山岳

第九年

第二號

上高地の夏（牛番小屋）
辻村伊助氏撮影

岳　山

第九年
第二號

（へ町らか山）

目次

（大正三年九月十二日發行）

表紙……原木彫凹版……茨木猪之吉氏彫刻
タイトルページ……（山から町へ）……同　上筆
卷頭畫……コロタイプ刷（上高地の夏）……辻村伊助氏撮影

挿畫

○梓山の旅舍白木屋……（寫眞銅版）……北澤基幸氏撮影……一六頁
○多摩川の上流……（同上）……同上……一六
○梓山村の遠望……（同上）……同上……一六
○三峯山登龍橋……（同上）……同上……一六
○浦上川……（同上）……同上……一六
○冬の嘉門治小屋……（コロタイプ）……八木是峰氏撮影……四八
○温泉塲附近より穗高山を望む……（寫眞銅版）……同上……五六
○德本峠下牛番小屋……（同上）……同上……五六
○温泉塲と燒岳……（同上）……同上……五六

○雪の金剛山表訓寺……（寫眞銅版）……橋本欽四郎氏撮影……六四
○長安寺……（同上）……同上……六四
○梅花藻……（コロタイプ）……辻村伊助氏撮影……九六
○山梨縣東八代郡金川原より見たる白峯山脈（寫眞銅版）……角田祐吉氏筆……一五二
○千社札の數々……（同上）……小島烏水氏藏……一六〇
○英國山岳會に關する刷物……（同上）……一九二

本欄

頁
秩父の奥山　理學士　木暮理太郎……一
豐後の双子火山及び内海の風光　理學士　石田義雄……三八
雪の日本アルプス越へ　八木是峰……四六
雪の金剛山　法學士　橋本欽四郎……五八
樽前岳　大平晨……六六
妙高の秋色　小野塚進次郎……七六
鳳凰山彙縱走記　小佐野迢々……八六
上高地風景保護論　小島烏水……九〇
山吹日記　法學士　關口泰……九五
登山者の地質學素養　理學博士　神保小虎……一一〇

雜錄

○佛國山岳會を訪ふ（巴里で辻村伊助）○「白峰三山に就いて」の異議を讀む（高頭式）○間の岳に現出する農鳥に就て（小島）○登山記念の千社札（小島）○八ヶ岳森林の大伐採（小島）○甲斐の口碑と傳說（小島）○尾根といふ語（小島）○富士山の豆蒔小僧（小島）○山梨山岳會講演會（青柳白嶺）○茅ヶ岳登山（小佐野迢々）○甲府平原地より見たる槍、常念、後立山の三山脈（小佐野迢々）○登山法私見（山本德三郎）○飛騨高山の年中行事（奥田正造）○本誌に用ゐたる紙に就て（蝶郎）

雜報

○諸高山の融雪○妙高山大崩壞○參科山の祇園祭○御岳初登山の外人○御岳山開き○淺間記

會報

○第七回大會期日の確定○關西の山岳講演及び陳列會○英國山岳會寫眞展覽會○英國山岳會六月例會○英國山岳會に於ける本會員辻村、近藤二氏招待晩餐會○英國山岳會に於ける本會員近藤氏の講演○飛騨高山の山岳講演會○會員登山報○會員諸君に○新入會員○圖版說明

附錄

日本山名錄初稿……（四）……高頭式……

秩父の奥山

木暮理太郎

何の爲に山へ登るか。自分は此稿を書かうとして筆を持つたまゝ、不圖こんな事を考へた。

然し自分は茲に登山の目的を論じやうとするのではない。唯秩父山脈が首都に近い割合に、相當の高さと深さと大きさとを有し、麓に一ノ瀬、梓山、栃本などの愛す可き山村を抱いて、二三泊の旅行ならば、充分に樂しい愉快な山の氣分に觸れることが出來るのに、登山者の少ないのはどういふ譯だらうと首を捻つたまでゝある。言はゞわが娘に縁談の遠いのを不思議がる、俗にいふ親馬鹿の類と見れば見られぬことはない。

昔の人は信心で山に登つた、從つて山の大さ高さ深さなどは、別に問ふ所でない。勿論初めて其山を開いた僧侶とか行者とかは、各自に信仰の芽生へが一度わが信徒の胸に萠え出したならば、益々深く且堅く其根を張るに都合よき條件――森林、瀑布、奇岩、噴湯、火口、火口湖等の如き――を備へてゐるらしい山を選んだものに相違ないことは、言ふ迄もあるまいが、信條の命ずる儘に默つて向上の道を辿る信徒に取りては、登山そのものゝ外他に何等の目的が有る可き道理はない。こんな眞面目な登山は、昔の人に限られた特權であつた。夫に較べると吾等が登山の目的は頗る複雜になつて來た。そして小さい低い淺い山よりも、大きい高い深い山を狙ふやうになつたのは、流行に伴ふ必然の結果といふてよからう。あの山を平げた若しくは片付けたといふやうな言葉は、どんな意味を語つてゐるか。無事に御登山を濟せて目出度いと喜んだ昔に較べると、これは馬上の將軍が敵國を征服して、

◎秩父の奥山　木暮　二

鞍に倚つて睥睨する時の態度にもたとへられやう。自分が茲に書かうと思ふ秩父の奥山は、辛うじて最高二千六百米突を超えてゐる許りである。山を征服せんとする血氣の荒武者には、それだけで既に物足らぬ感が起るに相違ない。これが秩父山脈に登山者の少ない源因であらうか。然し自分は昔の人のやうに眞面目な氣分で山に登りたいと努力する人の少なからぬことを信じて疑はない者である。

秩父は我國でも古く開けた土地の部に入る可き者で、知々夫國造の創置されたのは、崇神帝の朝にあるといはれてゐる。兎に角秩父の名は和銅開珍と共に世に流布されてゐたにも拘らず、其山に就ては近頃まで多く知られてゐなかつた。武藏峯（ムサシネ）、秩父嵩（チヽブダケ）などの名前が古書に散見するが、勿論これと一峯を指して唱へた名稱ではない、夫すら大勢が寄つてたかつて、いつの間にやら大宮の南一里に聳立する武甲山の異名にして了つた程だ。自分の所謂秩父奥山が、僅に一二を除くの外、絶えて記載されたことのない山許りであるのも無理はない。新編武藏風土記稿は、武藏に關する地志の上乘なる者である。それですら總說の部に於ては、纔に武甲、兩神、三峯の三山しか擧げてない、秩父郡の條に入つて漸く雲採、白岩、大洞等二三の山名と、十文字峠及雁坂峠の名を知り得るのみである。甲斐國志とても武甲國境の山名を記載した數は、決して武藏風土記稿の上に出る者ではない。獨り武藏通志（河田羆氏著、寫本）のみは、近時の編述に係る上に、著者が斯學に造詣深く、加ふるに實地の探究と各町村の書上げとを綜合して書いた者なので、流石に一頭地を拔いて、各山の記述詳細を極めてゐる。後にも引用の必要があるから、山嶽編の中に就て、此稿に關係ある部分だけを抄出することにした。

國司嶽

秩父郡大瀧村ノ西ニアリ、高八千五百五十三尺（地理局實測）山脈東ハ雁坂嶺（高六千八百六十九尺（實測）南ハ甲斐東山梨郡釜川村ニ通スル支道ニ係ル）枝澤山（高五千尺南ハ甲斐釜川村ニ至ル）槇澤山（高七千尺同村南ハ甲斐釜川村神金村ニ至ル）千葉山（一大仙波ニ作ル高八千尺南ハ甲斐神金村ニ至ル）牛王院山（高七千尺南ハ甲斐神金村ニ至ル）大

洞山（高六千三百十五尺（實測）以上同村ニ屬ス）ニ連リテ三峯山ニ接シ、甲斐國界ヲナシ、西ハ破風（高九千尺南ハ甲斐釜川村鷄冠山ニ接ス）木賊岳（高九千尺南ハ同上）又北ニ轉ジテ眞ノ澤山（高一萬尺西ハ信濃南佐久郡梓山村ニ至ル）股ノ澤山（高七千尺西ハ同上古金鑛アリ天正中武田氏之ヲ鑿シ德川氏ノ時復之ヲ采掘ス山腹東南ニ洞口八十許ヲ存ス）岩戸屋山（高四千五百尺股澤山ノ東脈ニシテ支脈南荒川北中津川間諸山トナル以上同村ニ屬ス）十文字嶺（高七千五十五尺（實測）西ハ信濃梓山村ニ界ス）松尾山（高四千三百尺西ハ同上）三國山（高五千五百尺西ハ同上北ハ上野南甘樂郡櫛原村ニ界ス三州ニ跨ルヲ以テ此名アリ字猿市ヨリ上八十八町以上同村中津川ニ屬ス）ニ至リ、信濃上野國界ヲナシ、南ハ甲斐釜川村（東山梨郡）山嶽ニ連ナル。諸山共ニ檜栂赤松ノ屬茂密ニシテ、良材多シ。

國司嶽とあるものは恐らく今の所謂甲武信岳を指したもので、古い他の少數の著書や地圖と同じ誤謬に陷つたのであらう。そして一連の山脈を中途から兩斷して、破風山と雁坂嶺とを西と東とに分つて筆を起した爲に、國司岳がこの二山の間に位置するが如き有樣となつたが、金峰奥仙丈の山脈を除いた秩父奥山の喬嶽は、畧ぼ羅致してあると思ふ。標高が今日の者と相違してゐるのは、嚴密なる測量の結果で無いのであるから已むを得まい。

秩父山脈の構造といふやうなことは、御影石と花崗岩とを近頃まで別物と心得てゐた程の自分には、素より分らう筈はないが、從來の地質圖に色別してある古生層と花崗岩若しくは石英閃綠岩との區劃線は、頗る怪しい箇所が有ることは斷言するに躊躇せぬ。例せば甲武信岳の如きは、これまで古生層の山として記載された申譯に、頂上附近に僅か許りの古生層の岩片を戴いた花崗岩の山である。其北の三寶山は勿論、東に連る雲切破風の二山は、全部花崗岩から成つてゐる。そして雁坂峠から將監峠に至る間の連山は、頂上に露出してゐる花崗岩（破風山附近から花崗岩は或は石英閃綠岩に變つてゐるかも知れぬ。此二つの岩石は少くとも此地方では、專門家でさへ容易に區別することの出來ない岩相を呈してゐるとの事であるから、自分は二者を包含して假に花崗岩と名付けて置く）を見ないが、二三百米突を下つた谷間には、武州側にも甲州側にも少なからず露出の箇所があつて、溪流には花崗岩の大塊がごろ〳〵してゐる。これは荒川の谷ばかりでなく、花崗岩には緣の遠いと想はれる中津川

の上流にさへ見られる。將監峠以東では地表に呈露してゐる處は無いらしい。想像するに秩父方面では大洞川を界として將監峠に達し、龍バミ谷を甲州方面に下つて、一ノ瀨川から泉水谷を遡り、大菩薩嶺の西を其連嶺に平行して南下せしめた線が、東は古生層西は花崗岩の分界と見て差支ないやうである。これは勿論地表に追跡し得る花崗岩に就ていふのである。而して古生層の山脈は概して東又は東南の走向を取つてゐるが、花崗岩の山脈は南又は西南の方向に走つてゐるやうだ。世に下手の横好きといふ諺がある。大聲では言へぬが大分仲間があるらしい。自分も其一人であることを內所で白狀して置く。聞く所に依ると、酸素を壓縮して液體か固形體にした者は、大空のやうな青色を帶びてゐるさうである。それで天文學者のロバート、ボールといふ人は、固體の酸素が青い色をしてゐることは、大空が何故青い色をしてゐるかといふことを說明してゐるではないかと曰ふた。旨いことをいふた者だ。物事も斯う手取り早く埒が明けば誠に結構だ。ダ、ビンチのやうな大畫家でも、ゲーテのやうな大詩人でも、空の青く見える譯を說明するのに大骨を折つたが、かういふ說のあることを早く知つたならば、あんなに無駄骨を折らなかつたらうと、大畫家大詩人といふ名に對して氣の毒で堪らない。自分もこゝで地質學者の說を借りて、ロバート、ボールの眞似がして見たくなつた。鵜の眞似をする烏は水に溺れるが、これは山のことであるから崖を蹈み外して落ちる位のことは大目に見て戴きたい。何でも古生層は直接若くは間接に花崗岩の上を掩ふてゐるのださうであるから、古生層の山脈の走向は、よし全くとは行かずとも、大部分は其下にある花崗岩を眞似してゐることは確だ、從つて古生層山脈の走向は、即ち地下の花崗岩の走向と見てたいした不都合の無いこと、恰も親の物は子の物だといふに同じであらう。さうとすれば花崗岩の山脈が隣り合つて向きを異にしてゐるとは、仲の惡くなつた證據である。此大喧嘩はいつ頃起つた事か自分は知らないが、岩質に多少の相違はあるにしても、甲府盆地を中に向ひ合つてゐる鳳凰山塊の噴起と同時若くは遠からぬ時期に起つた出來事であらう。

そして其當時に在つては互に高峻を競つたものではあるまいか。それが第三紀に起つた北日本の大變動の際に、金峯奥仙丈の山脈は、一度海に沈みて再び隆起したのであるが、遂に元の高さに復することが出來ず、反て八ヶ嶽のやうな大火山を附近に堀起せしめたのであらうと、最負目の大太鼓を叩いて置く。

自分が幾年かの前に初めて秩父の地に足を入れたのは、丁度朝の露が枯葉に結ぶ霜と變つて、小春日和の長閑な空に柿の實が赤い頃であつた。山の峽からはもう炭燒の烟が立つて、近い赤城山の黑檜や地藏の頂にも雪が降つてゐた。眞綿を引き伸したやうな雪雲は、遠い越後界の山々を包んで、ぼやけた雲の先から冷い風が吹いて來た。然し秩父の連山は一點の曇も無く、ちぎれ雲の漂ふ南の空に、紫を帶びた藍の透徹るやうな色に聳えてゐるのが堪らなく嬉しかつたのである。東上州から見た冬の秩父連山は、單に色彩がうるはしい許りでなく、自分には更に懷しい思ひ出の湧く山である。或年の冬であつた、日は御荷鉾山の後に落ちて、其あたりの天は黃金色に輝き、夫より地平線に沿ふて東するに連れ、樺色桃色草色と色美しく風ぎ渡つた夕暮の空に、紫と紺とを濁らぬ程に混ぜて、幾度か塗り上げたやうな深い色の秩父連山が、劃然と壽き出されたのをふと心付いて眺めた時には、未だ十一二の少年であつた自分も、紙鳶の絲を卷くことさへ忘れて、磁石に吸はるゝ鐵のやうにひたと眼を引き付けられて仕舞つた。怪しくも山に魅入られた自分は、其以來山を愛する外に仕方無かつた。十月の末、夏は草雲雀の樂しい住家であつた桑の葉が、人の跫音にもかさ〳〵と音がして、脆くも落ち散つて了つた桑畝の上に、遠近の山が鮮かに望まれる日が多くなると、水の涸れた田圃の小溝に枯柴を敷いて、其上に仰向けに寐轉びながら山を見て居るのが樂みであつた。西北の風がそよ〳〵と吹く好晴の日には、目路のはてにそゝり立つ高い山の巔を、赤蜻蛉が列を作つてすい〳〵と飛び越して行くのが面白いと思つた。そして眼はいつの間にか南の空に縹緲として積翠を湛えた秩父の山奥深く迷ひ

込んで行くのが常であつた。この頃でも秩父山といふ名は絶えず村の人が口にしてゐたものであるが、東西の御荷鉾山は別として、怪奇な姿をした雨神山の名は、既に知らぬ人が多かつた。況して三寶、甲武信、雲切の諸山から東に亘る長い連嶺の如きは、僅に武甲山を除くの外、村の物識りと許された老人すら、試に自分が指點した山に對して其名を敎えることが出來なかつた。一度自分はもどかしさの餘り、三峰參詣の人に賴んで山の名を聞き糺して貰つた時、其人は雲取山の名を齎し歸つたのは好いが、可笑しいことにはどの山が夫であるか遂に分らなかつた。秩父山は依然たる大きな謎の塊で、幾多の峯は夫々解き難き一の謎のやうに想はれた。自分が遠望して山奥深く迷ひ込んだと書いたのも、强ち無理ではあるまいと思ふ。

然し謎は終に解かれた。如何なる想像の大飛躍をも妨げなかつた謎の秩父奥山は、旅行の度毎に輪廓だけを朧げに殘して次第に消え失せた。同時に强く自分の眼を刺戟した山肌の部分が、次から次へと代つて其位置を占めた。木喰ひ虫が虫糞でその穿つた孔を塡めて行くやうに。恐らく三千年來の謎であつた埃及のスフ＊ンクスが、其體内に埋藏してゐた殿堂や、其頭上に穿たれた大きな孔の何であるかを解かれたのを最後として、世に謎の種は盡きたのではあるまいか。少くとも自分はわが秩父奥山を床しい謎として其儘保存して置いた方が幸福であつたかも知れぬ。さう思ふと自分は鐵砲虫のやうに山に喰ひ入つて、殆んど完膚無きまでに解剖し批評し叙述し描寫しなければ滿足することの出來ない人間の欲望を呪ひ度なる。それにしても人は自然の前に出ると、誰しも惡戲盛りの小供のやうになるものと見える。如何なる秘密の玉手箱も開けて見ぬ内は虫が納らない。默々として而も偉大なる山は、この我儘を可愛さに堪えぬ慈母の眼をもつて眺めて居るのであらう。

秩父に對する自分の感念といふやうなものが變つたと同じ樣に、秩父其物も亦變りつゝあるのは如何にも惜しい。十八九年前に自分が初めて十文字峠を通つた時には、晝も頭の上が暗い程に樹は茂つ

てゐたが路はよかつた。其後通る度に路は荒れて反て木立が透いて來た。何々組林業事務所などいふ嫌な札が路傍に建てられてあるのを見るやうになつた。炭燒竈の烟が一年は一年よりも數多く且山深く進んで行く。聞けば一萬二千町歩に近い秩父の森林は、既に東京横濱其他の富豪に買收され、殊に奇峭を誇る兩神山の如きは、殆んど全山を擧げて二三者の所有に歸して了つた相である。上武鐵道が間もなく大宮まで達するの日は、やがて秩父山林の荒廢といふ大悲劇が、森林伐採の序幕を以て開かれるのではあるまいか。土地の人は鐵路の延長に依て得らる可き運輸の便利をひたすらに喜んでゐるが、石炭の烟は自然を破壞する恐る可き勢力の先驅者であることを忘れてゐる。想ふに今日の秩父は、溪流の澄徹と森林の蓊鬱と景趣の幽邃とに於て、其權威の絶頂にあるものである。そしてこの幽邃とこの蓊鬱とこの澄徹とを奪はれた慘ましい秩父山岳の姿は、遠からず濁つた水と「石の洪水」とに惱まなければならない秩父の住民が、知らずに犯した罪の報の餘りに酷いのに慄れ戰きつゝも、反て其苦痛を緩和する唯一劑として、朝夕に仰ぎ視るやうになるのであらう。

前置が長くなつた、急いで本文に取り掛るが、其前に尙ほ一言を費したい。

茲に秩父の奥山と題したのは、大宮方面から見て秩父の奥に在る山といふ意味からであるが、東は雲取山から西は甲武信岳を經て金峰山に至る迄の武甲及甲信の國境山脈を合せて此中に含ませることにした。この兩國境山脈は、一貫して秩父山塊の脊梁をなしてゐる者である。二千米突以下の山を除いた爲と、金峰山以西の山を知らないことゝは、自ら記述の範圍を此二山の間に限つて了つた。地圖は陸地測量部五萬分一の丹波、三峰及金峰山の三圖幅を參照されたい。

試に此山脈に駢峙する二千米突以上の峯を東から數へて見る。先づ雲取山を起點として、大洞山（飛龍山）、龍バミ山、和名倉山、牛王院山、唐松尾（槇ノ澤山）、枝澤山、燕山、袴腰山、古禮山、雁坂嶺、破風山、木賊山（雲切山）、甲武信岳、三寶山（眞ノ澤山）、股澤山、富士見、東股頭、國師岳、奥

仙丈岳、朝日岳、金峰山等、合せて二十餘山を擧げることが出來る。更に甲武信、國師附近の數峯と、金峰山以西の瑞牆山、小川山等を加へたならば、其數優に三十以上に達して、而も最高峰は二千六百米突に及んでゐる。關東大平原の西半部をぐるりと馬蹄形に取り卷いた山の中で、秩父山脈と日光火山群とは、互に馬蹄形の一端に位置して、頗る趣が似通つてゐるのみならず、南北日本アルプス地方を除けば、何處へ出しても後れを取らない所は、正に關東の兩大關と云ふてよからう。

雲取山

平地に波瀾を起した幾多の小山脈が、彼方からも此方からもアミーバの僞足のやうに絡み合つて、いつとなく五六本の太い脈に綜合され、それが更に統一されて茲に初めて二千米突以上の高峯となつた者が雲取山である。甲信武甲の國境を東走して來た秩父山脈は、どの道この邊でこれ位な高度の山を掉尾に振ひ起して、武藏野に君臨せしめなければならない筈だ。高さ二千十八米突。東京方面から見た此山のくつきりした男性的の姿は、如何にも氣持が好い。武藏通志に據ると、此山は大雲取と呼ばれ、南に續く小峯が小雲取と呼ばれてゐる。

大雲取山　西多摩郡氷川村、日原村ノ西北ニアリ、秩父郡大瀧村ヲ界ス。高七千三百九十五尺（神奈川縣測量ニ據ル下同）山中深高ニシテ栂根（ツガネ）山毛欅（ブナ）楢ノ屬喬鬱森立シ、樹皆蒼古、老蘚之ヲ覆ヒ、人跡殆ド絶シテ、獵夫モ到稀ナリト云フ。山脈磅礴トシテ四旁ニ展敷シ、西北ハ秩父郡諸山ニ連リ、南ハ小雲取山（高七千二百八十一尺北ハ秩父郡西ハ甲斐北都留郡ニ界ス）唐松谷峯（高六千七百六十一尺山南七巨巖駢立シテ下ニヨリ七石社アリ甲斐丹波山村之ヲ七石山ト稱ス）ニ至リ、赤指山（高四千五百二十尺留濤村ノ西南ニアリ）雨乞塲山（高三千九百七十一尺同村ノ南ニアリ）トナリ、甲斐北都留郡ヲ界シテ多摩川ニ至リテ盡ク。

頂上はさまで廣くは無い。絶頂三角點の在る所から、傾斜の緩い茅原の尾根が南へ曳いて、小雲取

から七石山（ナヽツイシ）へと續いてゐる。東から北へかけては一面に黑い針葉樹の林である。その黑い針葉樹に頂上まで包まれて、近く東北に聳えてゐるのは、二千米突に垂んとする白岩山である。武甲の國境は、三角點より二町餘も南寄りの所から西へ出た尾根に當るので、丁度其分岐點あたりに、小島氏の所謂赤石板岩が少しばかり露出してゐる。其外には頂上附近に岩石は無いやうに思つた。

登路は、三峯神社から白岩山を經て登るものと、鴨澤村から七石山を經て登るものと二つある。前者には强石から大血川に沿ふて大日向山太陽寺に至り、晝ヶ岳を經て三峯口の登路に合する路があり、後者には氷川村か小河内村から、尾根傳ひに鷹巢山に至り、七石山にて鴨澤口の登路に合する路がある。鴨澤からは四時間、三峯からは五時間あれば頂上まで登れる。鴨澤口は殊に樂な路である。三峯方面は水に乏しいが、鴨澤口ならば七石山の頂上直下に滾々と湧いてゐる。雪は稀に五月下旬まで殘ることもある、然し大抵は其月の上旬か中旬に解けて仕舞ふ。雪の無い時この連嶺を縱走しやうとする人は、水の用意が肝要である。六月初旬に三頭山の頂上から、此山を盟主とした連嶺を北方亂雲の絕間に仰ぎ見た時の雄大な感じは、未だに頭に殘つてゐる。

大洞山（飛龍山）

雲取山から少し急な草原の尾根を西に下ると、三十分許で鞍部に出るが、直ぐ上りとなつて間もなく一峯に達する。是は荒澤の源頭に當る山で、荒澤山と呼ぶ可きであるが、此邊から秩父では大洞山を通稱として、西は遠く龍バミ山までも含んでゐるらしい。この附近は一面の小笹である。南の甲州側は急な谷で、樹は甚だ稀であるが、北の秩父側は所々に濶葉樹を交えた針葉樹の密林である。概して甲州側に木の乏しいことは、秩父山脈の特色の一といふてもよい。千九百四十九米突の三角點のある峯は、栂澤の上に峙つ山であるが、名は知らない。栂澤山と呼んで差支なからう。甲州では此附近

を三條ダルミと呼んでゐるさうである。此山から雲取山までは二時間あれば樂々と行かれる。此處を下つて西南の小峯を指して登ると、山相が一變して岩が多く、從つて尾根が狹く急となり、石楠や馬酔木の曲りくねつた枝が行手を遮ぎる。四つ許りの同じやうな峯（其中の一は三角點のある峯よりも高い）を踰えると、尖つた岩峯が二つ三つ突立つて、針葉樹のいちけたのが妙に意地惡くのさばつてゐる。尋常では容易に通れないのであるが、幸に切明けがあるから何でもない。地圖に三ッ岩とある者が夫である。此處を通り過ぎて緩い傾斜を登り切ると、大洞山の最高點二千八十九米突の三角點に達する。絶頂は三角點より二三十間程西へ寄つてゐる、高さも二米突位高い樣に思つた。元と大洞山といふ名は秩父方面の稱呼であつて、前にも記したやうに範圍が廣い。甲州ではこの最高點を飛龍と唱へてゐる。絶頂を西南の方へ二町許下りた所に飛龍權現の社があるので左樣謂ふのであらう。甲斐國志にも

飛龍權現ノ社　慶安中ノ鰐口、文明年中ノ棟札アリ。別當寶藏寺。

と記載してある。然し飛龍の名は秩父には通用しない、同樣に大洞の名も甲州方面には稀にしか役に立たぬ。自分が曾て南日君と雲取山に登つた時、當面に雄偉な狀貌を呈してゐる此山を指して、鴨澤から丁度道普請に來た人夫に、あれは大洞山かと聞いても、容易に其意味が通じなかつた。一般の例から推せば、大洞川の本流ホラノカイ源頭に聳ゆる峯即ち龍バミ山が、大洞山の名を冒す可き筈で、茲にいふ大洞山は、椹谷の名で呼ぶのが普通の命名法であるが、大洞川の上流では此山が最高である所から、其名を負ふやうになつたのであらう。龍バミの名も元祿の圖に書き入れてあるから古い山名である。自分はすべて舊に據ることにした。尤も此山の登路は、雲取山若くは將監峠から尾根傳ひに登る外には、丹波山村から一條の登路がある許であるから、從つて飛龍の名の方が實際には必要な譯である。

大洞山　最初の登山者は誰であつたか元より分らぬ。自分の知つてゐる限りでは、明治四十五年の春に、丹波山村から登つた南日中村の二君が先登第一の人である。此山から南東に派出した雄大な尾根が其登路で、四時間程で登れると聞いた。此山を飛龍と呼ぶこと、地圖にある三ッ岩を三ッ山と呼ぶこと、其東の方を一體に三條ダルミと呼ぶこと、地圖に後山川（丹波山村ではこのあたりの國境山脈を總稱して後山（ウシロ）と呼んでゐる）とある川を親川と呼ぶこと、親川を遡ればどの谷からも尾根へ登れることなど、皆其時に判然したのである。村からの登路は樂であるが、千九百三十九米突の前飛龍の邊からは、石楠などが蔓るので（途中に石楠横手の字がある）、多少の困難を感ずるさうである。此山から雲取山まで四時間あれば充分であるが、急げば三時間に短縮されぬことは無い。

龍バミ山

多摩川の上流一ノ瀬の奥に三ノ瀬の部落がある。其處から秩父へ踰える將監峠を登ること一時間半で、頂上の平坦地に出る。右に折れて下り氣味に一町許行くと、廣い鞍部が龍バミ谷の方面へ濶然と開けて、程よく配置された若い唐松の林などが目を怡ばせる。左手はこんもり茂つた針葉樹の木立に圍まれて、井戸澤の清い流が大きな花崗岩（或は石英閃綠岩）の間から、快い音を立てゝ湧いて來る。側には石で築いた竈があり、不完全ながら小屋もあつた。今も殘つてゐるかどうか分らぬが、申分の無い野營地である。此處から右に尾根を傳ひて四十分登れば、高さ二千十二米突の龍バミ山へ出られる。井戸澤や洞（ホラ）ノカイの方面は、針葉樹で悽いやうに暗いが、南方は遠く開けて眺望が好い。南アルプスが駒、朝與から聖、上河内、笠に至るまで一目に見られる。十一月中旬、此山から初雪を戴いた白根赤石の連嶺を遠望した時には、とても默つて凝としては居られなかつた。路は短い笹原の中を緩く登つてゐる。この頂上から飛龍へは二時間あれば行かれる。切明けの跡や、査何號と記した小さい

標木があるので、少し注意すれば路を誤る心配は無い。が、木が枝を指し交したり、丈の高い笹が蔓つたりして、歩くに骨が折れる。小さい峯と言ふよりも寧ろ凸起を十ばかり越すと、椹谷と大常木谷との分水嶺で、これから飛龍の登りとなるのである。飛龍も此方面は梅の大木が茂つて、下は一面に梭葉草が生へてゐる。秩父街道から眺めた大洞川の谷は、左右の山襞が幾多絶大の人の字入の字を倒しまに重ね合せて、奥は深く且つ暗い。今其源頭に立つて覗いて見ても、窈として大洞川の名に背かないことが頷かれる。

和名倉山

將監峠の頂上から左に折れて、井戸澤を右下に見ながら山腹を辿ると、間もなく一の尾根に出る。此尾根は純秩父の最高山二千三十六米突の和名倉山が、牛王院山と連絡する爲に正南へ派出した者で、三峯へ下る峠の路は、此尾根を和名倉山の頂上へかけて通つてゐる。新舊の兩道があるとのことであるが、地圖に載せてあるものは新道の方であるか舊道の方であるか、自分は此山へ登つたことが無いので確としたことは言へぬ。三峯路の途中から左に分れて大ヨケ谷を下れば、栃本へ出られるさうである。又瀧川谷へ下る林道もあるとのことであるが、判然しない。恐らく牛王院山の北側を通つて雁峠の路へ合し、雁坂峠の新道へ出て栃本へ下るのではあるまいかと思ふ。地圖に白石山と記載してあるのは、相當の理由があつてのことであらうが、白石神社の在る白石山や、又は白岩山などゝ紛れ易い。宜しく秩父は勿論甲州でも通用する廣い名稱の和名倉山に改むべきである。梅澤君の話によると、頂上附近に白い岩があるのださうである。尤も同君は目擊した譯では無く、人傳に聞かれたのであるから、間違つた所で抗議にも及ぶまい。若し又白い岩があつて、夫が花崗岩であるなら面白いと思ふ。自分等同人は和名倉の名を聞くと、雜木の茂つた尨大な山塊が目に浮ぶと共に、馬力尊と書いてある

珍らしい石碑や、秩父名物狼餅のことまで想ひ出されて、腹の底から込み上げて來る可笑しさに、ドット笑はずにはゐられない。秩父とは切つても切れぬ關係のある名である。石川光春君は本會員の中で此山に登られた唯一の人ではあるまいか。

牛王院山、唐松尾(槇澤山)、枝澤山、笠取山

中央東線の鹽山驛から青梅街道を北に向つて柳澤峠を踰えると、間もなく落合の部落がある。其處から左に折れて一ノ瀬へ行く途中に犬切峠といふのがある。其頂上から北を望むと、正面に黑木の茂つた餘り高低のない一連の峯巒が見える。左の低い笹原が秩父の所謂雁峠で、一ノ瀬では燕ダルミ(ツバクロ)と唱へてゐる。雁と燕では同じ渡り鳥仲間でも時季が正反對になつてゐる、双方で意地になつて付けた名でもあらうか。雁峠から右に引き上げた緩い草原の斜線が、一頓して四つ五つ波を打つた者が笠取山で、其東は栂の大木が黑く茂つた枝澤山である。秩父では特別に名を持つた山の外は、總て澤の名を其上の山に冠らせて、何澤のウラと呼んでゐる。ウラとは梢の意味である。而し地圖や地誌には、古くから山又は峯の字が使つてあるから、自分も山の字を用ゐることにした。枝澤山は即ち枝澤のウラを謂ふのである。連脈の殆んど中央に臼の如き頭を擡げてゐるのが、最高點二千百九米突の唐松尾で、西は枝澤に臨んだ急な斜面が、細い尾根を枝澤山に結び付けてゐる。東に延びた尾根は四つ許の小峯を駢べて、最後に尖つた岩峯が目に入る、それが牛王院山である。其處から南に四五尺もある篤竹(スヾダケ)の中を掻き分けて下ると、三十分で將監峠の頂上へ出られる。其間に三つ許り小さい峯があると思つた。

元來此附近の山は、二三年前迄吾々には少しも知られてゐなかつた。雁坂峠以東では大洞山が一番高い位に思つてゐたものである。曾て十文字峠の途上から此連脈を遠望した時にも、それは大洞山が西

の方から眺めるので多少形を變えて見えるのであらうと信じてゐた。明治四十五年の春に中村南日の二君が丹波山村に來て、初めて唐松尾の名を聞き、其山を見て歸つたのがもとで、吾々は此山に親しむやうになつた。其時兩君は登山する積であつたさうだが、遂に果すことが出來なかつた。自分は南日君に慫められて、同年の八月に登山した。武藏通志には、枝澤山の次に槇澤山、千葉山、牛王院山が擧げてあることは、前に引用した通りで、千葉山の註に「一大仙波ニ作ル、高八千尺、南ハ甲斐神金村ニ至ル」と記してある。そして他は皆千葉山より低いので、それが主峯であることが窺はれる、主峯とすれば自分等が唐松尾と稱する者に當つてゐる。其上槇澤は唐松尾の東を流れる大澤であるから、從つて千葉山、槇ノ澤山、唐松尾なる名稱は、同じ山の異名である可き筈だ、後の二者に就ては全く疑ふの餘地は無い。唯だこゝに不審なのは、武藏通志が千葉山と槇澤山とを別個のものとして記述したことである。或は笠取山を枝澤山、枝澤山を槇澤山と誤認した爲に、槇澤山と異名同山である千葉山を別に掲出したのではあるまいか。兎に角笠取山に近い澤は、葡萄澤であつて枝澤ではないから、これは武藏通志の誤記であらうと思ふ。千葉山と云ふ名は自分等は聞いたことはないが、秩父側の名稱に相違あるまい。此連脈は甲州側から登るのが近く且つ便利であるから、其地方の山名の方が實際は役に立つ。牛王院山は甲斐國志には護王院、富士見十三州輿地圖には御王院となつてゐる。甲州獵夫の所謂山ノ神なる者がこれであらう。

唐松尾へは、一ノ瀨の奥にある三ノ瀨から直接に登れる。村の北で直ぐ將監峠への路に分れ、左へ三四町行つて坂を上ると、谷川が流れてゐる、それを遡つて流の二分する所へ出たならば、其中間の尾根を登ると、二時間の後には頂上に立つことが出來る。三角點は地圖に示す通り國境より二三十間北に寄つてゐる。測量の爲に伐木した跡には、古生層の岩片が狼籍して、稍荒寥の趣がないでもない。石楠の茂つた岩蔭を縫ひながら北へ三町許下ると、枝澤から上つて槇澤へ下り込む立派な林道へ出る、

恐らく是が前に記した栃本へ下る道ではあるまいか。牛王院山へは尾根傳ひに一時間半で行かれる。日光の女貌山を小さくしたやうな山で、岩間には米躑躅が多い。枝澤山に續く尾根を西へ辿れば雁峠へ出られる。自分は唐松尾を西南に下つた鞍部で野宿し、翌日枝澤山から雁峠へ下る豫定であつたが、容易に水が見出せなかつた爲に、已むなく三ノ瀨へ引き返したのであるから、遂に枝澤山の頂上を窮めることが出來なかつた。それで此連脈に就ては遺憾ながら語る可き何物も無い。然し見た所草丈が高く木が繁つてゐるから、切明けが無いとすると縱走に多少の困難が伴ふことだけは確である。唐松尾の頂上から三時間あれば雁峠へ出られぬことはあるまい。

雁峠は將監峠に似てゐる。頂上の原は大きな鍋を伏せたやうな小山が幾つか並んで、凹凸は有るが餘程廣く、一面に小笹や篤竹が生へてゐるのみで、木立がないから風情に乏しい。廣川谷に向つてゐる草原から清水が湧き出てゐる。井戸澤にはとても及ばないが、野營地として適當せぬことはない。北方栃本から葡萄澤を上つて來た路は、此處で右と左とに岐れて、それ〴〵廣瀨と一ノ瀨とへ旅人を導いて呉れる。

燕山、袴腰山、古禮山

雁峠から西北指して尾根を登ると、十五分で大きな岩の露出した峯に出る、これは燕山（ツバクロ）の一峯で、同じやうな小峯が五つ許連つてゐると思つた、西北のはづれの者が一番高い。此連峰も割合に樹が多く、殊に秩父側は針葉樹が茂つて、じめ〴〵した落葉の上に一面に梭葉草が生へてゐる。此處から尾根の向きが少し西へ直つて、極まばらに唐松の生へた爪先上りの茅原が續く。二千米突を超えた山の上とは思はれない、まるで平地の林を歩いてゐるやうな氣がする。柳澤峠の頂上から北正面に見えるのが此山で、袴腰山と呼ばれてゐる。甲斐國志雁坂の條にも

西ノ方ハ西澤御林山、南ノ方ハ袴腰ト云、山形ノ似タルヲ以テ名トス。

と記してある位で、紛れもない名である。南日君も此名を聞いた事があるさうである。最高點二千百十二米突。地圖には古禮山としてあるが、古くから袴腰の名があり、且つ現に其名が用ゐられてゐるのであるから、古禮山の名はよろしく其北方古禮澤と水晶谷との中間に在つて、二千百六十米突の小圏を有する無名の地點に移す可きである、一ノ瀬の獵夫も曾て自分にさう敎えて呉れた。尤も秩父では袴腰の名を知らない、恐らく古禮山の名で一括してゐるのであらう。こゝで斷つて置きたいのは、これらの山名が一ノ瀬方面の稱呼であつて、廣瀬方面は少しも探つて無いことである。此古禮山は針葉樹の密林で、立派に切明けはあるが眺望は少しもなく、晝も薄暗い程であるから、隨分無氣味な山である。西北に尾根を辿ること三十分で雁坂峠へ出られる。一ノ瀬から雁峠まで一時間半、雁峠から雁坂峠まで二時間の行程である。

雁坂嶺

凡河内躬恒が歌に

秋風に山飛び越て來る雁の羽むけに消ゆる峯の白雲

とあるのは、果して此山を詠んだものか否か、穿鑿するにも及ばぬことであるが、内務省地理局刊行の新編武藏風土記稿所收秩父郡の正保圖には雁木坂峠の名が見え、元祿圖には雁木峠となつてゐる。然し淺草文庫の藏書印ある内閣本を見ると雁坂峠と書いてある、其他内閣本及東京府本の正保武藏圖を見ても、孰れも雁坂峠である。それで雁木坂峠又は雁木峠とあるのは、刊行本の誤ではないかと思つたが、能く比較して見ると他にも多少出入した所があるので、必ずしも刊行本の誤ではなからうと思ふやうになつた。或は刊行本の稿本となつた者の方が反て正本であつたかも知れないとさへ想へ

梓山村の遠望

梓山の旅舍白木屋

三峯山登龍橋

浦上川

多麗川の上流

（北澤基幸氏撮影）

る。これは原本を見ない以上は斷言出來ないが、果して想像した通りならば、山名の由來も推知するに難くはない。甲州方面の廣瀨を出發點とすれば、四時間を費さないで峠の上に出られる。秩父方面からは峠を上つた事がないので、判然したことは言へぬが、降り路ならば栃本まで四時間半、上りは六時間半と見て大差は有るまい。これは新道の方であるが、舊道は一里許近いさうであるから、從つて時間も節約される譯である。地圖には舊道が示されてゐる許りで、新道も雁峠への道もない。新道は水晶谷と豆燒澤との間に蟠つてゐる水晶尾根（假命名）の南側を千八百二十七米突の三角點ある峯まで下ると、左斜に折れて、豆燒澤を瀧川谷との合流點よりも一町許上の方で渡つて、二百米突程上つたまゝ小さな谷川を横切り、次第に瀧川谷に近づいて、終に舊道と合するのである。雁峠の道は水晶尾根の中腹に一五〇〇の數字が書き入れてある邊で雁坂新道と岐れる。「右雁坂甲州道　左雁峠一ノ瀨部落マデ三里半」と書いた標木が建てゝある。甲州路は至て平板單調であるが、秩父道は新舊兩道ともそれ〴〵別樣の趣があつて面白い。然し頂上附近では、秩父側は少しも眺望がきかぬ。甲州側は眺望もよく、其上萎々した急斜面の草原に、唐松の大木が三々又五々直立してゐる風情は、美しい者の中に數へぬ譯にはいかぬ。峠の南の直下には俗に一杯水と唱へる清水が湧き出てゐる。附近に野營することも自由だ。十四五町下れば三四人は泊れる小屋もある。總じて甲州側は水の便が好い。秩父側は豆燒澤の外には水が無い。舊道では絶えて水が得られぬ。峠の頂から西に切明けを辿りて尾根を登ること一時間の後には、少しの困難もなく、二千二百八十九米突の絶巔に立ちて、躬恒が秋風の歌を高吟するの人となることが出來る。

破風山

二千三百米突を超ゆること纔に十七米突、七千六百尺の山は決して高いと威張る譯にはいかぬ。而

も其位の高さの山で、若し偃松が生へてゐたならば、假令信越地方に在つても珍らしいに相違ない。況んや其が秩父の山で、今迄其存在すら認められてゐなかつた者であつたなら、一層の興味が湧くと共に、頗る意を強うするに足るものがあらう。秩父の山に偃松無しとは、誰れ主張するともなく、一般に認められてゐた事實らしかつた。一寸考へて無理のない話である。が、それは眞實では無かつた。破風山には立派に偃松が生へてゐる。これは秩父の爲に萬丈の氣焔を吐いたもので有るまいか。秩父群山中の一異彩として、特に此山を推奬する。

登路は雁坂峠から行くのが一番捷徑である。左も無ければ栃本から入川谷を遡つて、更に荒川の西股（大荒川）を登るか、又は其上流の木賊澤を登るか、若しくは甲州方面の雁坂路から岐れてナメラ澤を登るか、三つとも兎に角登れるには違ひあるまいが、其困難は非常なものであらう。何か特別の目的があるので無ければ、さう無駄骨を折らずとも、雁坂峠の頂上から三時間で破風の三角點に達することは容易である。一里半位はあらうと思ふ。切明けもよく通つてゐる。山は名の示す通り屋根形で、東の破風から西の破風まで四五町の間、花崗岩の大塊であることは、一寸意外な感が起る。岩と岩との間に少しでも土らしいものがあれば、米栂や石楠が無造作に根を下して、八方に枝を伸してゐる。秩父側は針葉樹に濶葉樹を交へた密林であるが、それも西に廻つて松葉澤を生む尾根の上まで來ると、米栂其他灌木性の針葉樹が柔い綠の毛氈を一面に岩の上に敷いて、遠目には短い草原のやうに見えるが、其中に這入ると動きが取れなくなる。甲州側は岩の大破片から成つてゐる。其間を灌木性の針葉樹が、大袈裟に言へば沙漠の綠園の如くに飾つてゐる。三角點は西の破風に在つて、東よりも三十米突許高い。其處から西方の斜面を瞰下した景色が尤も高山的で、少し下ると懷しい偃松が盛に枝を延してゐる、宛ら舊知の人に握手でも求めてゐるやうに。地圖には破不山とあるが、破風山の方が正しい字であることは言ふ迄も無い。七月の下旬に石楠の花盛りを岩の上から眺めた快よさは、今も忘ら

れぬ思出の一つである。

三寶山(眞ノ澤山)、甲武信岳、木賊山(雲切山)

甲武信岳の絶巓に初めて立つた時、何よりも先づ意外に感じたのは、附近第一の高峰であらうと信じてゐた此山の北に近く、われを凌駕する無名の高山が、儼然として聳えてゐることであつた。信州梓山から四時間許りの樂な登りを續けた後、白檜や唐檜の茂つた薄暗い林を拔けて、漸く急な斜面に掛ると、間もなく頭の上がぱつと明るくなつて、すぐ痩ぎすな甲武信の頂上にひよこりと出た南日君と自分とは、登山の目的を遂げた快さを泌々と味ふ餘裕も無かつた程、この豫期してゐなかつた山の出現に氣を奪はれて了つた。是が即ち三寶山である。標高二千四百八十三米突、日光の男體山よりも一米突低く、淺間山よりは或は高いかも知れない。甲武信岳の東南には、近く二千四百六十八米突の木賊山がある。高さは三寶山に劣るが、根張りの大きいことは優つてゐる。甲武信岳は此二山の中間に位置して、高さも木賊山よりは高く、三寶山よりは低い、而も二千四百七十二三米突を下ることはあるまいと思ふ。此三山は遠望した所に據ると、三寶山の北の斜面と木賊山の東南の斜面とが割合に長く、中央の甲武信が小さいので、宛然一座の大山が三の巓を駢峙した形となる。此特徴は著しく目に立つので、容易に他と識別することが出來る。去年槍ヶ嶽に登つて殺生小屋に泊つた翌日、朝早く小屋の前に立つて、視界の開けた東南の空に、一樣に紫紺の大波をうねらせた山々の形を、覺束なき記憶の中から物色して、獨りで喜んでゐた時、ふと立科山の横岳の額を掠めて、それかと思はれるほのかな線の閃きに、怪しく胸は跳るのであつたが、槍の肩まで登つて振り返ると、果してそこに此三山の姿が現れてゐたのは嬉しかつた。東京市内からも雲取山と白岩山との間に此等の山を望み得ることは、前號の雜錄に書いた通りである。

への字形に排列した此三山は、體から言へば、希臘神話に現れてゐる地獄の怪犬ケルベロスのやうに一身三頭である。布置から言へば、天蝎宮の心宿に似てゐる。そして其第一星たる可き山は、どうしても三寶山で、中央のアンタレスの位置に在る甲武信岳では無い。三寶山の名は初めて甲武信岳に上つた時、案内者であつた梓山の獵師油井安十郎が敎えたので、念の爲に三方と書くのかと聞き質したら、三つの寶と書くと答へた。其時は別に深くも究めず、同行の南日君も三寶山として曾て本誌で紹介した。後考に據れば、三寶は矢張三方から來たものらしく、梓山で甲武信岳を三方山と唱へてゐたことが、三度目の登山の時に判然した。然るに甲武信岳なる名稱が普く行はれるやうになつて、三方の名は迷子になつた形であつた。安十郎は獵師であるが、元は區長も勤めて相當に學問のある男であると、白木屋（梓山の旅舍）の主人も話した、それで三方山といふ總稱の中に含まれてゐた此山を、新に三寶山として敎えたのではあるまいかと思はれる。或は安十郎が區長時代に、三寶山の名を村の記錄に書き入れたか、どうか、夫は知らない。また本人の死去した今日、詳細に聞き糺すことも不可能になつた。が、どの道甲武信岳の名が既に確定した以上、三方を三寶と改めて隣の山に移しても、それが通用する上は差支あるまいと信ずる。秩父では眞ノ澤山と唱へてゐるが、此山の絕頂は信州に屬してゐるので、依然三寶山なる名稱を用ゐることにした。

此山へは三寶澤に沿ふて直接に登る路がある。梓山を出發點とすれば、甲武信岳と同じく四時間あれば充分であるが、澤を離れてから可なり急である上に、路が荒廢してゐるから、甲武信へ登るよりも骨が折れる。甲武信へ先に登つて此山から下るやうにすれば比較的樂である。甲武信の頂上から望見した所では、距離も近く登り降りも少ないので、容易に達せられさうに想へるが、さて木立の中に這入ると、白檜や唐檜の若木が透間もなく生えてゐるので、通過に困難だ、四十分は懸ると見なければならない。南日君が生新らしい熊の糞を拾つて珍らしがつたのも、此密林の中であつた。又十文字

峠から股の澤の岩峯を經て登ることも出來る。梓山から六時間はかゝると思ふ。山は全く花崗岩より成つてゐるが、針葉樹の密林が頂上まで包んでゐる。唯東南甲武信岳に面した所に巨大なる岩塊が露出して、これが頂上にあつたならばと惜しいやうな氣がせぬでも無い。

甲武信岳は近年まで國師岳として記載されてゐた。新編武藏風土記稿も、富士見十三州輿地圖も、武藏通志も、明治十二年に內務省地理局で出版した駿河甲斐伊豆三州圖も、皆甲信武三州の境に國師岳を記載してゐる。享保年中の編纂に係る信府統記に據れば、佐久郡の條に

大椹峠　武藏、甲斐、信濃三ケ國ノ境ナリ。此大椹峠峰通國境。(武藏甲斐兩國ニテハ國師ケ嶽ト稱フ。理云、甲州ニテハ三國山ト稱スルコト甲斐國志ニ見ユ　蓋シ信府統記ノ著者モ國師甲武信ノ二山ヲ混同セリ。)十文字峠ヨリ午未ノ方ニテ、此郡ノ巽ノ隅ナリ。東ハ武藏南は甲斐ナリ)。

と說明してある。武藏風土記稿の秩父郡の元祿圖は、信府統記より三十年も古いものであるが、雁坂峠の書き入れに「此所ヨリ國師岳迄の間山國界不知」と記し、甲信武三州の境に「此所峯通國界、但シ信濃國ニテハ大椹峠」と書いてある。尙ほ同書の古大瀧村の條には

國師嶽　御林山ノ內ニ聳テ栃本ヨリ西ニアタリ五里餘ニアリ。

との記事さへあるから、是等の地志や地圖の著者は、甲信武三國に跨る山を國師岳と信じてゐたのであらう。實地を踏査しないで、書上げの類を唯一材料として編纂著述した古い地志や地圖には、能く斯うした誤がある。自分は栃本の人までが其當時國師岳と呼んでゐたかどうかは疑問であると思ふ。恐らく土地の人はコブシと呼んでゐたのを、コクシの訛と誤認した結果、甲信界の國師岳を無造作に甲信武三國の境に引き移して了つたのではあるまいか。自分が斯う當推量したのも滿更の出鱈目では無い。甲斐國志金峰山の條に下の如き記事がある。

東方ノ別峰ヲ鐵嶽(クロガネダケ)ト云、其東ハ三繋平(ミツナギダヒラ)ト云、甲信武三州ノ分界ニシテ、荒川其南麓ヨリ發源ス。

◎秩父の奧山　木暮

山梨郡帶那山、奥仙丈、秩父郡界ノ雁坂等ニ綿亘せり。

此文で見ると、金峰山の別峰鐵嶽の東が甲信武三國の界で、直に奥仙丈や雁坂等に連つて居ることになる。又奥仙丈山の條には「三州交界の處ヲ三國山ト云」とあるし、西澤御林山の條には「奥仙丈ノ東へ續ケル絶頂ヲ國司ケ嶽ト云」とある。假りに是等の記事を土臺として考へて見ると、三國山と國師嶽とはよし同じ山で無いとしても、極めて近い位置にあるものと想像するのは當然であらう。そして奥仙丈が東西山梨二郡の北方の境に聳立した高山である以上は、國師嶽の位置を東の方へ移して、現今の甲武信岳の位置あたりに置いたのも、理由の無いことではない。兎に角國師との混同も可なり古くからの事であることが知れると共に、信州に大椹峠の名稱があつたことも分る。富士見十三州圖に大椹山の名が信州側に載せてあるのは之が爲であらう。梓山では前記の通り三方山と呼んでゐた。故荻野氏の記行には甲州で三國山と稱することが斷つてある。然し今では甲武信岳の名が廣く認められて了つた。其名の起源は知らないが、信濃寳鑑に「甲武信ケ嶽一ッニ拳ケ岳とも書けり」とあるのが眞ならば、それは形から名付けたので、推察するに栃本の稱呼であらう。梓山に三方山の名があり、甲州に三國山の名がある。其上甲州側信州側からは、此山は一寸見えないが、栃本では近所の小高い所へと登れば、自分がケルベロスにたとへた三山がよく見えて、中央の山は小さく、如何にも拳に似て居る。自分がコブシをコクシの訛と誤認した云々と疑つたのは、如上の理由からである。農商務省出版の甲府圖幅が、拳に甲武信を代用して、武甲信の三州に跨る山であることを同時を表示したのは、氣のきいた仕方であると思ふ。この山の頂は頗る狹いが、岩石が露出して稍高山相を呈してゐる。そして頂上直下より子酉川の東澤へなだれ落ちた崩壞面は、極めて少許の古生層の岩片の外は、花崗岩より成れることを示してゐる。詳し事は本誌六年壹號に南日君の紀行が出てゐる、就て參照されたい。近年十文字峠の途中から左に折れて股ノ澤の上流を横切り、眞ノ澤の右股沿ふて、直接に此山に

登る林道が開けた。この道ならば栃本から一日で樂に此山に登ることが出來る。十文字峠の道が三峰圖幅の左の端で正に盡んとしてゐる所が、林道への入口に當つてゐる。又栃本から入川谷の左岸を遡つて、前記の林道へ合する道もある。自分はまだ此二つを蹈査する機會に接しないが、聞いた所では路が大分面白さうである。

木賊山へは甲武信岳から四十分で行かれる。安十郎は之をクモキリ山と敎えた。雲切の二字をこれに充てたのは、東の雲取山に對照せしめたので、別に意味はない。頂上は三寶よりも廣く、針葉樹が鬱蒼としてゐる。西から登つて來た人が、破風山に向つて東に尾根を下る時には、切明けの跡が二に岐れる所へ來たならば、荒廢した左の方を取らなければならぬ。右へ下ると鷄冠山と澤一つ隔てた東の尾根を子酉川へ下り込んで仕舞ふ。これは御料局で造つた切明けで、立派に登山路と稱する資格がある。此山も亦花崗岩の山であることは言ふ迄もない。破風山からは尾根傳ひに三時間を要する。序にいふて置くが、初めて此山へ登るには案内者を伴ふた方がよい。

股澤山

入川谷の股ノ澤の上に聳ゆる群峰の總稱である。南に近く尨大な三寶山を控へてゐるので、餘り目に立たないが、主峰は二千三百米突を少し超えてゐやう。東は股ノ澤の大澤で、壁立した岩峰の上から見下ろすと、深い谷底を流れる水音が幽かに聞えて來る。十文字峠の頂上から南に國界の切明けを辿つて尾根を上ると、三十分で一寸した頂上に出る。更に二十五分の後、筍のやうに聳立した第一の岩峰を、猿の如く攀ぢ登るのは、危險でもあり愉快でもある。それから第二の岩峰と小さな峰を二つ越えて、崩れ易い岩に攫りながら急勾配を登り詰めた所は、第三の岩峯の頂上で、高さ二千二百九十米突。入川谷に面した岩壁は百米突餘も直立してゐる。其南は即ち股ノ澤の最高峰、二十分程の距離に

在る。此峯から岩質は俄然一變して、花崗岩の大塊が露出してゐる。少し下ると直ぐ三寶山の登りが始まる。栂や白檜の大木が茂つてゐるが、思の外登り易い。一時間餘で頂上に達する。入川谷の紅葉が霜に飽きた十月の中旬に、此岩峯の頂上から眺め下した景色は、定めし偉觀であらうと思ふ。

富士見、東股ノ頭

甲武信岳から國師岳に至る間の尾根は、甲斐國志の所謂奥仙丈山脈の一部に當つてゐるらしいのであるが、惜しいことには二千四百米突を超えてゐる峰が一もない。然し全體としては決して低い尾根で無いことは、最低の鞍部が二千百四十米突を下らないことを見ても分る。所詮この尾根は、兩端に國師甲武信といふ大立物を控へて、殆んど一日を要する程の長い距離を蜿りながら、目に立つ山の無いことが、著しく低く感じさせると同時に、登山者を惹き付けない源因となつてゐるのであらう。餘り登つた人はあるまいといふ好奇心と、眞黑に繁つた針葉樹の森林とは、妙に自分等の心をそゝつた。然し樣子が知れない。梓山の安十郎は確に切明けが通つてゐるとは言ふたものゝ、見た所は如何にも手剛さうなので、大に尻込みの體であつたが、中村君も同行するといふので、南日君と三人で思ひ切つて通つて見ると、少部分の外は其案外に樂であつたのに驚いた位である。此連脈中には兎も角も峯らしものが五つ六つあるが、中に就て二つだけを總代的に揭げることにした。山も總代を出すやうになつてはお仕舞であると憤慨するかも知れないが、個々の名を知らないのであるから已むを得ない。尙ほ自分は一度而も餘り注意せずに通過したのみであるから、詳しく書けないことは勿論、誤もあらふと思ふから、特にその事を斷つて置く。

甲武信岳の頂上から左下に搔き取つたやうな赭色の崩壞面を見ながら、西を指して狹い尾根を百二三十米突も下ると、一小峯に達する。古い切明けの跡はあるが、新らしい若木が充分に生長してゐるの

で、行先がうまく見透せない。殊に唐松の一丈位のものは大に邪魔をする。此小峯を踰えて二千四百米突に近い一峯を上るのであるが、此通過がなか〳〵困難である。測量部でも御料局でも切明けを造らなかつたと見えて、僅に國境を査定した時のものらしい古い木の切株などがあるのを頼りに、灌木喬木倒木の雜然と入り亂れた中を、會釋もなく押し通るのである。目先が見えないので、同行の中村君や南日君と別れ〳〵になつて、途轍もない方へ出て、互に聲を懸け合つて戻つたことも少なくなかつた。後で梓山の獵夫に聞いたらミヅシと敎えて呉れた、どんな字を書くのか分らない。甲武信岳から一時間近くもかゝる。此處を下りて又登り詰めた所が二千三百七十九米突の地點で、ミヅシから一時間半を費せば足りる。路は相變らず困難であるが、前程のことは無い。此山も名の知れない一である。直ぐ北に續く山は富士見といふので、此處よりも二十米突許高い。恐らく國師甲武信の間に於ける最高峰であらう。富士が見られるから付けた名ださうである。自分等は此山から四十分で往復した。この尾根は尙ほも北へ延びて戰場ヶ原に臨んだ所に五郎山が聳えてゐる。頂上の大きな岩は、昔し建御名方命と盤古の神と戰場ヶ原で戰つた時、何とかいふ力のある神が投げ上げた大磐石ださうな。富士見の南の峯から尾根の向きが西南に變つて、路は柔い苔の生へた栂の林を下つて行く、下り切つて少し登ると石楠の多い岩の上へ出る。瞰下ろす左の谷は黑木の茂つた遠い子酉川の上流で、脚の下は百尺の懸崖である。岩間には低い灌木が生へてゐて、日蔭かつら、苔桃、小岩鏡などが目に入る、此岩峰は地圖に記載してない。岩峰から又石楠の多い狹い尾根を下つて、平な鞍部に出ると、右に澤へ下る道がある。是は梓川の東股へ下つて、夫から梓川に沿ふて梓山村に至る道であることが地圖で分る。此附近も栂林で路は歩きよい。この鞍部から緩い傾斜を登り切ると三角點のある峯に出る、梓川の東股の頭と呼ぶのださうであるが、餘り長いから單に東股ノ頭と稱することにした。高さ二千二百七十一米突、富士見の南の峰から二時間半を要する。慾には此邊に金峰國師に劣らぬ高峰を

欲しいのであるが、無いものは仕方がないと諦めた。稍や西に向つて頂上を下り、二三度小凸起を上下して、最後に下り切つた所が此連嶺の最低鞍部である。附近は栂の大木が晝も暗い程に生ひ茂つて、蹈む足の下には苔が柔い。これから國師の斜面にかゝるので、五六の小峯を上下するが、孰れも二十米突足らずのものである。自分等は國師岳から下つて來たのであるから、登りに何時間を要するかは明言出來ぬが、下りに約三時間を費したことから考へると、少なくとも四時間は懸ると思はなければなるまい。然し尾根には御料局で作つた立派な切明——といふよりも寧ろ路——があるから、通行に少しの困難もないことは、愉快には相違ないが、何だか物足らぬ感が起らぬでもない。

富士見へ登るには、梓山から梓川を遡り、地圖に示してある路を二千二百四十九米突の三角點へ出て、夫から南へ尾根を辿ればよいのであるが、其路は今も果して通れるかどうか、自分の知らぬ所であるから何とも言ふことが出來ない。東股ノ頭へは梓川の東股から登れる。此處から尾根傳ひに富士見へ行くもよからう。然し自分は子酉川の上流東澤を遡つて、此連脈の諸山に登り、梓川に沿ふて梓山に下るのが、尤も面白い方法であろふと思ふ。東澤一體の溪谷は、可なり奥深い澤で、針葉樹の大森林である。雁坂街道の赤志附近から子酉川の口元を覗いて見ると、薄暗い谷の奥に鷄冠(トサカ)山が鮫の齒のやうな凄まじい尾根をぐいと川まで突き出して、此谷の秘密を守る大蛇が口を開いて近付く人を威嚇してゐるやうで、容易に近寄れさうにもないが、這入れぬことはあるまいと思ふのである。

國師嶽

國師岳を初めて廣く世に紹介したのは、故荻野音松氏で、甲州國司嶽記行と題する詳細を極めた文が、本誌二年二號に載つてゐる。國師岳なる名稱は、其山が夢窓國師に關係させてあるやうであるから、國司と書くよりも國師の方が正しいことは、曾て小嶋君の云はれた通りである。此山の位置に就

ては甲斐國志に次のやうな記事がある。

西澤御林山（上釜口村）奥仙丈ノ東ヘ續ケル絶頂ヲ國司ケ嶽ト云、山内ニ西ヘ指入タル溪谷アリ、因テ名ヅク。笛吹川の濫觴是ナリ。

甲州の古圖を見ると、此邊は極めて畧してあるので、實際に引き較べやうとしても、容易に見當が付かない。然し奥仙丈山は元の東西山梨の郡界（金峰山圖幅を見ると、此山脈は東山梨郡三富村と西保村との村界をなしてゐるのみで、東西山梨の郡界では無い）に連亘して、北は信州界に達する山脈である。其東へ續ける絶頂といふことであり、西澤御林山の名がある以上、現在の位置と見て差支はあるまい。即ち金峰山圖幅に二千五百九十一米突の三角點ある峯である。地理局出版の駿甲豆三州圖が、奥千丈山を國師岳の位置に、國師岳を甲武信岳の位置に据えたのも、或は此文に據つたのかも知れぬ。甲武信と國師との混同に就ては、既に自分の考を述べて置いた。其上國師岳と西澤御林山とは同一の山でなければならない。然るに甲武信岳は東澤の山である。駿甲豆三州圖の奥千丈の位置は、大體に於て間違はなかつたとしても、國師の位置は明に誤であることが分る。

此山の絶頂三角點の在る處はさして廣くは無い。測量の爲に木を伐り拂つたので、多少の眺望は得られるが、快濶といふ譯にはいかぬ。元より岩石も無ければ偃松も無いので、荻野氏の言ふた通り少しも高山相を呈してゐない。一體の有樣が三寶山と能く似てゐる。絶頂から東に向つて二丁許下つた後再び二丁許上ると、三角點より三四十米突低い峯に出る。此峯から俄然低下して東北に走つてゐる尾根が、即ち甲信の國境山脈をなしてゐるもので、東南に延びた尾根が川浦からの登路に當つてゐる。五六丁下には大嶽山神社の奥院の大岩が木立の上に突立つてゐるのが見える。三角點から西へ一二町下つた處はちよいとした平坦地で、三方への分水嶺をなしてゐる。西南が荒川、西北が川端下川の東股、東南が京ノ澤の本流である。甲斐國志の所謂三繋平と稱するものは、正に此處を指したものである

ことは、「荒川其南麓ヨリ發源ス」とある文が之を證明してゐやう。此處から東南の山ふところへ四五十間下つた所は、木立に程よく圍まれた野營の好適地で、燃料は豐富である。水も地質が花崗岩の砂地で、岩と岩との重なり合つた罅隙の多い土質とは異つてゐるから、少し谷間へ下つて覓めたなら、湧き出してゐさうに思へる。五月下旬か六月上旬ならば、雪があるから少しも水の心配はない。自分等は五月下旬に一坪程の火を焚いて茲に野營した。三繋平から爪先上りの路を一町許西に行くと、大きな岩が露出して丈の高い偃松が枝を延ばしてゐる。此峯は絶頂より二三十米突低い。南側は背の低いひねつこびた針葉樹の密林が目も遙に續いて、頑强な幹にも枝にも、一面に霧藻が附着して、風に靡いて居る風情は、適度の高さを有する深山にのみ見られる特色の一つで、また自分の絶愛して措かざる者の一つである。此處から急に低くなつた尾根は、途中に一小峯を起したまゝ、二百米突近く下つて、金峯山の東の雄峯朝日岳と脈を連ねてゐる。この國師の東西二峯と中央の最高點とは、北方から遠望した所では、殆んど凸凹を認めないので、爲に國師の頂上は大なる弧を空中に畫いてゐる。三繋平の南から緩い傾斜の尾根が次第に高まつて、遂に二千六百米突に達し、奥仙丈山の最高點をなすと同時に、秩父山脈中の最高點をなしてゐるのは、自分の所謂奥仙丈岳である。

國師岳の登路は、甲武信岳及金峯山の方面から尾根傳ひに登る者の外、川浦道と西保道と梓山道との三つがある。川浦道は荻野氏の取られたもので、道の有樣は其記行文に詳しい。梓山道は梓山村から梓川に沿ふて上るのである。安十郎は梓川を遡つて川端下と梓山との間に出てゐる尾根に取り付くのだと敎えた。さうすれば地圖に示してある路の終點から右の尾根を攀ぢて、直に絶巓に登るのであらう。路のりは三里で甲武信岳へ登るのと大差なく、一日で樂に上下出來るとの事であつた。又梓山から國師を踰えて、東山梨郡の諏訪又は西保へも一日で行かれるさうである。御嶽圖幅がまだ出版されてゐないので、西保の道筋はよく分らないが、奥仙丈山脈を尾根傳ひに登るものらしい。地圖に三

繋平から南へ尾根を絡んだ一條の點線で示してあるものが其路の上部と思はれる。諏訪道は西保道の中途から分れて、琴川の谷を杣口、千野ノ宮、諏訪と下るのであらう。想像した所では梓山道が一番樂な道であるらしい。

奥仙丈嶽

先づ奥仙丈山に關係ある甲斐國志の記事を抄出して、其位置と境域とを定めることにする。

奥仙丈山　本郡（山梨郡）ノ極北ニシテ、其北ハ信州武州ノ界十文字嶺（山脊南北ヘ延テ徑路東西ニ亘ル故ニ名ヅクト云）ニ接ス。三州交界ノ處ヲ三國山ト云。山内東西七里許、南北拾餘里ト云。東ハ栗原筋ノ雁坂峠ニ連ナリ、西ハ本郡ノ北山筋ニ接シ、金峰鐵嶽ノ東三繋ノ下流荒川ヲ界シ、南ノ方川窪村、荷坂、瘠尾、帶那道ヲ限リテ奥仙丈ト云。仙丈トハ千丈ノ義カ、他州ニモ同名アリ、高峭ノ謂ナリ。

中牧山　大窪山（室伏、乙カ妻ノ北ニ在リ）ノ西北ヘ連ナレリ、中牧諸村ヨリ入會故ニ山ノ名トス。（杣口、千野ノ宮、城古寺、窪平四村ヲ中牧ト云。後ニ隼村及ビ倉科ノ諸地組ヨリ租米ヲ入レテ組合トナレリト云）西保ニテ此山奥ヲ東奥仙丈ト云。

西保山　西保四村ノ入會山ナリ。山奥ヲ西奥仙丈ト云。

琴川　一名帶縮川、濫觴ハ奥仙丈ノ中ヨリ發シ、中牧大窪ニ山ノ溪水相集リテ南流シ、杣口、千野ノ宮、窪平村東ヲ歷テ、室伏村ノ東南ニテ笛吹川ニ注グ。

西保川　奥仙丈ノ中ヨリ發源シテ、大澤川（北原ノ上ニテ大澤山ヨリ發ス、此山ハ小檜峯ノ別稱ナル可シ。）及ビ其他ノ溪水七八道相湊ク、南流シテ北原ヨリ牧平ニ出ヅ、上流ヲ漆川ト云。

荒川　金峯ノ東三繋ノ南ヨリ發源ス、其東ハ西保帶那ノ奥仙丈トテ、深山幽谷ナリ。

帶那山　東ハ万力筋切差、西保等ト山脊ヲ界シ、北ハ西奥仙丈ノ高屏風、玉小屋ニ至リ、西ハ荒川ノ中央ヲ限ルト云フ。

◎秩父の奥山　木暮

尙ほ金峰山の條に

其東ハ三繋平ト云、甲信武三州ノ分界ニシテ、荒川其南麓ヨリ發源ス、山梨郡帶那山、奥仙丈、秩父郡界ノ雁坂等ニ綿亘セリ。

甲斐國志に載せてある奥仙丈の記事は如上の通りである。若夫れ奥仙丈山の條を今日の地圖と照し合せて見たならば、本郡の極北と云ひ、其北は信州武州の界十文字嶺に接すと云ひ、山内の廣袤と云ひ、恰も甲武信岳を中心として東西に連亘した山脈が、即ち奥仙丈の主脈たるが如き觀を呈するのであるが、茲に昔の地圖と今の地圖とは、精確の度に大なる相違のあることを參考しなければならない。蘆毛山脈に南を限られた子酉川の上流は、殆んど人跡の絶えた地で、記錄の徵す可きものがない。甲斐國志に此地方に關する記事が詳細を缺いてゐるのは之が爲である。其結果金峯山から東走して來た山脈は、其儘幾んど一直線に信州武州の境を雁坂峠に續くものと信じられてゐたことは、其信念を形の上に現したものと見て差支の無い甲州の古圖が之を證明してゐる。自分は西澤御林山の條に「奥仙丈ノ東へ續ケル絶頂ヲ國司カ嶽ト云」とある記事も、亦信念から生れたものではあるまいかと思ふのである。そして甲信武三國の境は勿論雁坂峠なども、國師岳と甚しく離れてゐない距離に記載されてゐたことは、比較的近時の補正を加へたものと認む可き測量部出版の輯製甲府號を見ても想像されやうと思ふ。甲斐國志が東に雁坂峠北に十文字峠を擧げて、奥仙丈の東乃至北の限界を示す目安の如くに取扱つたのは、當時此の二の峠を除いては、手近い處に名の知られた山が無かつた爲で、必ずしも限定的の意味で用ゐたのではあるまいと思ふ。以上は單に自分の想像に過ぎないとしても、更に自分をして怪訝の念を深からしめたものは、中牧山以下の記事である。是等に據ると東奥仙丈と云ふのは中牧山の奥で、西奥仙丈と云ふのは西保山の奥である。この東西奥仙丈なる稱呼が西保の言葉であることは、深く注意す可きことであらう。其他琴川西保川は孰れも奥仙丈の中より發源すと特筆してあ

るが、德和釜口等の諸村になると、一も奥仙丈の記事がない。又子酉川の東澤西澤なども、當然奥仙丈の中より發源すと特記されなければならない筈であるのに、反て西澤を冠して西澤御林山の名がある位である。前記の中牧山や西保山は、皆甲信の國境よりは遙に南方に位する山で、秩父往還の西に見ゆる前山である。單に其山奥と云ふたのみでは限りは無いが、此塲合自分が秩父の奥山と題して金峯山までも含ませたのとは違ふのであるから、無暗に遠い甲武信岳や雁坂峠までも、山奥といふ二字の中に含ませたものではあるまいと思ふ。自分は是等の記事から推して、奥仙丈山は、西は荒川東は笛吹川、南は兄川を限りて帶那山に至り、北は三繋平を界とした大山塊の總稱であつて、其主脳は元の東西山梨の郡界を南北に連亘してゐる山脈であると云ひたい。かう考へると、荒川の條に「金峯ノ東三繋ノ南ヨリ發源ス。其東ハ西保帶那ノ奥仙丈トテ深山幽谷ナリ」とある記事や、金峯山の條に「山梨郡帶那山、奥仙丈、秩父郡界ノ雁坂等に綿亘セリ」とある記事や、中牧山の條に「奥仙丈ハ金峯山ノ鐵嶽ノ東見通シナリ」とある記事や、若しくは奥仙丈山の條の終に「凡ソ此筋奥仙丈ノ諸山、皆連貫一脈シテ金峯ノ羽翼ナリ」とある記事やが、始めて要領を得たものとなるやうに思ふ。彼の山内東西七里南北十餘里といふやうな記事は、唯だ山が廣く且つ深いことを示す爲に擧げたので、此塲合之に泥む必要の無いことは、三繋平を甲信武三州の界とした記事に拘る必要の無いのと同じであらう。

自分は甲斐國志に據りて、奥仙丈山の位置境域を右の如く斷定して、畧誤りはあるまいと信じてゐる。然し西保附近を探つたことは無いから、今でも其名が行はれてゐるかどうか少しも知らぬが、地圖に正當と思はれる位置に奥千丈嶽があり、西保村に奥千丈御料地の名があるのを見れば、今も其稱呼を存してゐることを知ると共に、奥千丈なる名稱が西保村の山名であることを知ることが出來やう。黑平入りの鳥居附峠近から右に望んだ奥仙丈山の主脈は、平な圓味のある長い頂界線を描いて、高峭と云ふやうな感じは起らないが、秩父の大洞山附近から遠望した所によると、山勢頗る緊張して流石

に雄大峭拔の趣が見える。

奥仙丈といふ山名に敬意を表して、其區域と思はれる北部に二千六百米突の高峯があるのを幸と、自分はこれに奥仙丈岳の名を與へて、此名高い總括的山名の代表者としたのである。國師岳と餘り近いといふ非難があるかも知れないが、立山の淨土龍王二山の關係と能く似てゐるから、差支はあるまいと思ふのである。

此山の絶頂は國師岳よりも廣く、五六の花崗岩の大塊を露出した下には、同じ岩の爛砂が一面に敷き詰めて、偃松が稍多い、眺望は可なり雄大である。其外山頂別に記す可きものはない。登路はすべて國師岳と共通である。東京市南郊の高臺から、國師岳と此山とが望見されることは、前號の雜錄に書いて置いた。

朝日嶽

農商務省出版の甲府圖幅に、奥仙丈山として紹介されてから、陸地測量部の輯製甲府號を始め、其後の地圖が皆之を蹈襲したので、奥仙丈山は恰も金峯山と國師岳との間に聳立するもの丶如くに信じられて了つた。然し二三の古圖や明治十二年に地理局で出版した圖などを見れば、三繋平附近に的確と奥仙丈岳を据えて、國師岳が反て其東の甲信武三國の境に記載してあることは、前に述べた通りである。農商務省が全く巨摩郡に屬する山を山梨郡の山として了つたのは、可笑しい間違であるが、若し甲斐國志西澤御林山の文に據つて、國師岳の西に奥仙丈の名に相當す可き山を覓めたならば、此山を措いて他に相當するものが無いと共に、是こそ奥仙丈山なれと大きく首肯させるに足る山容を備へてゐる。黑平入りの鳥居峠あたりから北方を望み見た時に、金峯山に亞で峭拔して居るのは此山である。甲武信岳から西南望した姿は最も雄壯で、金峯山を右の肩に載せて稍鈍い金字形に尖つた頂上附

近から、眞額一文字に巾の狹い赭色の崩落部が長く下まで續いて、敵軍を睨みながら戰場に立ち竦んだ手負の勇士を見るやうな凄みを覺える。川端下から荒川の谷へ踰える路が之に沿ふて通じてゐるやうであるが、自分等は氣が付かなかつた、覺束ない路なのであらう。標高二千五百八十一米突。頂上は平で東西に長く、疎らに木が生へてゐる。中央に小さな三角櫓が建てゝあつた。此處から十四五間東に行くと、岩が重なり合つて偃松が枝を伸してゐる。南は荒川の谷を瞰下ろして、眞黑なる針葉樹の梢が、其下に太古の儘の靜寂を閉ぢ込めてゐるやうな氣がする。西の斜面にも岩はあつたが偃松は無かつた。道は百米突餘も下を通つてゐるらしい、自分等は知らぬ間に路を離れて、國境の切明けを頂上へと進んだのであつた。其程樂な登りなのであるから、國師金峰間を縱走される人は、序に此山の頂上も窮められたらよからうと思ふ。五月下旬頃は頂上の北裏にはまだ雪が大分殘つてゐる。

黑平では此山を朝日岳と呼んでゐる。自分は始め此山を奥仙丈と信じてゐたので、幾度か黑平を通つても遂に名前など聞いたことは無かつた、また聞かうともしなかつた。唯だ梓山の安十郎が、奥仙丈は甲州の山で信州界ではない、國境の切明けは其山の北を通つてゐると答へたのを聞いて、少し變だつたとは思つたが、國境は山の頂上を通らなければならないと云ふ理由も無いから、深く究めもしなかつた。其時安十郎を連れて國師へでも登つたならば、早く仕末が付いたかも知れない。其後甲斐國志の記事を見て、再び疑の雲が此山に懸つた。然し疎懶な自分は進んで之を拂はふともしなかつた內に、金峰山圖幅が出版されて、奥仙丈の位置や朝日岳の名が公表された。今年五月金峰山に登る途次、黑平で念の爲に聞いて見たらばアサイ岳と答へた。文字は朝日と書いて古くからの名ださうである。これで以前黑平の湯で聞いて貰つた友人の話や、宮本村役場へ照會して得た返事等が總て一致した。甲斐國志には少しも此山の記事が無い。

金峰山

金峰山の記行文は、本誌二年一號に高野君の「秋の金峰山」を始め、其他二三の記事があつて、登路や山頂の模樣まで詳しく記してあるが、このまゝ筆を擱くのが如何にも惜しいので、二三の蛇足を付け加へる。

人若し黑平附近の見晴らしのきく高處に立つて、麓に幾多の前山を重ねた金峰山の姿を、遙に北方の空に仰ぎ見た時には、誰しも奥深い山だと感ずるに相違あるまい。此前山の濶葉樹林が針葉樹林に代つて、終に御室川の左岸で金峰山の直下にある御室の新らしい屋根を見る迄には、隨分長いこと歩かなければならない。是から上は、甲斐駒の屏風岩の小屋、若しくは木曾駒の金懸ノ小屋から上と同じやうに、瑰奇を逞うした花崗岩の間を登つて行くと、喬木が次第に灌木となつて、偃松がそろ〳〵出て來る頃には、頂上の五丈石をすぐ目の前に仰ぐやうになる。絶頂は岩衾をかぶつた大きな岩が重り合つて、南三十間の距離にある五丈石よりも二三米突高い。附近には岩高蘭、苔桃、蔓苔桃が一面に緑の毛氈――そのすつきりした柔い感じは寧ろ天鵞絨を想はせる――を敷き詰めて、秋十月の頃には紅色紫黑色の小果が玉累々たる有樣を呈する。絶頂から東の方へ下り氣味に四町許行つた處は、甲斐國志に

北方ハ本宮ヨリ奥ノ院藥師ヶ嶽ヘ下ルヿ一里許、此處甲信兩州ノ界ニシテ、神領モ亦此ニ限ル、天正壬午ノ御朱印ニ所謂長子ノ番所是ナリト云。此ヨリ信州佐久郡川端下ニ至ル五里餘、山徑殊ニ險ナリ。

と記し、又

山北藥師ヶ岳ニ牛頭天王ノ祠アリ、金峰ノ奥ノ院ト稱ス。

と記載してある藥師岳に當つてゐるらしい。今は祠はないが、石が澤山積み重ねてある。下ること一里とあるのに四五町では甚しく距離に相違があるが、是より一歩を踏み出せば甲信兩州の界でなくなるから已むを得ない。或は此兩州の境とあるのが誤りで、藥師岳は實際一里の下に在るのかも知れないが、自分はまだ此道を蹈査しない。然し上から見た所では、此處から急に傾斜が增して偃松が餘程多く、蹈んだ跡らしいものはあるが、果して路であるか否か疑問である。次回の登山には是非探つて見たいと思ふ。金峰山圖幅には明に路が示してあるから通行に差支は無いのかも知れない。去年十月に岡野、冠の二君が川端下から登つた時には、誤つて鐵山附近へ出られたやうに聞いたが、初めに此道を登つて、偃松の斜面にかゝつてから左にそれたのか、或は初から其左下の谷川を遡つたのであるか、詳しいことは遂に聞くを得なかつた。長子ノ番所とあるのは、修驗道の盛な頃には御嶽から番人を置て、入山者に山役錢を課したものであるが、御室は其時の南口の番所であつた、是は北口の番所であつたのであらう。此地點から右に折れて木立の中を下つて行くと、間もなく最東の一角に出る。金峰山の條に「東方ノ別峯ヲ鐵嶽ト云」、又「鐵山ノ社、山宮ノ東ニ在リ、此地磁石ヲ產ス」とあるのが是である。五月下旬に通つた時には、此邊は未だ三尺餘も雪が殘つてゐた。此處から尾根が東北に向つて朝日岳に連なつてゐる。

頂上の五丈石は

御影石高サ貳拾五間横拾八間、其頂ニ小池アリ、形蛤ノ如シ、其水亢旱ニモ涸レズ、甲斐派美ト稱セリ

と甲斐國志に記載してあるが、實際は其三分の一も覺束ないであらう。上は平坦で長さ一丈巾四尺しか無いと思つた。小池とは大袈裟な言葉で、其實は岩の凹みの溜水に過ぎない。二日も照り付ければ干上つて仕舞ふ。位置も東に添ふて立つてゐる岩の上にあるので、頂上よりは一段低い。自分の初

登山の頃は梯子があつたが、今はそれがないので、攀ぢ上るのが少し危險になつた。其上最高點では無いから强いて上るには當らない。

川端下からの登路は、川端下川の西股の上流が二つに分れてゐる間の尾根を登るやうに地圖に示してあるが、これは前述したやうな次第であるから略すとして、右の溪流を更に遡つて七八町も行くと、左からまた一溪が來り合する。路は其澤に沿ふて登つて行くので、其處には小石を積み重ねて道しるべがしてあるから、夫を頼りに左に岸を上ればまごつくやうな心配は無い。路は荒れてはゐるがよく分る。十二三町行くと水の無い澤について右に尾根を登り、五丈石と三角點との間へ出る。中村君は十一月に此道を登つて、梓山から往復した。五月下旬これを下つた時には、塲所に依つては三尺近くも雪が殘つてゐるので驚いた。尙ほ前記の溪流を左に入らずに、本流を何處までも登ると水が盡きて、四十度以上もあらうと思はれる急傾斜な谷が偃松帶の直ぐ下まで續いて、末に二つに分れてゐる。長さは十町の上はあるまいと見たが一時間はかゝる。左右孰れを取るも元より路は無いのであるから差支ない。谷が盡きてから偃松や岳樺の間を登るのが少し厄介であるが、十五六分で頂上へ出られる。自分は川端下道の中では、これが一番簡單で一番樂なやうな氣がする。も一つ西口の增富道もあるが、自分が此道を登つたのは二十年も前のことであるから、何一つ記憶に殘つてゐない、唯だ其當時は路がよかつたことだけは覺えてゐる。

金峰山から國師岳までは、大略四時間の行程であらう。荻野君は國師岳を八時少し前に立つて、十二時に金峰山に着いた。自分等は十一時少し過ぎに金峰を立つて、四時十分に國師の西峯に着いた。更に細別すると、朝日岳の頂上に着いたのが午後一時半で、二時間半を費してゐるが、鐵山附近で三尺近い殘雪の爲に路が分らなくなつたり雪を踏み拔いたりしたので、三十分餘も無駄骨を折つたらうと思ふ。朝日岳を出立したのは二時であつた。其上自分等は四五泊に要する野營の準備品を各自に背

負ふて居たから、割合に時間を空費したに相違ない。何の道四時間あれば充分であらう。

金峰山は實に立派な山だ。獨り秩父山脈中に嶄然頭角を拔いて居る許りでなく、日本の山の中でも第二流に下る山では無い。世に男の中の男を稱へて裸百貫といふ諺があるが、金峰山も何處へ放り出しても百貫の貫祿を具へた山の中の山である。

以上は東の方雲取山から西の方金峰山に至る秩父奥山の梗概である。金峰以西の山に就ては二三の聞見した所が無いでもないが、それは本文の補正と共に他日實査の上に讓つて、茲には案内者のことを一言して筆を擱くことにする。

秩父奥山に登る根據地又は出發點としては、秩父に在つては栃本の外にない。此處の山中卯吉といふ獵師は、先づ秩父の主とも謂ふ可き者で、十文字嶺、股ノ澤、眞ノ澤から東は雲取山に至るまで、秩父郡内の山でも澤でも掌を指すが如くに明るい。同人を連れて此邊の山や澤を縱横に蹈破したらば面白からうと思ふ。栃本に宿屋は無いが、大村與一といふ舊幕時代に關守をした家で泊めて呉れる。甲州方面では丹波山、一ノ瀨が雁坂以東の山へ上るには便利である。丹波山の楠とかいふ獵師は山に詳しいさうである。一ノ瀨のことは能く知らないが、附近の山ならば土地の人は大抵知つて居るから、賴めば案内して呉れぬことはあるまい。丹波山には宿屋がある、一ノ瀨には宿屋は無いが何の家でも大概は泊めて呉れる。信州の梓山は金峰山から甲武信岳に至る間の諸峯及十文字嶺、三國山等へ登るには究竟な根據地で、皆一日で上下することが出來る。附近には戰場ヶ原や川端下の原(同く戰場が原の名がある)等の美しい原もある。唯好案内者の無いのは缺點であるが、測量部の人夫と爲つて山歩きをした者があるから、其等で間に合はぬことはなからう。終りに此山脈は、國師、甲武信、雁坂、唐松尾あたりを一度上つて置けば、案内者は無くとも七泊で全連嶺を縱走し得ることを附け加へて置く。

豐後の双子火山及び内海の風光

理學士　石田義雄

九洲の東北部一角に、殆ど瘤狀をなして、突出してゐる國東半島のある事は、日本地理を習はれた方々には、熟知せらるゝ事であらう

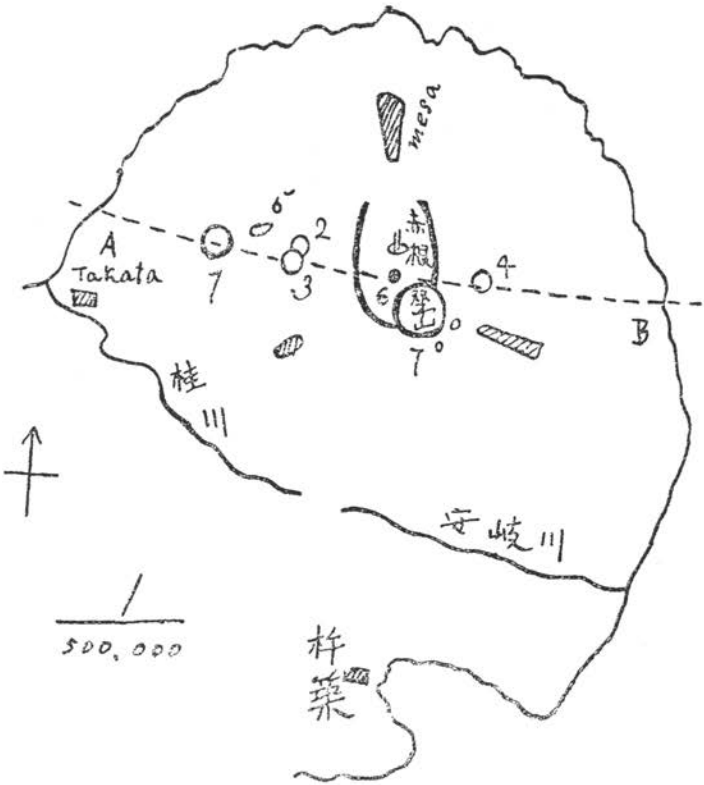
此の半島の丁度中央に在るのが、双子火山であつて、現今は全く死火山と成り終つて、通例其の岩石研究以外には、誰にも是が第三期時代に、火を吹いて居たであらうとは思われない程に、破壞せられて居る火山である、然し山岳の學術的趣味としては、甚だ大切な山で、彼の日本の内帶に發達して居る白山火山脈の續きが、中國から九州に遣入る其門口を爲して居る處であるから、以上の考を持つて御覽を願ひたい

國東半島を構成してゐる岩石の大體を申しますと、其基底熔岩は、耶馬溪を造つてゐるのと同一の安山岩の集塊岩から出來てゐて、特にMud blocksと云ふべきもので、九州の東北部に、非常の面積を占めてゐるのである（遠く阿蘇山の基底を成して居るものに、成因の同じいものが有るが、岩石研究の結果、全々異なれる安山岩の集塊岩より成れる事が明かと成つたので、此の阿蘇山のは、含有せないが、九重山及び天下の奇勝地たる耶馬溪附近に迄、廣がつてるものである）賴山陽が『耶馬溪山天下無』と吟せし奇勝も、全く此等集塊岩の風雨抵抗力の局部的差異に基くもので、斷崖削立、競秀峯と成り、急端激碎香魚歸と成れるのである、此の集塊岩に依つて構成されてゐる半島の中央に、双子火山が噴出したのである。

然し乍ら双子火山と、學術上名付くべき山體は、比較的に小區域を、占むるもので、殆ど半島の中央に、北方に開口せる馬蹄形の、火口をなしてゐるのである、此の馬蹄形火口の東南隅の、即、火口

丘の上に、該火山中の最高峯たる双子山（標高海面上約二千四百尺）が最後に噴出し圓錐形の塊狀火山を構成したのである（最高峯が双子山なる名稱なるが爲めに、馬蹄形火口として、破壞殘存せる諸山をも合せて、是を双子火山と稱してゐるのである）だから火山學の方から云へば、現在火口として殘在せる部分は、其爆發當時噴出せる灰及び熔岩の交層より造られたものであつて、長日月の雨水風力の破壞作用によつて、數多の峯に分たれたのである、即ち復式火山である（二重式火山ではない）もし此火口壁を造れる諸山が、今日迄風雨の破壞作用を蒙る事が無かつたならば、凡て同一の標高を示さねばならぬ理である、即ち今日數多の群峯に分たるゝも大抵千八百尺内外の標高を示してゐるのを以て見ても、當時火口壁を構成せしものゝ殘峯なる事、明白である、且つ此等諸山の岩石は、其顯微鏡的研究の結果、凡て僅かの合兩輝石角閃安山岩から造られて居て、確かに同一火口から流出したる事を物語つて居る、（角閃安山岩は白山火山脈の特有のものである）而して此等熔岩噴出時代は、研究の結果、第三期の末期時代に起つて、洪積期の初期時代まで連繼したもので、今日は一般に白山火山系に屬する火山は、殆ど死火山或は餘命將に盡きんとしつゝあるものゝみで、此の双子火山も、其の命數を前述の馬蹄形火口内に、湧出する赤根温泉と温度と相待つて、殆んど死火山と稱するも誤りなき、最早や危險時代を通過して、仕舞つたものである、此の赤根温泉は、攝氏の温度の二十五度位を示して居て、夏季でも土地の人は、之を更に沸して用ひて居るのである、一體火山の命數を、大體に於て吾々に指摘して居るものは、其の火山附近に湧出する温泉の温度である事は、明かな事實で、是又造物主の吾々に示して呉れる、有難い危險通報計に外ならないのである。

此の双子火山の火口を取卷いて、殆ど同一の距離を持つて、三つの火山臺地（Mesa land）（メサーと云ふのは内海にある古戰場で名高い、屋島の樣な形の山で、所謂屋島臺地である）此三山は、双子火山の爆裂以前に流出した熔岩の殘骸を示すもので、非常に立派な形を爲してゐる、八面山などゝ云つ



◎豐後の双子火山及び内海の風光　石田

て、土地の人が呼んで居る、此の八面山なる名は、幾つも外にあつて（大抵メサー形の山に附けてあるらしい）其好例として豐前中津から耶馬溪に入らんとする門口に、八面山と云つて、立派な屋島式火山臺地がある、大分線の列車に乘つて居ると、車窓から立派に見えるのである、之を造つてる熔岩は、一般に安山岩としては基性（ベーシック）(Basic Varieties)に近いもので、特に瀬戸内海の諸島中に發達してゐる讃岐岩 (Sanukite)などは、好例である。

先づ上圖で、大體の概念を、頭に入れて戴きたい。

今少し學術的のお話と成るが、中央の馬蹄形火口と、殆ど直角に東より西に、丁度一直線上に、三四の塊狀火山が噴出してゐる（大

抵千五百尺—千八百尺内外）此等の火山は、爆發して出來たのでないから、頂上には火口はないが、一體が蕈笠型（キノコガサガタ）、即ち圓錐形を爲して火山基底の集塊岩を破つて、噴出して居るのである、無論白火山系に屬してる安山岩から、出來てるが、中央の双子火山の熔岩に比べては、其噴出の時代の差異に從つて、皆多少の特長の有る熔岩から出來て居るのである、此等の諸塊狀火山を、東から西に連絡した一線に依つて、其縱截面圖（プロフアイル）を作つて見るならば、左圖の如き形と成るのである。

(1)(2)(3)(4)(7)が塊狀火山で、特に(7)は双子火山の火口丘の上に、噴出した塊狀火山で、先にも云つたが、一等高い山で、名が双子山だから、此地方の火山の總代名にしたのである、(5)は岩脈(Dyke)と云つて、地殼の割目に添ふて熔岩が、上昇して間を滿したものである、(6)は双子火山の火口中に出た一種の岩脈で、此は其爆發時代に於て、熔岩を流した地殼の弱き部分が、火山活動の力の衰微と共に、即ち殘餘の熔岩を、其の弱き活動力で、押上げた部分を示すので、學術上火山の岩頸(Neck)と云つて、最後に地表に流出せしめた熔岩である、溢れ出す程の力も容積もなく、押上げられながら固まつたものである、此は酸性の石英安山岩（含雲母角閃石英安山岩）に屬するものである。

此圖の東西に走つて居る線は、白山火山脈に直交して居る所の、一つの地殼の弱點を示すもので、

白山火山脈と云ふものには、中國では大山（ダイセン）（約六千尺）三瓶山（サンベサマ）（約四千尺）があり、此の續きが内海を横切つて（姫嶋の矢筈岳に渡り）九州の門口には、表題の双子火山が有り、猶別府温泉の背後に、由布嶽や、鶴見嶽を起して、嶋原半嶋の温泉嶽迄、連絡して居るのである、所で先に云つた東西の弱點は、内海の侵入してゐる方向と、殆ど平行してゐるので、此の内海の切目の方向も又白山火山脈と殆ど直交してゐるとも云へるのである、此の事實は、東西の弱點に噴出した塊狀火山が、内海の成因と、深き〳〵關係の上に有ると云ふ事の大切な意味を含んで居るのである。

先づ由布鶴見嶽を構成した火山脈の續きは、約六十度位の曲線を畫いて、嶋原半嶋に連つて居ると云つたが、何故に斯る曲線を畫いてるかと云ふに、其の源因は、甚だ深奥で、且つ興味深い學術上の要點であるのである、此は勿論九州の陸地成因と大關係の有る事は明であるが、私等よりも二三十年間、一意專心に火山學術研究に盡されてる恩師小藤博士の白髮頭腦裡に有るもので、彼の世界一の大噴火口を有する阿蘇山が、此の白山火山系と、如何なる關係にあるか、又先般學界を驚嘆せしめた彼の櫻嶋を含む霧嶋火山帶に入れるものか、又は此兩つの中間のものであるか、或は前者を横切つて居るものであるかは、何れ博士が他日發表に成る事であらうから、山岳に趣味を持たる丶諸君の中で、學術的方面に趣味を抱かる丶ならば、同教授擔任の震災豫防調査會發行の報告書に、注目せられたが、一段であらうと思ふ。（日本の重なる火山の調べは、大分濟んで居て、其報告も七八分は印刷されて居る、震災豫防調査會發行の火山の部を御尋に成ればいゝ）で、諸君が多少でも注意せられたならば、例へば日本アルプスに登山せられた時に（餘り急峻なる高山の調べは、二三終つてるも、未だ完全ではないのです）御嶽（オンタケ）とか、乘鞍ヶ岳とか、諸士の山岳趣味を深奥ならしむる、可成の高山幽谷に迄、調査の歩が進んで居るのであるから、夏季一簑一笠、千山萬岳に登山せられて、浩然の氣を、やれ何とかせらる丶諸君は、其の美的趣味に附加するに、多少の學術的方面の出版物に御注意に成つて『連山若波濤』とか何とか峭角に立つて、漸やく浩然の氣の落着いて來た

頃に、彼の鎗ヶ岳の奇觀は、何して造られたか、御嶽の絶頂は、火口丘の殘峯か何うであるか、なんて事が、幽邃の趣きを得た腦裏に閃めいたならば、其の興味は、一段の快味を添ふることであらうと思ふ、此迄「山岳」雜誌には、多く登山の記事や、植物採集の記事が、あつた樣に思つてゐる、植物の採集は、素人でも入り易いとは云ふものゝ、又科學の一部と見て可なるものであつて見れば、岩石採集等も（地質學に關聯したもの）も又山岳趣味を養成する一手段と成るものではあるまいか、岩石の方は高山植物の如く、珍草を追ふて進むと云ふ珍味はないけれども、此れに附加する色々の地質學上の興味ある地形地貌等を知る樂しみがあらうと思ふ、又は鑛物採集と云ふことも、出來るのである。

扨て双子山の頂の一角に立つて、內海の風光を瞥見した美的情緒の一說を述ぶれば、丁度昨夏八月の上旬であつたらうと思ふ、早朝人夫と共にカメラとハンマを持つて、輕裝三尺のコンパスで何の二三千尺のチョコ火山位と云つて、飛躍前馳したのであつた、餘り道中が長いと、彌治喜多八式と成るかも知れんので、面倒臭いから、先づザット七八合目邊までは、丈餘の雜草と小松原の密林があつて、頂上近には、三四尺の茅（カヤ）と、野薊（アザミ）の痛い奴が密生して居たとかうする、中腹の双子神社から、一時間で絶頂の人と成つた、時間は未だ日の出後間がないので一面薄絹を被ぶせた樣に、朝露が雜草に輝いて、ホロ〳〵と足に綻ぶる邊り、其の冷つこい感味は、中々乙なものであつた。

夏季山岳登山に經驗の有る方々が、よつく御存じの如く、山に山を越して『彼の山越えて谷越へて』と漸く目的の山頂の一角に取縋つた時に、遠く海か何かゞ見えやうものなら、親の敵にでも廻り合つた樣に嬉しさが込上つて來るであらう、丁度其と同じで、濕暑人に迫り、煩熱灼くが如しと云つた夏季調査に於て、汗みどろと成つて、山頂に一服すると成つた折に、特に日本の地中海である內海の風光の一端を俯下し得た時には、斯う云はざるを得なかつた『嗚呼よつく來たものだ』と思つた、一面鏡

を張り詰めたと云ふ、矢張り形容詞よりも外に、適當の修辭句を見出す事が出來なかつた、周防灘の灘なる字句は、巨人の鉋を持つて、綺麗に削去られて半島の左右から、迫り來つて、何時の間にか、お互に消合つてゐる樣にも見える、遙か水天彷彿の際どい所に、始めは模糊たる靄の如く、蜃氣樓の如くに、中國の山脈が一直線に暈し出されてゐる、そして少し右手、伊美岬の鼻近く可愛いゝ姫島がチョコネンと水鳥の樣に浮いて見える、『沖の小島に波の寄る見ゆ』てな事もないが、何となく見樣では、白い細鱗が岸邊を洗つてゐる樣にも見えて、丸で盆景を見出した樣であつた、右手の遠く入込んだ銀鏡の末を辿れば、多島海の島々（祝島あたり）が、人形淨瑠璃の背景の樣に、一刷は一刷を被ふて重り合つてゐる、大きな一波路を距てゝ右手には、四國の佐多岬から、廣がつて、奥の山々が丁度巨鯨の樣に横はつて居るのも見ゆる、全くよく登つたものだ、四國から關門邊まで、薄い乍らも、肉製カメラの内に、納め得た愉快は又とあるまい。

一體、双子山は、山としては標高僅かに二千四百尺位に過ぎないが『山高きが故に尊からず、眺めの可なるを以て尊と爲す』と、山岳崇拜者の語を借れば、又以つて尊しと爲すと云たい、夏季内海遨行の途上、四國には石鎚山あり、別府温泉附近には、由布、鶴見嶽がある、其の最終點として、此の双子火山頂に、内海的風光の一般を俯下するも、敢て無駄ではないであらうと思ふ、まして火口として、僅かに認めらるゝ中央火口原の中には、田舍ながらも、赤根の温泉があるのである。

半島の風景は先づ此丈として、山頂から瞥見して、可愛いゝと云つた姫島の事を、一寸お話しやう此姫島に關しては種々書いたものが出版されても、未だ學術方面の鋭き觀察に至つては、今後の研究を待つ事が大であらうと思ふ、名は姫島ではあるが、昔し矢張り日本の火山活動時代（第三期より洪積期の初め）の盛なる時代にあつては、海底の昇降、山岳の沈降及び爆裂地殼の龜裂、地層の陷落など天變地變の一大活動が、此の優しい沖の小島にも起つた事は、其地質が明に證明してゐるのである、

姫島の火山には、爆發的のものはないが、姫島富士と呼ばれる矢筈岳（八百八十尺）は、塊狀火山で、第三期凝灰岩層を貫きて噴出して居る、勿論姫御前のあられもない今後の爆發など、危險はない事は確であらうと思ふ、此の姫島に關して、やれ七不思議とか、やれ女が多くて、犬まで貞節で、非常に働くとか、其上男子も女護島の如くでなく、返つて遠く海外に發展して、海國民の英氣を吐露するとか何とか色々書かれて居るも、要するに海上僅に三浬の小島が、何日迄半島の文物から支配されずに、殘されやうか、全く何の差異をも見出す事が出來なかつたと思ふ、唯私が雇つた人夫は、女であつた事丈は確であつた、そして裸足であつた、何にせ荒くれ男の住家守る姫御前には、水道の水の色艶が有らう筈はないのである。

然し此の姫島に『過ぎたる物三つ有り』と申し度い（私の調査上丈で）（一）岩石學上、興味ある角閃雲母流紋岩、（二）石英粗面岩の白色玻璃（黑耀石Obsidian）（三）第三期凝灰岩層の美くしい皺曲(Folding)と、斷層(Fault)で、此外に拍子水なる鑛泉の噴出してる事で、兩瀨（モロセ）の海岸近く、安山岩脈の裂目から噴出するもので、多少の甘味と、多量の鐵分と、炭酸とを含有してゐるから、砂糖を入れて飲むと、サイダ其まゝで、夏季飲料水としては、甚だ立派なものである、晝夜絶え間なく泡沫爆然（ちと過言）として、湧出してゐる、徒らに海水と混入させるのは忍び難い所である、其の鑛泉として有望なるは、湧出の位置が海岸である一事で以て、如何に天賦の恩惠を、吾人に示して居ると云つてもいゝのである。

大體頗る略式の事を述べて、稿を終つて仕舞つたが、一寸終りに、小生の山岳哲學なるものを附加して置き度いと思ふ、一體此迄、山岳の趣味には、色々勝手な方面に、やれ浩然の氣とか、やれ崇高の、體育の、精神修養が何うのとあつて、無論文學上に現はれる價値は、又捨て難いも、今後私は私一個の意見として、山岳趣味は、以下三個のものゝ、少くとも合體でなかつたならば、發展の餘裕の無

いものではあるまいかと考へたのである。(無論例外は何んにでも有れば其の考で願ひたい)

一、山を撫でる人

二、山を叩く人

三、山を寫す人

(一)は山岳の普通崇拜、登山精神修養團であつて、此の中に植物採集者も、入れてもいゝと思ふ人々である。

(二)は山の調査をやる石叩き、即地質調査とか、鑛山開發者である。

(三)畫家、寫眞師等で、無論素人にても、此の趣味計りの人は這入るのである。

で、私は右の三つの中の、第一の精神修養團員で、第三の技術と第二の智識を、多少なりとも附加せしめたならば、初めて學術、體育、精神の三方面に、貢献する所が大であらうと思ふ。

雪の日本アルプス越へ（冬の上高地）

八木是峰

雪山に向ふ孤客　ナポレオンが雪のアルプスを打ち越へるとの飛報が傳はつた時に、全歐洲人は一齊に其無謀を嘲笑した。而して其嘲りの聲の未だ消へぬ間に、野薔薇咲くロンバルヂアの平原に、肥馬の鬣を春風に嬲らせつゝ毅然として立てる彼の雄姿を仰いでは、人々は更に驚嘆の眼を見張り、一の「奇蹟」とまで絶叫した。常套の人は往々にして吾等の肉體を機械視する。安んぞ知らむ、我輩

五尺の小軀には時に天をも飛ばむず偉大なる能力あらむとは。

登山冒險熱の漸く旺んになつた今日此頃ですら、漸く盛夏の候に山岳會員其他小數の畫家等が折々拔渉するのみなる日本アルプスの嶮を、而も冬の最中に於て單身踏破せんと決心した僕の計畫を聞いた人々は、或は無謀と嘲り、或は成功を危んだであらう。木枯に吹きまくられつゝ今日を限りと血眼になつて狂弄する人々を冷かに見やりつゝ、大晦日は夜の七時名古屋停車場より汽車に乘じ信濃路指して出發した。車中會々一友に會ひ快談湧くが如く時の移るも覺へず、大に車中の無聊を醫するを得た。野尻須原邊にて古き年は逝いて新しい年は來たのである。

松本に着いたのは午前三時半、直ちに腕車を雇ひて六里の坦路を島々に向つて疾走した。寒風酷烈、息も凍らむばかりである。漸くにして夜は白々として明け離るれば、東天紅と鷄の啼く聲霜に響いて、里宮詣での村人が、參々伍々行き交ふ姿を見ては、枝もならさぬ御代のゝどけさを覺へた。島々の宿屋清水屋に着いたのが七時頃。主人は上高地温泉の營業主なので、昨年夏僕が上高地で雨に閉ぢ込められた折などの事共を談じつゝ、炬燵にもぐりながら、元旦の雜煮を祝つた。同夜はこゝに一泊して、翌日の冒險に耐ゆ可く鋭氣を養つたのである。

無人の境　明れば正月二日、今日の豫定は、拂曉島々の逆旅を發足し、上高地温泉迄、出る積りである。で萬端の用意をさ〳〵怠りなく、待てど暮せど、昨夜約束した人夫嘉代吉、庄吉の二人はやつて來ぬ。やがて彼等の宿に馳せ參じたのは、既に七時を過ぎて居つた。僕は人夫を促して即刻出發した。彼等の旅裝はと見れば、毛皮の袖無に毛皮の足袋を穿ち、獵銃をたづさへ、肩には三貫目程の僕の荷物を負ふて居る。僕は毛糸の靴下の上に、薄製の脛衣を着けた、いと手輕の身仕度である。いで之れからは、無人の境を踏破するのだ。

島々を離るれば、直ちに羊腸たる小路となる。冷へ切つた、三ッつの鼻を西に向けて進む程に、山は

愈々迫り、弱い冬の日は照り兼ね勝ちである、滾々たる水の流れも、數尺の積雪に埋もれた溪流の、或は右岸を或は左の岸を縫ひ〳〵て進み、九時古平橋に達す。こゝまでは多少の道はついて居つたので、甚だしい困難もなかつた。

此れよりは積雪愈々深く、而もサラ〳〵として、踏みこたへない雪は、膝を埋め、道は一向に捗取らぬ。幸ひ路傍に小舍が有つたので、人夫は樏をつけて、雪を割り〳〵進んだ。梨の木橋、高橋等を過ぎで、午岩魚止に着いた。こゝは海拔四千百六十八尺、島々より高き事千七百七十五尺である。夏の頃ならば一杯の澁茶に渴を醫すべき岩魚止の小舍に入りて、焚火をして辨當を喫し、一時八分出發した。

道の六七丁も進んだ程に、雪は意外にも深くして、道は中々捗らぬので、流石に山馴れた人夫も、辟易して僕に乞ふて曰く、この儘前進を續ける時は、今日中に上高地温泉はさて措き、梓川の河岸に出づる事すら覺束なく、雪中に露營するの已む無きに立ち至るであらう。如かず、我等の一人は、是れより明日の道を割り、他は岩魚止の小舍に歸りて、宿營の用意を調べんにはと、茲に於て余も遺憾ながら、元來た道を小舍に引つ返して、一夜を茲に明かすべく決心した。で我々は薪を切つて、夜寒の用意をして居る程に、短い冬の日は、とつぷりと暮れかゝつた。やがて取りのこして來た人夫嘉與吉も歸つたので、三人鼎座して、小舍に殘しあつた鍋で、飯をたき、汁を煮、覺束ない夜食に空腹を醫した。焚火に背を向けて用意の毛布にくるまりつゝも、假寢の夢は結び兼ねて、山鳥の尾の長々しい一夜を明かした。

深々と身に泌み渡る寒氣に、目覺勝なる一夜を岩魚止の小舍に明かした、一行三人は、黎明出發の用意に取りかゝり、朝飯を喫し、辨當を作り、七時四十二分と云ふに、發足した。昨夜來降りに降つた雪は、幸運にも晴れて、木々の梢は時ならぬ花を宿し、其れが朝日の光を反影して、キラ〳〵と眼を

冬の嘉門治小屋（上高地）

八木是峰氏撮影

射る樣は、亦譬へ樣ない美觀であつた。然して一方には、昨日嘉與吉が、折角苦心して開鑿した道は、更に雪に埋れて、僅かに其の跡を頷かすのみで、進路は昨日に增して、困難となつた。人夫は根氣よく雪を割つて進み、進んでは雪を割り、十時二十分漸く德合峠の麓、本谷橋に着いた。岩魚止の小舍から一里弱。この行程二時間四十分を費したわけである。之れよりは夏の頃ならば、白百合の香も高い羊腸たる坂道を「葛籠」折れに登る所も、今は道と云はず、灌木といはず、一面に積り積つた深雪は、一直線に進むことを得せしむるのである。さり乍ら踏みこたへない粉雪は、股を埋めて、人夫は重荷を卸しては雪を割り、雪を割つては重荷を運び、奮鬪努力甚だ力めた爲め、疲勞は其極に達し、峠の頂上に達したのが既に二時四十二分。本谷橋から十丁程の間を、實に四時間と二十分を費したことを見ても、如何に行路の困難であつたかを想像するに足るであらう。

頂上の雪は丈餘に上り、雪の上に腰を卸して食を取つた。酷烈なる寒氣に、飯はいて常の味なく、空腹にも拘らず、咽喉へも通らぬ。一時間程休息して、疲れを休め、重い身體を澁々起して出發したが、稍もすれば、谷に足を辷らし、深雪の中に身を沒して樏（カンヂキ）は岩角に喰ひ込み、身を拔く能ざる事、數次、前進の力も全く盡き果てた。兎角する中に、冬の脚は既に西方の灰色の雪雲に包まれて、深山の暮方は蒼然として迫つて來た。これから三十丁も行けば、牛小舍があつて、尠なく共、雪と風とを凌ぐ事が出來るのであるが、この有樣では、三十丁は愚か、五丁も前進は覺束ない。僕は荷物を捨てゝ前進しやうと決心したが、人夫は僕の袖を犇と捉へて、若し牛小舍に達する事が出來なかつた時には、食物なしで、焚火なしで、一夜を雪中に明さねばならぬであらう。而も牛小舍に達し得ぬ事は、火を賭るよりも明かである。今、何を好んで、凍死するの愚を演ずるの要あらうと、哀願し、或は脅嚇し、ひたすら、僕の主張を沮止せんとした。茲に於てか張りつめた氣もくぢけ、百計盡きた一行三人は、茲に德合峠の絕頂に、雪に埋もれつゝ、野宿せねばならぬ悲運に遭遇したのである。

前進の到底不可能なるを覺つた一行は、德合峠の頂上より、三丁程下つた處に、榛の木の林の有つたを幸はひ、四疊敷程と思はれるだけ、雪を踏み固めて、此處を心細い今宵の宿と定めた。

野宿

この野宿に命の綱とも賴むべきは、燃料である。そこで人夫は、終日の疲勞も忘れて、栂柴と榛木を伐り集め、暖を取らうと企てた、處が栂柴は枯れ切つて居るので、めら〳〵と燃えてしまひ、榛木は生々しい上に、雪に濕つて居るので、容易に燃え付かない。迚も焚火がない樣では、この一夜は明かせない。凍死するより外に仕方がないと、殆んど當惑して仕舞つたが、最後に人夫のたづさへて居つた鳶口の柄が、樺で出來てるのを思ひ付いて、これを削つてたきつけをこしらへ、漸くにして、薪はパチ〳〵と火花を散らして、紅の焰を積雪の上に輝かせた時には、云ひ知られぬ嬉しさと、安心とで、急に疲勞が全身にまわつた樣に思はれた。やがて火の爲めに、雪が融け初めて、黑い土の面が久方振りに見え出し、我々は四五尺の雪の穴の中に、焚火を圍んで暖を取つた。然し身體が少し温まると、新に起る慾は夕飯である。勿論山中の事であるから、鍋一つの用意が無いので、晝の殘りの飯と、餅とを、辛うじて咽喉に通して、饑餓を凌いだ。幸ひ僕はエナメル製のコップを用意してあつたので、雪を溶かして、味噌汁をこしらへ、三人で交る々々飲んだ味は、如何なる山海の珍味も此れには及び難く、一口の味噌汁は、全身の疲勞を醫したかの如くであつた。榛木は燃燒が早いので、附近の榛木を伐つては、焚火の中に投じ、伐つては投じ、朝になつて見ると、其の邊の榛木三四十本は、切株となつてあつた。扨て三人はやがて雪の屏風にかこまれて、用意の毛布を開く根氣もつきたれば、着のみ着のまゝ、雪にもたれて、目をつぶつたものゝ、焚火が消へやしまいかと云ふ心配と、骨をえぐる樣な寒さに、夢はなか〳〵結ばれぬ。さり乍ら晝の行軍に、五體は綿の如く疲れ切つてるので、眠るとはなしに、うと〳〵と暫しは幸福の國に徘徊つたのであらう。大蛇にでも睨まれた樣な身震に、不

圖我に歸れば、今迄心地よい焔を擧げて居た焚火はいつか弱り果てゝ人夫の顏も、朧に見分け難くなつた。僕は愕然として無限の恐怖の念に襲はれ、心地よげに眠つて居る人夫を起して、急ぎ木を切りくべ、やつとあせつたが、人夫は睡氣と寒氣の爲めに、逡巡して、居つたので、漸く木を切つた時には焚火は殆んで消へかゝつて居た。加ふるに折角燃え付けば、風が吹き消して、辛ふじて火の氣を絶やさずにすんだのは、一方ならぬ骨折と心配の後であつた。

この樣な不安の念に驅られて、目は益々冴へて來る。折しも天の一方より、數團の白きものは續々として山をかすめ、谷を越して暗黑の中を我々目がけて迫つて來る。白龍か非ず。白虎か非ず。即ち雪は霏々として降り來つたのである。僕は二十餘年の生涯を通じて、これ程心細い、これ程情けない、感じに打たれた事は無かつた。試に思へ、嚴冬の夜も十二時と云へば、華かな都大路にあつても、終電車の軋る哀音が彼方の暗に消へた際には、我等はノアの洪水に獨り取殘された樣な氣分になるを、禁じ得ぬものである。況んやこの山に、この夜に、この雪に、野營してる身に於ておやである。嗚呼今降り出した此の雪が朝まで續くならば、我等の肉體は、あのさら〳〵した眞白の衣に包まれて、高根菫、黑百合の花が、ちらほらと咲き出づる頃には、我々の朽ち果てた白骨は、登山客の草鞋に踏みしだかれなければならぬのだ。僕は亦僕の生涯を通じて、此れ程嚴肅莊嚴の氣分に捉はれた事はなかつた。積つた雪と積りつゝある雪に、凡ての人間間の汚物は隱蔽され、凡ての物質界の濁音は絶緣されたこの山中は、實に大靜大寂、僕は凡百一切の煩惱を解脫し、利慾を離れ、名利を棄て、我が五尺の小軀は、融然として偉大なる自然と同化し、我が方寸の心靈は、飄然として神佛に接したのである。嗚呼この瞬間に於ける僕は、正に檀德山中に艱難苦行しつゝある悉達太子、其の人であつたのだ。レバノン山巓に斷食瞑想しつゝあるジーサス、クライストと同格だつたのである。然し乍ら、幸にも雪は暫くにして小降りとなり、風は木々の稍を鳴らし初めて、雲の切れ目切れ目には、つめたい星がキ

ラキラと瞬たき初めた。そしてまんじりともしなかつた辛い夜は、鷄の聲も待たずに、白々と明け離れたのである。

不圖見れば、枯木林の上には、突兀たる穗高の峯が峙だつてる。ものなつかしい穗高よ。昨夏は此の處に於て、暫らくは佇立たち去るを敢てし得なかつた僕の心を「魅」(チヤーム)したあの艶麗な、湯上りし美人の肌とも譬ふ可き色合は、見るを得なかつたが、一望白皚々として崇高莊重なる古武士の樣な姿はまた他に求め得ざる趣きがあつた。僕は昨夜來の苦勞も、この一穗高の壯觀に酬ゐられたかの觀があつた。この味あればこそ、登山癖は、容易に止められぬのである。

上高地まで　殘んの樅柮火に、朝餉を調へ、北へ北へと谷を下つた。夏なりせば、淙々の響きに、滿身の汚汗を洗ふべき谷川の流れも、積雪に閉されて、どれが河原やら川やら見分けもつかぬ處を辿り辿りて、栂、樅、五葉松等の茂つて居る森林帶へと出た。昨夏來た時には、彼方此方から斑や飴色の牧牛が、僕の汗臭き鹽の香を嗅ぎ付けて人なつかし氣にやつて來た此の平和の牧場も、一面に雪に蔽はれて、亦當時の俤も無いのである。この邊、雪も三尺程に減じて、行進も稍々樂になつた。牛小舍に着いたのは十時半であつた、茲で餅を燒いて、空腹を滿たした。島々出發以來、思ひ掛けない故障の爲め、豫定以上の日數を途中に費した、僕は尠なくとも、今日は上高地温泉場まで行き、明日は是非共蒲田温泉に出て、一日も早く、電信の通ずる處まで行き、僕の安否に付て、胸を痛めて居る國許の老母へ、身に恙ないことを知らさうとあせつたが、一昨日以來の奮鬪と昨夜の艱難に身體愈々疲勞困憊した人夫は、今日は此の小舍に一泊して、對岸の小舍に狩獵の目的で、獨り籠城してる嘉與吉の老父嘉門次より、猪の肉を得て、久方振りにて温かい馳走に舌づゝみを打ち、そのかはり明日は早起して、上高地温泉場を經て、蒲田温泉迄出やうと、頻りに僕の豫定を繻さんことを歎願するので、彼等の努力と疲勞とを、ひそかに多としてる僕は、今は強いて彼方の望みを退け兼ね、心ならずも同

夜は牛小舎に一泊すべく決定した。

正午過ぐる頃、嘉代吉を伴ひ、梓川に架せる丸木橋を渡り越し、宮川の池のほとりの、積雪に埋もれたる嘉門次の小舎を訪れた。折しも爺は、不在であつたので、暫らく焚火して、爺の歸るを待つて居る中に、程なく彼は戻つて來た。爺は本年六十八歳の高齡ではあるが、鑊鑠壯夫を凌ぐの概がある。然しこの山中に、この雪で思ひもよらぬ人の子が、音信れたのを見ては、如何ばかりか嬉しかつたであらう、あの氣むづかしい顏の、相好を崩して喜んだ。僕は豫定以上の日數を費した爲め、用意の糧米も乏しかつたので、爺に米を分與して貰ひ、嘉與吉は牛小舎に殘つて、夜の用意をしてる庄吉に、手傳ふ可く、こゝを辭し、僕一人殘つて爺と火をかこんで雜談に花を咲かせた。僕は一昨日來の難路、さては昨夜の露營のことなど、取り〴〵語つた處、彼も尠なからず僕等の難儀に同情して、爺が初めて狩獵の爲めに、この山に入つた年も、丁度今度の樣な荒れで、僕等の露營した所と、場所も、程遠からぬ兎ある大木の下で、一夜を明かした事ども等、物語つた。聞けば今年は非常な不獵の由で、爺は僕等が島々發足以來の、樂しい希望なる、殊には今宵の牛小舎一泊の一動機ともなつた、猪の御馳走に遠來の珍客をねぎらふ事の出來なかつたを非常に殘念がつた。然し僕は暖かい湯と、昨秋裏の畑より得たる大根漬を、心盡しのもてなしとして、舌づゝみを打ちて、爺の好意を謝し、紀念の爲め、爺の小舎を撮影して、夕景今宵の宿に歸つた。牛小舎では、庄吉嘉與吉は、既に、薪を切り、夕食の仕度を調へて、僕の歸りを待つて居たので、今日は汚れた顏や、手足を洗つて、窮屈な洋服を和服にぬぎかへ、爐邊に打くつろいで、溫たかい夜食を取つた。

さて焚火を圍んで、三人は眠に就いたが、夜の更けるにつれて、身に泌み渡る寒氣を防ぐ爲めに、稍ともすれば、消へ勝ちなる焚火をかき起し〴〵おち〳〵夜も眠られなかつた、人夫はと見れば、昨日來の疲れの爲めか、將た亦かゝる境遇に馴れてる爲か、すや〳〵と安らかな夢路を辿つて居つた。

明れば五日月は、西に傾いて霜天に滿ち、極寒、極冷、肌を裂くばかりである。梓川岸に密生してる白樺、水楊木等の梢は、一面に木花を宿し、折しも東の方、紫雲を破つて出づる朝日の光を反射して、或は水晶の如く、或は紅玉の如く、五彩、七色、燦爛たる配合は、僕の未だ嘗て實驗した事ない景色であつた。

今日は上高地温泉で、材木流しに從事して居る人夫を新たに雇ふ手配をするため、嘉與吉を出發せしめ、その代りとして、嘉門次には荷物を負はして、嘉代吉に遲るゝこと一時間、七時二十二分、僕等も出發した、嘉門次は獵銃を肩に、二匹の獵犬を牽ゐて居つた。釣橋式の河童橋を渡れば、やがて上高地温泉の屋根は、樹間に隱見した。膝栗毛の足なみも、勇ましくて九時四十五分、温泉場に到れば先發の嘉代吉は、火を焚き鍋を掛けて居つた。早速人夫の都合を尋ねた處が、折惡しく早朝、川を下つて仕舞つた爲め、之れを雇ふことを得なかつたので、折角の豫定は、又もや齟齬するに至つた。そこで日の中、明日の行程なる中尾峠の頭迄道を作り、今宵はこの宿に一泊するは、策を得たるものたるべしとの人夫の主張を容れ、且つは例年ならば霜月頃より涸れ切つて仕舞ふ温泉も、今年は不思議にも尙沸々と湧き出てるのに、心を引かされ、同夜は温泉に一泊と決心した。扨て爐邊にどつかと座して、冷へ切つた手足を焚火にかざし乍ら、鍋を見れば思ひ掛けなく、兎の切身は煮られてあつた。蓋し大野川の人夫が、通路に仕掛け置いた罠に掛つて居たのを、嘉代吉が貰つて來た代物である、で四人は思ひがけない珍味を、鱈腹貪り食つたが、其の時の味は、今尙思ひ出しても、食指の動くを禁じ得ぬ程であつた。

やがて人夫は雪を割りに出て行き、嘉門次は種が島を肩にして、狩獵に向つたので、僕は温泉につかつて久方振りにて汚埃を流し、炬燵に身をのばして、今日迄の日記を認めた。短い冬の日は、西山に春く頃には、二人の人夫も戻つて來た。見れば片手には、一束の芹を下げて居たので、早速之れを

料理し、四人は香の高い芹の茹と「岩べつとう」の味噌汁、ハムの御馳走に舌鼓を打ち、尙僕はウイスキーの壜を明けて、今日迄の困難に打ち耐へた人夫等の勞を犒らひ、一同の健康を祝した。今夜こそは、疊の上に炬燵へもぐり、暖かな夜具に包まれて、安らかな夢を貪つた。

上高地より蒲田へ

翌朝七時二十四分嘉門次に別れを告げて、一行三人は梓川岸を離れて、森林帶に入つた。漸次路は急坂となり、森は益々繁り合つて來た。森を拔けると直ちに溪谷となる、夏の旅は中々難所であるが、冬は却つて一面に雪が降り積つて居るので、比較的安々と、兎の足跡を各所に散見しつゝ、溪谷を打ち越へ、十時二十四分中尾峠の頭に達した。此の邊、風は無かつたが、寒氣頗るはげしく、寫眞を取る間さへ、足は堪へ難く震ひ、辨當も食ふに由ない程手はおのゝいた。暫にして俗に『中尾峠の船』と稱する地點に達した處、雪は黑ビソ、唐檜等の梢に、のしかゝり、其の樣恰も垂楊の如く、喬木にして斯くの雪の爲めに枝を垂れて居る狀態は、初めて見る處であつた。道と云はず、谷と云はず、灌木の上といはず、中尾の方面を目指して、下へ下へと進み行けば、折々過ぐる年の暴風雨の爲めに倒れたる、喬木の雪中に埋もれて居る所に、足をはめて、身は乳の邊迄雪中に崩もれた事も一再ではなかつた。

然し何等の故障もなく、一時四十五分中尾の部落に到着した。中尾は人家十二戸、稗、豆麥を耕作して、食糧を得、共有林より薪を切り、村內一の分業とてはなし、自勞自營の「太古的生活（プリミチーブライフ）」を營んで居る。此れより半里にして高原川の溪流に沼へる蒲田温泉に出て、杉下旅館に投じた。時は午後三時十分。湯に入りて暖を取り、食後宿の家族と十一時過ぐる頃迄打ち語らつた。

この温泉の浴客は、一月より三月迄は女工、四月頃より五月頃までは近鄕の町家の人々、九月頃より十月頃迄は農家の者である。この地も、四五年以前までは、古代純樸の風を存して、旅人の來泊を嫌つて居たさうだが、今日は滔々たる都會の俗風は、此の山間僻地にも吹き荒んで、一夜の旅客に媚を呈

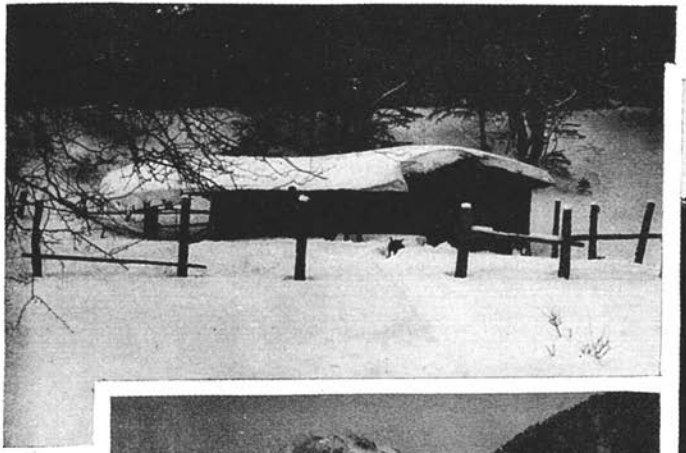
するに至たのである。總じて此の邊の家屋は、山間に似氣なく、何れも堂々たる二階作りで、目なれぬ者には、一寸奇異の思ひあらしめるが、思ふに材木の無盡藏なると、冬季積雪深く、家屋を高くするの必要あるからであらう、尙温泉に到る重なる道は、高山より船津を經由するもの、即ち里程二十一里。松本より上高地、中尾峠を越へて到るもの。他は同じく松本より島々、大野川、安房峠平湯を經て到るもの。及び高山より簑谷、長倉を經て至るもの里程十里其の他である。

七日朝、人夫に七日間の日當と、若干の酒手を與へて之れを解雇した。茲で新に人足を雇ひて、船津に出る積りであつたが、宿の者近隣の人々が、寫眞を寫して呉れとの切なる望みをいなみ兼ね、兎角する中に、出立の時間に遲れ、已むなく一日滯在する事となつた。庄吉は僕の爲めに、山鳥を獲つて歸つたので、今夜は彼の心盡しを喜んで受けたが、食後しきりに腹痛を催した。

寒さに冷へた爲めと思つて、湯に入り、身體を温めて床に就たが、痛みは翌朝に至る迄止まず、宿の人も心配して、降りしきる雪をもいとはず、半里川上の中尾部落迄、鍼灸醫を呼びに行つて呉れた。處が件の醫は、雪におじけて澁々宿に來たのは午後三時半であつた。で彼は僕の身體を診察して、疝癪と診斷し、其の病因を、身體の冷へ來たつた空腹の際に、湯に入つた事に歸し、打鍼をほどこし、尙一服の藥を調合して呉れた。打鍼の効か、將た亦藥の効か、幸ひにして腹痛は漸次減じて來たので、初めて安堵の胸を撫で卸した。

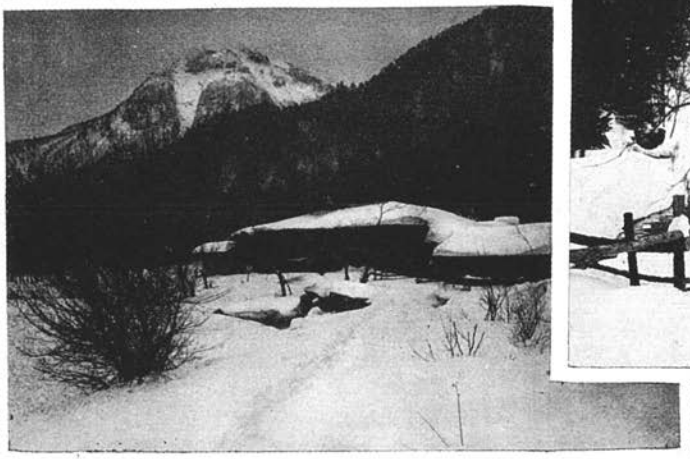
翌九日朝、身は全く以前の元氣に復した。鍼灸醫には、一封の謝金を與へた處が、彼はそれよりも、ウイスキーの空壜に、より多くの滿足を以て持ち歸つたのは、如何にも質樸の氣風に滿ちて居つた。

高山まで　十日午前十時、宿の男に荷物を背負はせて出立した。庄吉、嘉代吉の二人は、流石に別れを惜んで、門口に立つて、僕を見送つた。袖すり合も多少の緣とかや。まして島々以來、共に俱に生死の境に浮沈した彼等と袖を頒つの今、豈一掬の涙なきを得んや。おゝ質樸なる庄吉、嘉代吉よ。



德本峠下牛番小屋

溫泉塲附近より穗高山を望む



溫泉塲と燒岳

雪の上高地　（八木是峰氏撮影）

卿等は再びこの危險なる道を、辿らねばならぬのだ。卿等の身體、須らく安泰なれ。一路願はくは平穩なれ。おさらば、さらばである。客觀的に考ふるならば、此の危險なる道案内に對する報酬としては、餘りに少額なる十餘枚の賭物を、妻や子に見せて喜ばす爲め、再び積雪と戰ひ、嶮路を越へねばならぬ彼等の境遇を察しては、今更に彼等を憫むの情禁じ得ず、後ろを顧りみ顧りみ、前進した。行程一里にして栃尾に着き、こゝで宿の男に若干の金子を與へ、新に人夫を雇ひて進み、行く事三里半、長倉に達した。不圖路傍の里程標を見れば船津へ三里十一町、高山へ六里三十三丁と書いてあつた。即ち高山は船津より遠き事、僅かに三里二十二丁である。僕は最初は船津より富山市に出て、北陸線にて歸名する積りであつたが、人夫の言葉によれば、船津富山間の道は、雪の爲め嶮惡なので、寧ろこれより高山に出て、それより自働車で岐阜に出る方便利で有り、殊に今夜多少遲くれるをいとはぬならば、高山に着くことさして難事でないとのことに、急に旅程を變更して、路を高山方面に向けて取つた。時は三時半。所が簑谷峠の雪は、意外に深く、八時三十七分、折敷地の部落に着いた。高山町の長瀨旅館に着したのは、既に翌日午前一時過であつた。

歸路　十一日朝餉をすまして、直に名古屋の自宅に電話で、無事踏破の趣きを通じ、午後二時宿を出で、宮峠を越へ、國弊小社水無神社へ參詣して、午後八時過小坂に着し、同夜はこゝに一泊し、翌日自働車を驅り、岐阜に出で、それより汽車で歸名した。

願ればの稍々無謀に近かつた此の計畫も、さしたる故障無くして、遂行することを得たのは、我等の身體は、雪中に不眠不休の勞働にも堪へ得るのエラステシテーあることを確信して、竊かに意を强うした。さり乍ら豫想以上の日數を費したのは、一は天候嶮惡なりし爲め、即ち積雪意外に深かゝつたのと、一は雇つた人夫が、常に出發の時間を嚴守せぬことに歸着する。若し天候にして順調であり、且つ人夫にして今少しく「几帳面」（ソンクチコテル）であつたなら、日本アルプスの雪中横斷は、蓋し二日乃至四日に

して、なし得られることを信ずるものである。

雪の金剛山

法學士　橋本欽四郎

朝鮮には、到る處山岳丘陵重疊してゐるが、高山名岳には極めて乏しい、僅かに人に知らるゝものは北、滿洲との境にある白頭山（長白山）南、濟州島の漢羅山及び中部江原道の金剛山位である。

金剛山とは、長白山系の一脈、太白山脈の江原道、高城、淮陽、通川、麟蹄の四郡に跨る部分を總稱するのであつて、矗々削立する峯頭は、其數一萬二千、周圍二十八里と號せられ、毘盧峰、衆香城、彌勒峯、白馬峯、集仙峰等は、其の主なるものである。金剛山は、其最高峯たる毘盧峰ですら、一、七八六米突に過ぎないが、其れでも朝鮮では、第一流の高山であるのみならず、古來朝鮮唯一の名山として、尊重せられてゐる、朝鮮人は金剛山を東洋第一の勝地と誇り、四期折々の、移り變る風光につれ、春は金剛、夏は蓬萊、秋は楓嶽となり、冬は皆骨となるなどといつてゐる、先づ內地の妙義と耶馬溪とを、かき混ぜて、之れを引き伸した樣な所で、高山的の崇高な點は缺けるかも知れぬが、周圍二十八里一萬二千峯と稱する山中は、到る處奇巖絕壁で、急湍奔流、此の間に流れ、奇勝絕景、文人畵的の山水の美を極めてゐる、加之山中には新羅以來の古刹甚だ多く、楡岾寺、神溪寺、長安寺、表訓寺の四大寺を始め、末寺小庵數十あり、されば古來朝鮮人の之れに遊ぶもの甚だ多く、金剛山を見ざれば、結構といふ勿れと」てある、近來內地人知名の士の遊覽するあり、今や金剛山は、朝鮮名

物の一つとなつた。

金剛山探勝の期節は、春より秋に限る、冬の登山には、數尺の雪や、零下十度乃至二十度の寒氣と戰はねばならぬ、されば雪に暮れ、雪に明くる金剛の奇勝は、未だ內地人間には秘密の衷に鎖されてゐる。自分も、渡鮮以來、一度は登りたいと願つて居たが、一昨年の夏も、昨年の夏も、餘暇なき爲め志を得ないで、終に大正二年の師走となつた、冬の休暇は一週間足らずである、金剛山迄は滊車より下りて片道二十五里あれば、往復五十里となる、滿足な旅行はとても出來まい、峯に登ることは到底不可能であらうが、せめて雪に埋れてゐる古刹を訪ねて、雪の金剛の一斑だけでも見やうと思ひ立ち、獵銃を肩にし、寫眞機を負ひ、家を飛び出したのは十二月も押し詰まつた二十八日の午後であつた。

午後二時南大門發、京元線下り列車に投じ、五時間ばかり搖られて、平康にて下車、直ちに平康館に投宿した、此の宿には、此地に狩獵の都度、宿まるので、主人とは舊知である、「金剛登山の爲め來た」と語れば「まあ此の嚴寒に」とばかり驚きの眼を睜つたが、兼ねて自分の頑迷野蠻の性質を知つて居れば、止めるも益なしと思つてか、夜の內に人夫や其他の用意をしてくれた。

十二月廿九日　夜來降雪烈しく、已に尺に近く積んでゐる、九時には食事も濟み、用意も整ひたれども、人夫がこない、督促に督促を重ねやつと來たかと思へば「此の雪に金城迄行けたものではない」など愚圖つて行く氣配がない、腹が立つたから、此の鮮人を叱り飛して追ひ返し、宿の男に他に人夫を尋ねさせたが、應ずるものがない、一人で出懸けたいが、銃砲や、寫眞機械や、食料の外に塡裝彈を百五十發も持つてゐれば、人夫がなくては、駄目だ、聊か閉口してゐると、店の前を通るチゲがある、呼びとめて「金城迄こい」といへば、喜んで承諾したので、まづ安心した、よく見れば年の頃五十に餘る老人で、餘程貧窮者らしい、由來朝鮮人は勞働を卑んで、無爲徒食を誇りとする、其

の日丈でも食える者なら、此の雪降りに金城迄も「ケゲ」を負ふて、動きたがらぬは無理ならぬ次第である。こんな騒ぎで時間を潰し、發足したのは十時近かつた、邑内を離れて、一二町すれば、右金化、左金城と書いた木標が立つてゐる、左を取つて行くと、雪は益々烈しくなり、咫尺も辨せぬ位、頭や外套に積る雪は、拂つても拂つても果しがない、歩行甚だ難澁を極めたが、旅の戸出ではあり、希望に滿てる心持して、嬉しさ限りがない。

松峴を過ぎ、丘陵を下りて、川を渡る頃より、降雪漸く薄らぎ、道傍には雉子が群をなして、餌を搜つてゐる、行き掛けの駄賃にと、忍び行けども、雪が深い故、ザク〳〵音がして、近か寄れない、鮮人夫は雪が深いので、緩々休み休み行かうといふ腹なのか、雉子を見付けては、頻に撃てといふ、ずるい奴だ、雉子が獲れない腹立ち紛れに擲らうとしたが、老人だから赦してやつた。垂楊亭沙器店を過ぎ、峠を越え、宗鐵で民家に入つて飯を食ふ、握り飯は凍つてガリガリしてゐる、時計を見れば驚いた、三時を過ぎてゐる、鮮人夫は雪が深いので、疲勞したのか、此處に宿らうといひ出した、叱り付けて又前進する、一時間程で塔巨里に着く、雪の日なれば早や四邊は薄暗い、鮮人夫は鮮人宿に泊らせ、自分は巡査駐在所を訪ふ、事務所は粗雜な日本建で、宿舍は溫突である、先づ事務所に入れば、年頃四十前後と覺ゆる日本巡査は、ランプの許で、何か書類を調べてゐる、自分は名刺を出して、宿泊を乞へば、喜んで溫突に招ず、自分は京城から持參した鯛を出せば、主人は酒など燗して、夜遲くまで物語る、彼れは數年前内地より赴任の途次、京城に二三日居たばかりで、其後は常に江原道の山奥の駐在所ばかり廻つて居るといふ、此處でも平康迄六里金城迄三里の間、日本人は彼れと、彼の妻君二人限りである。

三十日　今日も天候險惡、今にも降り出しさうである、九時發足す、峠を越ゆれば、道は谷川を沿ふてゐる、京元街道に出れば、間もなく金城邑の樓門が見える、金融組合理事の木下氏を訪へば、

「昨日は御出でだらうと思つて待つてゐたが、日が暮れても見えない、平康や鐵原に電話で問合せたけれども、そんな人は通らぬとのことで、心配してゐた」といふ郵便所長の石井氏も見えて、今夜は是非泊れといふ、旅程を急ぐ故、歸りを約して昌道迄行くことにした、此處で老鮮夫を歸し、新しく人夫を雇ふ。

京元街道を進んで昌道に着けば、こゝの駐在所の巡査奥村氏は、金城郵便所長の電話があつたので、待つてゐた、今日も道傍には、雉子が澤山出てゐた、相當獲物もあつたが、雉子を追つてゐると、時間を空費するので、今度は鳥は追はぬことにし、彈丸は大半此處に預けて、只腰の周りに十數發だけ持つて行くことにした、又人夫も茲からは、金剛山迄雇ふことにし、其の撰擇を賴めば、巡査補は洞内より一人の骨格逞しい二十五六の若者を連れて來た。

三十一日　昨夜より氣溫急に低下したと思つたら、今日は晴天である、奥村氏の話しによれば、今朝は零下十六度であつたいふ、十時頃出發す、元京街道を十二三町程行き、城隍堂で本道から別れ、通口縣里に向ふ、二三町も行つたらうと思ふ頃、後ろより「オーイ」「オーイ」と呼ぶものがある、望遠鏡を出して熟視すれば、巡査の服を着たのが走つて來てゐる、自分等は立ち止まつて、近寄るのを見れば昌道の鮮人巡査補であつた、正宗の小瓶に醬油の入つたのを突き出して「お忘れになつたのでしよやう、所長の命で、持つて來ました、半里を十分で走りました」といつて帽子を取つて汗を拭ふてゐる、好意を謝し、ウヰスキーを飲せて別る。

京元街道を離れてから、道は惡く雪は深い、岐城、觀音洞等を經て、十二時半縣里に着く、民家に入り餅を燒いて食ふ、民家を出たのは一時過ぎ、冬の日の短いのに、晝飯を食ふのは時間の不經濟であり、鮮人夫なども食はぬ習慣なれば、翌日よりは晝飯は拔にすることにした、縣里から先きも常に川に沿ふて上るのである、周圍の山々は、段々狹まつて來て、漸く奥山に進み行く氣持がする、今朝

の快晴は束の間で、何時の間にか暗雲天を覆ふて、時々飛雪あり、三時過ぎなのに、今や日が暮れさうである。

墨泗川、桃坡、新坪、長坪里、花溪洞を經て摩泥村に差し懸つた頃は、薄暗かつた、村の最奥の一軒家、鮮人旅宿の金明一方につく、音に名高き斷髪嶺は、すぐ眼の前に聳へてゐる、温突は二間（六疊位）の一室で、鮮人の旅客らしいのが四五名宿り合せてゐる、部屋の隅には、糸眞のカンテラが、薄暗く燈してある、何だか薄氣味が惡いが仕方がない、荷物や、藁靴を始末して、夕飯に取り懸る、御膳には半搗きの米に、小豆を混ぜて、焚いた飯を「サバリ」とて、大きな白色の茶椀に山盛りにしたのと、韮臭ひ朝鮮の漬物が乘せてある、此れも例の朝鮮老婆が、前掛けで拭ふたのかと思へば、咽喉も通らぬ筈であるが、空腹と薄暗い御蔭で、無難に喰ひ盡す、屋外には斷髪嶺おろしの寒風は、暴れに暴れてゐる、明日の天候も氣遣かはるゝので、外に出れば、天に一つの星もなく、寒風は肌を裂くばかり、震へ上りさうであれば、すぐ温突に入り込む、入りがけは、鮮人の惡臭鼻を撲つて堪へられないが、暫くすると臭にも馴れて、左程苦しくなくなる。

大正三年一月一日　天候相變らず、不良、雲低く雪模樣である、金城から貰つて來た餅など、燒いて、心ばかりの年頭の祝ひを爲し、九時過ぎ出發、愈々斷髪嶺にさしかゝる、嶺は内金剛に入るの關門である、其の嶺よりは一萬二千峯の大金剛を一望するを得るといふ、傳ふる處によれば、昔高麗の太祖、此の嶺に登り、金剛連峯を望見し、禮拜良久して、髪を斷ち、樹枝に挂け、沙門に入らんことを示した故に、斯く名付けられたといふ（江原道狀況梗概に依る）上下一里位の峠である、初めは差して峻坂ではないが、冬の日は山越えする者も少ないと見え、山路は峯より吹き下す雪に覆はれて、旅人の路行く跡すら見えない、漸く登るに從つて、坂は急に雪は益々深い、終には腿を沒するに至り、人夫と交代に雪を踏んで登り行く、登攀甚だ苦しい、氣温は攝氏零下十何度なるに、流汗はシャツを霑ほす、

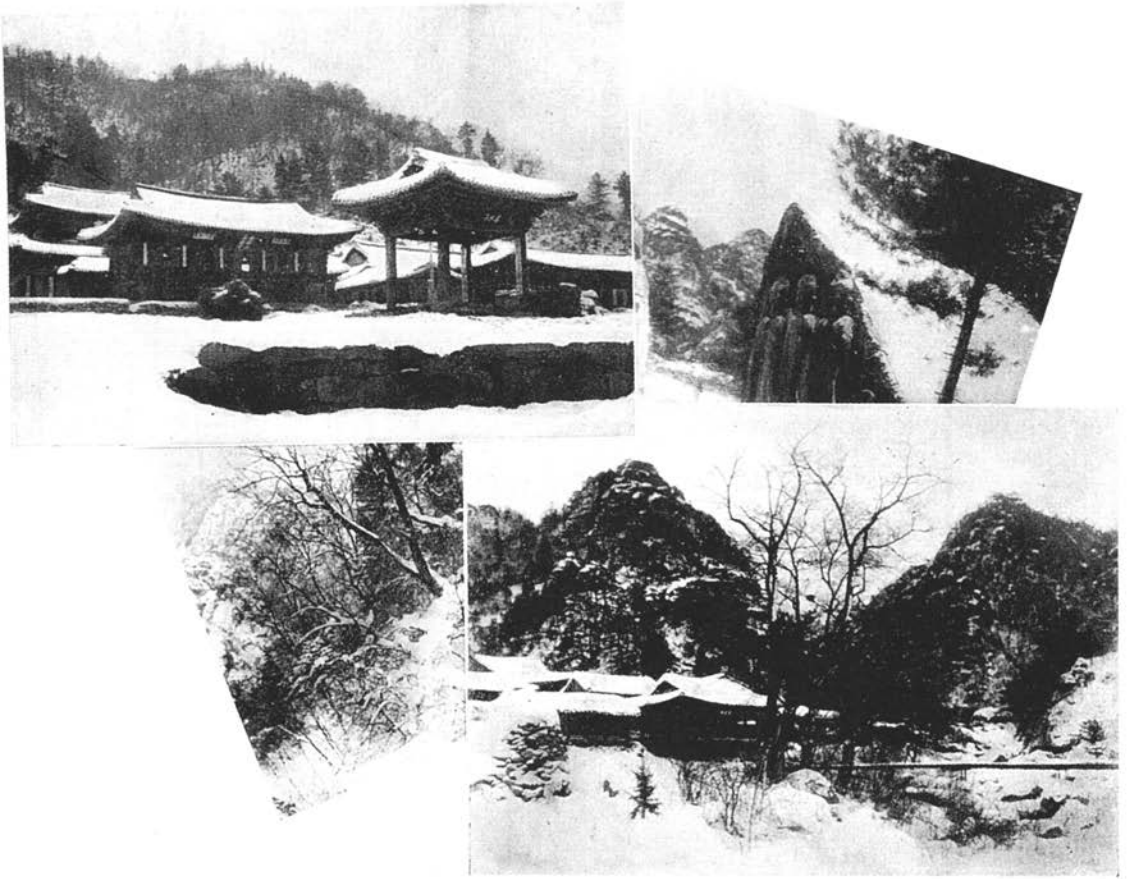
漸く上り詰めたが、金剛の連峯は、雲に遮られて何も見えない、流石に嶺は風が吹き透せば、寫眞撮る間も手足が凍り付きさうであつた、下り路は一層路も急に、雪も深かつたが、何といつても下り坂だ、登りに比すれば三分の一の苦みもない、峠を降りて一軒家のある所から左に折れ、十町程で川畔に出た、川に沿ふて約一里で、末輝里に著た、此處で路は二つに別れる、右すれば內金剛に、左すれば温井嶺を越へて外金剛の神溪寺に出られる、末輝里には憲兵派遣所が置てある、訪ふて金剛山の事情を聞き、金剛橋を渡つて、長安寺に向ふ。

峠を越ゆれば又小川に出る、此の邊の景色は非常にいゝと聞いて來たが、誠にそうである、何ともいへぬ趣きがある、雪に埋れてゐる小川の所々に、流の強い爲めか、水の面の見ゆる所には、鴨が二つ四つ浮んでゐる、松の林の間からは金剛の岩峯が隱見する、鐵砲で鴨を驚かして遣らうかと思つたが、今夜はお寺に厄介になるのに、鳥を下げても行けぬので歸りの樂みに殘すことにして、道を急ぐ、松林を出れば、塔巨里である、向仙橋を渡れば、道傍に「金剛山長安寺境內」と書いた木標がある、松並木を通り拔け長安寺に着いたのは夕暮れであつた。人夫をして來意を告げ、宿泊を乞はしむれば、執事らしい僧侶が出て來て、自分等を本堂の左側の客室に導いた、温突は奇麗な紙で布き詰めてあつて、可成清潔だ寺男は湯など持つて來た。

長安寺は大本山外金剛の楡帖寺に次いでの大寺で、金剛山四大寺の一つである。新羅朝二十三代法興王の七年とかに、眞表律師が創建に係る、其後火災に遇ひ、度々修覆して、今日に及んだといふ、堂宇の結構、實に宏壯を極めてゐる、僧侶中に日本語に通ずるものはないかと問へば、一人居るといふので、早速呼びに遣る、來たのを見れば二十前後の若僧である、流暢とは行かぬが、話しはよく解る、携へた「ウヰスキー」を飲まして、山の模樣など聞く、この寺には僧侶は四五十人居て、彼れは此の寺にある小僧の學校の先生を兼ねてゐるらしい、今は雪が深くて、遊覽には一歩も出られない、これか

ら二十一町北に、四大寺の一つなる表訓寺があるが、道は溪谷に沿ふて居る故、行かれまいといふ、然らば人はどうして行くかと聞いたら、多くは塔巨里から、山越えして行くといつた、此の模樣では此の邊の山寺は殆んど冬籠りで、めつたに里には出ないらしい、寺男の出した膳には、コブや豆腐の油揚げらしいものが列べてある、僧侶は入れ替り、立ち替り、來ては自分等を取圍んで、何か言ふ、終には自分等の持つて來た荷物など、珍しさうに觸つて見てゐる、片言交りの鮮語で、話しをするが殆んど通じない、寺男は零下十數度の寒氣を冒して來た遠來の客を歡待する唯一の御馳走と思つてか、無暗矢鱈に溫突を焚いた、始めは丁度よく暖まつて、身體も生き返つた樣であつたが、段々時間が經つに從つて、熱くて堪らない、座れば尻が熱つい、横になれば脊中が熱つい、立てば足の裏が燒ける、立つても座つても居られない、外套や洋服を拔いで、下に布いた上に眞裸になつて横になる、屋外は零下十何度なるにこゝは、焦熱地獄の此の有樣、內地ではとても見られぬ圖である。

二日　亦曇天、境內の雪を掃き寄せ、切り開かれてあつた道も往來の風で、全面又雪と化して居る、門迄出るにも膝を沒する始末、本堂など觀たが、美術に關する智識のない自分には、面白くもなかつたから、いゝ加減にして十時頃食事を終へ、表訓寺に向ふ、寺の前を流るゝ溪流を遡るのである、天候不良、時々チラ〳〵雪が降る、遠くの山は霞んで見えないが、近く地藏峯、長慶峯等の諸峯であらう、岩峯なれば所々雪なき所もありて、黑白の斑點ある奇峯が、溪谷を狹んで峭立してゐる、進むこと數町、鳴淵潭に至る、此處は春より秋にかけては、谷に散亂する奇岩怪石には、溪水奔瀉し、累累たる巨石に遮られては、靑々たる深潭となり、欝樹之れを覆ひ、金剛山中の一名所であるが、今は溪谷全部、雪に覆はれて通る路筋さへ別ち難い、樹枝に攀ぢつゝ進みゆけば、時折踏み外づしては、腰迄雪に沒して、人夫に助け上げられなどした、右の樹林中に安養庵を見、岩壁に架られたる丸木橋を渡り、暫くして又迎仙橋を渡れば、白華庵である、庵の前方に三佛岩あり、高さ數丈の巨岩に、三體の



雪の金剛山表訓寺（下）と長安寺（上）（橋本欽四郎氏撮影）

佛像が彫刻してある、高麗時代の懶翁の作なりといふ。

これより數町にして、表訓寺に到る、附近の風景は長安寺の其れより勝つてゐる、寺院の庫裡らしき所に至れば、品よき僧侶四五名あり、自分等の來たのを見て、喜んで温突の内に招じやうとする、草靴を取らうとすれば、其儘で構はぬといふ、此の日は天氣殊に寒く、鬚には勿論、水晶の玉が、小豆大に聯つてゐる、鼻毛も凍つて、バサ〳〵しで氣持が惡い、此寺の僧侶は、日語に通ずる者がないから、片語交りの鮮語で話す、右に見えるるが五仙峯、左のが青鶴峯だなど敎へてくれる、此の寺より摩訶衍に至る間が、萬瀑洞とて、金剛山中有數の勝景ださうであるが、今は雪深く、行くことは到底不可能だといふ、此から奥に進むことは出來ない迄も、天氣の晴れる迄、二三日此處に滯在して、雪の金剛の眺めを擅にしたかつたが、瀛車のある所迄、二十六里の雪路を經て、五日迄には、京城に歸らねばならぬ身であれば、殘念ながら此處から引き返すことにした、長安寺、表訓寺邊は、金剛山の入口ではあるが、金剛山中の名所が、近距離に集つて、居る所だといへば、これで先づ雪の金剛山一斑は見ることが出來たと、あきらめるより外はない。

歸路は白華庵より、拜再嶺を越え、塔巨里に出づることにした、嶺を上り行けば、一歩一歩毎に、顧返り見る、毘盧より白馬に至る金剛連峯の雪景色は、雪空で朦朧としてゐる故もあらうが、何ともいへぬ崇高の感を與へた、末輝里より淮陽を經て、洗浦に出づるは、近距離であり、道も良いと聞たが、昌道金城には、荷物が殘してあるから、往路と同じ路を取ることにした、塔巨里附近の松林中を通る頃より、降雪繁く、金剛橋を渡る頃には、吹雪猛烈を極め、十間先きは見えない、鮮人夫は苦痛極まつて哀呼を連發す、漸く末輝里に着くや、此所に宿泊しやうと歎願する自分も一歩も進みたくはなかつたが、明日中には昌道迄行かうと心に決してゐたから、鮮人夫の横面をウンといふ程擲つて、無理に進ましたが、吹雪は少しも止まない、益々烈しくなるばかり、鮮人夫の顏は眞赤になり、鬚に

は水晶が聯つてゐる、上新院里の一民家に泊る。

三日　八時出發、九時斷髪嶺下に至り、十時半頂上に達した、昨日に變る今日の快晴、殊に風もなければ、悠々眺望を擅にして、降路に就き、縣里を經て夜に入り、昌道着。

四日　金城に向ふ、三里の行程なれば、午前中に到着、木下氏宅に入る、午後は附近に狩獵に出づ。

五日　旅行中に獲たる雉子鴨を駄馬に積み、六時出發平康に向ふ、三時發の上り列車に間に合ひ、京城に歸着したのは、夜の九時、此れで九日間雪の金剛訪問旅行は終末を告げた。

樽前岳

附

洞爺湖と壯瞥瀧。登別溫泉。神居古譚。

大平晟

洞爺湖と壯瞥瀧

平面圖に於ける「マクカリ」岳の殆ど正圓なるが如く、洞爺の湖亦殆ど比類なき正圓を呈し、周囲九里六町、丘陵四方を繞り、水深くして清し、湖中大小四個の島嶼あり、大なるもの周圍五十餘町、其摺鉢山(スリバチ)は高一千四百尺、山巓清水湧出し、冬季凍らず、夏季涸れず、土人稱して神泉(カモイリツカ)となす、アイヌ語「トウヤ」は、湖丘を意味すと云ふ、湖北に「マクカリ」岳を望み、南岸に有珠(ウス)岳屹立し、風景頗

る佳なり、湖中四五尺の鯇を產すと云ふ。

向洞爺は、洞爺湖の北岸に臨める數十戸の小部落にして、伊達氏の別莊あり、三橋旅館の樓上に坐せんか、湖島の四丘は相重れるも各其丘頭を現はし、右の三丘は恰も「ピラミット」式、左の一丘は緩斜の土饅頭狀を呈し草木之を蔽ひ、翠色波に映せるに對し、獨り其右肩を掠める後方の有珠岳が代赭色なるも一異觀となす。

向洞爺より對岸の壯瞥まで二里餘、渡船あれども賃金壹圓半なりといふに、我脚用ふべし、行々湖畔の景を探らばやと思ひ、七日（明治四十二年八月）午前八時向洞爺を出發し、左岸に沿ひて進む、湖畔人家點々、稻田あり、菜圃あり、桐樹あり、又所々鐵鑛採掘地の標木を見る、疲れては樹蔭に憩ひて釣魚を傍觀し、暑氣に苦みては屢々湖に入りて面を洗へば、魚屬來りて我脚を喙む、戲れに砂礫もて誘致場を造り、之を追ひ込み、忽ちにして二三寸の鰍數十を虜にせるも亦可笑。

湖畔やなぎらん夥しく、其熟せる蒴の裂開して白絮を吐ける狀亦奇なり。

午後一時三十分本道第一の稱ある壯瞥瀧に達す、瀧は湖水の尻にあり、猶華嚴瀧の中禪寺湖に於けるが如し、湖水溢して川となり、清流約二町、忽焉落下するもの即ち壯瞥瀧となす、色に純黑ありて純白の益白なるを知り、地に低野ありて高山の愈高きを感ず、至靜の湖と至動の瀧、本瀑は何ぞ其れ華嚴と相似たるや、瀧高約二十丈、落口の幅十間許、落下半ばにして凸出せる巨岩に當り、瀑身三分するも、其落口及瀑身の狀甚だ華嚴に類し、水量と瀧壺の廣さとは遙かに彼に優れり、瀑下の急湍石を嚙み雪を吐き、奔下深谷に入るの觀あり、而も數町ならざるに平地に出で、直ちニ長流川に合し、紋鼇に至り噴火灣に朝す。

北海道廳の拓地殖民要錄に據れば、壯瞥瀧は懸下六十尺、幅二十四尺とあり、內地諸瀑の掛値の甚だしきに反し、これは餘り謙遜に失しぬ。

◎樺前岳　大平

瀑上にはなら、はんのき、いたやかへで等生ひ茂り、まひづるさう多く、又六八とくさの長四五尺太さ鉛筆大のものを見る。

再び湖畔に引き返し壯瞥川の橋を渡り、三町許の坂路を下れば、五十戸許の小部落あり、即ち壯瞥にして土人は瀧の下と稱す、瀑布の參觀に空腹を忘れしが、今や俄に腹の催促を受け、餅屋に驅け込み、餡餅を以て晝飯に充つ、理髮店あり「散髮料十錢」と云ふ掲示を見る。

長流川に沿ひて下れば、右方近く有珠岳を仰ぐ、本山は又臼岳と稱し、不規則なる圓錐形をなし、標高約一千八百尺。安政年間大噴火ありし以來、今尚頂上數條の白烟を吐き、全山殆ど赭色の熔岩を露はし、其六合邊以上は大劈裂夥く、頗る凄愴の觀あり、簸々たる火山灰砂を踏むこと三里、六時三十分海岸紋鶯に出で、七時二十分五十三噸と云ふへる小汽船いろは丸に搭じ、九時二十分室蘭に著し丸い旅館に投宿す。

室蘭はアイヌ語「モロエラン」より出で、繪鞆半島の腰部に當り、灣内徑約一里に過ぎずと雖水深し、海軍鎮守府の豫定地となり、特別輸出港となりて以來、漸く繁盛となり、今は人口約一萬、石炭の搬出甚盛にして、雲丹の名産あり、但市街は屈曲高低ありて形容甚振はず、汽船にて當港に入るや、靄霧土人の所謂「ガス」かゝりて、燈臺の光朦朧たりしが翌朝に至り濃霧四塞、衣袂爲に濕潤を覺ゆ、予本道に入りて以來、往く所常に快晴なりしに、聞けば當地方は既に十數日間此の「ガス」なるもの霽れずと云ふ、本道東海岸夏季に於ける濃霧は有名なるものなり。

登別温泉

八日朝旅館を辭す、街頭宏大なる綠門の建造中なるを見る、韓國皇太子殿下の伊藤公と共に來港せらるゝを歡迎せんが爲なり。

膽振新聞社を訪ひ、九時二十分室蘭發の汽車に搭じ、泥岩礫岩を穿てる隧道を過ぐれば、製鋼所あり、石炭車の往復頻繁を極む。

輪西（ワシニ）、鷲別（ワシベツ）、幌別（ホロベツ）の諸驛を經、十時三十分登別（ノボリベツ）驛に著す、幌別驛より約三里にして「カルルス」温泉あり、滿山の紅葉秋を飾りて甚美觀なりと云ふ。

予は豫て高頭氏の談話により北海道の草津と呼ばるゝ登別温泉を一顧すべく登別驛に下車するや直ちに温泉場通の馬車に投ず、道は幅約二間、登別川に沿ひ漸く爪先登りとなり、更に支流「クスリエサレベツ」川を溯る、登別驛より温泉場までは一里二十八町にして、馬車賃三十五錢、乘馬賃は五十錢とす。

登別は夷語「ヌプルペツ」にして、山川又は強き川の義なりと云ふ、温泉場の最奥に位せる第一瀧本旅館に投ず、玄關上に大額あり「温泉開祖瀧本」と題す、瀧本旅館は二ヶ所に分れ第一、第二の番號を付す。

該温泉は久しき以前土人ノ發見にかゝりも、地險に荊棘深く鎖して行くもの甚稀なりしが、安政五年武州兒玉郡本庄の人瀧本金藏なるもの移住開拓の際、其効驗の著しきに感じ、獨力浴場を經營せしより浴者漸く多く、明治二十年には馬車道を開き、今は戸數十餘、浴客二千に上り、第七師團衛戍病院附屬轉地療養所に撰定せられ、名聲嘖々全道に著る。瀧本氏は明治十四年藍綬章を賜はると云ふ。

浴後温泉源地の壯觀を探るべく、後庭を貫き谿谷を逍遙すれば、療養の爲め來浴せる兵士諸君の散策に逢ふこと屢なり、屋後二町餘にして熱泉の湧出するもの數十あり、大なるものは口徑十餘間、泉色概ね暗灰色なるも、稀には暗黄灰白色なるあり、硫黄礬土の泥濘滾々沸々、煮ゑ揚りては復沈み、沈みては復沸き立つの狀、焦熱地獄も斯くやと想はしむ、其噴騰三四尺、時には數丈の高さに及ぶ、附近多くの噴氣孔ありて、水蒸氣、亞硫酸瓦斯、若くは遊離硫黄粉を噴騰し、濛々四邊を蔽ひ、臭氣

◎樽前岳　大平　七〇

鼻を衝く、其區域二三町に亘り、地は一面に灰白黄色を呈し、浮石散亂す、光景恰も越中立山の四十八地獄に類せるも、唯其白色の著しきは、何となく新らしき心地す。

尙西北四町許にして湯池あり、周囲四町餘、水色暗綠色を呈す、池の東西兩岸には、熱泉熱泥の噴出沸騰するもの數ヶ所、池中亦往々泡を噴き上ぐ。

地學雜誌に據れば、此池畔の間歇泉は、明治二十一年磐梯山爆裂以前、一時間毎に噴騰七八回、高さ五十尺に及びしも、爾後全く休眠せりと云ふ。

西北岸は絶壁數十丈、其色赭褐、黄綠、暗綠等層々交錯し、壁上綠樹の之を蔽ふあり、又所々硫氣洞の曖々たるあり、頗る悽愴を極む、途上往々「此處通行すべからず、室蘭警察署」の標札を見る、蓋危險を警戒せるなり。

池水溢れて溪流をなす、川水爲に攝氏六十度の温度を保ち、白氣濛々谿谷に滿つるの狀、恰も上州草津川に似て更に壯大なり。

池岸に立てば、西北方僅かに登別岳の頂上を望むべし、脚下白花の簇開せるはいそつゝじとす。

該地の温泉は其源數ヶ所ありて、概ね硫化水素、硫酸、格魯兒最多量にして又頗る鐵、麻倔涅叟謨を含有するも、又多量の炭酸を含むものあり、梅毒性諸病、皮膚病、腺病、神經痛等に効ありと云ふ。

温度は攝氏三十八度乃至九十五度にして、概ね白濁なるも又無色透明なるものあり。

此地標高六百六十尺、盛夏も八十度以上に至らず、晩秋の紅葉は滿谿を錦化せしむと云ふ。

名物には鑛泉羊羹、大皷饅頭あり、蕎麥亦佳良なるを聞き特に一食を試む。

温泉場に於ける掲示を左に記す。

定

一日宿料　一等　貳圓(但三飯)　二等　壹圓五拾錢　三等　壹圓

湯錢一日　一人四錢　三日以上滞在一割引
自炊
席料一人　一日ニ付拾七錢ヨリ參拾五錢
一室貸切リ　疊一枚ニ付拾錢ヨリ拾五錢

九日霧深し、午前七時四十五分徒歩登別温泉場を出發す、程なく凝灰岩壁の下、清水の湧出するあり、「錦ノ清水」と題す、又朱字もて「紅葉谿」と題せる標札あり、途中眼に入りし植物にはは、んごん、さう、いわうさう、みやまよもぎ、おほいたどり、ふぢばかま、ぎばうし、たうばな、みそはぎ等あり、鶯鳴に送られて登別驛に達せしは九時三十分なりき。

樽前岳

十時十五分發の汽車に乘り、十一時四十五分錦多峰（ニシタップ）驛にて下車し、㊟旅館（米谷）に投ず、樽前岳の新噴狀を探らんが爲なり。

錦多峰は「ニシタップ」と訓むを可とす、北海道旅行案内に「ニシキタミネ」とせるは誤なり、又拓地殖民要錄に錦多布と書し、其他「ニシキタフ」或は「キンタフ」など訓ぜるは皆誤れり、大日本地名辭書には「ニシタプ」と訓ぜり。

午後海濱漁家の狀態を視察し、郊外に散策を試む、附近は數次樽前岳の噴灰を蒙り、茫々たる廣野農作に適せざるが如し、但白鳥、鴨及其他鳥獸に富むを以て好獵區なりと云ふ、植物にはは、まなす、ちだけさし、たちふうろ、みやこぐさ、かはらまつば、かはらなでしこ、だいこんさう、みそはぎ、みやまたつなみさう、はまぼうふう、えぞたうちさう等あり、殊におみなへし、べにばなのこぎりさう夥し、白老（シラオイ）驛以來車上にて原野一面の黄花を認めしは此おみなへしにして、予は北海道に入りし

以來始めて此花に接しぬ。

◎樽前岳　大平

予が隣室に警官二名の來宿せるあり、乃ち附近の地理を質問すべく刺を通ずれば、其一名は新潟縣人阿部谷藏といひ、曾て旭川警察署に在勤せりとて、予が爲に「ヌタップカムウシュペ」山（旭岳）方面の說明を與ふること懇切なりき、二官は明日韓太子當地通過に關し、警衛の爲に出張せしものなり。

夜に入り樽前岳攀登の案內者中村友次郎（五十一歲）を呼び、豫察的質問の眞最中、附近の失火に接し、一時は荷物取纏め避難の準備までせしが、幸一戶にして消し止む、翌日新噴火山を探檢すべき予が身に取りては、前兆吉か將た凶か、案內者及警官と共に語り合ひ、果ては哄笑となりぬ。

窗を押して屋外を眺むれば、殘螢の彼處此處に點々たるは火事場火の粉の殘りかと疑はれ、仰げば星斗爛々、晝間は雲に鎖されし樽前の山峯も、今は全く其綿帽を脫して見參に入りしは愉快なり、樽前岳は本驛の西北方直徑約三里とす。

十日快晴、今日は此地を根據とし、日歸の登山なれば、味爽輕裝出發の豫定なりしも、夜前の火事の祟りにて遲延し、六時二十分案內者を促して旅舍を出發すれば、袴穿てる小學生の陸續たるに逢ふ、韓太子歡迎の爲なり。

本街道を西南に進み、錦多峯川、覺生（オボブ）川を渡り、同五十分國道と別れ、右折山逕に入る、十數町にして牧場あり、札幌高木某の經營に屬し二百の馬匹を有せりと云ふ、三々五々群をなせる彼等の屢我輩に尾行せるも愛らし、濶葉樹林を穿つこと數町、樹種は概ねかつら、かへで、いたや、はんのき、なら等にして、又さんせう、くはを見ること多し、山草の眼に入りしものにはきみかげさう、はないかり、かせんさう、をかとらのを、ともゑさう、きつりふね等あり、きみかげさう、はないかりは、內地にては標高約三千尺以上の深山ならでは產せざるもの、今海岸の低野に之を見る。

八時坂路にかゝり、二町許にして平原に出で、同二十分幅六七尺の溪流に接す、燐寸用材工場の廢跡あり、殆ど水なき此溪流を溯り、えぞまつ、とゞまつの針葉樹帶を穿ち、同四十五分所謂空澤に入る、蓋最近樽前山上より急落せる行潦の鑿開せるものにして、其幅十間乃至三十間、平時全く水なきにより空澤の名あり、進むに從ひ兩岸漸く高く、浮石質砂礫層の峭壁は殆ど鉛直をなし、其色概ね暗灰色なるも、往々赤褐色を呈するあり、此空澤を辿ること約一里、行潦の爲め流下せる巨幹全溪に横はりて梁木の如きあり、或は枝梢の半ば埋沒して亂抗の如きあり、鹿柴の如きあり、此間を或は飛び越え、或は潛り、或は縫ひつゝ進めば、往々鹿及巨大なる熊の足跡を見ること屢々なり、而も其痕跡の頗る新なるは、餘り心地も宜しからず。

十時空澤の盡くる所に達すれば、絶壁高七八丈、到底攀づべくもあらず、引き返すこと一町許、辛うじて左手の崖壁を攀ぢ登れば、樹木は既に矮小となり、眼界開け行手に近く樽前の峯頭を仰ぐべく、點々散在せる岩面を蔽へる石蕊の暗灰硫黄色なせるは、屢火山噴灰の見舞に接せるを偲ばしむ、附近の植物にはいちやくさう、くしろちどり、えぞつがざくら、ほつゝじ、いそつゝじ、みやまやなぎ、しろばなこめつゝじ、うこんうつぎ、しらたまのき、くろまめのき等にして、えぞまつの矮小にして而も老齡なるは、盆栽家の流涎に値するものあり。

十時三十分測量部の小屋塲に達す、標高約一千二百尺とす、小屋はおほいたどりを以て四圍及屋根を葺きしものなり。

十一時二十五分樽前岳の胸突とも稱すべき噴出砂礫の急坂にかゝり、十二時十五分頂上に達す、即本山外輪の最高點にして、前きの胸突は其外側なり、此最高點は舊火口の東壁にして東山と稱し、標高三千三百五十尺、錦多峯驛より約四里、胸突を除くの外登路甚緩斜なり。

本山は勇拂、千歳（ユウブツ、チトセ）の郡界に位し、又垂舞山と稱し、文晁の名山圖繪には珉瑁陟（ダイマイノボリ）と書せり、「クルマイ」

◎樽前岳　大平

は夷語「オタルマイ」にして山燃て砂崩る丶義なりと云ふ。

◎樽前岳　大平

本山は有史以來屢次の爆發を經しものにて、明治に入りては七年、十六年、十八年、二十年、廿七年噴火せしが、本年三月三十日午前七時大爆發をなし、噴烟は本山の三四倍の高さに騰り、降灰四里の外に及び、札幌に於て黑烟火光を望み得しと云ふ、爾後四月下旬に亘り、徐々に噴湧せる熔岩により、舊火口内に圓頂丘を形成せり、舊火口は略楕圓形をなし長徑約十八町、新成の圓頂丘亦略楕圓形高饅頭狀をなし、其長徑約三百六十間、高さ五百七十尺にして、外輪の最高壁よりも尙高きこと約百尺斯る圓頂丘の形成は、我邦火山中に於て頗る珍奇のものなりとす、就て之を檢するに、黝暗褐色輕鬆脆弱にして表面參差たる霜柱狀を呈し、手指以て之に觸るれば、容易く崩壞すべく、時々自然に壞落するを見る、而して無數の孔隙よりは水蒸氣瓦斯を發散し、西側特に著しとす。

圓頂丘の東脚斜に突出せる巨岩の下より猛烈に噴烟する所あり、轟々の音は人語を破る。

外輪山は西南部に於て約三千二百尺の高度を有し之を西山と稱す、此外輪東西の突起は、白老方面より之を望めば、雙耳的圓錐狀を呈す。

本山の北方は馬背狀の山背を以て「フウブシヌプリ」に連り、其山脚は直ちに支笏湖に沒す、「シコツ」とは夷語大谷の義なりと云ふ。

支笏湖は東西三里餘、南北二里、周囲約十五里、其水面は拔海約一千尺、水甚だ深く、群峯近く環峙し、其著しきもの、東南には樽前岳、西南に白老岳（二八五〇尺）、東北に紋別岳（三二〇〇）、對岸即西北には繪庭岳（四六五〇）、ありて、其尖峯雋絶の姿は湖面に倒映し、山脚の絶壁は直に湖面を壓し、幽邃壯絶を極む、殊に繪庭岳の左方遙に蝦夷富士の高く天を摩するを望みては、曩遊の感湧き興盡くるを知らず、湖岸所々溫泉湧出すと云ふ。

本山頂上は一面に火山砂礫を以て蔽はれ、殆ど不毛の觀あれども、稀には矮縮せるだけかば、まる

ばしもつけ、こめばつがざくら、たかねすげ、いはぎきよう、いはぶくろなど目に入りぬ、いはぎきようは甚小形にして花色薄く、いはぶくろ亦他山に比すれば甚小形花色薄紅のもあれど、多くは殆ど白色若くは白色暗紫條を帶ぶるあり。

圓頂丘周遊の際、蝦夷蟬の岩上に鳴くあり、又白蝶の噴烟を縫ひつゝ飛翔するを見る。

午後二時五十分頂上を辭し、往路を復習し、七時歸宿す。

神居古潭

十一日快晴、午前八時四十五分錦多峯驛より乘車し、苫小牧を經、沼端驛に到れば、左に廣き池沼を見る「ウツナイトウ」と名く、雁、鴨、白鳥等の好獵地なりと云ふ。

早來、安平、追分等の數驛を經、栗山驛附近に到れば、茫々たる水田を見る、蓋沿道第一富有の農業地にして、亞麻製造會社あり、追分は夕張線の分岐點にして、其骸炭製造所は一日製出高約百噸以上に達し、其規模の壯大なる本邦中一二を爭ふものなりと云ふ。

十一時五十五分岩見澤に着す、驛は函館、旭川、室蘭、幾春別各方面鐵路の交叉點にして、構内規模頗る宏大なり、當地は石狩平野の中樞に位するを以て、明治十七年開拓後次第に繁昌し、現今戸數八千を算し、空知支廳、御料局出張所、警察署等あり。

停車時間を利用し、我校出身者松井源平君を鐵道事務所に訪ふ、君沿道風光の説明をなすべく、「サイダ」、菓子など携帶同乘す、汽車は峰延、美唄、砂川諸驛を經、本道最長の稱ある空知川の一大鐵橋（百間餘）を渡り、江部乙、妹背牛、納内等を經、一隧道を出づれば、蝦夷寢覺の稱ある本道の奇勝神居古潭は直ちに眼前に脚下に展開す、時に午後三時三十八分とす。

神居古潭は夷語「カモイ」は神、「コタン」は居所又は村の義なりと云ひ、住古惡鬼石梁を以て此河

水を止めんとせしに、神來りて之を砕き惡鬼を殺せりとは土人の神話なり。

石狩川は此處に來りて中央山脈を突破し、兩岸峯りて相距る往々三四十間に及び、壁立數十丈、或は曲折屏風の如く、或は巨岩河中に兀立し水勢激して白沫四散し、或は滙して深潭藍を湛へ、或は奔りて急湍綿を吐く、加ふるに欝樹の崖上を蔽ふあり、鮭、鱒、鰻、「チライ」の波間に躍るあり、「チライ」とは「イハナ」にして三四尺の巨物を見ると云ふ、若し夫れ春櫻霞を引き、秋楓錦を織るの季にありては、風光更に一段を加ふと云ふ。神居古潭驛は此勝景の仙境にあり、驛を距る約五町、河を隔て、鑛泉あり、入浴に供せり。

神居古潭の岩石は古生層に屬し、砂炭、粘板岩、輝綠凝灰岩、蛇紋岩等交錯重疊し、其色黝暗なれば、木曾寢覺の白閃々たる花崗岩に比すれば、何となく陰氣の感あり、此隘峽里餘に亘り、實に石狩、上川二大原野の關門をなせり。

當驛にて松井君は辭し歸る、四時二十分旭川に着す。

妙高の秋色

小野塚進次郎

一

○誰か曰ふ。高峰の上、峻嶺の頂。雲外の天地、幽玄の妙境。誰か曰ふ。秋色の美、紅葉の錦繡。一間一瞬を爭ふ自然の佳境。

○曾昔、遠く寒山に登つて石逕斜なる所、遠く白雲の生ずるを指して人寰たるを認め、更に霜葉二月の花よりも紅なりと嘆賞せし杜牧が詩趣、又以て秋色の天地、山行の壯濶、紅葉の美觀を併せ這般の消息を語る快文字たるを失はず。

○紅葉に名ある所、日光あり。碓氷あり。鹽原あり。然れ共何ぞ比せん雄峯八千尺の高きにあつて、連繞せる山又山、悉く是錦綺亂霞の裝、その美化大觀、妙高の紅葉の如きに至つては果して他に何れにかある。即ち妙高の秋色たる、それ日本の紅葉と稱すべきか。

○去歳仲秋、然も霜露滋き神無月の五日、偶思を登山に寄せ、行歩以て山頂を極め、計らずしもこの大觀に接しせり。「紅葉深し巖石雲を吐く處」てふ言ふべからざる壯觀奇趣の印象。頃日、山岳第九年第二號成るを開き、即ち筆を投じ當時の思出を集め、同趣の諸賢に呈せんとす。

二

○時は大正元年十月五日。釣瓶落してふ秋の日は西に沒してより二時間の後。此處は星光燦たる信越線田口の驛、蟲聲悽咽たる野頭に立つ三人。一は大平晨氏にして一は田中岩吉氏なり。

○女心に秋の空か。男心に秋の空か。吾人未だこの間の消息を審にせざれ共、共に兩性の浮薄を恨むるの文字たり。それにも遂はず今朝の天候は、もどかしく愁雲の離集一定せざりしが、翌日曜をその儘にせんも物惜しくして俄仕度の妙高登山、一度靈峯の山容を心中に描きては心とび肉躍りて思ひ立つたが吉日と、午後一時來迎寺發の客車に投じ、今しも今宵の目的地たる赤倉温泉に向つて行路をとりぬ。

○秋の香寒き野の道の夜行、蟲聲唧々として韻を送る。一度は踏みし路とは知れど、小曲小屈悉く記臆に存せず、偶々尾行し來れる巡査に尋ねんと發問すれば「地理の事なら私は存じません——まだ參りましたばかりで」

◎妙高の秋色　小野塚

○無月の里頭。二里弱の行程。二本の一錢蠟の惜しきばかりに星光を友として只管に急ぐ處。折りしも暗路を急ぐ一穗の提灯。赤き文字は「赤倉香雲館」と大きくしるされて今様の女中風の女來る。

○暗に提灯。渡りに舟と後を辿りぬ。前路の發問、赤倉の近況切なり。人あらば何と思ふらん。若き女と三人の旅男。然も田口と田切の野中の道、八時は既に過ぎし無月の宵。

○娘は辭しぬ。何とか用にかこつけてとある民家に入る。さらばと始めて提灯を出して灯を得。丁氏曰く「あの女の頭を解剖したらどんなだつたらう」「どんなだつたろう」さても罪の言葉、されど謝辭は至つて丁寧にして充分なりき。

三

○空は晴れぬ。星幾千太古に似たる闇夜の這宵、秋風嫋々として路傍の名なしの雜草を吹いてつきず囂々たる荒川の上流は白霧深く、上越發電所の電光、夜光と相映じて物凄きまでの壯觀を演ず。

○髯を撫す。露滋し。唱歌雪夜の斥候に習ひし句、敎へし歌。「氷りて髯の色白く」てふ文字、成程外界の冷氣を受くるは髯が何より先、これなれば髯が第一に氷るものなりと合點し得たり。

○田切を辭して左折し山路赤倉に向ふ。路傍の民家に丁氏訪れて前程を問ふ。戸口はこれ馬の應接、馬公平然として聲なし。馬と人と室續きなるは此邊山家の構造。

○緩なる傾斜里許。星光愈澄みて夜氣次第に迫る。

尋ねられて二里を一里と答へけり
野の道寒き秋の夕暮

てふ敎へし人の情によるか否かは知らざれど、近くに見ゆる赤倉の里燈は行けども行けども同じ大さ、靈峯の姿は目前近く立ちて其間幾何もなきの感あり。やがて闇の中よりスーと現れたる一簇の杉森、

その森蔭より二つ三つと影ます燈火、サア來たと坂を登れば曾て紅葉山人を歌はしめし香雲館、香嶽樓の前なり。

四

○時已に九時。今しも赤倉の村端藥師堂の前に立つ三個の異行の影、是ぞ余等一行が今宵の目的とせる無貨の宿舍につかんとするにありき。堂の御前數歩の所、將に近づかんとするに、右手の家より、吠え出したる一犬、一聲又一聲次第に烈しく咎められぬ。

○里内を驚す騷擾の聲にあやしく思はれてはと遂に退却し、共同浴場の前なる一の豆腐屋を敲きて、やがて古風めきたる一室は宿と定りぬ。

○浴場三間に六間の新式の建物、中に九尺二間の浴槽二、之に通ずる筧尺餘。流れ來り流れ去り茲に幾百年、善男善女の凝脂を洗ふ事幾何。一浴以て身を清め屋外に立つ。此處三千尺に近き高麓の原頭、冷氣身に迫りて暫もあらず室内にかけ込む。

五

○霜夜の夢、旅寢の枕もあはれ豆腐屋の優情によりて、丁氏と抱寐の三枚蒲團、圓寐の夢は鄕に走りて華胥の國、胡蝶の羽に戯むるゝ折りしもあれ、パッタと破れて結ふ軒の雨音。囂々たる事雨の如く、颯々たる事風の如し。サア失敗と蒲團を蹴て障子を排せば、雨にあらず又風にあらず、これ高山を繞る重疊の流れ。

○下弦の月は皎々として千里隈を殘さず、東山を登る七八尺、大空の一點の曇りなき淸風白月。時は四更にして虫聲更に悲し。

○六日、四時起床、一浴す。浴後溪流に口嗽いで朝の靈氣に接す。殘月愈光强く、明星一點東大に清し。思はず口ずさむ陣營の秋「月下の曲」

○汽車賃を除外して無錢旅行に似たる今樣彌次喜多の一宿、兵糧は直江津にて鮨の用意なしおきし故その心配なし。正直の處、有體に申し上ぐれば旅宿に拂へたる代金如件。

一、拾　八　錢　布團六枚代
一、七　錢　五　厘　湯錢三人前
一、拾　壹　錢　五　厘　豆腐一丁半（但一丁の大さ東都のもの丶約三倍）
一、拾　五　錢　室　代

〆て五拾貳錢也。外若干の茶代、それも可なり。豆腐にそひたる一鉢の澤庵、一皿の梅干までも種のみを殘して。

六

○前五時半、結束登山の途につく。東道を儀はず。

此處、妙高の裾野、緩にして長き傾斜を後にして朝露を分けつ丶峻角たる山巡を迫る。麓より次第に色づき初めし全山の紅葉、珍らしきに心も浮き立つ程に、山葡萄、木通（アケビ）の類は所在點々頭上に吾等を迎へ、梅鉢草、大文字草は早も靈山を氣取りて足下に一行を送りぬ。

○五時五十五分、丸山清水塲に着す。清水を掬する間に旭日東天を彩りぬ。山の半腹より次第にボカしたる幾千萬の紅葉、黃葉、淡く濃く錦繡の裝、斜に受くる全山は燦として是に映ずる雄大の壯觀、所謂地として樹あらざるはなく、木としてもみぢせぬはなきの大觀、世は全く化して紅美の天地となりしかと疑ふ。

○頂上より吹き來る高嶺の朝風、强からぬ程に颯と裾野を訪るれば、小さく染めたる千草の樣々、葉裏を反して一段の秋色、玉と散りなん數千町の秋の野、旭日に映ずる曙の風致。

これぞ山上と山下、旭日斜光の紅葉の配合、我眼に映せし淸水塲の朝景色、筆にするも懶し。

七

○休憩二十分。ひた登りに登り行く山逕、次第に嶮を增し、色づく紅葉は濃度次第に深しゝ身未だ旭日より高き事數尺、「サアお天燈樣が早く山の上に出づるか、吾等の登山がそれよりも早いか」など戯談にまぎらはして歩を運べば峻坂亦登るに易し。

○晴巒雨峯、次第に吾等を壓して上は峨々たる千仞の絶壁、下は削れる萬仞の深谷。見上げては驚き、見下しては怪む。折々は溫泉の間歇的湧噴に足を洒して熱さに膽を消す。さては硫化石の沈澱せる奇形に見とられ行くまに、身は已に前山の大崩（オホクヅレ）に達す。

○下流は往きて澁江川となるその上流、身は海拔五千尺の北地獄谷のとある巖頭。右するは赤倉の棧道、左するは燕への峻逕。四周の紅葉はその色方に八分、紅きは楓に山漆、黃なるはいたや楓、殊に奇趣を呈せるは白樺の天色、材幹白皮に蔽はれたるが上に黃褐の色をのせたる自然の風致、然も一山一側、悉く紅葉の彩色にして恰も全山帶薑の繁生とまでに怪まる。眼を轉ずれば名なしの小草に至るまで、皆とり〴〵の秋色ならざるはなし。一山又一山、總て風致を異にす。見渡す限りの眼界、山水草木、紅葉にあらずして何ぞ。玆に至つて詩人も亦筆を投じ、畫人も亦器を捨てん。

嗚呼……地獄谷附近の仲秋の風致……そは神名山を望む山腹の屈路。

八

○天狗平の破堂の前、休憩若干時にして十時十分富士見石に到る。火山岩地上に立つ方二間、即ち岩側に立ちて展望を恣にす。

○此の日晴空、四方一點の雲影なし。地は海拔七千尺、今迄余等の頭上を壓せし神名、赤倉の外輪山は、今は侍して、全く足下にあり。

○右手に黑姫、戸隱の諸山、遠く駒、乘鞍の諸峯、怪しくも雲表に聳ゆる一朶の彩り、雲か、空か、それにあらず、是正しく東海の鎭たる芙蓉の靈峯。實に中霄に立つ一萬二千尺、望みて聖なる事神の如く、美なる事名畫の如し。

○信越の境界に雄視して、山疊の間を一眸に集めし展望の好所、上越下信の間の平野は、細く開けて廣く收る。その溪間を縫ひ行く一條の鐵路、一瀨の流れ。煙をあげて走る汽車は香爐のとぶが如く、白絲に似たる荒川の上流は何ぞ一縷の如くなる。流れて別るゝ下流の八瀨、寄せて集まる名古の海口。何ぞ一芥を浮ぶに堪へざる。稍平たきは下信の盆地、白き鏡と我眼に近く映ぜしは、それ野尻の池か。

九

○十時二十五分、當山第一の嶮難、笈摺坂を登る。一枚岩の傾斜七八十度、方六七間の絕壁、命とするがるは唯三條の鐵鎖、前年高田にありし頃、一行十名、機械體操の名手も等しく天狗樣の御罰に當たらぬ樣にと祈りし雨の登山の舊蹟なり。

○今日は晴天、さほど異行のスタイルも演せず、無事に通過して行けば、富士ならば胸突八丁、此處は行者の法螺貝を摺るといふ貝摺岩、怪岩突兀の間、それにも目はくれず唯山頂を目ざしぬ。

○山頂も近きぬ。逕の熊笹、漸く繁く漸く短し。嬉々として歩を移せば、今度は燒けたる巨岩、疊々として連續し山相を陣取る。狡兒巨口を張り、猛士足を岐するてふ熔岩崔嵬の處、天風の淅瀝たるに珍物「こけもゝ」の赤く熟して、笑んで珍客を迎ふ。即ち渴するまゝ唯無闇と手にとつては口に運ぶ。暫らくその味を知らず、漸々にして心付けば、成程甘し。正にこれ七千尺上の天界の珍味たり。

○高峯の珍果、鄕里への家苞になど心を奪はれ、兩手に一杯、握つて峨々たる山頂を辿れば、吹き上ぐる風に、斜に押されて飛ばされんとする事幾次。

○

○十一時十分。頂上阿彌陀堂の前、日本石の傍に達す、余等一行は今八千尺の高峯の人、雲表に巉巉たる峻嶺は、巍峨として四嶽を足下にし、獨り有史幾千年の昔を語るが如く一行を迎へぬ。

○晴空千里。信越の半、一眸に聚めたる雄壯の幽境、一角に立つて嘯けば、全く無我の境に入り、我なく、人なし。俗界の富貴、浮世の榮華、迷界の利達は何れにか去つて、唯宇宙の偉大の感に打たるるのみ。

○御堂の北。巨岩に洞窟あり。そを通ふ萬年の名水、四時に涓滴絶えず、以て登山者の渴を濕す。即ち喉を濕して食につく。

○妙高の山、或は山の傳說に付いて、已に江湖に傳はる。拙才薄識、敢て之を辯ずるに足らず。或は日本山岳志に、或は地名辭書に、又その他の紀行に之をつくせり。

○本山は頗る顯著なる外輪山を有し、中に火口丘を峙立す。食後好晴をあびて頂上を散策す。南八丁、北八丁の凹所は尺餘の矮樹と芝草の點在するのみ。頂南にある大火口原は環狀をなす。巨岩を超えて一歩すれば、火口原の水は北東に向つて、外輪山を破り、火口瀨をなしたるが如し。

◎妙高の秋色　小野塚　八四

○聞說、外輪山たる、赤倉、廓、大藏、神名等の外圍の連山、大きく造れる半圓徑は、その直徑三粁に餘るど。素人の眼にも最もよく映ずる、二重式火山の好典型、北東を破りて出でし火口瀨は、今も殘る、大田切、小田切、途中北地獄谷を通して、その溪合の特流を感付かば、自ら合點し得。

○日は將に頭上にあり。頂上を圍繞せる四方の彩り、光線の當る所自ら差異あり。何れも尺餘の小灌木、石南、山榛、山南天、その他とりどりなり。東西南北、色彩の異なる所、眼界に映ずる山、皆もみぢせぬはなく、爛然として霜に飽く。紅霞、彩靄、或は錦繡、綺羅。茲に至つて言ふに言葉なし。淡き濃き美觀の中に目立つは、頂南の溪間、小木の白樺、一帶の紅葉、上は全くの紅禍の美裝にして、樹は全部の白帶、日光の直下する所、無双の美、黃—紅—白—の彩り。人界の美、浮世の觀、茲に至つてつく。

一一

○午後一時、下山の途につく。ひた登りに登りたる高峯の下山は、ひた下りに下るのみ。五十分にして二千尺を下り、前山の頂南、天狗平にて小憩す。

○北地獄谷を過ぐる方に二時半、溪流に沿ふて山腹を下る峻路、登るより一層危し。登山の途次秘めおきし紅葉の各樹、硫黃の沈澱石は流石にその場を知るを得たれども、珍奇の名木、白樺の幼材樹容殊に面白くありけるもの、如何に訪ねてもその場を求むるを得ず。

○行路を轉じて左にとり、燕温泉さして行く。溪間路上にかゝる二條の瀧、聖明といひ高明と呼ぶ。上にあるもの三十間許、下にあるもの四十間内外の長さなり。更に奇なるは上流の瀧、土岩全く赤く地層を現し、下流の瀧忽ち變じて地層悉く白し。而して二瀑相連り姉妹瀧をなす。水量亦可なり。余等始めその名を知らず、赤瀧白瀧。姉は赤く、妹は白し。姉にせんか、妹にせんか、曰く何れも捨て

がたし。

○行歩茲に轉ずれば、忽ら嶮角の巖頭、韡々ととぶ二十四五丈、そは赤瀧にあらず、白瀧にあらず、地岩の彩色一變し、黑色を呈せる即ち黑瀧なり。赤と白と黑との三彩、面白きコントラストなるに、あはれ一段の風色を添ふるは、此處も龍田姫の見舞給ひて、錦霞、紅雲の靉靆、これ皆幾千年の古木の綾羅、そは三瀑の兩側、一山の秋色、中にも可憐なるは瀑上枝を交ふる三四の山漆、二三の楓、水に映じ、岩に對して自らなせる南畫の筆致、實に求むる能はざる勝景なり。

○車を停めて徐に愛したきは吾人も同趣とするところ、奈何せん、前途の時間に限られて、名殘惜しくも三時半といふに燕温泉、山屋と呼ぶ旅館に腰を下ろしぬ。

一二

○瘦貧滿ちたる羈旅の中、その興漫々たり。是今回の小旅行に吾人のとりし方針なり。

○例によつて例の客たり。先づ前の共同浴場にて登山の汗を洗ひ、登山の腹埋に今朝の味覺えし豆腐の註文、折から信州某小學校の修學旅行とて宿屋の豆腐買占めとて御註文は品切れ候との大難に會す。僅にありつく半丁（大さ赤倉のそれに同じ）それをも命じて後は茶腹にてごまかす。

○辨慶豆腐、登山に妙なり、冷（ヒヤ）としたる所、醬油に浸して一度渴せし口にすれば無限の味あり。無限の味ありて又充分の滋養あり。余は一口、口にして徐に今日の行路を追懷す。以て同趣の士に勸む。

○宿の女將、土地の廣告に乘じて話頭縱横に花を咲かす。余等一行を何者と解せしか。以ての外の優待なり。即ち一時間の御茶の御給仕、御付添の有樣、厚紙の一行、敢て辭せず、吾人にとつては又飲早の名手、飲んでそつと前におけば直につがれ、つがれては又飲む。その數無慮二十餘杯。

○かくして一時間、腹の用意もどうやら成りぬ。茶化したる茶腹をかゝへて、四時半、關山さして出

◎妙高の秋色　小野塚

發す。

一三

○燕の寒村より十八町、關の温泉あり。燕より此處にひく。温泉宿數軒の外、又人家なし。

○これより先、數里の傾、斜緩なる妙高の裾野は、今仲秋の天地、老ひたる八千草、そが夕暮の微風に戰ぐ一帶の風致、その中を一直線に下り行く關山の街道。

何處より人は入りけむ眞葛原
野分吹き込む道よりぞ來し　（方文記）

曾ては其根に虫を宿して、月の一夜を歌に明かせし尾花、葛花、今はその色漸くあせて、悲風の哀景をなせる爲とはいへ、茲萬頃の廣漠の原、そゞろ往時の談も繰り返されて古き歌ども思ひ出でぬ。

○一歩停まりて顧望すれば、數刻の前攀ぢし雄峯は、今は白雲に鎖されて山頂の見分、定めもつかず。さても天與の好登山なりしを喜ぶ。關山停車場に着せしは發車の前十五分、かくして七時廿五分、一日の目的を果して、鄕關に返る終列車の人とはなりぬ。（終り）

鳳凰山彙縱走記

小佐野迢々

七月十八日（大正三年）の夜は、中巨摩郡芦安村の温泉旅館に宿つたが、蚊と蚤に攻められたり、

御勅使川の流聲が耳に付いて、碌々眠られなかつた、曉近くなつてから、少し眠つたかと思ふと、もう起きなければならなかつた。起床したのは午前三時であつた、河岸の樹木を搖がして來る涼風は、面に冷氣をおぼえた、清冽なる河水に嗽き、やがて準備が整つて、登山の途に就いたのは、午前四時五分であつた。

路は御勅使川に沿つて登るのである、岩に激する水は、轟々と音を立てゝ、流れて行く、この邊りから、溪流と云ふ感がせらるゝ、やがて假橋を渡れば、川と離れて路は開墾され畑地の中を行くのである、左の山麓を流るゝ御勅使川の流聲は、絶えず耳朶に響くのであつた、路は爪先上りである、巨石の在る、大石と云ふ祠のある所で、休息した、樹木が五六本あつた、ふと仰いで見ると、枝に磨れた所が幾つもある、聞いてみると、子供が鞦韆をする爲めであると云つた、廣々した高原地の樹蔭で鞦韆をする田園の子供を、自分は羨ましく思つた、里餘を歩めば高原地が盡きて、夜叉神峠である、かなり急峻であつた、流るゝ汗を拭ふ隙もなく、喘ぎつゝ登れば、しばらくにして、其山頂であつた。

正面を見ると、日本南アルプスの巨峰白峰三山が近く峙つて居るのである、高峻なる山容は、雄岩壯絶たるものがあつた、自分は自然と云ふものゝ、壯巖なるを感ずると共に、或威壓を心より感せざるを得なかつた、間の岳の大雪田や、北岳農鳥の雪田が見える、朝の日光に映じて壯麗であつた、荒川嶽は農鳥よりの尾根つゞきで、二千五百五十五米突の、屈起を見せて、滿山樹木に掩はれて居る、白河内や、魚無河内岳には、殘雪が見えなかつた、白峰山系の連嶺の上から、赤石山脈の惡澤岳、赤石嶽が其秀容を峙てゝ居る、夜叉神峠の山頂から、北の方の尾根へ掛ると、熊笹が股を沒して歩むに困難であつた、然して笹平に出づると、矢張名に反かず、熊笹が股以上を沒するのであつた、笹平と云ふけれど、茲には平（たひら）と云ふ文字は適當でない程、急勾配であつた、さうして夜叉神峠は、野呂川と御勅使川の分水嶺の一部分を成して居る。

笹平を登り終ると、石の祠があつて、山の神が祀れてある、處に出でた、大石と云ふ祠のある所から、少し先へいつて、横に這入る道と、夜叉神峠の東の中腹より這入る道と共に此祠の所で合して一つの道となるのである。小島烏水氏の著「日本アルプス」の第一卷の白峰山脈臆測圖にある堀切峠の登山口である、されど案内人は、堀割峠と云つた、芦安村でも矢張り堀割峠と云つて居る、山道を堀つて木を運輸するに、便宜のよいやうにしたので、其名があるらしい、堀割の名の方が、妥當して居るやうに思はれるから、自分は堀割峠としておく、堀割峠が終れば杖立である、杖立とは、杖を立てて休むの意があるとか云つた、如何にも堀割を登つて來て、休みたい所である、もう此邊りから樹木に「猿おがせ」が下がつて居る、杖立は少し下りの所があつた、樹木の茂つた所に、水苔などが見えた、杖立より見たるは、仙丈嶽、駒ヶ嶽、朝與岳ゴーロ澤頭等であつた、上りとなつて暫く行くと切明小屋舍である、伐木小屋の有つた所で有るから、水が有るだらうと渴して居つた自分は、其附近を約三十分も探したが、見出す事が出來なかつた、紫の花をつけた手形千鳥が、此邊りに澤山あつた。

切明小舍を後にして、只管道を急いだのである、里餘を歩みて、漸く達したのは辻の小舍である、午前十一時四十分であつた、辻の小舍は、四方が展いて、恰も街路の四辻の樣な所である、辻の小舍と云ふ名は、土地の形狀により名付けられたと思はれたのである。茲は、海拔二千五百米突の地盤である、淸冽な山水が樋を通つて、木で作つた槽へ落ちて、槽から淙々と音をして流れて居るのを、ふと見付けて嬉しかつた、淸らかな冷やけき水であつた、渴を醫したり、水筒を滿たしたり、晝飯を茲で濟まして、暫く休憩して、登山の途に就いたのは午後一時五分であつた。

樅栂などがつゞいたのち、灌木帶となつて、しらべや、石楠花、白樺などが見える、降雨の折の流水のために、洗はるゝのか、路が荒れて、石が露出して居て、歩むに難かつた、それのみならず、倒木が澤山路に横たはつて居つて、跨いだり、飛び越したり、潛りなどして行くのである、然して道は急

峻であつた、ハクザン女郎花や、ゴゼンタチバナ、赤花キンバイ、紫蘇葉シホガマなどが、優しい花を着けて居る、白樺と偃松が多く見え出すと、砂拂ひである、山は花崗岩が、侵蝕作用で崩れた砂で、眞白く包まれて居る、花崗岩の巨石が、重なり合つて、高く峙つて居る所が、絶頂であつた、藥師岳の絶頂と思はれる處も、矢張り砂拂の絶頂のやうに、岩石が重疊してをつた、偃松を潜ぐつて、しばらく行くと、地藏嶽の山頂となつた、廣き山頂である、岩石が疊々と重なりて高くなつてる所が、二所ある、甲府平原からも見ゆる高所が、それであつた、一方に三角點があつて、二千八百四十一米突と記してあつた、山頂は花崗岩の擢破された白き砂で、掩はれた、日光に映ずる雲母の光るのが、壯麗であつた、大花ビランヂや、シコタン草、浦嶋ッヽジなどがあり、チングルマが黄い色の花を着けて、美しく咲いて居た。

尾根傳ひに鳳凰山頂に登つた、高處は甲府平原で云ふ地藏佛である、矢張り雲閃花崗岩が重なり合つて、其上に一つの巨石があるのであつた、巨石の下に石地藏が祀られてある、砂拂にも小さき石地藏があつたが、首が缺けてをつた、地藏岳鳳凰山頂の展望は、甲府平原を望み、北巨摩郡は脚下に、七里岩明かに、御勅使川釜無川の二川は、すぐ山麓迄流れて、居つた、甲府平原を流るヽ各河川の落合ふ所謂三川落合や、富士川も見え、金峰山脈、大菩薩山脈、毛無御坂の二山脈も、呼べば答へんとして、甲府平原の北東南の三方を取圍んで峙つて居る、道志山脈も見え、富士山は麓の高原地迄見ゆるのであつた。近く白根三山、及び同山脈の秀峰を見、仙丈嶽、小太郎山、朝興岳、駒ヶ嶽、鋸岳等を望み、笠ヶ岳、七面山も見える、仙丈嶽と白峰山脈の間に日本北アルプスの一部分を見、白峰山脈連嶺の低き所に、日本中央アルプスの一部分を見た、植物の採集や、山上の撮影が終つて、やがて下山の途に就いて、辻の小舍に着したのは午後三時五十分である、往路を辿りて、夜叉神峠の山頂迄來ると、日暮となつて、蠟燭の火で下山したが、蠟燭は間もなく空しくなつて松明などを道々に拾つた、

枯枝などで作りて、乏しき火を力として、下山をしたが、中々に路が捗取らない、終りには松明もなく、マッチを一本づゝ磨つて、芦安村の清水旅館にかへつたのは翌日の零時三十五分であつた、十九日の日暮には、歸られると信じて、燈火の用意をせなかつたのが、斯く手間取れた因をなしたのであつた。

上高地風景保護論

小島烏水

左の一文は、昨年信州松本市に、信濃山岳研究會が開かれて、私がその用で同市に赴いたとき、『上高地の風景を保護せられたし』と題して、『信濃毎日新聞』へ寄せたものである、舊作ではあるが聊か考ふるところあつて、少しばかり增訂を加へ、本誌に載せることにした。

此のたび、松本市に開かれた信濃山岳研究會に、來會したのを、機會として、私は松本市から遠くない、上高地温泉のために、温泉のためではない、日本アルプス登山の中心點のために、將た敬虔なる順禮の心を以て、日本アルプスといふ嚴肅なる自然の大伽藍に詣でる人々のために、同地にある美くしい森林の濫伐に關して、公開狀を提出する。

信州の山岳の中でも、御岳や駒ヶ岳などは、古くから多くの登山者を有してゐたが、宗教が權威を失つた今日では、新らしい登山家は、種々の理由からして、日本アルプスの中でも、殊に飛騨山脈を選び、飛騨山脈の中でも、最高點の槍ヶ岳や穗高岳の、特色ある火成岩の大塊は特に多くの人々を引きつけてゐるらしく思はれる、さうして槍ヶ岳や穗高岳への最も好適なる登山地點は、上高地温泉で

あることは、言ふまでもない。

山岳は登山地點の便不便に依つて、世に著はれることの遲速があり、且つ人間との交渉を多少にすることを免かれがたい、歐洲アルプスのマタアホーン山は、日本の槍ヶ岳に類似した峻峰で、久しく人界から超絶してゐたが、ゼルマットといふ登山地點が、發見せられ、そこにいゝ旅館が出來て、叮嚀に客を待遇するやうになつてからは、初めての年に一ヶ年八十人ぐらゐしか登山客の無かつた土地が、後には毎年何千人といふ登山者を見るやうになつた、アルプス山の最高峰、白山（モンブラン）に於ける登山地點、シャモニイ溪谷の發見も、亦同樣の關係を有してゐる。

我が日本アルプスでも、上高地は、私が明治卅五年に、白骨温泉から梓川を渉つて、霞岳を踰え、此の峽谷に下りて、槍ヶ岳へ登つたときは、夏とはいへ、寂寥無人、太古の如き感があつて、温泉の湧出はあつても、今日のやうな宿屋は、未だ建つてゐなかつた。其の時分上高地峽谷に入る人は、獵師の外に、稀に飛驒の蒲田谷から、燒岳を越えて來るか、或はその反對を行く旅人を見るに過ぎなかつたのであらうと想像されるが、今日では夏日になれば、登山客が、この谷に多く群集して、數十年來の谷の主、老獵師嘉門次に呆れた眼を睜らせるやうになつた。

私が一昨年、温泉宿の主人、加藤氏に聞いたところを事實とすれば、明治四十二年は、宿帳に註せられた客が千百三十人、翌四十三年は、千百九十人で、最も混雜する時は、一日に九十人位を泊めることがあるさうである、現に我參謀本部の陸地測量部が、去年測量したばかりの槍ヶ岳及び燒岳二圖幅（五萬分一圖）を、本年製圖發行したことなどは、その早手廻しに於て、前例のないことで、それは登山者の希望のあるところを容れた結果であらうとも、推せられるし、又實際、多數は則ち勢力であるから、大多數の登山者を有する山岳は、それだけの要求を有し得らるゝことゝ信ずる。

斯の如き繁昌が、單に温泉のためでなく、登山又は觀光を主要なる目的とする客が、その過半數を

占めてゐるといふに至つては、常念山脈の麓にある、中房温泉がやゝ似てゐるとしても、先づ他に例の無いところである、上高地が特に多く登山客を吸収する所以は、槍ヶ岳、穂高岳、霞澤岳、燒岳等の大山岳に登る便利のあること、殊に大山岳は富士や八ヶ岳式の火山を除いて、とかく全容を仰ぎがたいものであるが、穂高岳、霞澤岳、燒岳等は、その威嚴ある岩壁の大部分を、この峽谷に展開して、容易に仰視し得られること、燒嶽が盛んに噴煙して、火山學者や又地震學者の注意を惹き初めたこと、明淨な花崗質の岩盤を流れる谷水の、純碧と美麗と透徹と、他に比類なきこと、神仙譚を思はせるやうな美くしい湖水のあること、森林のあること、温泉のあること、飛驒への交通路にあること等であるが、之を一括して言へば、日本北アルプスとも稱すべき飛驒山脈の、大殿堂は上高地峽谷に依つて、その第一の神秘なる扉を開かれたのである。

之を日本アルプスの他の山岳と比較すると、赤石山系の最高點、自峰の北岳などは、標高三千百九十二米突を有して、高さは槍ヶ岳を壓し、形容の尖鋭且峻直にして、威嚴あることも、或は槍ヶ岳以上（甲州駒ヶ嶽から見て）とも思はれるが山又山の秘奥にあつて、上高地温泉のやうな、好適な登山地點を有してゐないために、今日でも登る人はおろか、一部の登山家を除いては、名さへあまり知られて居らぬ、それと同じ運命を有つてゐる山は、長大なる日本アルプスの大山系には、いくらもある、槍ヶ嶽にしたところで、もし上高地温泉が無くて、德本峠から蝶ヶ嶽、赤澤嶽と迂廻して、この山に登るのであつたら、到底今日の登山客を招致することも、亦槍ヶ嶽が自然崇拜者の、渴仰の標的となるやうなことも、出來なかつたであらう。

一たび槍ヶ岳や穂高岳に登つた人は、日本アルプスに列座する大連嶺の、雪に閃めき氷に尖れる壯觀に接して、北へ！北へ！と、踴躍する自然崇拜者の、憧憬を持ち得られるであらう、それからそれへと、自然に對する愛慕と驚異の情を、有し得るやうになるであらう。

さすれば上高地の小峽谷は、日本アルプスの順禮のためには、結緣の大道場である。

然るにこの美麗なる上高地の峽谷に對して、早くも殘虐なる破壞が、その森林から始まつた。自然の中でも、比較的に抵抗力の微弱なる森林から初まつた。

信州と他國の國境、即ち飛驒境から越中越後の國界へと亘つて、多大なる面積を有する壯麗なる國有林は、大林區署の收入を多くする考へからか、或は他に理由があるのか、用材の伐り出しに着手された、現今は知らぬが、私が嘗て聞いたところでは、明科製材所へ出す材料の多くは、梓川や嶋々川の水源地の森林であつたさうで、森林の濫伐は、おのづからその地盤を赤裸に剝いて、露出させて、水害を頻繁にしたり、大にしたりすることは、今更言ふまでも無いことであるが、上高地にあつてこの感は殊に深い。私はいつぞや雨あがりの日に、上高地の森林に佇んで、峽流を視てゐた、水の落ちることが早く、今まで見えなかつた河底の岩石が、方々から黑い頭を出して、それが一寸二寸と、丈を延ばしてゆく、水の落ちるのが早ければ、溢れるのも同じく早いわけである、森林があつてさへそれだから、坊主になつたときの、慘めさがおもひやられる。

上高地は海面を拔くことも高く、氣候も寒冷で、地味も瘠せてゐるから、あまり大きい樹木も、深い森林も無いわけであるが、それでも、その森の幽邃なこと丶、美くしいことは、森影を反映する溪谷の水に一層の靑味を加へ、梢から梢に唄ひ歩るく、ガッチ（かけす鳥）の聲は、原始的に森林を愛慕する叫びを思はせる、私は一昨年獨逸の陸軍少佐で、スタインザアといふ人と、この溫泉宿で、一緒になつたが、この人は森林國の獨逸人だけあつて、森林を愛することは、祖國のやうである、獨逸の山岳會員で、二十年間登山をしてゐるのださうで、四十三歲になるが、未だに無妻でゐると言つてゐる、何でも財產を山に使ひ果すつもりださうで、槍ヶ岳に登つて下りて來たところであるが、一寸した露出でも、樹木の無いところは、山が剝げてしまつて、回復は容易に出來ないと言つてゐたが、

上高地に來て、森林の下を逍遙したときには、これこそ眞に日本アルプスであると言つて、帽子を振つて、躍り上つてゐたさうだ、その森林は今安くに在る。

日本山岳會の名譽會員、ウォルタア、ウエストン氏は、かつて歐洲アルプスと日本アルプスとを比較して、日本アルプスに欝葱たる森林の多いのを、その最も愛すべき特徴としてゐた、同氏が穗高岳に登つたとき、あの森林の梢と梢との間に、ハムモックを吊つて、滿身に月光を浴び、玉露に濡れた一夜の光景を、私に語つたこともあつたが、その愛すべき森林は、今いかんの狀態にあるであらうか。

その愛すべき森林が、商人に惜しげもなく、拂ひ下げられた、それも、拂下げに依つて、土地の生産力を大に潤ほすわけならば、格別であるが、若干の價をも得られべきでないことは、樹木を見ると、大概わかつてしまう、賣る方のみでなく、現にそれを買つた商人は、樹も小さいし、巢を喰つてもゐるし、運搬は不便だし、一向引き合はぬと愚痴を飜しながら、ドシドシ斧を入れさせる、その伐木を何に使用するかと問へば、薪材にして、潰すより外、致し方ないと言つてゐる。一昨々年は、溫泉宿附近、前穗高一帶の森が、空地になつた、友人亡大下藤次郎氏が、こゝで描いた水彩畫は、今では森林そのものゝためにも、遺念になつた、昨年は河童橋から德本峠まで、落葉松の密林が伐り廉けられた、本年は何でも、田代池の梅を掃つてしまふのださうであるが、或はもう影も形も無くなつて、屍體が方々に轉がつてゐるかも知れない。

さうして、山骨は露出し、溪水は氾濫し、燒くが如き炎日は直射し、日本アルプス第一の美麗なる峽谷は、荒廢し、欝積熱烈の綠の焰は、白ッちやけた灰になり、その上に燒岳の降灰が積もつて、生生欣榮の姿を呈した『生の谷』が醜い『死の谷』に變る日も遠くには來ないであらう、一戸の溫泉宿はどうなつてもいゝ、一座の槍ヶ岳は、或はどうなつてもいゝかも知れぬ、人間靈魂の內部に潛在する自然に對する驚異の心の消耗は、やがて人情の上に倒影して、恐怖すべきほど、乾燥にして露骨な

る時代を、荒廢の谷地に象徴されはしまいか。このやうな、恐怖すべき時代は、今日では都會を襲つて、地方に及ぼさうとしてゐる、土地もあらうに、この峽谷を以て、その時代を象徴させやうとするには、あまりに惜しい上高地ではあるまいか。

一方に於て、市内の學者たちが、山岳研究會を開催し、山岳地の宿屋は、山光水色の美くしさを呼び物にして、登山客を吸引してゐる傍らに、他の一方に於て森林の伐採を公許して、風景を殘賊してゐるやうな矛盾衝突した現象を、この國人は何と見られるであらうか、碧空に高く冴えゝと輝やく雪の光にあこがれて羽を挿した帽を冠つた人や、氷斧を擔いだ人や、又は白衣實冠の人たちが、年々の夏、何千人又は何萬人となく入り込むのは、この國が日本に於て、二つとない大自然の誇を有してゐるためではあるまいか、殊に上高地溪谷は、日本アルプス中に、深く藏せられた珠玉ではあるまいか、私は座からその殘賊を視るに忍びないので、かくは旅窓に一文を草したのはこの峽谷の森林を管轄する位置に立てる當局と、森林の興亡を念とせらるゝ國人に向つて、保護を乞ひたいからである。

山吹日記

天明六年榛名赤城登山紀行

法學士　關口　泰

山吹日記は奈佐勝皐の紀行なり。

奈佐勝皐、姓は日下部、名は勝美、通稱を久左衛門、隅東はその號なり、幕府の士、國學を善くす、

◎山吹日記　關口

塙保己一は此人に學びしといへり、國號考、古語拾遺考異、いなむしろ、等の著あり（圖書解題、大日本人名辭書）

下野國誌は、此日記を日下部高秀の紀行なりとすれど、高秀は賀茂眞淵の門下にして、寶暦元年に沒したりといへば、天明より三四十年前のことなり、此紀行が天明年間のものなる事は、赤城神社のところに、今年天明六年云々とあるによりて疑ふべくもあらねば、高秀の著に非ることは自ら明かなるべし。

この山吹日記は、足利學校の參觀記あるによりて知られたるものにして、下野國誌にもその部分を拔きありて、その日下部高秀の紀行なるよしを書けるなり、又圖書解題山吹日記の條下にも、足利學校參觀記なる旨を記せり。

圖書解題には寫本一卷とあるも、余の見しは南葵文庫に藏するものにして、上下二冊、半紙判八十五枚あり、本誌に組直せば六七十頁もあるべし、開卷直に

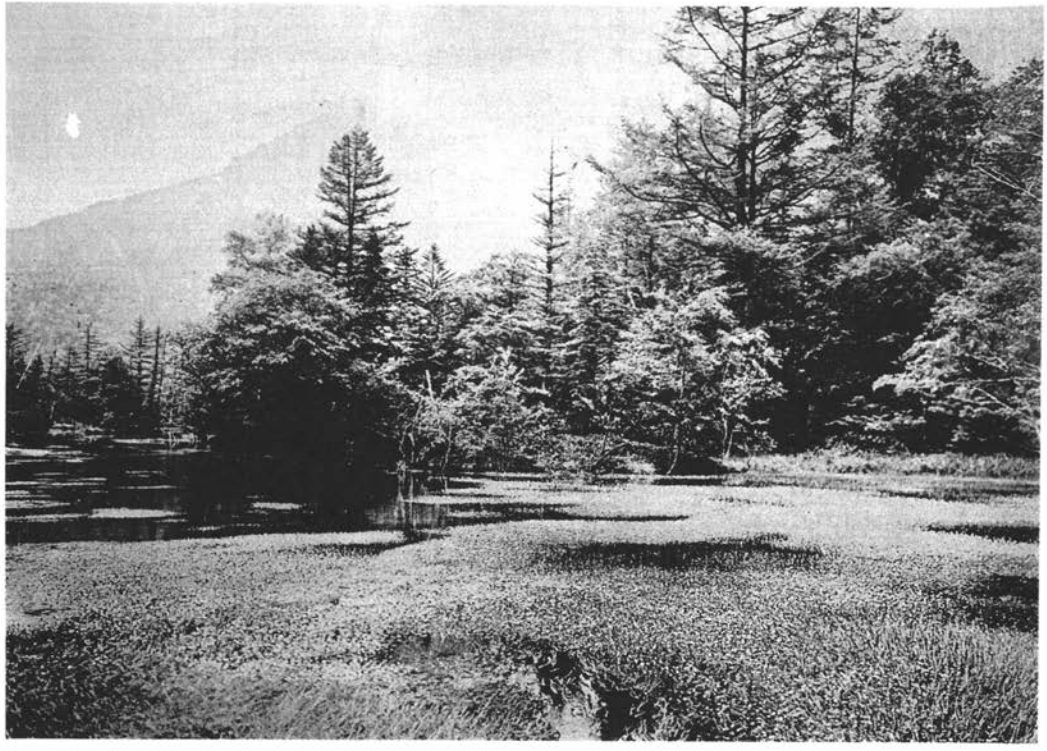
五月一日　きのえたつ　辛うじて院主のいとまを待ちてたれば、今日はつとめて出づ云々

とありて、序書もなく基點も明かならねば、此寫本が山吹日記の全部なりとは斷じ難きも、恐らく重要なる部分はこゝよりにて、又我々に必要なる箇所も之にて充分ならん、然れども刊本なく、上野の圖書館にも大學の圖書館にもなければ、照會する便りもなし。

此寫本の奥書に

此書二卷。得于赤阪傳馬街骨董店。收藏書函以愛閱。是則日下部高秀紀行也。高秀通稱貞右衛門。字東進。號仁良齋。以今條爲家號清水溜臣之酒泊筆話中作日下部寶暦元年八月八日沒。葬于淺草新堀金龍寺。墳墓今尚存在。明治五年壬申夏六月廿八日。外務權大錄中原朝臣諸遠。

とあるは全く下野國誌によりしものにして其誤れる事は前述の如し。



辻村伊助氏撮影

梅花藻（上高地田代池と燒岳）

名岳山載記

圖書	出版又ハ製作年代	八ツケ岳	駒ケ岳	鳳凰山	地藏岳	觀音岳	藥師岳	北岳	間ノ岳	農牛山	農鳥山	白河内岳	ナラダ山	デンツク峠	ザルケ岳	源氏岳	七面山	身延山
此欄ハ假定山名ナリ																		
峽中紀行	二三六六	—	駒岳	地藏	鳳凰	—	—	—	白嶺	農牛	農鳥	—	檜田山	—	—	—	七面嶺	身山
新刻日本輿地路程全圖	二四三八	八岳	駒岳	法王岳	地藏岳	—	—	—	白嶺	農牛	—	—	檜田	—	—	—	七面	身延山
重刻日本輿地全圖	二四四三	八岳	—	—	—	—	—	—	白峯	—	—	—	—	—	—	—	七メン	身延
甲斐名勝志	二四四七	八ヶ岳	駒岳	鳳皇山		—	—	—	白根	—	—	—	—	—	—	—	—	—
甲斐國繪圖並村々高附	二四五九	八ヶ岳	駒ケ岳	—	—	—	—	—	白根岳	—	農鳥山	—	—	—	—	—	七面大明神	—
甲斐國志	二四七四	八ヶ岳	駒ケ岳	鳳凰山	地藏カ岳	觀音カ岳	藥師カ岳	—	白峰	—	農鳥山	別當代	—	—	淘籮岳	—	七面山	身延山
甲斐國繪圖四種	二四八五	八ヶ岳	駒ケ岳	地藏岳	鳳凰山	—	—	—	白根岳	—	濃鳥山	—	—	—	イザルケ岳	—	七面山	身延山
大日本輿地便覽	二四九四	—	駒岳	鳳凰山	地藏岳	—	—	—	白嶺	農下	—	—	檜田	—	—	源氏岳	七面山	身延山
國郡全圖	二四九七	八岳	駒岳	鳳凰	地藏	—	—	—	白嶺	農牛	—	—	—	—	—	源氏岳	七面山	身延山
富士見十三州輿地全圖	二五〇二	八ヶ岳	駒ケ岳	地藏岳	鳳凰山	—	—	—	白根山	—	濃鳥山	—	—	—	イザルケ岳	—	七面山	身延山
堂中甲斐國繪圖	二五〇九	八ヶ岳	駒ケ岳	地藏岳	鳳凰山	—	ヤクシガタケ	—	白根岳	—	濃鳥山	—	—	—	ザルガ岳	—	七面山	身延山
甲斐叢記	二五〇九	八ヶ岳	駒岳	鳳凰山		—	—	—	白根	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大日本國郡輿地路程全圖	二五一二	八岳	—	鳳凰	地藏岳	—	—	—	白峰	—	—	—	—	—	—	源氏岳	七面山	身延山
大日本海陸全圖	二五二四	—	—	法王	チゾウ	—	—	—	白峰	—	—	—	—	—	—	—	七メン	身延山
新刻大日本全圖	二五二四	—	—	法王	チゾウ	—	—	—	白ミネ	—	—	—	—	—	—	—	七メン	身延山
鋼鐫大日本國細圖	二五二五	八ヶ岳	駒ケ岳	鳳凰山	地藏岳	—	—	—	白峯	—	農鳥山	—	—	—	—	源氏岳	七面山	身延山
甲斐國全圖	二五二八	八ヶ岳	駒カ岳	地藏岳	鳳凰山	—	—	—	—	—	濃鳥山	—	—	—	イサルケ山	—	七面山	身延山
大日本國海陸之圖	二五三一	—	駒岳	法王岳	地藏岳	—	—	—	白嶺	—	—	—	檜田	—	—	—	七面	身延山
大日本地圖	二五三一	八岳	—	鳳凰山	地藏岳	—	—	—	白嶺	—	—	—	—	—	—	—	七面山	身延山
山梨縣新圖	二五三六	八ヶ岳	駒ケ岳	地藏岳	鳳凰山	—	—	—	白根山	—	濃鳥山	—	—	—	ザルガ岳	—	七面山	身延山
大日本分國輿地全圖	二五三七	八ヶ岳	駒ケ岳	鳳凰山	地藏岳	—	—	—	白根岳	—	濃鳥山	—	—	—	イザルケ岳	—	七面山	—
甲斐國全圖	二五三八	八ヶ岳	駒岳	鳳凰山	地藏岳	○○○	藥師岳	白根岳 北岳		—	農鳥山	—	—	デンツク峠	南岳	ザルケ岳	七面山	身延山
輯製廿萬分一圖	二五四七	八ヶ岳	駒ケ岳	鳳凰山	地藏岳	—	藥師岳	北岳	白峰 荒川岳	—	農鳥山	南岳	—	—	淘籮岳	笊ケ岳	七面山	身延山
二十萬分一地形圖	二五四八	八ヶ岳	駒ケ岳	鳳凰山	地藏岳	—	藥師岳	北岳	白峰 荒川岳	—	農鳥山	—	—	デンツク嶺	南岳	—	七面山	身延山

天明六年は、かの淺間山大噴火の年より、三年を經しにすぎねば、此日記のところ〳〵にそのなごりを止めたり、下仁田邊の峠を越へし折「片つ方のいと低ければ危きを、あやにくなる淺間の山の燒石のみち積れり……一足をはらへば、石のころ〳〵とはしりたちて、踏とゞむべきよすがなし」と書き、又澁川白井邊のところに「いにし年の災に淺間の山より廿里ばかり、輪の如くおしめぐりて、刀禱河になゝめに落ちあひけるに、さしも早き河水をせきとめて、水上四五丁ばかり、さかさに流れて、そこらの家居に水のあふれ入りしとか、此あたりは殊に田畠をも流し、人もあまた失せけるとなむ」とあり。

此寫本によれば

一　日　高崎邊より伊香保をへて榛名山に登り
二　日　榛名神社に詣で、後閑、松井田を經て
四　日　妙義山の中ノ岳金洞山に登り、高田より拔鉾大明神に參詣して、富岡に泊り
六　日　多胡の羊太夫の碑を見て、高崎邊にて
十　日　迄雨の爲に滯留
　　箕輪城趾、惣社等をへて、子持山にゆき、利根川を渡りて
十四日　勢田郡津久田に止り、棚下の不動窟、宮田の熊野三嶋の古祠に詣で、十六十七日は雨
十八日　赤城山に登り、三夜澤に下りて
二十日　足利學校を觀て、古河より大宮を經
廿三日　晝の頃、蕨の驛に至りて少し憩ふ、戸田川を渡り、板橋を過ぎて、申の頃ほひ、草の庵になんかへりつきたる。

道すがら束短き筆にまかせたりしことゞも、假の日とり出でゝ、あまりくだ〳〵しきをけづり捨て、

後にかうがへたる事どもは書き入れつゝ、淨め寫さんとて、机のはしにおきたるを、友がきの來りつれば、見せじとてやをらとりかへせしを、とがめて、そは帳秘の論衡かとあざみ聞ゆれば、あらず鴟のかゝなく鼠ぞ、あな醜くといへば、おのれ鳳凰のひゝなゝらねば、いでその鼠こそほしかめれとて、あながちに引出して打見る、かゝる名だゝるところ〴〵見あるきたるに、いかでなにとの一つをしもいはで徒にへつらん、いみじう心なのわざやとせめきこゆるに、さればよといひて、道ゆきづりに、山吹の花みたりしところ〴〵をひき出して、かう〳〵なんといひて

くちなしの色に言葉のそみぬればいはでぞたゞに山吹の花

と筆を擱きたり、之やがてその日記に山吹の名蒙らせし所以なるべし。

以下、榛名山、赤城山、に關する部分を採錄す、假名書に漢字をあて、ところ〴〵に註を加へたれども、常に此の如き書に親まざる爲、間違ひし處もあるべく、わからぬ箇所三つ四つそのまゝになしおきたれば、御敎正をたまはりたし、内に挿みし地圖は、やはり南葵文庫に藏せしものを謄寫せしものなり、庚寅改正とある庚寅は天保元年なるべし、山の形も比較的正しく、又詳細なるは貴重すべし。

伊香保の温泉に至る……此山のあたり凡て桃櫻山吹の類、今を盛りの色に咲きつゞきたり、すべてはとく散りすぎたる頃なるを、更にかゝる花見るもいと珍らし、此温泉に來て浴し遊ぶ人々多く、山中には似つかはしからぬ迄賑はゝし、しばし憩らひて、此左の道より出づれば、いと嶮しきかぎりを越へて、見わたり廣き所に出ぬ、こや山の頂なめりと思ひつゝ登りはつれば、めぐりて又登れるこそあらましに違ひて、いたくくしはてたれ、さはいへど、此上より我が來し方を顧みすれば、伊香保の家居のあたりたゞ目の下にて、軒塲々々いと小さやかに見なされたるいとをかし、次第に山の彼方に移り登れば、又いみじう大なる山の見へそむるは二つ嶽とぞ聞ゆる、其山を左に見つゝ廻れば相馬ヶ嶽、摺礁嶽、富士の嶽など、山々連なりめぐれり、ゆき〳〵て又廣き野に出づ、是より榛名に至る

迄、はげしき坂路もあらずとぞ道士のいへり、萬葉集に（註）いかほろのそひのはり原とよみたるは此野をいひしならむとぞ

註　伊香保呂の傍の榛原慇懃に行末をな兼ねそ方今し善かば　萬葉集第十四卷東歌の內上野國歌

伊香保呂の傍の榛原我が衣に着き宜しもよ絹布と思へば　同　上

沼のほとり近くなれば、數多の木ども根こしになりて、倒れ臥したる多かるは、此如月の頃、高崎の方より摺礁ヶ嶽の下を堀て、沼の水を通して、田に灌がん料とて、はや五十間ばかりを堀けるに、俄に雨風烈しく神鳴ひらめき、山の崩るゝばかりにとよみ渡りければ、此の御崇にて有けるよと、皆おぢあひて此事やみにけり、其時に此木ともはかく成にしなりとぞ、恐ろしさ譬へむ方なし。

榛名の沼に至りぬ、是も（註一）古のいかほの沼なるべし、廣さいふばかりもなく、遙に水の面を見渡せば、沖の方は水の心靜かに青み渡れるは、物恐ろしき樣なるに、汀はたゞ眞砂の上に蓮の來寄するばかりにて、僅に塵一つをだに浮めざるは、むべしこそ、神の守らせ給へると見てためれ、其の向ひには相馬、摺礁、烏帽子、掃部、氷室など名づけし嶽、とりよろひたる中に此沼は湛えたり、氷室ヶ嶽の傍に岩垣山といひて其あたりに又池あり、座主の池といふ、賴印座主の修法の所とかや、（註二）岩垣沼とよみしは是にてやあらんかと思はるれど、古き歌によめるはうちまかせたるやうにて、さして所の名なるべしとも思へねば、あながちにも尋ねずなりぬ、鐘樓の嶽は昔鐘樓の有ければ今も其名を負へるなるべし。

註一　上毛野伊香保の沼に殖子水葱斯く戀ひむとや種求めけむ。　萬葉集卷十四　東歌

註二　青山の石垣沼の水隱に戀や渡らん逢ふよしをなみ。　萬葉集卷十一人麿の歌

少し行けば汀近の墓の標あり、是は昔綠野郡木部の某とかやいひける人の妻の沼に身を沈めたるが墓なり、古きしるしは水に入りて失せたれば、再び立てたるなりといへど、据石はいと古きやうなれ

ば、よく見るに（註）明德の二字あり、その外は凡て見へず、其人の亡靈は此の沼の龍となりて、今に住めるとなん語り傳へたる、榛名の御社に至る。

註　明德後小松天皇の年號皇紀二〇五〇—二〇五三西紀一三九〇—一三九三今も湖畔亭の傍に、木部神社及龍體院の墓といふあり、龍體院殿自山貞性大姉、覺位　上州綠野郡木部村、十二月廿七日　とあれど年號は滅したり、傍に久屋妙昌信女と誌せる小さき墓あり。

利根川水源

麓になりぬれば水の音いと高く聞ゆるは刀禱河なめり、河原に出づとて、山の裾をめぐれば、こしなづむ篠の小笹をわけゆくに、袖こそやれめとかち人の心づかひせらるべし、河のほとりにてをちこちの景色をみやれば、暮かゝる河つらはるゝと流れくる水は、武士の征矢射放つかと見えて、岩の立てるに行ふれて高くあがれるけしきこそたとしへなく見ゆれ。

この水上は越後國の山奥より出づ、されど誰もその源をきわめ見たる人なければくさ〳〵になむいふ、凡そ沼田より北の方三十里あまりの奥山に、文珠菩薩の御形なるおのづからの石あり、その乘給ふ獅子の口より流れ出づるといふ、又は限なく大なる石ありて、其洞の中より流れ出づるともいひ、又はいと廣き池あり、それが洩り出る水なりなど、さま〳〵に云ひ傳ふめれど、誰みしてふ事完かならぬは、たゞ浮きたることのみにてうけひくべうもあらず、沼田の山より五六里奥の方は、いみじうけ遠く物恐ろしき限りなき境にて、怪しき事のみあるに、その上熊のいたう多かれば、自ら木樵杣人も入りあへず、此後もし槎にのらん人もありなば、まことのさたを知るべかりけり。

津久田眺望の事

此院は赤城の山の南の麓をやゝのぼりて上なれば、境内いと高し、……見渡せば東をば子持山の峯連なり、南の方は、妙義榛名碓氷の高嶺のいでたてるに、遠方に信濃越後の山々、千重にとりよろい

て、その中にまして遙なるは、天雲のうきたつ末に、たゝまよひ、ぎのごけしきばかりになんみゆめる、麓には利根の河水帶の如くめぐりて、その音なひさやかに聞ゆ、後には赤城の岳連りあへり、巖のとぼそは、浮世の人のひらきて入らんこと難く、木垂るゝ松の下道は、鷲の山邊にわけ入らん通路なるべし。

赤城山

十八日　かのとのとり

しのゝめの頃より出づべかりけれども、とかくしてはや日もあがれば遲しとて出づ、院主も今日伴ふべき本意なりけれども、さらぬとのいできたればときこえて、道のほどまでとて送りつ、今朝は北風の烈しう吹くに、山はまして如何に寒かるらんと人みないふ。

十餘町もや來ぬらん、さらばとて別れす、弟子の僧泰玄觀了二人伴ふ、下男に破子茶櫃など擔なはせて送る、又廿餘町ばかりや登り來ぬらん、南には鍋破ヶ嶽、東には荒山、少し北の方に寄りて背向に黑檜の嶽など見ゆる、鍋破の嶽は明神のお食きこしめしける時の具を納めたりける山なり、荒山は昔小路の嶽と云ひけるを、横なまりてさは呼ぶめり、御旗と矛とを納めたりとぞ、宮木とりたる山を大黑檜といふ、小沼の沿の嶽なりけり、古の風吹き傳へにし檜の葉の古ことに、(註)久呂保のねろと聞へしも此嶽をやいひけむ。

註　上毛野久路保の嶺の久受葉我多可愛しけ兒等に彌遠り來も　萬葉集第十四卷東歌

登りゆくまに〳〵、道のいとけはしきは姥子の坂山といふ、をち方の高根々々連なりたる樣は、實に千尋の海に立ちつゞく五百重の浪の如くなるべし、頂に至りて四方を見遙かす、下の方に躑躅花咲つゞきたる、こゝにはわきて多く、凡て紅の衣にてつゝみたらむやうなるは、こや赤城てふ名のしる

しありけりと思へば、子健を顧みて此處にも（註）茅初成か常に遊ぶらんといへば、いみじう笑ふ。しばし休らひ破子開きて皆物たうべなどす。

註茅初成、咸陽の人、博學深鑑、周室の將に衰へんとするを知り、仕進を求めず、歎じて曰く「人生は流電の如きのみ、奈何ぞ久しく塵寰の中に迷はんや」と、是に於て鬼谷先生に事へて長生の術を受け、遂に華山に入て修煉す、秦始皇三十九年、龍に乘じて白日天に昇る、之より先邑人謠て曰く、神仙得者茅初成、賀龍上昇入太清　時下元州戲赤城　繼業而往在我盈　帝若學之臘嘉平

また登る程に、初めの三ッの岳、今は遠ざかりゆきて見えず成ぬると思へば、又地藏の嶽なん現はれ見ゆる、これ誠に高くて、ふりさけ見れば天雲に聳へて、登るべうもなし、少し道を踏み違へてとかくする程に、柴負たる翁二人つれだち來れるに問ふ、かう〳〵めぐりおはせと、懇に教へたるに從ひて、かゝぐりつゝ、篠の苅株いと多かる中をわけゆくがわびしさ、辛うじて山賤の通ひ路ある方に出でたり、觀了はいはけなく、泰玄も物負ひたれば、この磐根踏みこゞしき道をば、行きなやむべければ、先づ御社に往きて待ちてよといひやりつ、此山の嶮しさたとへむものなし、誰も皆いたくあへがれて苦しさに（註）謝靈運が足駄もがなとこそおぼゆれ。

註謝靈運、陳郡陽嘉の人、少うして學を好み、群書を博覽す、文章の美江左に冠たり、永嘉の太守となる、郡に名山あり、靈運素より山水を愛す、乃ち遂に意を傲遊に肆にして、偏に諸縣を涉歷す、山を尋ね嶺を陟り、必ず幽峻に造る、巖嶂千重備さに盡さゞるなし、常に一種の木履を着く、山に登る時は前齒を去り、下る時は後齒を去る、嘗て始寧の南山より木を伐り逕を開て、直に臨海に至る、從者數百人、臨海の太守駭いて以て山賊となす。

北の方に大沼なん見ゆる、沼の中少し東によりて中島あり、大きやかなる蓮葉をやひらてになして、少し片つ方に寄せて、ふと一つ据たらん心地ぞする、先つ年まけはくち二人、打ち戯れにたる心いら

れにや有りけん、此沼の魚多し、取て食はむ何の咎めかあらむと、はやりかに思ひたちて、沼近く登りきたるに、遙かに見やれば、沼の中に黑き盆のごと見ゆるものゝ、浮び出づるかとすれば、みるが内にやう〳〵大きになれば、しばし打ち守りゐたるに、まなくひろごり亘りて、今は沼の内に滿つると思へば、いつしか空は黑雲かいふたがり、いみじう雨降り、雷の今落かゝるやうに鳴わたりて、四方のあやめも見えわかず闇かりもてゆけば、かねてのゐせはやりも今は何處にか失せゆきて、おのれらよしなき横さま心をおこしてかゝる事しいでたりな、いざや捕かまるゝと、わなゝく〳〵かゞまりゐて、罪を悔み歎きけるに、かの黑き物次第に小さくなりて、水に沈み失せにければ、やう〳〵空の氣色もなほりて、雷のはためきしも靜まりければ頓に逃げ下りけるとなむ。

頂に至れり、四方の山々皆目の下にあり、石を積み集めたる中に、地藏菩薩の坐し給へる像おはします、昔此嶽に明神の神寶、御衣ども納めたればとて所の人神庫嶽と呼びたりしを、後には此の佛像を置くことに成りにけるとかや、されどそもむげに近き世の事にもあらず、應永十三年八月十三日、武藏國佐貫庄妻塚村なる淨土寺より安置しけるとぞ、此山より半ばより上つ方は凡て木草も見えず、土も色も皆赤き色なり、李北地か廬山記に赤崖童々と書けりしも、かくやあらんとぞおぼゆる、建長三年四月赤木の岳燒けたりし事、東鑑に見えたるは、此岳などにてや有けむ。

東に向ひていと峻しき岩根踏みさぐみつゝ下れば、觀了も從者も共に待ちゐたり、此にぞ赤城明神はいますがりける、社の西に小沼の浪靑く、今日の風にわきて遠く、浪の打寄するいとをかし、古にいならの沼ときこへしは、これらをやいひけむかし、今さることの傳へもあらねば、それと知るべきよすがなし。

註一　赤城の沼の社の小沼の東にあるは他に傳へもなく、今地勢を勘ふるもかくあり得ねば、恐らくは大沼を誤りしなるべし、黑檜を小沼のそひの嶽なりといひしに見るも然るべし、かねて山上に

沼二つあるを聞き知りてありしを、地藏嶽へ登りし途に見し沼と、地藏を北に下りて社の際に湛へし水をたがへるものと思ひて、之をば小沼とせしなるべし、然して地藏嶽の裾を牛石の方にゆきし爲實の小沼は見ざりしなり。

註二　上毛野伊奈良の沼の菅草よそに見しよは今こそ勝れ。　萬葉集卷十四東歌　人麿歌集出也

水の清らなる榛名の沼と違ひあらず、此沼の渚に下り立ちて、手洗ひ口漱ぎて、大神を拜み奉る、夏山の梢の翠ふかく、沼の面の水の白浪、さやかに立ち重なれるは、自なる青にぎて白和幣にまさりなされて、いみじう神さびたり。廣前に度々額をつく、御社いと嚴し、昔は黑檜の嶽の中程ばかりに、(註一)宮居おはしましけるを、明暦二年この所に移し奉れりといへども、(註二)國史に赤城の沼の神とも誌されたれば、よしや今の處ならずとも、沼のあたりにこそ古へはおはしけめ、黑檜の嶽ましませしはなか〳〵後の事にこそありけめ、この社も明暦二年に造りしといへば、今年天明六年迄は早や百年にあまれゝば、やゝあされたる所々あり。

註一　黑檜山の中程にはあらねど、小鳥ケ島より黑檜山の麓をやゝ登りたる所に少し平かなる處あり、此邊を古大洞と唱ふ、今は笹生いて跡も尋ぬべからず、

註二　三代實錄元慶四年五月廿五日の條に從四位下赤城沼神伊賀保神並從四位上とあり。

註三　現今の社殿は七八十年前に建てしものゝ由也。

御門を出づればすゞの篠屋建てり、ゆきて見れば男ひとりあり、是は朝きよめなど仕うまつれるなりけり、寒さ堪へ難きに、此屋の内にて榾折りくぶる煙も、自、我を待ち顔なれば、此の火のめぐりにまとゐし、ほころびて物たうべ酒のむ、これより泰玄觀了二人は歸る。

三夜澤の方へ下れば、躑躅の赤き白きが咲つゞきてめでたきに、山吹に混りて石楠草の開けたるもよしありと見るに、わきて我が住む方の草のゆかりの色は、我と思ふを紫の色には咲くなと、誰が云

ひけむかし。

註紫の色はさくな武藏野の草のゆかりと人もこそしれ（拾遺和歌集卷第七　物名）さくなんさ

如覺法師

溪あひをこえて、むかひの尾にのぼれば、牛石と名づけて、五六間もやあらむ、その形に似たるは、大神の東の鄙うち經にし時、此山に牛に乘りて登りまし〳〵けるに、その牛の石に成たるなりとなむ語り傳へたる。

こゝは凡て砂山なれば、道くゑて踏むべき方なきところ〳〵多かるを、蘿を攀ぢ危きを躍て通るに、麓の方遙に見おろしたる景色、上手のしわざに打ち霞めるがきたるやうなるは、見つゝを行かむに、この道の心づかひは、たゞ足の立て所をのみまもりてあからめもせず、ゆく程に道のひろさ是も七八寸もやあらんと見ゆる、うらうへはやう〳〵砂壞け落て馬の鬣のさましたる上廿間あまりやあらん、其下は千尋の谷なる、恐ろしさ限りなし、いでや自身を捨つると聞へしは、此御事ならんはよしや、さはれ母人を殺すてうこそうちつけの便なさと笑ひて、足もそとに過ぎはてつ、このいたつきに傍の磐かねの苔むしろに並ゐつゝ憩らふ。

けふはいたく疲れ給ふとこそみゆれ、此下に湯の澤てふ處もあれば、湯浴がてらよしやそこにもと道士のいへば、なにそはさまでといふやくなし、其疲れ足にてと聞ゆれば、いでそはむかひ火つけ給ふか、それも怪しうはあらず、燒澤にはあらねど、この山にその大神の鎭もりいませば、げにさることよ、あはれおのれもとて、火うち袋とうでゝ、ほくそに火うつして烟なむふく。

註三夜澤赤城神社東の宮には日本武尊を祭ればなり。

さるばかりに湯の澤に至れり、谷あひに家ゐして浴湯に來る人を宿せるなりけり、此山川に從ひてとゆきかく、ゆく道に石いと多く、行き惱めるも邯鄲に步みを失ひし心地して、たどる〳〵河の對ひ

に移りて、夏山の繁みが下をすぐれば、三夜澤とぞきこゆる、此里にも又山吹の咲きたるは、ときじくの花なめり。

此に里宮おはしませば、神人の家々軒を並べたり、神主增田加賀藤原成宥ときこゆるが方に宿りぬ、主緣起もて出で見す、古へ日本武尊、吾妻の鄙を打ち從へ給はんとて下らせ給ひし時、此山を見そなはしめて、さをおはしまして、この處に三夜とまらせ給ひしより、三夜澤となむ名づけたるとぞ、又或說に神主の記錄をひきて、大君この大神をはじめて齊ひまつり、御社のいでこしを見て、三日三夜といまり給へりければ、しか名づけたりと記せしは、三諸別王御父の尊、豐城の命を祭り給へるなめりといへる、實に事のさまに打あひて、いとをかしくおぼゆ。

天津神國津神を祭給ひし天の平瓮を納めし處を、擂石といひて、此里より一町ばかり山の方にあり、今もその所を掘ればさる形したる物なん出る、御旗御矛の類を納めし所を、小路の嶽といふ、是も今に至るまで、猶稀に、矛の類だつもの掘出づめり、五百津のさゝのやぞ玉串をとりける所を（註）篠倉と名づけたり。

註　黑檜山の東麓の山中なり。

後の磐余の若櫻の宮の御世（履仲）丙子の年、初めて社を建てゝ崇めまつりて赤城の社と申す、柏原の帝の御世詔りめりて今の處に遷し奉る、もとの宮居ありし處は今本三夜澤（元宮澤）と呼て、是より一里ばかり東の方にあり、東の宮なるは日本武尊、左は大已貴命、右は少彦名命を祭り奉れり、西の宮と申は、豐城入彦命にて、相殿二座、左は天照大神、右は大山祇命になむまします、祭りの領五十石を朝廷より賜はる、東宮は神主檜原和泉司ぢり、西の宮は此主の仕うまつれるなり、小田原の北條萬松軒氏康と越後の上杉不識庵輝虎と常に戰ありける頃、如何なる故にてやありけむ、此宮のあればこそ輝虎はこゝに來なれ、よしなしとて皆打破らせてけり、永祿六年の事なり、これより暫く

社なかりしを、慶長十一年に、もとの如く造り奉りけるなん、これら縁起に見えたるを摘みとり神主の語れるを記しぬ。

又縁起の説に、豐城入彦命こゝに鎮りましますよりて、彦狹島命をも祭り奉りける、御墓群馬の郡の茂木村にあり、今その跡を皇隱島と名づくといへり、思ふに、豐城入彦尊は磯城瑞籬の宮の尊（崇神）の御子にて、御母は遠津年魚眼妙媛と申せり、そのう孫、彦狹島の王と聞へ給ひし、卷向日代宮（景行）の御世五十五年如月の初の五日に、東山道十五國の都督に任給ひしに、幾程なく御病してかくれ給へりければ、此國に至り給はずなりにしことを、こゝの民等、それを悲しう且はいと本意なき事に思ひて、密にその柩をみきて、此國に納め奉りけり、かくて翌る年の八月には、御子御諸別王に、汝が父にことよさせし國なれば、いきて治めよと詔りましてければ、下りおはして、あるべきことゞも、いと美はしく控てまつりごちたまふ、なべての民草、皆比類なき慈みの風に、おしなべて靡きあひ奉り、其後國々の夷患いのねじけ心を起して、いみじくもよけけるをや、王軍を率ゐておはして打從へ給ひければ、その長なるものども、皆、わが領したりける所を奉りて、ひたぶるにまつろひければ、吾繻の方凡て穩かになりて、王子の繼々久しく治め給ひければ、その裔吾嬬に多かり、上野の君、下野の君ときこゆる氏、皆この御末なりけりと日本紀にみえたり、かゝれば、御諸別王此國に下りまして、その御祖の神を此の赤城に祭り給ひけるなるべければ後に至りても、上毛野君下毛野の君々の氏の神におはすめり、又彦狹島の王の墓は、その柩を盜みきて納めまつりし所なることは、今はた思ひ隱こそなかりけれ、さるをこの縁起に事の本末を違へて記したるなるべし、此墓の事、年頃それと知らまほしかりけるに、此度程田の石の棺を見て、もしくはそれと思給へしを、中に藥師佛の御像おはせしと聞へしに、早うさはあらざりけり、猶外にこそと思ひしを、今宵初めてなん、かの石棺もこの御裔の人たちの塚なるべし、皇隱島の御墓は今もめぐりに垣して、所の人らこよなく崇め奉る、いとれい

におはして馬の乘打ちなどとがめ給ふとなむ、此序に詣でまほしけれども、又立ち返らんが苦しさに、今はさてとこそ思ひ定めためれ、かねて知らざりしぞねたきや。

この神の御こと、凡てかく隈なく思はる、さぬる中に、猶心得ぬ事こそあなれ、鎌倉右大臣の金槐集に、上つ毛の勢田の赤城の神やしろやまとにいかで跡を垂れけん、と見だし、さる御神のおはさぬを、なとしもかくはといと思束なし、しかはあれども、凡て歌には、何ごとをもそこはかとなく、たゞ言葉によりてよめる例いと多かり、躬恒のぬしが、(註)山邊をさして、とよまれしたぐひ數多あるべし。

註　大鏡卷三八。御前の御階のもとに躬恒をめして、月をゆみはりといふ意はなにの心ぞ、これがよし仕うまつれと仰せごとありしかば

てる月をゆみはりとしもいふ事は山邊をさしていればなりけり

されば此歌も、(註)唐土の天臺はさしも名だゝる山なるうへ、さま〳〵怪しきしるしも聞ゆるに、赤城の名まして高かなれば、それを御なぞらへて、やまとにいかで、と讀み給ひけるならし、此集のよしある家に傳へし本にも、夫本集に載たるも、共にからやしろと書けり、いづれにつきてもをさ〳〵たがひなきをや。

註　支那の浙江省臺州天臺縣に赤城山といふあり、この臺州は寧波と溫州との中間にあり、赤城山は天臺縣の北六里にあり。(山岳第七年第三號一五三頁)

十九日　みづのといぬ

まだきに起て里宮に詣づ、神主成宥、烏帽子に裝束して案内す、まづ西の社にまゐる、神寶をとうでゝ見せぬ、神鏡は八稜にて徑四寸ばかり裏に唐草あり、是はこなたざまならぬものなり、今一つはまろくて徑三寸ばかり裏に鳥あり、是はわが國の古き鏡ならん、昔(註)小沼より出たりとかや、猿玉めぐり五寸ばかりもやあらん、黑くまろし、其形つやゝかにもあらず、いと重し、石のごと見ゆ、大般

若經二部あり、一方は應永十八年と書けり、一方は永正十七年のものにて、共に法師の書きたるなり、又紺紙に金泥もてものせし法華經あり。

註　今も時おり小沼の岸にて見出づることあり。

東の社に詣づ、二社ならびいます、この背後の山の裾に、高さ三尺許りの古き石塔二つならべり、形武藏の大藏なる、源帶刀先生の墓のしるもの如し、城宥に問へば誰とも知れずといふ、又その家にて古き十一面觀音の木像を拜む、之は昔、高野邊左大將家成といふ人いますかりけり、此ところにさすらへおはして、延元元年に失せ給ひけるに、その十三年は貞和四年にて、此人の十三回の忌にあたりければ、その菩提にそなへんとて、十一面觀音の像千體を作りて、此社に納め奉る、今もあまたおはしまし、この里人の家に傳へもたるも又多かりと語れり、立像は長八寸あまり、下の方に延元十三年と朱もて記したり、座像は五寸あまり、高野邊左大將の十三忌によりて、その菩提にすゝめむとて作りたるよしを記せり、高野邊左大將家成てふ人、物に見當れることすべてなし、されども延元十三年と記せしは、その世の有樣も思ひ知られて、いとまめ〳〵しう哀れも深し、延元元年は二月廿九日改元ありて、同じき十二月廿一日に、後醍醐帝吉野に行幸ならせ給ひて、この號三年つゞきたるを、都にては立かへり、もとの建武を用ゐられけり、其後屢々吉野にても都にても改元ありけるを、此國はをさ〳〵吉野に從ひ奉れば、その帝の年號を用ゐて、かゝる亂れの世なれば、その早う改まりけるを知らで、猶延元十三年と書きしにや、實は正平二年になむありける、かゝればその頃漸く吉野の主上の御勢の振はざりし事も知られてたり、東の社の後なる石塔は高野邊殿の墓のしるしにやあらん。

（編者曰、地圖は製版の都合上省畧せり）

登山者の地質學素養

理學博士　神保小虎

山に登りし時に寫眞を寫し、歌を作り、植物を採るも一つの樂みなるが、更に少々の地質學趣味を加ふる時は一層眼界を廣くするの快あるべし。

余が東京工科大學生の爲めに印刷せしめたる「實用地質學大要」より所々摘出して登山者の參考に供せん。

先づ最初數日間の實地見學法を敎へられて後、始めて少々視力を養ひたる心地せば、單獨の登山にも石に對して趣味あるべし。

僅に數日間の實地見學者は曰ふに及ばず、眞の本職の地質調査も其必要なる携帶器具は僅かに鐵槌、傾斜儀、アネロイド晴雨計、方眼紙の手帖等に過ぎざれば盡く外套の內側に匿し得べし、又た地圖、懷中レンズと普通のナイフなどはチョッキの匿しにも忍び入るべし、尙ほ携帶して漏る事なき小きガラス罎に鹽酸などを入れて持ち行けば岩石鑑定に便利あり、然れども特別の調査には種々の寫眞器、高測器、土壤採集用の檢土器、マグネの鐵鑛測定器等を要すべし。

又た始めの參考書は左の諸書にて足らん。

(一)山崎氏岩石學（金港堂）、邦文にて記したる岩石顯微鏡學の書なり。

(二)横山又次郎氏の地質學（富山房）

(三)地質調査所の諸圖

二十萬分一の圖は北海道、カラフト、琉球、臺灣、朝鮮を除きたる區域を九十八に切りたるものに

して未成の部尙少々あり、地形に和文英文の兩樣あり、又地質にも此兩樣あり、詳査圖と呼びて、一一地質上の說明書（圖幅說明書と呼ぶ）を附す、二百萬分一の地質圖は朝鮮、滿洲の租借地、及びカラフトをも含み、一種にて和英兩文とす、且つ和英對譯の說明紙を附したり、其他種々の地圖あり。

（四）神保近易鑛物鑑定畧表（三省堂）、小本一冊、

中學校卒業後の人に適するものにして、始に鑛物の實地觀察法を擧げ、又吹管の簡易試驗の例と顯微鏡用法等を擧げたり。

（五）田中阿歌麻呂氏本邦火山圖譜（富山房）

火山の地勢、地質等を見るべし。

（六）有用鑛物早わかり（カラフト廳官版、一枚刷）

先づ旅行に缺くべからざる地圖と景色圖に就きて一言せん、大畧の地圖を作るには步測法を便とす。

步測の法

測量に三脚の器械を運び行くは精密を要する時にして、僅に豫察の目的にて川筋の大要を寫し、又た石切場の見込み區域などを圖する時は步測の敏捷なるを可とす、特に嶮岨にして器械運搬の不便ある時は、步測のみに便るべく、此時に於ける步測目測は未熟者の器械よりも概して精密なり、又別に簡單なる距離測定器あり、猥に三脚の器具を運び步くは、徒に牛刀割鷄の誘を招くのみ、又大なる道路などは三脚の器械にて測量するも、其間なる短き小徑等は步測にて之を充塡すべきのみ。

步測とは頸より小き測圖板を下げ、之に方眼紙をゴム糸などにて結び附け、更に磁石をネヂ等にて挿みたるものとす、斯の如くにして、步みながらに道筋を記入するが故に、昇り阪と降り阪、水中徒涉、嶮崖這ひ步きの場合に於ける步數を斟酌し、又た時々方向の誤りを正せば頗る實際に近き地圖を

得べし。

方向は磁石にて讀み、距離は步數にて測り或は步數器にて見るなり、圖の縮尺の度は方眼紙の一ト刻みの間の長さが測者の何百步の何萬分一に相當するかを豫め測定し置くべし、（適當なる物差しを製するも可なり）、步測は器械の測量と異るが故に曲線の一本道路などを故らに多くの直線に分區して測點を作るが如き事を爲さず、唯目分量にて一度に天然に似たる曲線として引くなり、多くの分區をなす時は距離延びるなり、又たオフセット(Offset)などを取る事を爲さず。

步みたる道を猥りに直線にすべからず、縮尺も亦た猥りに大なるを撰ふべからず。

若し測圖板を缺く時は、方眼紙の手帖と地質家の傾斜儀（磁石あり）とを一所に相重ねて摘まみ行けば、其代用を務むるものとす。

測者は步みたる線路を畫くのみならず、其線の傍に露れたる岩石の名（略字にて短く記す）と、其延び方（走向傾斜を言ふ、主なる裂け目などを記し、又た近接の山側、川筋、主なる目標物、人家などを簡單なる記號（參謀本部の地形圖に附屬して發賣する圖式を見よ）にて記入するなり、步測圖（野稿圖）は成るべく無用の記入を避け、又必ず其日附、何地より何地迄といふ題號と縮尺の度、南北線を缺くべからず。

初步の步測者は步數を數へ誤り、（數へつゝ步む時石などに躓けば驚く拍子に數へたる數を忘る）、又た昇り道には步調忙しくなりて、爲めに短距離を長距離と誤り、朝の出發と夕の投宿時も步調に大差ある事を忘るゝものなり。

又た目測にて支流を圖に入るゝ時は誤て之を短くし又た屈曲を甚しくし、實地其支流を步行して其誤りに驚くなり、又た近接の山頂は大抵誤りて甚しく道に近く畫くものなれば、時々方向を測りて切り合ひにて其位置を訂正すべし、又た高低曲線にて山の斜面の勾配を示す時は誤て峠道の全部に平行

する曲線を引く事あり、峠道は次第に上ぼるものなれば同高點を結びたる線が峠の麓より其頂上迄で道の兩側に沿ふて進むの理無し、又た蚊に喰はれたる跡の如く或は牛角の如き山點は天然には極めて稀れなれども初學の測圖には多く之を見受けるなり、時々傾斜儀の中の下げ振り(垂直に振ラ下がる)を見て山側の勾配が常に思ひしよりも緩なる事を知るべし(富士山の頂上すら四十度の勾配無し)、地質の巡見者は簡單なる高測器すら用ふること無く、又た山の高さは晴雨計と寒暖計の示數にて略算するのみ。

寫眞器にて地勢の特徴等を寫し置くことは固より必要にして、又た岩石の露出に於て肉眼に明かならざるものが寫眞にて始めて現はるゝことあり、然れども石炭を寫して其光澤の爲め白き岩に見ゆることあり、又海上に遠く見たる黑き岩が日の輝きにて純白の大理石と思はるゝことあり。

寫眞器に回轉の構造ありて、横長がの景色を寫すものあり(パノラマ、コダク)、又た特別の裝置にて距離測量に用ゆるものあり、其他特に遠距離に對して有効なる裝置もあり。

又た景色圖の爲めに山形などを略寫し置く時は地圖の缺點を補ふべき助となるべし、遠近と影の塗り方に注意するは一歩進みたる考なるも、始には谷の道と流の岐分かれ、土地の凹み、山側の勾配などに注意するを主眼とす、其他「此處は田」「此處は林」などの文字を記し置きて、後に畫家の加筆を求むれば略寫の見取圖、瞰瞰圖の景色も畫に近き畫と成るべし。

少しく注意を要するは山側の勾配なり、畫家の富士山は屢餘りに嶮峭にして、健康の男子すら草鞋にて登るべからず、然るに勾配を天然に合はすときは時に山點の位置を認め難し、故に景色圖には勾配を少しく急にして、其線上に何十何度といふ實角を附記するを可とす、此度數は遠山の斜面の線と傾斜儀の一邊とを重ねる樣に持ちて、其下げ振りの指したる度數を讀むなり。

傾斜を誇大にするは土地斷面圖にても必要の事なり、即ち低き山點の位置が消失せざる事を期するも

のなり。

地形圖の讀み方といふ事あり、一般に地形圖を解釋する事は長さ、距離、面積、方向、高低、諸記號等の理解にあり、尙ほ面積を圖上にて測る器械あり、又た川などの曲線の長さを計る器械あり、距離は亦た經緯度の引き方にて全圖面到處同樣の縮尺なる事を得ず。

土地の高低を表はす方法は、或は着色或はケバを用ひ或は高低曲線にて示す、曲線の相密接するは嶮地にして然らざるは緩地なり、又ケバの長き所は緩斜にして然らざるは急斜とす、地形斷面圖は斷面の走るべき或る一線上に諸點の距離に從ひて垂直線を立て、其上に各點の高さを取りて、之を結び合せ作るなり。

又た地形圖に於ける諸記號の內にて、地勢に關するものは參謀本部の圖式（別に圖式のみ集めたる一枚の賣品あり）を見るべく、記號の如何に豐富なるかに驚くべし、地質調査所の圖式は其出版圖にて覗ふべし。

地形圖も亦た一種の畫なれば或る肝要なる所は之を特に明示し、然かも其全體の實況を殺さゞる妙手を要すべし、山崩れの跡、地震にて荒れたる跡の如きは、或は平坦にて安樂の鄕の如きも、實は極めて不安の地なることを示すありて、多少の地質眼を有する測量師は之を圖上に記入する工夫あるべし、然らざる人は之を看過して唯に大なる崩れ崖のみを記入するに止まらん。

又た地圖に地名を記し、或は更に之を他圖に寫し入るゝ時は、地名の誤寫、誤聞、誤認の頗る大なるものあり。

此時に於て少々の語學知識あらば、此誤りを減ずべく、又た土地の人より聞きたる地名が速かに耳に入る利益あり。

地勢上の單語を知り、又た上、下、新、大、小、其の他の冠字を知る時は、多くの記事體地名を解し

て豫め其地勢、產物、露宿の適地等を知るべし、記事體地名とは「赤ヵ岩の澤」、「一杯清水」等の如し、登山者は又た多少の岩石智識あるを可とす、然れども岩石の名には翻譯體の學名と地方の俗稱とあれども、學名すら既に混亂あり、我國の譯字にも讀者の迷惑を察せざる區々別々あり、石の俗稱には頗る誤解多く、且つ種々の不規則あり。

岩石の地方名の混亂を避くるには、寧ろ「何々丁場の石」（丁場とは作業の現場）と曰ふを安全とす、岩石の鑑定には色は價値少なきものにして、葡萄鼠、利久色などの吳服屋の用語は岩石の區別に於て採るべきものに非ず、又た色にて岩石の名を區別することは容易ならず、岩石には白、灰、黑、綠などの色多きも赤は甚だ少く、紫と青は尙稀なり、又た黃と鳶色とは外部の分解の色に過ぎざるもの多し、岩石鑑定の最容易なるは唯一種の鑛物（Mineral）即ち化學成分の一定したるもの）にて成りたる時にして、鑛物鑑定表あらば即ち足れり其量小ならば鑛物と稱へ多量にて大塊を爲せば岩石と稱す。

岩石の識別には通常懷中レンズを携へざるべからず、又多くの場合には顯微鏡を要すべし、（第三附錄は鑛物用顯微鏡の扱ひ方なり）、然らざれば花崗岩と砂岩とを混同する事も決して珍らしとせず。

稍粗粒なるミカゲイシ（花崗岩）さへも、決して解り易き岩石と信ずべからず、幸にして粒子極めて粗く、レンズを以て其中の長石（通例白くして厚く剝げ、此岩の割れ口に於て平かに輝きたる粒の小口を示すもの）が大部分正長石か斜長石なるかを知り得ざる場合には唯「ミカゲイシらしき岩石」と假稱し置くを可とす。

岩石に名を附するには、必ず之を組織する合分鑛物（Component Minerals）を知り、又た其集合せる組織の狀態を知る事を要す、併し此二つを知り得るは多く顯微鏡に因るものなり、地質專門家と雖も未だ地質圖の存在せざる處に入れば、即席に岩石に名を附せず、唯假稱を以て之を呼び、後に之を訂正するなり。

始て蹈み入りたる土地にては其先輩の調査報文等に因らずして猥りに岩石に名を附すべからず。遠方より見たる岩石を大略認識するは、其色、其汚れ方、苔の着き方、割れ目の樣子、突角の形、崩れ方などに因るべし、石灰岩（遠方より青灰色に見へて屏絶壁を爲し、又た往々自然に溶けて奇形あり、）集塊岩（妙義山蠟燭岩などにて奇形を爲す岩石）、ミカゲイシ（瀬戸内海の景色に固有にて、粗砂狀の白き崩れ崖と、米俵を積みたるが如く見へる崩れ殘りの塊多し）などは、岩石遠望にて固有なる性質を示す例なれども、多くの塲合には遠望識別は困難なり。

又夜間燈火（種類によりて光の働きを異にす）の下、又た雨に濡れたる時、泥に塗みれたる時、或は特に道具にて刻み目を附けたる石垣の石などは、是れ亦た眞の色を見る能はざるが故に識別に苦しむなり、或塲合には故らに水にて濕めして見、磨きて見るを利とすれども、磨きなどしたる時は岩石に頗る區別の不明を來す事多し。

一見して認識する熟練は多數の岩石に於て容易に之を試みるべからず、人造石と眞の天然の岩石の區別も僅に手を觸れて暖かく感ずるや否やに止る程、巧に造りたる人造石あり、猥りに岩石と思ひて之を鑑定すれば人の笑ひとなるべし、又た全體土壤の如くにしてバクテリアの集合多きものあり（黑姫山のテングノムギメシ）。

專門家以外にて自から岩石の鑑定を試みるは無益の事なれども、鑑定に必要として記憶すべき造石鑛物（Rock-forming Minerals）は、其主なるもの僅々二三十種にして其肉眼に現はるゝ最著るしき性質は一概に困難にも限らず。

專門の人は通常岩石を鐵板上にて金剛砂などにて磨り減らし、透明の薄片と爲して顯微鏡に置き、其組織と合成鑛物（合分）を認識し、始めて岩石に名を下すなり、然れども尙ほ之にて足らざる事あり、更に化學分析を行ふ事少からず。

岩石薄片は次の如き法にて製造す。

一、先づ刄の尖き鐵槌或は鑿を用ひて、小き薄き破片を取り、次に其一面を滑かに平かならしむる樣、鐵板の上にて金剛砂、カーボランダムなどに水を加へて磨り減らす、磨る時の結果は僅に窓の棒が映る位の平滑にて可なり。

二、之より此平かになりたる一面を、カナダバルサムを燒きたるものにて、堅くガラスに貼り附けて、之より他面即ち凹凸面を前の如くに磨り減らす、磨る間に粗細種々の砂を用ふるなり。又た貼り附けのバルサムの燒き方は强ければ脆くなり、不足なる時は更に固着せず。

三、遂に岩片は薄くなりて、元よりも著るしく淡色となり、之を通じて新聞紙を讀み得るに至る、之を燒けばカナダバルサムは軟くなりて薄片はガラスより容易に放すべし。

四、更に此薄片を新しき物體ガラスの上に、カナダバルサムにて貼け替へ、其上に薄ガラスを加へて之を掩ひ、尙ほ札紙を貼り附けて、其岩石產地等を記入す。

岩石の學術名は兎角に長きものにして、最も長きは漢字十個以上となれども、是れ亦た實地家が一々學ぶに足らざる事とす、岩石肉眼鑑定の助となるべき處は地學雜誌（明治四十四年十二月）に出でたる土木家用地質學項目の中にあり。

何れの地を論せず、岩石を大別して、（い）諸種の岩石が層を重ねたるが如きもの、（ろ）通常塊を爲す岩石、及（は）此二種より變成したる岩石の三類とし、（い）を水成岩又た成層岩（Sedimentary or stratified Rocks）（ろ）を火成岩又た塊狀岩（Eruptive or Massive Rocks）（は）を變成岩（Metamorphic Rocks）と呼ぶ、水成岩には一種の岩石中にも、細かに層狀の縞を成したるものあり、又た厚層にして全部一塊の如きものあれども、多くは岩石の破片が水中に沈澱し、又は水中より溶けたる固形分が分れて結晶したるものなり。

東京の赤土の如きは元恐らく風にて陸上に沈澱したる火山灰なるべきも、別段之に風成(Aerial)などの語を用ふる事稀なり、火成岩も亦た火山の岩石などに多く見る如き、著るしく板狀に割るゝものあるも、是れは元來の形に非ずして、元の酷熱狀態より冷却の時に生じたる割れ目のみ、火成岩の一般の形は其熔け居たる狀態に相當して、不規則の塊、蠟燭の熔けて流れたる如き形、又た割れ目に流れ込みたる形などを爲す。

變成岩とは今日の地表に見るべからざる地中の作用にて、水成岩が變質したる結果なり、其外見は頗る成層の狀明かにして然も多く輝きて美しく、恰も花崗岩などの如き物さへあり。

登山者の地質要具は左の如し。

(い)　鐵　槌

鋼鐵製にて一端(甲)は稍廣き面にして、他端(乙)には稍鋭き刄あり、(甲)にて岩石を大きく打ち割りたるを、(乙)にて更に缺き長方形の標本に作るなり、缺き採りたる標本は、後の誤解無き程度に明かなる產地を包み紙又たは附け札(荷の中にて文字の磨れぬ事を要す)に記し置くなり。

(ろ)　懷中レンズ

二枚重ねを可とす、即ち一枚別々又たは二枚一所に用ひて、廓大の度三種を得べし、五十錢又たは一圓位の品にて可なるも、充分なるは六七圓以上の品なり、總て眼をレンズに密接し、且つレンズを物體に極て近けて見るなり。

(は)　地質用の傾斜儀

磁石を附しありて、種々の形あれども、木製なる物を左に說かん。

地層面を測るには器の長邊を之に密着せしめつゝ少々辷らして、水泡が溶管の中心に在る樣にせば、器面如何に傾くも此長邊の方向は水平なり、器の傾きを少しく直し、磁石の針が善く動く樣に

持ちて、磁石の南北線と針の北又は南の點との間の角を讀むべし、之を此地層の走向(Strike)とす。又た層の傾く方向は走向に直角にして、此方向は之を大署に呼びて何十何度の數を言はず、例へば單に傾斜(Dip)東南と呼び、又た傾斜せる程度は器の長邊を走向線に直角に當てゝ地層に密着せしめ、下げ振りの指す點を以て何度と讀む。

(に)　方眼紙の手帖

之を假りて步測圖を作る時は、同じ手にて之と傾斜儀と一所に持ち步くべし、然れども眞の步測板有る時の如く便ならず。

之より岩石に就きて注目すべき事柄を述べん。

第一、水成層岩石の成層狀態

地層面の測定が隧道中の偏壓、山の崩れ込る事、及び炭層等の採掘探驗に重要なるは論を待たざるも、層面を發見することは往々困難なりとす、總て物が靜に水中に沈澱するや、水深の變遷、水流の强さの變遷に因りて或は粗粒のみを落し或は細粒のみを落す時あり、又た粗層と密層と不規則に相重るを見るべし、是等の時は成層狀態自から明かなれども時として俄に水底に多量の沈澱を生じ、又た全く陸上に堆積したるが爲め層理無く、全部塊狀にて均質なる厚層を爲すことあり、此時の成層面は唯僅に此岩石の上又は下の層に對する境にて認むべきなり。

又た岩石の種々裂け目を見て層面と誤り易き事あり、常に注意すべし。

又た流勢の變化に因りて水底の凹凸を變ずること少しとせざるは、洪水の土砂沈積等にて之を見るべし、東京高臺の砂礫層(田端の停車場などに善く見へたり)、及び臺灣基隆(キールン)の固結せる厚き砂岩も同樣の模樣あり、之を水流模樣(Current bedding)と稱すべし、此模樣には礫の行列が斜に見へて畫中の波

の如し。

今日の水底を見れば靜所に沈みたる木葉及び礫は、皆其廣き面を互に平行にして相重なり、然らざるも多少一平面に列なるを見る、是れも亦た地層中に於て見ることにして、之を以て地層面の眞の方向を知るべし。

水成岩中に含まれたる化石等も亦た之を採りて趣味あるべし。

水成岩には屢化石あり、化石ある岩石の礫にて、其磨れたる表面に種々の曲線の模樣が散在するを見れば、鐵槌の一擊を試みることを要す、即ち化石の介などの斷面は礫の上に明かに現はれて、其外形種々なるも、之を打ち割れば容易に介の形などを發見すべし。

化石の狀態は種々にして、之を含みたる沈澱土砂が固結して堅岩となりたる後、中の化石溶け去る時は空處を生じ、一面には其の表面の模樣を殘し、他の一面には裏面の模樣を殘すべし、此空處に石膏などを詰める時は其全形を得べきなり、又た植物の葉及び枝などが炭化したるものありて、其多量なるは石炭層と爲す、化石は密質の岩石にては極めて明瞭なる模樣を殘すが故に、特に之を斯の如き岩石中に尋ぬべし。

化石は時代の異りたる地層又たは石炭などを含む地層を區別するに必要のものにて、例せば我國の石炭層に接する粘土には、往々杉に似たる木の葉 (Sequoia) 及び特別の介あり。

水成岩中には尙ほ塊球 (Nodule) と稱する團子の如きものあり、其或るものは燐鑛として採掘せらる。又た之に多くの割れ目ありて割れ目に他の鑛物質を充たし、一見龜の甲の如き模樣あるは俗に龜の甲石として化石と誤らる、地質學にてはセプタリウム (Septarium) と名く、又た諸岩石の割れ目に沈澱したる酸化鐵、酸化マンガン等が樹枝の畫に似たる形にて薄く扁きものあり、是れに「シノブイシ」などの名あり、草のシノブに稍似たるが爲めなり、固より化石に非ず。

塊球の中心には屢化石有り、特に泥灰球は甚だ緻密なるもの多く、其の中の化石は形鮮明なりとす。成層岩の皺及び斷層は往々美しきものにして面白し。

東京の高臺は殆ど平地にて、表面に火山灰の變化にて成れる赤土あり、其の下に砂礫層あり、尙ほ其下に粘土ありて、總て水平の層を成せり、斯の如く水成岩は始め水平に沈澱したるを規則とするも、後の變遷にて山壓に押し曲げられ、種々の勾配を爲して傾くものあり、其續き方及び傾きを定るには傾斜儀を用ふ、此時に於て其露出を唯一方より見たる人は傾きたる層を水平と誤り、又た其の傾きの度を割合に高く見る事多し、故に地層の露出より少し離れて佇立し、且つ種々の向きに之を望む事を必要とす、傾斜を精測せざれば層の眞の厚さを知るべからず、炭層の探驗にて初步の人が其厚さを誤るは、成層面と露出面の傾きを考へざるに因る、即ち鹽鮭の切り身を厚きものと見誤り、又た金屏風の黃金を厚きものと誤るが如し。

地層の曲り方に種々あり、或は極めて小き波を示し、或は恰も手拭を擦みたるが如き亂皺(Contortion)を爲すことあり、皺の曲り方には鉢形に凹みたるあり、饅頭形なるものあり、屋根の形即ち背斜(Anticlinal)あり、船底の形即ち向斜(Sydinal)あり、又た一方に甚しく傾きて一方に緩なるものあり、Sの字を屈く押したるが如きものあり。

地層に生じたる皺は種々ありて、布と紙との種類に因り其皺を異にする如く、實に千差萬別と曰ふべし、或る岩石は軟きに係らず折れ撓け、或るものは堅くして脆きも柔順に彎曲せることあり。

又た外見壓迫の結果を示さゞる岩石中に、甚しく壓し潰されたる化石あるは、磐城國平町に近き綴停(ツヾラ)車場に對する崖にて採集せられたり。

皺の續きは往々割れ目となりて、辷りを生じ斷層の形を示すことあり。

斷層(Faults)とは岩石に裂け目を生じ、之に沿て片側が辷り落ちたるを言ふ。

斷層の兩壁は互の磨擦にて滑かに磨かれ磨れ肌(Slickensides)を爲す、又た崩れて岩片を生じ、之にて斷層の割れ目を充たす事あり、固結すれば磨擦角礫岩(Friction Breccia)と呼ぶ、斷層の辷り方は種々ありて、往々水平にも走り、或は斜に辷り、時に地層面に沿ふて辷るなり、又たスレハダ斷層線は時として岩片に掩れたるものあり、又た之と反對に水蝕を進めて大なる溝又たは深き谷を生ずる事あり。斷層線の兩側には岩石相異ること多く、從て土壤の相違あり、植物の生育を異にすることあり。斷層線に沿て清水の湧出する事あり、濕地ある事あり、又た斷層其他の割れ目には石英、方解石等の脈を生ずるを見るべし。

斷層は決して不整合(Unconformity)と混同すべからず、不整合は(一)傾きたる地層の上を水平の砂利岸にて掩ひたるもの(河岸の臺地などに多し)、(二)傾斜の異りたる水成岩が相掩ひ、(三)水平層の上が凹みを生じ他の水平を以て此凹みを埋めたるものすべて皆是なり、附圖を比較せば斷層と不整合と誤り易き事を知るべし、是れ亦た炭層等の測量には重大なる事なり。

第二、火成岩類の産出狀態

火成岩は元來酷熱の熔體にして其の天然に産するや、或は地表に噴出して固まり、或は地表に近き處にて固結し、或は深所にて固結せしものなり、地中にて固結せしものは其上に在りたる物の水蝕により始て地表に露はるゝに至る、特に深き處にて固結したる岩石を深造岩(Plutonic Rocks)と呼ぶ、火成岩は地中にて深淺種々の處に於て他の岩石に接し、或は大塊を爲して其中に介り、或は岩石の割れ目を充たして謂ゆる岩脈なるものを作り、又た地上に流れて固結せしもの往々は蠟燭の蠟の熔けて流たるが如き觀を呈す。

火成岩の分布は自然地殼の破壞線を示し、地質構造の上にて大に注意すべきものなれども、火成岩の

眞の性質は唯實地に就きて之を考究すべきものにして、同一の岩石にても其部分によりて性質を異にする傾きあり。

火成岩が地層の面に沿ひて噴出し、上部の層を丸く押し上げたる時は、正月のソナへ餅の如き輪廓を生ずべし、之を餅盤(Laccolite)とす、又た地層間に於て扁平なる狀を成したる時は、層狀岩脈(Intrusive Sheet)と曰ふ一見水成岩の樣なれども、其上下の面は必ずしも全く平かならず、餅盤も層狀岩脈も共に之に接したる岩石を變質せしめ、石炭などはコークスの如き狀を呈するに至る、又此等の物にて貫通せられたる岩石の破片は往々其中に包まれたり、餅盤は部分により岩質を異にし、又た層狀岩脈の薄きものは屢細粒狀を呈せり、餅盤と層狀岩脈とは屢之に接したる岩石に向て貫き進みたる細かき枝を發す、是れ明かに其岩石の既に存在せる時、其層の間に現れ來りたるを示すものなり。

岩頸(Neck)とは地表に近き處に噴出したる火成岩の塊にして、古き火山の喉に當るものなり。

火山の圓錐全く破壞せる時は岩石のみを存すべし、其の周圍の岩石は多少破壞せられ、又た其熱の働きを蒙りて陶器樣の緻密質に化したるものあり、岩頸中の節理は垂直に非ずして水平なる事を常とす、又岩頸が普通の熔岩のみに非ずして、集塊岩より成りたるもの又たは凝灰質なる時は其傾斜は中央に向ふと云ふ。

岩脈(Dyke)は沈澱脈と異なりて熔體より成りたるものとす、又た種々の節理あり、岩脈と層狀岩脈とは其の現出の狀全く相異なるものとす、岩脈の緣は冷却の關係上明かに內部と其質を異にする事あり、又た一箇の岩脈にて部分によりて岩質を異にすることあり、熔岩流(Lava stream)は地表にて固結せしものなるが故に、外形も流狀を呈し又た屢氣泡に富み、又た地上の礫などを捕へ或は木片などに接し之を炭化したるものあり。

火山灰(Volcanic ashes)の固結したるものは凝灰岩(Tuff)にして、其水中に沈澱したるものは屢明

瞭に成層の狀を呈す。

火山灰と共出するものには種々の火山彈(Volcanic bomb)と火山礫(Lapilli)あり、又た大なる岩塊あり、火山彈の形には鰹節に似たるもの等ありて、屢磁極を有す、岩石に磁石ある時は測量に誤を起す事あり。

又た火山灰は砂、粘土等と混合するが故に、灰質砂石、灰質頁石等の岩石あり。

火成岩中の斷層と皺は其發見屢困難なり。

山壓、地震其の他の働きによりて岩石に割れ目を生じ之を充たすに砂粒を以てし(武藏秩父のガニサワ等)たるものを砂岩の脈(Sandstone dyke)と稱すべし、往々一枚の水成岩と誤らるゝ恐れあり。

總て火成岩の割れ目を地層面と誤るは往々ある事にして、又た火成岩の脈を一枚の水成岩と誤る事無きに非ず、火成岩と區別は容易ならず。

實地に岩石を觀察する時は尙ほ節理、脈、岩石の斷續等に注意すべし。

層狀と塊狀の別なく、總べて岩石には天然種々の割れ目即ち節理(Joint)あり、或は之を利用して石材を採り、或は之に沿ひて不幸にも崖の崩れ落つる事あり、又た磨れ肌(Slickensides)は斷層又たは岩石節理等の割れ目に於ける磨擦に因りて、其面の磨かれたる事を示すものなり、岩石に大なる割れ目多き土地にては特に多くの磨れ肌を見るべし。

節理には眼に見へざる細かきものありて、風化の後始めて之を見る事あり、又風化せざる時既に之に沿ひて酸化鐵の汚染等を見るあり、節理には時として廣く口を開きたるものあり、往々其中に種々の鑛物を沈澱す。

火成岩の節理には往々長く走るものと、更に之を短く横斷するものとあり、種々の火山岩にある柱狀節理は屢冷却面に直角に走り、玄武岩に之あるは人の知る所なり。

岩石の中に在りて單に脈(Vein)と呼ぶは總て鑛物が沈澱して、割れ目を充たしたるものなるが、其の材料は上より入りたる水溶液より分かれて固結したる石英、方解石等あり、或は地中より溫泉又たは蒸氣等と共に昇りたる物にて成れる鑛石あり、山の壓力にて甚しく變動を蒙りたる岩石中には特に多くの脈を示すなり、又た脈も岩脈も曲りて皺を生ずるなり。

土木工事などの人が地形の上に注目するは言ふ迄もなく、又た水を透さゞる岩石、特別の物を含む岩石、風化せずして重さに耐へる堅固なる岩、地中に匿れたる粗鬆なるもの、總べて種々の岩石連續と岩石の境の弱點とを認むる事は重要なり、其連續を說明すべき地上の徵候は大畧次の如し。

(一)岩石の走向及び傾斜を計り、之に因りて二つの相距たりたる露頭が元は一ト續きなる事を知るべし、此時に於て水流模樣を層面と誤るべからず、又た地中には屢多くの斷層あるが故に簡單に層數を考ふるべからず、即ち皺にて曲りたる一枚のものを多くの層として數へ、又た斷層にて度々に現れたるを其度毎に別々の層と誤ること多し。

(二)或る層が他の層と必ず共出するを知る時は、一層の露出を見れば必ず他層の存在を豫想すべし。

(三)一の岩石の固有なる化石ある時は岩質類似せる他の層と分別する一大徵候とす、特に石炭の探驗に於て、河床の礫中に炭層を代表する化石の散在するに會する時は大に賴もしき徵候なりとす。然れども全く化石を見ざる地方に於ては、地層の區別は其岩石學上の性質に因るの外無し。

(四)土壤の色等も亦た其下にある岩石を示す事あり、即ち花崗岩地には粗き石英砂あり、赤き輝綠凝灰岩の地には淡赤の土あり。

玄武岩等の風化に因りて生じたる土は屢甚しく、赤く石灰岩の土には屢粘土と混じて自然タヽキの如くに固結せるものを認むべし、然れども遙に崖の上より崩れ落ちたる土などは往々岩石の眞の存在を誤解せしむるものなり。

(五)地上に生育する或る植物は鑛脈の存在を示すものなり、其例は鑛脈より生ずる鑛物酸に對し他の植物よりも強きカナヤマグサ等にあり。

(六)地面の形勢も亦た岩石の連續を表示するものにして、往々遠望にて直に其の岩は凡そ何々の地點迄で延長せるかを豫想すべし、即ち石灰岩の山などは屡鋸齒狀の風化面を示し、又た其崖の形に一種の特徴を見るべし、尚ほ背斜層の上部は岩石に割れ目多き爲め弱くして、水蝕作用にて削られ易く向斜層の露頭は割合に之を耐ゆるなり、又た低き平地に軟岩多し。

(七)湧水は往々兩岩の境界線より出づるものにして、之より生じたる沈澱物も亦た地中の岩石を表示するものなり、即ち石灰岩の地にては石灰質の沈澱物を地上に生じ、黃鐵鑛、黃銅鑛などを有する鑛脈鑛層の所在地には地上に褐色の酸化鐵を生ずべし。

(八)河流の流石は其の地方に存する岩石を表示するものにして、流石の大小も亦た注意すべし、流石大なる時は其元なる岩石露出が近所にある事を示し、小なる時は其遠き事を表はすものなり、鑛脈の探求は大雨にて削られ、又たは山崩れありし跡などに注意して其露出せるものを探り、又た新に山崩れの所より河床に流れ出でたる岩片に注意すべし。

然れども河流の轉石は必ずしも其の地に其岩石の存在する事を證するに非ず、時としては其所に礫岩ありて、之より崩れ出でたる礫が流石に混じたるもの有るべし。

露出面の彎曲に基きたる露出の形は一種複雜なることあり、兩岩の境界は其の露出面の屈曲に從て種種の曲線を爲すべし、全く平坦なる地層も谷の中にては曲りたる線を爲して現はる、又た傾きたる地層が谷底に露はるゝ時は、谷底の勾配と、層の傾斜の向きと角度とに因りて或はレの字形を呈し或はへの字を爲す。

尚ほ露出面の性質に因りて、露出の幅が部分に從て異るも亦た著るしきことゝす。

地層の眞の厚さに就きても注意すべし、同一の地層と雖も所に因りて厚薄の變化あり。眞の傾斜も其の露出の種々の面を檢して始めて之を知るべきなり。唯に一方のみ眺めて判斷すべからず、初歩の探檢者は屢斜面に露れたる平層、又たは平面に露れたる斜層を見て之を厚きものと誤認するなり、眞の厚さは露出の幅と傾斜の度にて容易に計算すべし。

地表にある諸種の集積物と岩石分解物は種々ありて、土壤調査等に於て地中より軟き物の標本を取らんとせば、檢土器（Boring stick）と名くる物を以て土中に突き込み、其の尖きの方の溝に挿りたる物を採集す。

地表の集積物には置き土あり、山崩れの土あり、崖下の崩れ土、流着せる土砂等あり、此れ等の物は岩石が其處にて風化して生じたるもの即ち分解土壤と辨別せざるべからず。

地表の觀察にて作るべき地質圖と地質斷面圖及び此等のもの、應用は次の如し。

地質の野外調査には委しき地圖を披き又たは新たに之を作りながら、實地に觀察したる岩石を記入し、主なる割れ目と斷層などを入れ、一岩石の部分に因り岩質の異ること、又た其層狀なるものは走向傾斜、皺の軸、其他を記入し、化石の存在を記し、調査の內業には野外にて集めたる岩石、化石、鑛物等を詳査し、種々の外國例を參照して取調べたる地方の地質圖、地質斷面圖及び報文を製す。

地質圖は野外觀察に基づきて、地質の境界（岩石の境、地層の續き等を曰ふ）と地層の切れ方と曲り等の關係を示したる地圖を曰ふ、實地に觀察したる岩石の露出が如何に相連續するかを認定し、圖の全部に着色を加へ、又たは一定の模樣を書き入れて、岩石の分布を明かにす。

地質斷面圖は通例垂直の斷面を示し、或る方向に引きたる甲乙の如き直線に沿ひて假想せる斷面を爲す、之を製するには先づ此の線の長さに水平線を引き、其上の諸點（イロハ等）の高さに從て地上の點を設け（方眼紙を利用し、又た一邊に刻みある三角棹木を使ふ）、此等の點を結び附け地形斷面を造

るなり、但し單に實際の勾配に從ふ時は、土地の形を不明ならしむるが故に、故らに勾配を急にする事も必要なり、之よりイロハ等各點に現るべき岩石を其點の所に示し、又た其斷面上の傾斜は甲乙線と地層の走向と互に爲す處の角によりて、實際の傾斜とは異るなり、地質調査員は日々斷面を造り、之を携へて進み常に其適否を檢し、之を翌日の調査の方針を定むるに用ふ、同じ斷面に現るゝ地層の續に就きても種々の說明案あるべし。

地質圖及び地質斷面圖の實用は石炭採掘等に當り坑道の掘進線を定むる事、トンネルの掘進に當りて其線路を撰ぶ事に缺くべからず、トンネルの如きも地質知識によりて掘進すべき岩石を撰び、其工費を節約し得る事多し。

登山者は尙ほ地勢の變遷に注意すべし。

岩石に水を通ほす性質、水に溶ける性質、諸物質の爲め分解する性質一樣ならざるを以て地勢の特徵を生ず、石灰岩の如きは特に溶け易きものに屬し、地表に摺り鉢の形せる穴 (Dolinen) を生じ、又た釘の山と見るべき凹凸の岩面を生ず、地中に溶けたる跡は洞窟と地中の川を成し、之に流れ込みたる石炭の溶液は其水の蒸發に因りて窟の中に鐘乳石 (Stalactite) と石筍 (Stalagmite) とを生す、又た地表には灰華と呼ぶ粗鬆なるものを生ず。

地表の地質粗鬆にして雨水深く浸み込む所は、表面常に乾燥して、荒れ地の狀態を爲す、又た雨に乏しき土地には地中より水を得る事容易ならず、然れども謂ゆる砂漠の地と雖も尙ほ井戸を穿ちて水を得べき地面無きに非ず。

天然の泉にも常出と間歇とあり。

間歇の泉は我國にもあり、熱海の噴泉は大湧きと稱する大噴出の間に幾回の小湧き（小噴出）を爲すものにて、其の源因は地中に進入して或る所に溜りたる水が地中の蒸氣の爲め熱せられて噴出せらる

るものにして、一回噴出したる後は蒸氣の壓力が再び充分なるに至りて更に噴出す、然して此噴出の間歇にはアイスランド（Iceland）の間歇泉、熱海の間歇泉、陸前鬼首（オニコーベ）の間歇泉等各其特徴ありて存す。河は種々の地を流れ、地形の特徴によりて大雨後の增水が善く流出し難きより汎濫を爲す事あり、山間に閉ぢられたる湖底の如き平地は、特に其害を受くる事あり。

又た嶮岨なる地にて大雨中屢起る所の山崩れは河筋の一部分を堰きて、爰に臨時の湖水を生じ、此の湖の水增して遂に此堰を破る時は、下流に洪水を生じ人家を流す等の慘害あり、我國の洪水には此類甚多し、之を山津浪（サンツナミ）と呼ぶ地方あり、山崩れの出水には往々河床の大石を逆に上流に向て轉ずる事あり、是れ理外の奇事の如くにして實は然らず、其下にある土砂などが流れ去るが爲め時としては遠く上流に向て轉げ落ちるなり。

山崩れは雨後のみに限らず、教科書にも無き地質の不安定より危險を生ずるは我國にて所々に其の例あり、又た鑛業土木等の人爲に因る雨後の山崩れも少しとせず、山林濫伐等は之を促し、貼り芝等は之を防ぐ。

谷の形と水流の道筋に變遷あるは著るしき事にして、一川の枝流の水が他川の本流と合して、元の川を涸渴せしむる事あり、一川の流堰き留められて川筋に湖水を生じたるもあり。

河は岩片を流し、其の衝突に因りて岸を削り、又た渦流の所には轉石にて鍋の如き穴（Pot-hole）を穿つ、又た人若し崖の下に深く削り込みたる所に游ぎ入る時は、恰も戸棚の中に入りたるが如く容易に逃れ出づること能はず。

河岸の段階は海岸の段階に似て非なるものなり、河成段階は昔時河水汎濫したる區域にして、河水浸蝕に因り河床低くなりし爲め、今は其傍の高所に位するものなり。

又たケニョン（Canyon）と曰ふは雨乏しき土地に崖の崩るゝ事少く、水蝕が深き谷を穿つ所とす。

河筋の屈曲は變遷を免れざれども、河床の傾斜大にして屈曲著るしき所にて、適宜にトンネルを穿ちて水を引けば、小距離に於て大なる落差を得て水力を利用すべし。

河流の屈曲は常に海岸の砂濱に多くして、海より打ち上げたる砂は河流を堰き留めて、其の砂の下に暗流を爲す事あり、甚しきは岸に沿て長き屈曲を爲し、一二里も進みて始めて海に入るものあり（北海道テシオ川等）、此屈曲の所は時々所々に決潰を生じ臨時の川口を作る、又た堰き留めたる川口の暗流の上は砂軟かにて、騎馬の人容易に其中に沈み一擊の浪にて人馬共に海中に葬らるゝ事あり。

河流の一部分が地下を流るゝは石灰岩地方に多く、其の終りは窟より流るゝ低き瀧と成りて地表に出で再び水流を爲すものあり、山口縣大田（此大の字に點無し）に近き瀧穴は其例なり。

海岸又たは湖岸の段階（Coast terrace）は其の源因海岸線の退却にありて、各の時代を示したる海岸沈澱の砂礫等にて段の上を平かにせり。

雪は高山の上に於て、夏の日にも殘り固まること富士山の萬年雪（Firn）の如し、氷河（Glacier）は之と異りて萬年雪が多量に堆積して壓し固められ、自己の重さにて次第に辷り降るものなり。

我國には現在氷河を見ず、又た信ずべき氷河の痕跡無しと雖も、ヨーロッパにては氷河の上に乘りて運ばれたる岩片所々に散在し、又た氷河の下底に在りし岩片にて爬き削られたる地には滑かなる岩面を見る所多し。

湖は寒地にあるも深かきものは凍結せず、之に反し諏訪湖の如く水淺きものは殆全面凍結し、僅に溫泉湧出の點のみ氷を缺く事を見る、然して湖氷は溫度の下降するに當り縮みて割れ目を生じ、後其割れ目の中の水は更に氷結す、之より溫度再び昇れば氷は膨脹して所々に皺の山を生ず、之を諏訪明神の御渡と呼ぶ、此物は尙ほ他の湖水にても見る事を得るなり。

湖水は其の膨脹するや岸に押し來りて岸の石垣等を破壞し甚しき損害を爲す、故に諏訪湖の岸などに

は船を繫ぐ杭さへも見る事無し、又た此湖の落ち口なる岡谷（オカヤ）の橋杭は氷の流着によりて破壞することを防ぐ爲め、多人數集り來りて大に務むと曰ふ。

岩の割れ目等にて氷を生ずる時は、氷は其割れ目などを推し廣めて岩石を破壞す、然れども永く地を掩ひたる氷は地面の水蝕を防ぐものなり。

地下氷はロシアにて土木農業等の關係上調査を行ひ居るものなるが、カラフト嶋五十度の境界線にても泥炭地の下に凍土あり、地表より四五尺を穿てば盛夏にも土壤堅く凍りて岩石の如しと曰ふ。

大氣に溫度の變化あり、濕氣の增減ありて、蒸發、降水、降霜、電氣の作用等を見るなり。

此れ等のものは皆地球に對して水蝕、沈澱等の働きを支配するものなり、例せば岩石に對し化學風化（Chemical weathering）、機械風化（Physical weathering）の破壞ある時は、流水雨水の水蝕は爰に力を得て容易に生ずるものなり、

風が砂を吹き送りてレス（Loess）の厚層を支那に作りたるは著るしき事實にして、海岸の砂濱又たは陸內の砂地に吹く風は砂を高めて砂丘を作り、又た砂風にて岩を削りたる跡あり。

生物も又た種々の岩石を作り且つ岩石を削ずるものなり。

特に人類が工業の爲め天然物を傷くるは其必要なるものに止め、天然の美及び學術上の貴重品、學生指導に用ふべき天然の好例等は多く保護するを要す、是れ天賦の樂みを永く享け、又た天賜の學術材料を永く利用するの趣意なり、之を保存する事業を天然記念物保存（Care of natural Monuments）とす、ドイツ等にては政府事業（又たは公共事業）として之を爲す。

登山の內にて火山は其美形を以て特に趣味多し。

臺灣にて火山は、天然ガスの常に燃え居る所なれど、地質學にて火山と稱するは、地中の割れ目より種々の物を噴出して、地上に推積し圓錐の山を爲したる所とす、別にマール（Maar）と呼ぶものあり、

一回の噴出にて少々の噴出物を輪狀に積みて、其中に生じたる凹地に多く水を湛へたるものとす、是れ未だ火山と稱するに足らざるものなり。

火山は多く中央より外方に傾きたる層狀の堆積物（火山岩の破片、火山灰、熔岩流等）にて成りたるものにて、中央に噴出口あり、謂はゆる火口(Crater)とす、火口底の中溝の穴は時としては殆空しく、時としては全く熔岩を以て充たさる、中央なる熔岩が固結して、其外部のもの崩れ去りたる後露はれたるを岩頸(Neck)と呼ぶ、火山には屢放射狀及び共心狀の割れ目ありて、之に沿て多くの小火山の噴出を生ず、富士山の側面にある多くの寄生火山は(Parasitic Cone)は其例なり、又た此等の割れ目に沿ひて熔岩の岩脈を生じたるは、富士の爆裂火口なる寶永山火口の崩れたる壁に於て之を見るべし。

火山は水蝕に因りて其の形を變じ、又た火口壁の陷入して火口を大ならしめたるもの多し、又た一方全く崩れ馬蹄形を爲すことあり、淺間山、大島の三原山等の外輪山(Somma)などに之を見るべし。

其の火口の中は又た新しき火山を生ず、之を中央火口丘(Central Cone)とす、阿蘇火山の火口は直徑凡そ六里あり。

火山より出でたる熔岩流は、淺間の北側なる鬼の押し出し及び富士の丸尾(マルビ)の如く、不規則の表面を示したり、富士にては美しき蠟燭の流れの如きものもあり。

火山には又た一回の噴出にて生じ、簡單に熔岩の一塊と見るべきものありて、普通の火山の如く側面に美はしき曲線の形ある事なく、箱根の二ヶ子山の如きは是なり、塊狀火山(Massive Volcano)の名あり。

我邦は火山に富める國にして、千嶋列嶋の如き、富士火山帶の如きは皆火山の列を爲すものなり、火山は斯の如く一帶を爲すこと多く、地表の裂線に沿ひて噴出せし事を示すものなり。

火山の動作は平常は僅に水蒸氣を噴出し、之に交はりたる硫黃は他の物と共に火口内に昇華(Sublim-

ate)する事多し、昇華とはガスより分かれたる物質より固體の生ずる事を曰ふ、火山にて煙と見ゆるは火山灰と蒸汽の凝結したるものにて、雪融けの水蒸氣も又た聊か火山の噴汽に似たり、火山にて火はガスの燃燒もあれど其大部分火口内の熔岩の色が噴出せし水蒸氣に映るものと云ふ。

火山の噴出にては火口内の熔岩は時に其の中の水蒸氣の力にて爆裂し、粉狀を爲して散出す、之れを火山灰(Volcanic ashes)と呼ぶ、其粗大なるは熔岩の爆裂の時生じたる火口壁の破片と共に火山礫(Lapilli)の名あり、又た熔岩の斷片は鰹節等の形を成し火山彈(Bomb)となる事あり、試に封蠟を熔かし其少々をピンセットにて挿みて投ずれば此形を爲すと云ふ、又た火山彈に屢磁極あることも注意すべし。

又た熔岩が火口より溢れ又た側壁を破りて流出すれば熔岩流となる。

又た火山破裂の時は、山上の融雪、噴出せる水蒸氣の凝結、地表の水等にて多量の水を流し、通常は此の水に加ふるに火山灰等を以てす、之を泥流(Mud lava)と名く、泥流は其流下する頗る早くして、之に會ひたる處は多くの人命と建造物等を失ふに至る、大なる泥流の如きものは熊本地方などにあり、極めて小なる區域に止るものなり、火山の働きが主として唯側壁等の爆烈に止るを爆烈(Explosion)と呼び、又た噴出(Eruption)の語は地中の物を噴出する時に用ふ、明治二十一年の盤梯山の爆烈には破片を北側に散じて川筋を遮り、幾個の大なる湖水(タマリ)を作りたり。

之れに反し明治四十二年北海道タルマイ火山の噴出には火口に熔岩を推し上げて新に圓頂丘(Dome)を作りたり。

硫汽坑(Solfatara)は火山の火口内及び側壁等にあるものにして、水蒸氣と共に亞硫酸、硫化水素等を吐き出す處とす、此所には硫黄等の昇華を生ずるのみならず、盛んに岩石を分解せしめ、暗色の火山岩も灰色又は白色の粉狀物に化せしむるなり。初來の人之を見て火山灰と誤るも宜なり、又た其一部

分には硅酸浸入して非常に堅く殆石英の塊と見るべきものを生ず。

蒸汽坑（Fumarole）及び炭酸坑（Mofette）も多くは火山地方にあり、其にガス體の物を吐く所にして、火山と關係あり。

温泉は多く火山地方に有れども、決して火山地方にのみ限らず、温泉の温度及び湧量が雨天の時に增加するは、出水の壓力にて一方の洩れ口を閉ざし、自然に湧量を增し、湧量の增加に因りて其の冷却を減ずるが爲めならん。

又た相接近して二種の全く異りたる泉の湧く所あり。

温泉には殆純粹の水あり、又た種々のものを溶解して含みたるものあり、之れより生ずる沈澱物には種類甚多し、今日の學説にては鑛山の鑛脈も多くは温泉作用にて生じたるものとす、温泉より炭酸石灰の沈澱する例は頗る多くして、我國には日光の奥の湯澤（ユザワ）に其小塔あれども、信濃國高瀨川の豆石（Pisolite）の如き好例なり。

鮞狀磁石の沈澱は越中立山温泉地の一部分等にあり。

臺灣の北投温泉の河床には、硫酸重土と硫酸鉛の混合結晶にて成れる放射能ある新鑛物北投石（Hokutolite）あり。

温泉に亞硫酸等を含みたるものは、往々之れに接したる岩石を變質せしむる事硫汽坑に於けるが如し、總て大昔の温泉の働きにて生じたる岩石の變質には種々の例ありて、明礬石（Alunite）、蠟石（Agalmatolite）等の生ぜるも亦た之に屬す。

間歇温泉の噴出口に沈澱物の圓錐を作くる事は、日光の奥なる西澤に近き湯澤にて圓錐形に生ずる噴泉塔あり、今日迄に知られたる生長の事實は一年間に高さ一尺計り生長す。

土地の昇降を認め易き處は海岸にありて、口碑及び實證にて之を知るを得べし。然れども社寺等に藏

する古圖には多くの僞物ありて容易には信じ難し。

登山者の屢出會ふ所の現象なる山崩れは我邦に大災を多く起すものにて、總論すれば次の如し。

第一、大雨の浸水に因りて、土砂及び岩片等が辷り落つるものは、山崩れの最も多き種類に屬し、其の辷り落るや堅き岩面に沿ひて粗鬆なるもの丶落つる事あり、又た時に岩石の層が地層面に從て辷り落つる事あり、此時に層面の向きに因りて谷の一方は少しも崩壞せず、唯其對岸のみ崩壞する事あり時としては粘土の如き軟き層に浸水し上部の岩石に押されて、此部分のみ突き出され、續いて上部の岩石の崩落する事あり、山崩れに伴ふ損害は洪水とす。

第二、可溶性の岩石溶け去りて空所を生じ、其の上の岩石陷落するは稀に見る山崩れなり。

第三、土木工事及び鑛業等の爲め、壓力に耐へざる所を生じ陷落を起すは、石炭山等に於ける陷落、トンネルの變形、切り取りの破壞等に多く見るべし。

第四、岩石の風化及び水蝕も山崩れを起すなり。

第五、地震の割れ目にて山崩れ及び段違ひを生ずる事あり。

第六、以上の諸源因に直接の關係を見ず、又た勾配の極めて緩なる斜面（下駄にて駈け上り得る位の處）にて格別の濕りを含まざる所の地割れ、押し出しと崩れ落ちは大井川の西岸にて、鐵道の俄に屈曲せる所（押し出しを留める道無く、已むを得ず、一丁程の間彎曲せしめある所）、岩代半田の古代の崩壞斷崖の內部、諏訪湖の斜面（鐵道破壞の地）、甲斐南巨摩郡の十谷（ジッコク）、大原野等、能登國久江（クエ）、常盤海岸鐵道の田の網の邊等にあり。

又た此外に山崩れを生じ易き人爲の源因は少しとせず。

嶮岨なる山間にて平地と見ふるものには、屢甚しき危險を伴ふべき山崩れの粗鬆なる土ありと知るべし。

山崩れの土の押し出しの力は之を測る道無し。

斯の如く、登山者は岩石に注意し、其の種類と產狀、連續等を觀察し、又た地勢の變遷等に注目すれば自然某の山は如何なる成因にて生せりなどといふ事迄でも考へ得る事ありて、趣味を高尙ならしむべきなり、又た廣く日本の地質を論じ、岩石に含まれたる有用物を數ふるに當りては、先づ其地勢を畧述せざるべからず、總て地勢は地質構造に因るものにして、岩石の堅軟、其割れ目の方向、水蝕と堆積、成層岩の變位、火成岩の噴出等によりて定まるものなり、例を擧げんに先づ山に就きて見るに火山、砂丘、氷何堆石等は大祇皆堆積物の山(第一)にして、成層岩の變位に因る鑛床も亦た特種の山(第三)を爲すべし、地面の削剝に因りて生じたる山(第四)は水蝕の山地、及び殘墟の山なりとす。又た海岸線の形も水成岩の變位及び火成岩の噴出に因るもの、及び地上の水蝕其他の諸變動に基くものなり。

以上は聊か登山者に地質趣味を擴めんが爲めに記したり、故に固より眞の地質學流の地質學には非ず、余が「實用の地質學」と曰ふ小冊子は主として鑛山探驗土木工事などの素人に示すべきものにして三省堂にて印刷中なり。

雜錄

佛國山岳會を訪ふ

正月五日 Rue du Bac に Club Alpin Francais を訪ねた。用事は無い、たゞ愛山家の呑氣さ加減をさぐりに行つたんだ。日本山岳會からの紹介狀を出したら、すてきに喜んで、どう云ふことを御望みですか充分に便宜を計りますからと云はれたにには閉口した。用が無いとも云へず、と云つてあるわけでも無し、仕方が無いから、實は圖書の閲覽を、と逃げて置いた。さうしたら出した、出した、とても一日や二日では見切れさうもない大部な奴やしまいには、頁の切つて無い「山岳」まで持ち出しては來たが、主に Pyrenees の方面なので、僕には割合に興味を感じなかつた、只 Berner Oberland の案内記はかなり詳しく讀む事が出來た。一寸面白く感じたのは會の寫眞帳 (Album des excursion) でこれは實に澤山ある、各部同じ體裁にとぢてあつて、一年の月日の順に時々企てられた旅行の簡單な記事と雜誌にのせない多くの寫眞をその順に貼付けたもので、テナックスなどで寫した小さなのも澤山貼つてあつた。つまり各會員が、此等の寫眞を燒きつけて、事務所で整理したもので、云ひかへれば、寫眞入りの會員登山報とも云ふべきものである。そして各旅行の初めにその時日、ホテル、晝食の場所、旅程、等目錄的の體裁でのせてある、これは多くは雜誌の切りぬきであるが、さもないのはペンで書き込むやうになつて居た。必しも登山ばかりで無く平地の景色も非常に多い。事務所につゞいた閲覽室には廣いテーブルを中心として、まわりの壁にはアルプの寫眞や油畫が一面

にかけられて、レリーフ、マップなどの置いてある所は先づ例の大會と思へば間違ひはない一方の大きな書棚に寫眞帖が澤山あつて、此方は勝手に見られる樣になつて居る。圖書室はこゝとは離れて、給仕を招んで一々持ち出させることにしてあつた。僕がこゝでいろんな寫眞の說明など聞いてる間に、入れかわり立ちかわり六七人の會員がやつて來たが、何れもかなりの年輩で中には白髮の混つた人や頭の禿げた連中が來るのは、いづこも同じことゝ感ぜられた、そして此等の人々は給仕に書物を出させてノートなど取り出してしきりに勉强してゐる、何を調べてるのかと思つてのぞいて見たら、Baedeker の案內記など讀んで居た。

僕の持參の寫眞は此の連中に大分持てた。主に話をしたのは Monsieur Marchandise で此の會の Trésorier である。氏に紹介された中老人は、寫眞が非常に好きなんださうだが、名は忘れてしまつた。そして日本山岳會は、會として或は個人として山岳寫眞又は登山に關する書端書の交換を熱望して居ると云つたら二人とも非常に喜んで、是非始めやうと約束した、だから會員諸君のうちで、その希望をもつてる方があるならば、どう云ふ方面の寫眞と交換したいと云ふ條件を付して送られたらばよからうと思ふ。會としては無論最近に開始せられる事と信ずる。但し手紙はなるべく佛文で認めた方が間違ひがなくていゝ、事務所にも餘り外國語に達した人が無いのであるから。

僕も少しく意外に感じた事は、この會が必しも高い山ばかりねらつて居ない事で、記事の中にも又は繪や寫眞帖にも僕等が見ては殆んど、名所畫はがきの如く思はれる平凡な景を含んで居る。一般の Tourist Bureau をもかねて居るとも思はれた。Ski section もあるさうで、來月は二週間ばかりスウィスへ行く筈であると聞いた。

こゝで僕は二時間ばかり費やしたらばもう燈もついたので、別れなければならなかつた。開館の時間は午前十時より午後五時までゞあるから。

事務は給仕の他に四人ばかりでとつて居るやうに思はれる。

僕は明日の朝 Lyon に去らねばならんので、今

回はこれで別れる旨を告げたら、次に訪問せられる日を必ず前に通知して呉れと頼まれた。時間が無いので今日は何の設備も出來なかつたが、その折り會員と集まつて宴會を開くからと云はれたには閉口した。そして僕の旅程は前に話してしまつたものだから、くりかへし〳〵、今はこれで、別れなければならないが、次に尙巴里を訪問せられる機會のあるのを深く喜んで居ますと、すつかり先き廻りをされてしまつた、困つた事である。再三度堅く握手して別れて來た、事務所は三十番地の三階にある、リフトが無いのは登山の練習をこの長い階段でくりかへす事と察せられた。

終りに今日は樂しい日であつた。(巴里で。辻村伊助)

「白峰三山に就いて」の異議を讀む

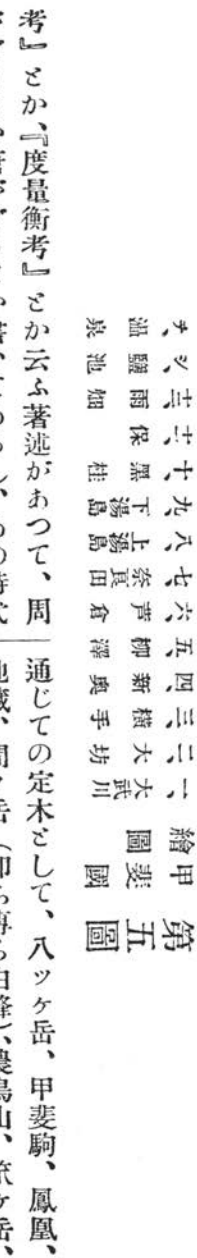
七年三號の白峰談に續いて、私の愚論の結末を告げる、實は八年の一號か、二號に載せる筈であつたが、安永版の「新刻日本輿地路程全圖」の、印刷の明瞭な品を見てからと思つて居た中に、唐突と旅行することゝなつて、今日まで延引したのである、安永版は未だ入手しないが、白峰問題には、さまで必要とも認めないし、それから『甲斐國志』にある專ら白峰が、現今の北岳でなくて、間ノ岳（東俣山と呼ぶも惡いとは思はないが、先號の續き上、此名を用ゐて置く）であると云ふ考證をするとしても、澤山の材料が有る譯でなく、一二の圖書を根據として、其他は自分等の好な方へ持つて行く事になるから、どうしても水掛け論になりやすくて、際限がないから、手元の材料で、ひとまづ切り上げる事にした。

私には出來ない咄であるが、古書を讀むには、古人の心になつて見なければならぬものとか聞いて居る、而して古圖を見るには猶更に其感があるやうに思はるゝ、高島北海先生が、或點は岩石の種類までも描き分けてあると、稱賛されて居る程の谷文晁の寫山畫を、我々が見ると、山の形さへも碌々に似て居ぬと思ふのが多い、尤も繪と圖は

第四圖

一、國掌中繪圖
二、甲斐
三、大武川
四、大横
五、新
六、柳
七、芦
八、奈良
九、上湯
十、下湯
十一、黑保
十二、雨
十三、鹽
十四、温泉
桂島
島田
倉澤
奥手
坊池
畑

別であるとも云ふ議論も出るかも知らぬが、古人の地圖には、何々畫とか何々繪とか書いてあるのも少くないから、現時の製圖と水彩畫程の差別は無かつたものと見て差支なからうと思ふ、であるから大體の見當を示してある位の考へで扱はねばなるまいと思ふ、決して中村兄のスケッチを以て擬すべきもので無い、是は少し古圖を見た人には、直ぐ氣の付く事であると思ふ、可なり上手に日本繪を描く人と、一所に四五日旅行した事が二三回あるが、其人が寫生した山川は、隨分變なものが出來るやうであつた、日本繪は似て似ぬ處にも妙味があるのでもあらうから、日本繪が惡いと云ふのでは無い、實景に多く繪風が混合する事を擧げたに過ぎない、瀧車、瀧船といふ便利のものゝある今の世に、私と草鞋で同行する人は、先づ山岳趣味のある人と見て差支なからうと思ふ、それが書いた物が左樣であるとすれば、山岳趣味のズツット低い時代に出來た我邦の地圖は、其山岳などに至つては、一幅の山水畫が、幾分の實景を含んだ物として考ふべきであらう、徂徠先生は『度量

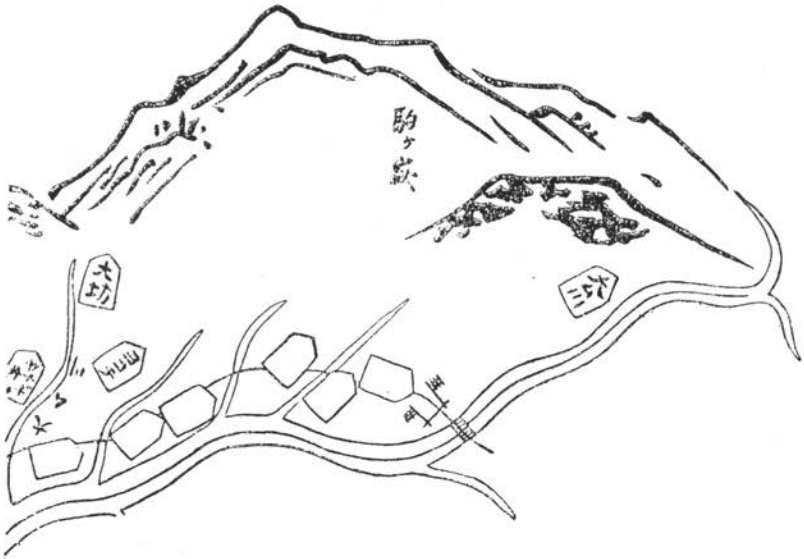


第五圖　甲斐國繪圖

一、大武川　二、大坊　三、横手　四、柳澤　五、芦倉　六、奈良田　七、湯島　八、新倉　九、上湯島　十、下湯島　十一、桂島　十二、田倉　十三、雨畑　十四、保栗　十五、澤奥　十六、手坊　十七、鹽泉　十八、池畑

考』とか、『度量衡考』とか云ふ著述があつて、周がどうとか唐がどうとか書いてあるし、あの時代に磁石を持つて旅行せられた位だから、全く數字を度外視した人で無いが、例の甲府城から見た間ノ岳に「望之稜々乎可畏」と云つて居る、古圖書の研究となると、頗る容易なもので無いのである、以上の苦しい辯護をして引證する私の材料は、極めて怪しい物と想へば思はれない事は無からう。

七年三號に載せた諸地圖の中でも、單に白峰の見當だけさへ記してないのが多いから、諸地圖を通じての定木として、八ッヶ岳、甲斐駒、鳳凰、地藏、間ノ岳（即ち專ら白峰）、農鳥山、笠ヶ岳、七面山、身延山（八ッヶ岳と身延山は表には引くが圖には除く）の山々と、村落で、大武川、大坊、横手、柳澤、芦倉、奈良田、湯島、新倉、雨畑を取つて置くから、其意で比較推測せられんことを希望する、それから第六圖即ち「甲斐四郡國繪圖並村々高附」を根據にする、原圖は草書で地名や高附が書いてあるが、必要のない處は省略して置く、何れ秋期の大會には此圖を出品するから、御



第六圖

甲斐四郡繪圖並村々高附

熟覽を願ひたい。

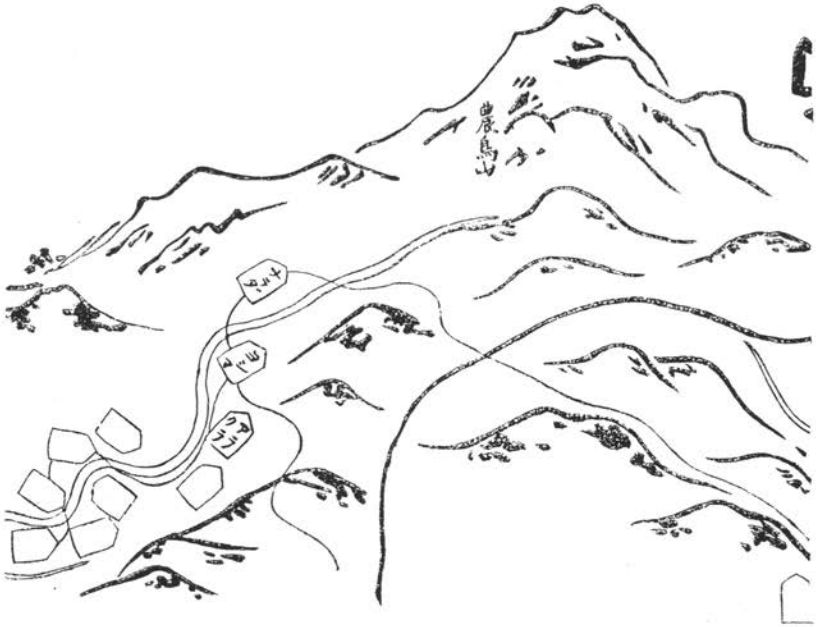
第六圖に據ると、八ヶ岳、駒ヶ岳、農鳥山、七面山は明記してあるから、何人も異說を云ふ人はあるまい、さうして其位置が百十何年前のものとして、現時のものと酷だしく相違して居ないやうである、白根岳と駒ヶ岳の中間に無名の二山があるが、是は地藏、鳳凰と首肯することが出來る、（柳澤の頭に、此所より鳳凰山え七りの文字が明記してある）、然らば此圖に白根岳と命じてあるのは、今日の北岳と見る事が出來やうか、若しコレガ北岳だとすると、間ノ岳が無くなる譯になる、此圖の白根岳が今日の間ノ岳である事は、徂徠先

第六圖　(其二)

甲斐四郡繪圖並村々高附

生が峽中紀行に書かれた白嶺と『國志』の專ら白峰と同一（夫れは國志が峽中紀行の文章を引用して、他に何も云つて無い事で分ると思ふ）である事や、七年二號一三九頁に引用した、名取氏が白河内ノ岳と別當ジロを同山と云はれる點や、芦安から正しく西に當るといふ『國志』の記事が、此圖に照らして附合する事や、「井川山奥事業地地圖」や、湯島の獵師が間ノ岳をシラネと云ふた事や、七年一號一二九頁、同二號一四八頁掲載の梅澤、山川、兩氏の東俣山の考證やに考へれば、明白だと思はれる、少くとも小島兄の第一の御說は成立しないやうに想ふ。

次に五圖は、七年三號に說明した、6、7、8、9、の地圖であつて、六圖よりも年代が二十五年ばかり後の出版であるが、四圖以上に、内容の豐富を見ることが出來ないと思ふ、地藏、

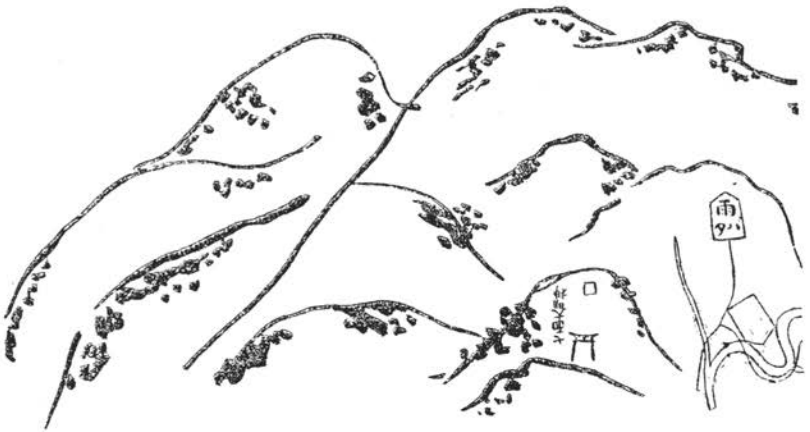


第六圖　(三其)

甲斐四郡繪圖並村々高附

鳳凰の記名はしてあるが、地藏岳と云ふのは、『國志』の所謂「絕頂ニ高數丈ノ岩アリ、遠ク望メバ人物ノ如、州人多クハ誤認メテ是ヲ地藏岳ナリト云フハ非也」の地藏岳で、現今の鳳凰山と記名が入れ違つたものである、それから地藏岳(現今の鳳凰山)が鳳凰山(現今の地藏岳)の前へ出て居る處や、今日の白河內岳と見るべきものが、遠山にしてある處などは、前陳の繪風が混入したものであらう、此圖に據ると小島兄の第一說が、各山に記名がしてあるだけ、夫れだけ事實に遠くなるやうに思ふ。

次に第四圖は、五圖から十四年ばかり後に出版されたものであるが、地藏、鳳凰を間違つて居ることは益々明瞭だが、今日の白峰三山(以下白峰三山と記するものは、小島兄の所謂白峰三山にして、現時の我々が認めて居るもの



第六圖　(其四)

甲斐四郡繪圖並村々高附

を指す）を描いたものとは思はれない。

第三圖（七年三號一二一頁）は、明治元年の刊行である、農鳥山、笠ヶ岳、駒ヶ岳は分明であるが、地藏岳の信州方面へ前岳と記し、鳳凰山の信州方面へ地藏岳と書し、間ノ岳に當る處の山の駿州（？）方面へ荒川岳と認めてある、多分「富士見十三州輿地全圖」から來たものらしく考へる、此等の圖が陸地測量部や、地質調査所の二十萬分一圖の、間ノ岳に荒川岳の名を冠したものと、關係があるらしく思ふ、此圖に據つても白峰三山などを認めては居ない。

第二圖（七年三號一一九頁）は、明治九年の刊行であるが、頗る不思議の品だ、農鳥山が現今の早川連嶺にある、即ち早川の東岸に當つて、其南に湯島と平林の通路が描いてある、奈良田の東で北に向つて居る野呂川の支流（鹽池の東のもの）にアラ川と記し、野呂川の本流は奈良田の西南に向つてある、此圖の白根岳は、奈良田の西に當るが、野呂川の本流と支流の間にあるから、前岳（仙丈岳）邊とも見ることが出來る、地藏、鳳凰を間

違つて居るのも依然として居る、よくもコンナ飛び放れたものを作つたものと、驚愕の外はなく、白峰三山など思ひも寄らない、此圖の芦安としてあるは芦倉の誤謬である。

以上の諸地圖の何れも白峰三山を認めて居ないのは事實である、若し三山を認めて居るものとすれば、記名の有無は兎に角、白根の右か左に、今一個の農鳥や、白根に相當する一山を描くべきものと確信する、其時代の地圖は悉く木版の日本紙刷であるから、今日の雜圖を印刷する程に容易なものでない、夫れが大同小異にもせよ、可なりの種類がある、(七年三號に掲げて置いた丈けは、私の手元にある)小島兄の御說のやうに、『國志』時代から白峰三山を認めたものとすれば、其何れかに三山を認めた俤を存せねばなるまいと思ふ、併も三山を記載したものがあつて、其三山の中で、農鳥山を基礎として右へ數へて、中峰が無名で、其次が白根と無ければ、小島兄の御說の引證にはならないのである、假令今後三山を記したものが發見されたとしても、普通の知識から見て、當時の甲斐人(他國人は勿論)の殆んど全部は、白峰三山を認めなかつたものと斷定して一向差支へがないと思ふ、然らば農鳥山の右に記されたる白根なるものは、今日の東俣山即ち間ノ岳であつて、北岳でないと結論するのが至當である思ふ

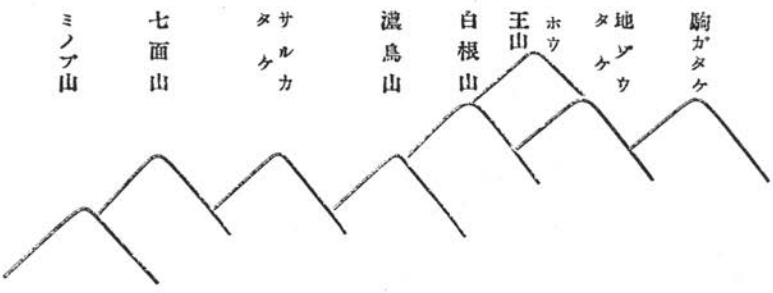
第一圖(七年三號一一八頁)は、明治十一年の出版で、餘程具體的になつて居る、此圖は『國志』を參考して製作したことは明である、想ふに六圖は『國志』編輯以前の出版であるから、當時の地理に詳しい人の作で、其後『國志』が完成しても、容易に閲覽することが出來なかつたらうから、六圖を原圖として、五圖や六圖が作られたものであるまいか、第一圖に初めて北岳の名が見える居る、併し此圖も不幸にして小島兄の御說と附合しない、此圖には白根岳なる文字を、甲、駿國界に大書してあつて、白の字の下に小さく北岳と記し、根の字の下に小さく中岳、農鳥山云と書し、早川の支流(内河内川)の上、即ち下記南岳の北の一座と、其北の一座との鞍部と思はる、處へ、字デンック峠と細記して、岳の字の下に南岳、別當代と云と

東北十五州之圖

駒ケ岳
鶴池
地藏岳
ホウチウ山
雲鳥山
泉
宗眞田
白根山は總稱の意ならんも、それでも變なものである。
大島
イザルケタケ
雨畑
白根山
身延山
七面山

◎雜錄「白峰三山に就いて」の異議を讀む

增訂路程便覽



小書してある、此邊を仔細に考慮して例の臆測を逞うして見ると、『國志』の記事に據つて甲府方面から望んだ白峰の三峰を、漫畫式に初めて甲州の地圖を作つて（私の知つて居る範圍内で）洋紙に印刷しやうと云ふ位な著者森丈助氏は、北岳や間ノ岳へ直接登攀せぬとしても、多少の高處から其邊を觀望位はしたものと察せられる、さうして甲府方面から見て一番雄大であり、農鳥の出ると云ふ目標のある農鳥を定めて、間ノ岳は疑問となつて、北岳が奇削で且つ此岳から地勢が一變してゐるのは、何人の眼にも映ずるから、北岳が『國志』にある北方最も高きものとなつて來る、そこで別當代に當るものが見當らない、今日の白河内岳は、間ノ岳を疑問として三座の一に加入させぬものとすると、問題になるものではない、距離から云つても、北岳と中岳即ち農鳥山の間ほどなければならない、處が其附近にそんなものがないから、笊ケ岳を別當代に當てゝ、『國志』の「白根夕照ハ八景ノ一ナリ、南北ヘ連ナリテ三峰アリ」の本文に取りて、甲、駿國界に白根岳と大書したものらしく、最北最高のものに白峰と云ふ白根と同音の文字を用ふるを避けて、『國志』に別當代を其南とあつたり、北方最も高きなどの文字から北岳、南岳を擬して、徂徠先生以來、白嶺、白峰、白根などの名稱で此山脈の代表者たる間ノ岳即ち東俣山は、急に無名の一峰と左遷されて、鳥渡、家出をして居た嫡子が突然歸つて來た後の養子と云ふ樣な觀がある、ザルケ岳も『國志』に見えて居る處から、本物の笊ケ岳の南にある何れかの一座に、ザルケ岳と命名したらしく考へ得ると思ふ、（『國志』の淘羅岳の記事にも特色が記してあるが、白峰の著名なのに捉はれて、且つは山岳など重大視せぬ當時故、夫れまで詳細に注目せざりしものなりしか）萬に一とつ此臆說が事實とすれば、『國志』の記事を誤解して三岳としたものは此人であると思ふ、それから此圖に據ると小島兄の御說の

「國志」時代の白峰三山は、同上の塲合に、人の心理作用が割合に普遍的で、暗合的である限り、今日の白峰三山と、やはり同じものに見てゐたに違ひない、誰か三山より「本州第一の高山」な

る北岳を切り棄て、山とは言はれぬほどの小隆起なる白河内岳（少なくとも遠望の場合に於て、北岳や、間の岳に比較すれば）を採用するほどの物好きがあらう、私は書いたものなどより、かういふ心の證券に重きを置いて、自然を觀察し、考定したいのである云々（七年一號一一四頁）。

祖徠の文章にも「風人の口に藉甚」とあるほどで、それらの文人は、無論白峰を觀望するに、都合のいゝ土地を歴遊もしたであらう、決して甲府にばかり、蟄居して居なかつたらうから、甲府から北岳が見えないからと言つて、白峰即ち今日の「間の岳」と決めてしまうとは限らぬし云々（同號一一六頁）。

の二節は私の臆説以上の臆説のやうに思ふ、それ程有名な白峰三山であつたならば、俯瞰式の地圖を改めて、新しき渾瀉式を試みた森丈助氏は、中岳を農鳥山として、間ノ岳を無名にしたり、南岳をアンナ處まで持つて行く要もなかつたらうに。

明治二十年輯製の陸地測量部の甲府圖幅（二十七年修正圖に據る、但し當時の修正は、道路の新鑿、町村合併の新命名等の修正にして、山名の訂正など無かりしが如く思はるゝからである）には、北岳（3094？）其南に荒川岳、其南に農鳥山、其南に南岳、其南に洶蘿岳がある、コレハ輯製圖であるから、廣く材料を蒐集して作つたもので、南岳を今の白河内岳と見てある、さうして荒川岳と農鳥山の間へ、少し〳〵大きな字で白峰と入れてある、コレハ森氏の地圖を見て、間ノ岳を無名の一座としてあるは、不當であると云ふので、コレモ同圖に荒川が北岳と無名の一座（間ノ岳）の間から出て居るし、「富士見十三州輿地全圖」などに荒川岳の記載があるし、『國志』に。

荒川岳、早川ノ西ニ在リテ白峰ノ枝山ナリ、奈良田ニ屬ス、御林アリ、樺樅、黒松、唐松、五葉松、唐檜、比曾ノ樹等ヲ産ス、○隈平峰、荒川岳ヨリ東ヘ連ル、奈良田、芦安ノ山脊ヲ分界トス、又、垂峰、中峰、平田、西枯澤、又、次山、水楢屋ト云、御鷹山アリ、奈良田ニ屬ス。

荒川、荒川岳ヨリ發ス、弱窪澤、南澤、三ツ瀑等合シテ東流シ、能呂川ニ注ク、此對岸ヲ鷲ノ棲ト云、二水相合シテ早川ノ

◎雜　錄　「白峰三山に就いて」の異議を讀む

名アリ、○廣河内、上流ヲ西枯澤ト云、(此邊數村ノ谿流ヲ何河内ト呼ブアリ、又、枯ト云ハ、山側崩壞シテ草木生セザル所ナリ)。白河内、上流ヲ水檜屋ト云、廣河内ト共ニ、二水東流シテ早川ニ入ル。

などの記文があるから、荒川岳と云ふ名を中峰に冠したものらしい、併し白峰三山と云ふ意味は未だ顯はしてない。

次に二十一年に出版になつた、地質調査所の甲府圖幅である、コレハ北岳、荒川岳、農鳥山に各米突を附して、北岳と荒川岳の間に白峰と大書し、荒川岳と農鳥山の間に山の字を大書してある、ココデ初めて現今の白峰三山が、稱呼は兎に角として、山そのものは揃つたのである、さうして調査所の方では、ザルヶ岳と云ふ意味ある名を捨てゝ(ザルに似たとか、三峰とか云ふ『國志』の記事で、少なくとも同書にない南岳といふ文字と比して)、無意義な南岳の名を存してある、南岳のある處は二十年出版の富士圖幅である。

(日本地誌提要)は、修史局の地誌課編纂で、日本全圖の殆んど總ての材料に據つて記載されたもので、我邦の地理書の根本とすべきものであるが、此書の白峰の記事を見ると、「白峰、同郡芦倉村ヨリ凡拾里、本州第一ノ高山ニシテ、凡三峰アリ、北方最高ノ者ヲ、專ラ白峰ト稱ス」とある、同書二卷(東海道)は明治七年の刊行である、此記事も『國志』を取られたものと首肯が出來る。

一方では登山趣味がウエストン氏などの外客から着手せられて、北岳が甲斐ヶ根、中峰が間ノ岳と呼ばれ、それ等の材料に據つて、小島兄が三十三年の八月に北岳へ攀躋せられて、當時邦人間で破天荒とも目すべき其登山文を『太陽』に發表されたのである。

併し小島兄も其折りには、北岳、間ノ岳、農鳥山を以て、白峰三山とは認めて居られない。

白峰は或地理書には、一萬百九十七尺とあり、他の地理書には、一萬二百十二尺とある、參謀本部の二十萬分の一圖には、三千九十四米突即ち後者の高さに同じくなつてゐる、ともかく一萬尺以上の高山なることは爭はれない、甲斐では富士山に亞ぐ高山であるのみならず、日本全

國中でも有數の名山である、かゝる名山も、地理書には赤石山系中の一山として、單に白峰の名が登錄されてゐるばかりで、何等の解說が與へられてないから、こゝでその地理的概念を、ひとわたり說く必要がある、この山は、西は信濃の伊那郡と、駿河の阿倍郡に跨つて、東は甲斐の國、中巨摩、南巨摩の二郡に連亘してゐる、則ち三國の境界を、北より南へとかけて、所謂封豕長蛇の勢ひをなしてゐるので、山は之を大別すると、尖つて三ッに岐れてゐる、最北に聳へてゐるのを中巨摩郡の北嶽といつて、これが白峰の最高點である、中央のを間ノ嶽とも、又、中ノ嶽ともいつて、南巨摩郡西山村に聳へてゐる、南のを南嶽といつて、同郡都川村に亘つてゐる、この山から、やゝ北に當つて荒川嶽といふ支山を派して、同郡奈良田村にかゝつてゐる、又、荒川嶽と南嶽との間には、農鳥山、農牛山といふのがある、以上の三大主嶽（北嶽、間ノ嶽、及び南嶽）及び幾多の支峰を總稱して、白峰といふのであるが、普通に白峰といふと、先づ最高峰なる北嶽を指してゐるので、余の登山も、實にこの尖先を目懸けたのである云々。

とあるから、輯製圖を『國志』の記事で說明して居られたやうである。

三十七年に出版になつた、山崎、佐藤兩氏の《大日本地誌》三卷にも、地形の白峰山脈では、北岳、荒川岳、農鳥山を最高と認めてあるが、八六〇頁の地方誌の白根山の條には、「此の北嶽、間の嶽、南嶽の三大主嶽」云々とあつて、白峰三山の文字は見えてゐない。

『山岳』二年一號に伊達九郎氏と高松誠氏の「北岳登攀記」には、北岳、荒川岳、農鳥山を指して三山と見てあるやうであるが、白峰三山の文字は使つて無い。

私が初めて白峰三山を北岳、間ノ岳、農鳥山と知つたのは、同二年三號（四十年十月發行）で、小島兄の「甲斐山岳の形態美」の、「甲斐山岳の總說」の末尾（一五頁）である、それから同兄の御斷定が三年の三號に載つたので、其中の『國志』の誤謬云々と言はれたのを、私が同書の農鳥山の記事

を中心として、峽中紀行の文に據つて卑見を陳べたのに、小島兄から御異議が出たので、遂に冗辯が長くなつて仕舞つたのである。

私が初めて陸地測量部の網圖と成果表を見た時に、北岳が白根岳、間ノ岳が相の岳とあつて、我意を得なかつたが、大正二年六月發行の五萬分一圖、市野瀨、大河原圖幅には、白根岳が北岳に、相の岳が間ノ岳に改められて居て、先づ嬉しいと思つたが、白根山脈と農鳥岳とは可厭に感じた、測量と云ふやうな事が緻密になつたとて、何も輯製圖（同圖は伊能忠敬先生の地圖を輪廓にして、其内へ方々から集めた地圖を綴り合せて、製作したものゝやうに聞いて居る、地形圖として價値なき事は既に定評があるが、古圖を見るには必ず參照すべきものであると想ふ）の歴史的好文字を、山村の愚民が使用して居る俗文字に更るにも及ぶまいと思ふ、コレハ町村の改稱など、現代使用の文字に改めると云ふやうな意味が、測量部の地圖か何かで見たやうに記憶して居るから、此等を誤用したらしく想ふ、例によつて序に書いて置く。

以上は白峰に就いての刊行物を陳列して、臆說は隨分雜じるが、其歴史を略ぼ陳べた意である、あまり長くなつたので、自然重複の處が多く出來て、枝葉の贅所が澤山であるから、私にも何を言つて居るのか、頗る明瞭を缺くところがあるから、總束して決論を作る。

●小島兄の第一說、むづかしくて私には一言に盡す事は出來ぬが、人間普通の眞理狀態から言つて、高い北岳を除いて低い白河内岳を採用する程の物好きは無い云々。

辯、コレハ虛論であるから困るが、若し小島兄の御說の如くんば、『國志』以後約六十年間（北岳、南岳の文字を見るまで）に出版された八種の地圖に、北岳と間ノ岳と農鳥山の區別が、記名は何でもいゝが、山そのものは分明に認識されてあるべきだと思ふ、其上に白峰三山の熟語や、北岳南岳の名が明治以前に見えぬとなれば、實際に於て價値なきものとなると思ふ。

●小島兄の第二說、『國志』に記載された三山は、記載そのものだけに就いて言ふても、今日の三

山梨縣東八代郡金川原より見たる白峯山脈（角田祐吉氏筆）

山と同じ物に解釋して惡くない云々。
○芦倉村正西云々。
辯、正西は今日の地圖に正西に當つて居て、約百年前の比較的正確なる地圖に正西に當つて居て、殊に『國志』に「正しく西」と書いてあるし、七年二號に陳べた、徂徠先生が磁石を持つて居られた事、峽中紀行の小佛嶺の處で「正東豁然」の間違ひない事などに照して、間ノ岳を推すべきだと思ふ。
○正西を訂正云々。
辯、北岳の記事は、正西を訂正してまで主張する程な有力のものでなからうと思ふ、私も今日の北岳の登路とは信して居るが、七年二號の一五〇頁に、梅澤、山川兩氏の御說のやうにも解釋が出來ると思ふ。
○名稱の詮衡云々。
辯、北岳と農鳥山の二山が、間ノ岳より大きくて高くなければ、空論だと思ふ。

●小島兄の第三說、甲府から北岳が見えぬため、間ノ岳から一枚づゝ下りて、今の間ノ岳が專ら白峰と呼ばれたと云ふは非云々。
○當時の文人が白峰の觀望に歷遊云々。
辯、然らば明治以前又は其初期に出た、多くの圖書に何故に三山が明記してないのか、セメテ一圖にでも。
○『國志』の本文だけで立證出來ぬ云々。
辯、本書の記事だけで立證出來ぬとなれば御同樣だと思ふ、併し「正しく西」や、峽中紀行を引用してある點や、農鳥山の事や、大樺の池の不明などから見て、私の方が强いと思ふ。
○徂徠が天守臺から見たものは間ノ岳であるが、其爲めに間の岳と北岳を混同して『國志』が書いてあるとは不當云々。
辯、『國志』が北岳なる名を明記してなく、北岳と想はるゝ記事が曖昧であつて、徂徠先生の文章を文句なしで其儘に引用してあるとすれば、さう疑ふのは無理でないと思ふ、斷章取義と云ふ事もあるが、本書の如き性質の地理書の、あの場合では適用することが出來まいと思ふ。
○徂徠が間の岳を白嶺と呼んでゐるのは、一面

に於て、北岳のつもりでゐるとやうにも解さる云々。

辯、十二分に讓歩して、『國志』時代に北岳を認めたとしても、徂徠先生の白嶺を北岳に解さると云ふのは、無理だと思ふ。

○荒川岳の所在。

辯、荒川が間ノ岳から出るとして、『國志』に荒川岳が白峰の支山とあつて、間ノ岳が荒川岳で無い限りは、私の見たものに此名を付するは當然であらうと思ふ、北岳と間ノ岳の尾根には、一座を構へる程の餘地が無いやうである、私の指すものは、たしか甲府方面から見へるやうである。

○白峰の汎稱云々。

辯、コレハ我もさう書いて置いたから、抗議される性質で無いと思ふ。

○徂徠が間の岳を北岳と考へ違ひをしてゐたものと强いて解釋云々。

辯、强いて解釋なんかしない意だ、峽中紀行を讀んで見れば分る、元來徂徠先生は、北岳も間ノ岳もテンデ知らないのだから、考へ違ひも何も無い、白峰（間ノ岳）が見へて、シラネと聞いたから、漢文流に白嶺と書いたまでだ、夫れを北岳とも解されぬ事もないなんかと、强いて解釋するにも及ぶまいと思ふ。

○徂徠の一文が間違へてゐたら、『國志』の著者も、其時代も間違へてゐると云ふは非云々。

辯、第三說の三番目の辯解と、前條の間違つて居ないと云ふ說と、諸地圖に北岳と間ノ岳が區別してないのを以て推測して知る。

○太田公園邊で北岳が見える云々、清水某が北岳と間ノ岳を間違ふやうな粗忽はしないと思ふ云々。

辯、太田公園邊から見える位にまで精細に注意して居たとすれば、今日我々がコンナに議する必要はないのである、白峰三山が圖書に記載されぬので、充分知ることが出來ると思ふ、清水某は比較的に知識が有つたのみであらう、現に八ッヶ岳の說明が少しもないので知れる、私は清水某の指した金峰山と云ふのが、八ッヶ岳の

やうに想はるゝが、未だ攷證する材料もないから確言は出來ない、要するに小島兄の御說のやうに、當時の人々が注意したり、淸水某がそのやうな山岳通であつたら、白峰三山が『國志』などには猶ほ詳細に記載さるべきの理だと思ふ、これは水掛論と云ふものだ。

○晃平を買ひ冠つた云々。

辯、我の考證と合するから、買ひ冠りであるまいと思ふ。

小島兄の序に言ふ云々は、七年の二號三號に枝葉の論として意見を陳べたからこゝには略する。

以上の理由を以て『甲斐國志』の記事は誤謬でなく、當時の人々は現今の北岳を認めないで、間ノ岳を以て白峰の最高と想つて、專ら白峰と稱したものと斷定した次第であつて、「談何ぞ容易なる」と云ふつもりでも無い意であつたのだ。

兎に角小島兄の御說の結尾の「之を要するに」以下と、最初の「雪寃どころか、誤謬の追訴狀を提起」の邊とは、如何にしても兄と一致することが出來ない、妄言多罪。

最後に七年三號に解說した諸地圖に、八ッヶ岳から七面山、身延山までに、如何なるものが列記してあるかを示して、參考に供して置く、勿論自說を確信して居るから、單にシラネとあるものは、白峰連嶺の代表者として、間ノ岳に見て置く、諸地圖が峽中紀行を根據としてあるらしいから、峽中紀行の白嶺は今日の間ノ岳であることは、小島兄も御異議がないのであるし、別に牽强附會と云ふ譯でもなからうと思ふ。

「甲斐國全圖」の觀音岳は、鳳凰山の正面に記してあるから○○○を施して置く。

文字は岳、嶽の區別はせぬが、他は一切原圖の通り記した意である。

「甲斐叢記」の地圖は、「甲斐名勝志」のものを、其儘に載せたらしく思ふから、重きを措かないのである。

諸圖の中で、表には省いたが、左の二圖を揭げて置くから、古圖の記載は、ホンノ見當だけと云ふ事を承知して貰いたいのである、「增訂路程便覽」

は、嘉永元年（二五〇八）の出版で、「東北十五州之圖」は慶應四年即ち明治元年の出版である。（高頭式）

間の岳に現出する農鳥に就て

白峰三山の内、農鳥山に殘雪が、農鳥形になつて、現出することは、既に本誌で私が「白峰山脈の記」の中で書いたし、この農鳥は、今では可なり登山者の間には、知られてゐるであらうと信ずるが、先達て甲府へ赴いたとき、日川中學の敎諭、田中復氏から聞いたところに依ると、農鳥山の農鳥の外に、同じ三山の間の岳にも、立派な農鳥が現出して、それは日川中學校舍の三階から、鮮明に見えるさうで、東八代、東山梨郡、殊に汽車のトンネルを越した奥野田（オクノダ）村邊では、この間の岳に出現する農鳥の方をばかり、注意して、氏が農鳥山の農鳥の方に、注意するに對して、「農鳥といふのは、眞ン中のぢやないか」と言ふてるさうである、村内の古老（農夫）も、多年同校の小使を務めてる土地の男も、はては子供まで、皆さう信じて、間の岳を仰いで農鳥が出たと言ふさうだ。

この農鳥は、間の岳の二つのストライキの間の、雪の深い澤へ、鵜狀になつて、尾を北へ、嘴を南に向けてゐる、さうして大きさは、農鳥山の農鳥よりも、同じくらゐか、むしろ間の岳の方が、此地からは、肉が肥えて大きく見えるさうで、本年の六月十日頃には、見えたが、私の入峽した七月五日には、消えてしまつた後である。（尤も當日は曇天で、高山が一切見えなかつたから、假令殘骸があつたにして、見ることは出來ないのであつた）農鳥山の農鳥の方も見えることは見えるが、格好が宜くないとのことであつた。

私はこの話を聞いて、歸宅してから後、もし間の岳に、農鳥が見えて、農鳥山の農鳥に、土地の人が注意を拂はないとすれば、間の岳を農鳥山と呼んでゐるかも知れない、然らば私の農鳥山と、白峰最高點の北岳を、其土地の人々は、何と呼んでゐるだらうかといふ疑問が起つたから、同氏に

照會したところが、同氏は左の回答を寄せられた、前の記述と重複したところがあるが、更に詳悉してゐるから、全文を掲げる。

御尋ねの北嶽農鳥二山の名は、當地方（東山梨、東八代二郡）にては、村内物知りと稱せらるゝ人々すらも、個々に三山の名稱を呼ぶもの、殆んどなしと申して、差支へなく、たゞ「白峰」と申居候、御存知の如く、元來甲州人は盆地を中心と致して、東境の一帶を總稱して「東山」と呼び、西境の一帶を「西山」と呼び居り候、「白峰に雪が來た」と申すより、「西山に雪が來た」と申す方、多く耳に致す所に候、故に「彼れは白峰だ」と敎へくるゝものあれば、實に上等の部類と存じ候。

次に「農鳥」に就て、見聞せし所、更に報告申上候。

現出の場所　間の岳（北より數へて第二塊）の絶頂より、東南に走れる二大尾根間の、雪深き澤、間の岳全塊の先づ中央部。

形狀　山鳥に似るともいひ、雄鷄に似るともいふ。

季節　初夏春蠶の終る頃（年により、多少の差あるは勿論）即ち六月十日前後の、農が忙がしくなり初むる時、及び秋白峰の初雪と共に、現はるゝものにて、年二回現出す。

白峰の初雪　大正元年九月三十日
　　大正二年十月二十八日

例年十月下旬の方、多しと記臆す。

初夏の時は、雪の融解に從ひ、鳥形に黑く山の肌を露出す（農鳥山の鳥形は、雪の鳥形に消え殘るもの）秋の場合は、他の部分に比し、此の部分降雪薄きため、鳥形を現はす、十月下旬は、稻刈、麥蒔に入らんとするの時、鳥の大さは、農鳥山の、額頭に現はるゝものより、稍々大に候、日川あたりよりは、間の岳のものは、分明に見え候が、農鳥山の方は、注意を用ひざれば、看取致し難く候。

なほ農鳥の現はるゝ以前、已に卵形をなし、雪の漸次とけゆくに從ひ、鳥形を成すといひ、その變化の樣を見て「未が農がわかい」などゝ申す

由に候、中央の山に、農鳥が出るとは申候が、「農鳥山」と申すものは少なく候、これ農民より見れば、山名などは、農には、餘り交渉これなく候が「農鳥」にいたりては、密接の關係あるによるかと存せられ候、且つ村の青年、日川の中學などは、農鳥の現はるゝ位は、存じ居候が、曖昧なるもの多く、これに反して、老農に質せば、精確に示教致しくれ申候、甲斐國誌、白峰の條を讀下致して、國誌の農鳥とは、或は此の鳥形を指したるには非ずやなどゝ、愚考仕候。

以上は氏の書簡文であるが、西方の鳥形に就いて、根本的に異なる點は、農鳥山の農鳥は、殘雪そのものが鳥形をなすのであるが、間の岳の農鳥は、雪から塗り殘された岩石の部分が、鳥形をなすことである。

元來農鳥山の農鳥は、私の記憶が誤まつてゐなければ、當時甲府中學の教諭をして居られた友人野尻正英氏に、農鳥の山名の由來を述べて、かゝる鳥形の出現に就いて、報告を乞ひ、同氏は山の殘雪を注意されて、立派な鳥形を發見せられ、忠實にスケッチせられて、その數枚を私に送付せられ、私がそれを本誌に於て發表すると同時に、白峰三山を北から順に、地勢や『甲斐國志』その他の地理書類から考へて、北岳間の岳農鳥山と斷定したのであつた、實際農鳥山の農鳥の方が、甲府から見ると、尤も著るしいやうであるが、萬一古來から認められてゐるのが、間の岳の方の農鳥で、それを昔の人が農鳥山と呼んでゐたといふやうな、記錄でも發見されたら、三山の名稱考定は、面白いものになるであらう、併し目下の私の考へでは、やはり前記三山の名稱は、動かないものであらうと思つてゐる、農鳥山の農鳥を發表した責任上、御隣りの間の岳の農鳥をも、聞いたまゝに公表して置く。（小島）

附　記

本號に載せた白峰三山の、水彩畫一面は、東八代郡金川原からの寫生で、日川中學校の角田裕吉氏の筆である。本年五月の作

白峰三山に就いては、その後高頭君から、精細の考證が出て、

本號に亘つて完結してゐる、同君の考證該博にして、戰線弘大に及び、しかも御議論の主調が、動搖して、私には異議だらけであるから、各項に亘つて、同君の御議論、及び同君の後詰を承はつてゐられる机上談山の筆者の御議論に對し、長文の辯駁を書きたく思つてゐるが、これが頗る長いものになるので、書かない前から、實はウンザリしてゐるのである、愈よ取りかゝるとなると「山岳」の編輯間際でなければ、雜錄一つ書けぬ多忙の私（何も私一人だけが多忙だとは言ない）が、外のことは何にも出來ない覺悟をしなければならぬ、これを書いて、又諸兄の高論が出、又私が御相手になるものと假定して見ると、こんなことに時間を潰へすのが、不必要で且つ愚であると、私には考へられるから私は私の信ずる通り、諸君は諸君の信ぜられる通りを、行くとするより外はあるまい、現に高頭君自身すら、或點では「自分等が好な方へ持つて行くことになるから、どうしても水掛論になり易くて際限がない」と認められてゐる、かういふ種の議論の性質として、そこまで行つて、根氣が無くなつて、物別れになるのは、止むを得ないことであらう、畢。

登山記念の千社札

近頃新聞を見ると、好事家が、よく寄り集つて、千社札（一に納札といふ）の交換會をやつてゐる、

これは何人も知る如く、江戸時代に流行して、今日まで絶えず行はれてゐるところであるが、登山家が、高山に登ると、記念のため、山頂の石祠や、木祠に名刺を納めたり、又は三角測量標に、名前を書いた木札を打ちつけたり、落書したりしてゐるのがある、それから思ひ合せて、私は同趣味者にだけ言ふことであるが、登山家も、千社札を製作して、記念のために、遺して置いたら、面白からうと思ふ、尤も神社佛閣の堂宇に、千社札を貼りつめて、汚なくする恐れがある如く、山の岩石や、神祠に、かういふものを遺して置くのは、俗氣があるといふ異議が、出るかも知れないが、ペンキで塗沫したり、商賣の廣告をするのと異なつて、小さな、しかも耐久性のない紙片で、記念の意味を充たせば、足れるものであるから、山を汚辱するやうなことは、萬無からうと信ずる。

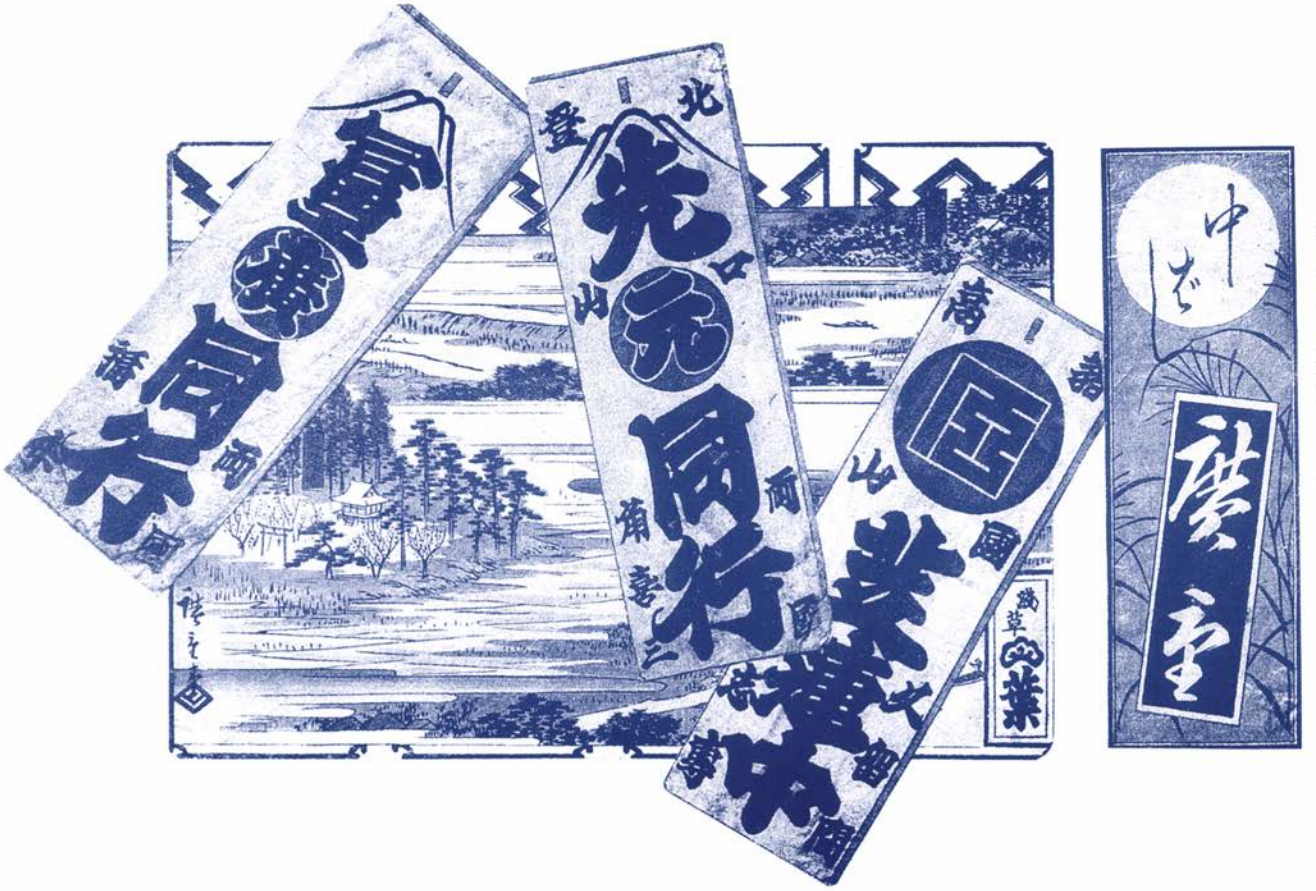
元來千社札なるものゝ起原は、ヒマラヤ山下から始まつたもので、佛弟子が、佛陀の靈蹟を順禮するとき、香華を供へ、文を刻した石柱を建て、參拜の紀念にした、奈良朝時代に、我邦から唐に

入つて、法を求め新智識を齎らして歸朝した諸高僧は、彼地の風習を學んで、佛閣を巡拜したが、その後に至つて、三十三ヶ所觀音靈蹟（これは觀世音が衆生濟度のために、三十三身に化身したといふ宗傳から、設けられたものである）や、六十六部順禮や、八十八所、四國遍路などが起り、各靈場に參拜する毎に、紀念の札を打つて歩いたもので、花山院が女御の崩御を悲しまれ、御發心（寛和二年西暦九八六年）の後も、御修行のために、各靈場を參拜して、御詠を札に書いて、納めさせられもものである。

下つて武家の時代となつてからは、慘虐なる兵火が續いて、人民は戰死や掠奪のために、父子離散、一家荒亡の厄に遭ひ、死者の冥福や、後世を祈るために、順禮をして歩いたもので、永正七年（西暦一、五一〇年）天文十五年（西暦一、五六四年）頃の西國順禮の納札は、今でも稀に存して、好事家に十襲珍藏せられてゐると聞いた。

斯の如き敬虔の念から始められた納札なるものも、江戸時代となつてからは、宗教も形式に流れ、廻國修行を、市内に縮寫して、六地藏、六阿彌、九品佛、十二藥師、三十辨財天、四十八地藏の類の如き、模型的靈場を設置し、遊山を兼ねて、おもしろおかしく群集參拜し、比較的眞面目に參拜するものは、社會の生存競爭から、失敗した殘存者が、圓頂黑衣、又は笈摺の順禮姿となつて、遁世的に行ふに過ぎなくなつた、一は遊戲衝動の參拜沙汰が、反感を起させ、一は社會の下層階級であるために、對手にされなくなつた。

しかして納札を、千社札と言ふのは、江戸時代に千社參と稱して、神社佛閣相手嫌はず、數の多きを貪ぼつて、一千に充つるを大願とした徒輩が、紀念と名聞とを兼ねて、名を記した紙札を、堂柱社扉に粘貼することが流行し、職人手合が多いから、人駭ろかせに、手の達かぬ高い棟へ「振出し竿」と稱する別工夫の繋ぎ竿で、貼りつけたり、貼札にも奇拔な趣向を考へ出すやうになつた、即ち芝居の番附のやうな、勘定流の文字で、各を書いたり、わざと人に賴んで、和蘭陀文字でひねつたりして、耳目を聳動させることを、主なる目的



千社札の數々（小島烏水氏藏）

とした、之に江戸勤番の諸侯家士が加はつて、駿馬の遠乘で、近郷近在の名ある神社佛閣に、貼札するものが出來たゝめ、千社參りも負けてゐずに、納札順禮の戰線を、遠い郊外や近國にまで、ひろげるやうになつた。

併しその流行と、奢侈と、遊戯三昧は、文化文政の江戸末期時代に至つて、頂點に達し、觀音の開帳には、納札を賣る商人あり、納札器具の專門製造あり、「納札起原」といふ書を著はす通人あり、千社札の道中を描ける滑稽小說あり、神主や僧侶と衝突を防ぐため、符牒の合言葉が作られ、通人の煙草入、服紗、風呂敷、羽織裏等に、千社札を染め出し、江戸藝者までが、一丁札、四ッ切の小札を、簪に挿すまでになり、千社札の趣向も、豐國、北齋、廣重のやうな、浮世繪の大家の手にかけて、極彩色何十度刷、半紙大ぐらゐの錦繪的紙札を製作し、その圖柄も、俳優遊女の似顔から、醜汚なる夜鷹までも描き出し、頽廢腐爛の社會の病弊を、縮圖にした感があつた。

さすがにこのやうな色彩入りの千社札は、神社佛閣には、遠慮して貼らず、只だ千社札交換を目的として、同好者大集會の席で、相互に交換したまでのことであつたが、その交換會は、高名な料理屋は言ふに及ばず、遊廓から屋形船の中にまで、催ふされ、豪奢を極盡したもので、色々な逆中が出來、群雄割據の狀態であつた、さうして江戸幕府の滅亡、舊風俗の衰頽と共に、かゝる豪奢なる千社札交換會と、淫靡なる千社札は、影をかくし、今日では、比較的眞面目に同趣味者が、時々催うす會合に行はれてゐる。（以上千社札の歷史は、朝倉無聲氏の調査から、借りたもので、私に何の創意もない）

併し私は、座して交換を旨とするやうな、千社札は作りたくない、交換するといふ目的は、虛飾や虛榮の伴ふことを免かれないから、いきほひ不純なものになり易くなる、山岳は自然の精舍、森林はその精舍の扉である、私は雲霧を冒して、この精舍に詣でたとき、身に泌み入るやうな法悅を表示するため、懷にした一枚を献げて、せめては自然との交歡として、山を下りたいのである、今まで私はさういふ場合に、名刺を殘して置いたので

◎雜　錄　登山記念の千社札

あるが、西洋紙に活字で、姓名宿所を印刷したものが、いかにも事務的（ビヂネスライク）で、自分の目的にそぐはぬこと夥だしさを感じる、落書も禿筆を遠慮したく、木札は持ち運びに不便である、かゝるとき私は千社札が、最も適當であると考へる、こんなことは、自發的なものであるから、人に勸めるべきものではないが、又人から妨げられるべきものでもなからう、只だ同樣な感じを抱く人々に、示すまでゞある。

その千社札なるものは、どんなに作つたらいゝかと言ふと、足利時代の納札寸法は、大凡縱一尺二三寸横二三寸の細長いもので、木製のものが最も時代が古く、銅製又は眞鍮製のものが、之に次いでゐる、これ等のものは、願文や經文を認めたものがある、併し江戸時代のものは、もつと微少に、簡易になつて、縱二寸六七分、横六分ぐらゐの小片になつた、單に交換を旨とする千社札は、大小一定せず、大は錦繪のやうなのもある、私が登山用にしたくおもふのは、永久に保存する必要を、毫頭認めないから、小紙片で、又粗末な紙で充分におもふ、それから人に見せびらかすものでないから、華美な彩色は斥けたい、併し實務用の目的でないから、活字姓名印刷のやうな曲がないものも好まない、人々の趣味、嗜好、又は審美心もあることであらうが、山の關係のある、美術上のあつさりした意匠は、用ゐたいとおもふ、少なくともの私の好みはさうである。

こゝに掲げた千社札の中二葉は、江戸時代の富士講中、北口登山講で、他は諸國高山の分二葉である、例の職人連中の用ひた納札で、下品なものであるが、登山用が珍らしいから出したわけである、繪の方は、浮世繪師歌川廣重の作で、隅田川から木母寺、關屋の里を地形圖式に構圖したもので、藍と赤が主なる色調となつてゐる、これは交換會用で、實際社殿に納付したものではないが、役者遊女繪等の千社札全盛時代に、瀟洒の作品だから、掲出したのである、私は此外に廣重作の、千社札、江戸八景八枚續きを藏してゐる、黑と白の二色で、江戸前の粹な構圖であるが、登山に關係がなくなるから、さまでとは、略することにした。（小島）

八ヶ岳森林の大伐採

信州八ヶ岳は、高山植物の豐富なことに於ては、日本アルプス中、白馬岳に次ぎ、他のいかなる日本の高山にも、すぐれた寶庫として知られてゐるが、森林に於ても――森林の最も、稠密に繁茂してゐる信州に於ても――三大國有林の一に數へられてゐたものであるが、本年は、南佐久郡臼田小林區署長が出張の上、五月四日から、伐採を開始し、八ヶ岳山林中、字黑檜澤から、南佐久郡南牧村の甲州街道に達する延山原といふところまで、四哩三分の一の間に、鐵道を敷設し、伐採木材を拂ひ下げてゐるさうだ、昨年は、この森林から既に一萬尺〆を伐採したが、本年も亦一萬尺〆を伐採する豫定で、鐵道終點から奥十町の間は、木馬道を敷設し、出來次第目覺ましく、斫材搬出をするさうだ、全山には樅、柾、檜、榧、山毛欅が多いが、今回の伐採は、樅のみで、三本中から一本宛順伐することにして、年々四萬尺〆を、二十年間計畫で、伐り盡くす計算であるさうな、目下は只だ運搬問題で、惱んでゐるが、信越線御代田、及び小諸驛方面は、交通機關不備であるため、甲州小淵驛の方へ下す計畫であるとか。

おもふに山岳地の豐饒な國有林は、それがいかに美麗であるにもせよ、當初からの目的が、殖産にあつて、一年の或短時日に、少數の登山客の觀覽に供すやるうな、優長な目的のために、經營されてゐないにもせよ、斯の如き稀有の大森林を、禿することは、地味や風土に及ぼす影響も、少なからぬことであらう、されば當局に於ても、伐採に供する傍ら、それを塡補するだけの、植林計畫は、立てられてゐるであらうとは信ずるが、森林が漸次敗滅せんとする徵候が、著るしく看取せられる今日に於て、吾人に胸の鼓動なくして、かゝる報知を受け取ることが出來ないのを、遺憾とする、切に當局者が、森林愛護の途を、講ぜられんことを望むのである。（小島）

甲斐の口碑と傳說

左に掲げたのは、甲府商業學校本科第二學年生徒諸氏が、夏季休暇中、鄕土研究の一部として、口碑や傳說を報告せられたのを、蒐集したもので、山岳に直接關係はないが、山岳村のロマンスとも見るべきものがあるから、同校敎諭小澤義正氏の好意に依つて、之を本誌に收錄することにしたのである。(小島)

□清田村行逢橋の化物　行逢橋は又大橋ともいふ此處には古き云ひ傳へ多きが內に、野の宮の謠をうたへば化物の出づるといふ話あり。されど誰も試むる者なかりしが、去にし頃紫宮の神主なる人我が叔父正親といへるを師として謠を學び、每朝早くより稽古に來れり。此の人或朝この橋の上にてふと思出し野の宮の小謠うたひしが、何の怪しき事もなし。さては例の迷信よとほくそゑみつゝ二三町行き過ぎし時、何處より來りけん一人の美人乳呑兒を抱きたるが行き逢ひ樣『もし〳〵甚だ恐れ入りますが足袋のこはぜを掛ける間、一寸此の兒を抱いて下され』と乞ふ『さらば私が掛けてやらう』とかゞみながらふと見れば件の美人は忽ち鬼女の姿と變り眼をむきて今にも喰ひつかんとするにぞ、之はと驚き一目散に走り來り我家の玄關にて打倒れたり。此の時家の人々物音に驚きて出來り、手當をなして漸く息吹き返したりといふ。

□廻り木　今は昔、荒川の堤切れて平原一面に潮と化したる時、北部の山より龍流れ來りしが、大橋の傍なる榎の木を廻り再び元に歸りたりといふ廻り木といふはこの故に名づけたりといふ。この洪水は何時頃か定かならねどその時の枕木といふもの今も我家に保存しあり。我が家の龍淵齋と號するもこれが爲なりと父なる人の物語れり。(以上二件磯部正董)

□小泉村の天狗の木　大井ヶ森の西部に在り。樅の木にて實測一丈八尺九寸あり。昔此の木を伐らんとせしに中に幾多の蛇居て伐る能はざりきとぞ。(板山國廣)

□松島村の法印堀　松島西町と天狗澤との間に在り。戰國時代に此の邊に大戰爭ありし時、或一家

既に危くなりたるを一人の法印この堀に飛び入り家族の難を救はんとて血の雨を降らしたりといふ。（一條近雄）

□勝沼町の藤切祭　勝沼町の藥師如來は武田勝頼が天目山へ遁れし時立寄りし跡として有名なるが、此の如來の祭の日午前に風が吹けば桑葉の價貴く午後に吹けば安しといへり。藤切祭はこゝにて行はれ、その藤を多く取りたる者は其年の蠶があたるとて競ひて取るを例とす。尚ほ、上地藏、さすり地藏等ありて、願事ある時容易く持上がる時は願がかなひ、重き時はかなはずといひ傳へたり。（萩原正高）

□古城の竹　甲府城北古城の竹を切れば割菱の形ありといふ。これ武田氏の緣故によりてなりとかや。又其堀の泥鰌は山本勘助に似て片眼なりとは誠か。（萩原弘太郎）

□宮本村の逆竹　宮本村高町に在り。昔日蓮行脚の砌金櫻神社に參拜せんとして此地に滯留し御嶽に日參して新誓せり。其時上人、竹杖を地にさして去れり。然るに日を經て其杖に枝葉を生じ今尚繁せり。

金溪子曰く、此の竹今尚ほ余が邸内に在り。又日蓮柿と稱する澁柿あり。蔕の上部に蔕の如き肉を生ず俗によだれ柿とも云へり。此の柿亦日蓮の植ゑしものといふ。

□太刀岡山の舊蹟　宮本村と清川村との境に在り古昔日本武尊此地に太刀を納めて山神を鎭め奉りし跡にて古くは太刀置き山と云ひしを中世岡に誤りしなりと云傳ふ。（以上二件細田敬一）

□東桂村の御南淵　御南淵は鹿留川に在り。昔この淵が膳椀を貸したりといふ話あり。若し膳椀の必要ある時は其附近の岩上へ紙に何人分と書き『お頼み申します』といひて翌朝見れば河原に並べあり。返すには以前の樣に並べ置けりといふ。然るに或時村民某面白半分に、一人分丈け返さざりしかば其後は如何に願ふも貸さずなりきといふ。其時の膳某家の重寶として今に存せりとかや。（大久保正喜）

□大阪崇禪島の敵討　十三停車場に崇禪寺といふ寺がある。正德年間和州郡山の藩士遠城重次安藤

光乘の兄弟が其敵生田傳八郎の爲に欺討せられ、無慘の最後を遂げたのを寺僧が憐んで葬つたといふ。今も兄弟の遺物が存して永く恨を傳へて居る不思議な事にはこの敵討の芝居をする時、兄弟の靈を祀らないと俳優の身に異變があるといふ。

（太田榮）

□在家塚村金山神宮の餅　金山神宮の下に長さ二間幅一間位の卵形の石あり。いつの頃なりけん此の地の人通行の武士に恨ありて、むごたらしく殺害し此山に埋めたり。然るに其夜より件の家に怪しき大音を生じ、日を經て大きく且つ其家と同じ紋なる丸形に井桁の紋の家は皆この不思議あり。神佛を祈れど甲斐なし。遂に件の人も後悔の心を生じその武士を神に祭りしに怪聲やめりと、今も丸に井桁の餅を作りて祭れり。

□稻荷の怪　下村の稻荷に松の大木あり。或時此の上に一匹の狐居りけるを、土民銃を以て射しに狐は逃げ去れり。然るに其翌日より二匹の白狐現はれて村内を荒し、かの獵師は『狐つき』となれり。よりてこの人その松に釘を打ちて己が罪を謝し堂を作りて祭りしに、程なく全快せり。今も祭を怠れば白狐の害ありと云ふ。

□北村地藏　昔ある人甚だ子煩惱にて道傍に出ては通行人の金錢物品などを取りて、子供には自他の別なく分ち與へたり。其の人死して後石像を作りて祭れり。今もその祭絶えず。（以上三件若尾藏之助）

□榊村の木馬　高尾山穗見神社に木製の馬あり。左甚五郎の作といふ。昔はこの木馬附近の田野山林等を荒したれば、こゝに祭りしに其害止めりといふ。（川崎昌訓）

□下諏訪の御船祭　諏訪下社は健御名方命夫婦を合祀せしものにて、社殿は春宮秋宮の二ヶ所あり正月元日神輿を秋宮より春宮に移す。此日御船祭として靑柴を船に擬し夫婦二神を是に乘せ裸體の人夫數千人（今は法被を着る）これを荷ひ三度社地を廻りて秋宮に入るなり。此祭は往古健御名方命の船遊に擬するなりとかや。

□高座石　下蔦木敬冠院の境内に在り。日蓮上人佐渡に竄流せられ、後免されて鎌倉へ還歸の途次

當院にて石上に坐し二日三夜の說法ありし地なり其石を高座石又轉石ともいふ。石の大さ高さ七尺徑一尺以上は二段となり、下段に祖師の龕あり。繞すに石の玉垣を以てし、蔦の古木石の端より生じ、一基三株に分れ石に據て茂生し一株は已に枯損したれども、二株は蒼然として石を纏へり。枯れたる一株こそ實に祖師の御手に突かれし杖なりといひ傳ふ。

□諏訪湖の神渡り　諏訪湖に七不思議といふ事あり其中にも殊更奇妙なるは冬季結氷の時神渡りといふ事あり。冬の初め湖水の水のやゝ厚く氷れる時、一夜湖上大なる音して物を引きて通るが如し夜明けて見れば氷の上を一文字に格別の大石か大木などを引きて通れる如く氷面左右に分れて一筋の道つきたり。是にて神渡り濟みたりとて其後は人馬往來して過なし。二月の末又此の事あり、其後は渡ると止むるなり。傳へいふ諏訪明神は狐を眷屬とし給ふが、此の神渡りは狐の神の命を受けての所爲なりと。(以上二件立石誠也)

□甲村の鈴石　いつの頃なりけん此村より若神子に通ずる斜坂(ななめざか)に三抱もある大きなる石なり。其石夕方に至れば鈴を振る如く鳴るとて、夕方は人通り絶え正り。村民等其石を何所にか運ばんとせしが、今の原山大神の所に來るや如何に力を入るるも動かざりければ、途に宮を建てゝ祭りたるなりといふ。(卷精一)

□大泉　昔或人諏訪郡より本縣に來る途中三里ヶ原とて八ヶ嶽の南麓の原を過ぐる時野火ありて其中に一匹の蛇今にも燒け死なんとして甚だ苦痛の樣に見えしかば、持てる杖もて蛇を助け出したりかくて數町行く程に後より呼ぶ聲のしたれば、振向き見しに年の頃十八九の乙女にて而も世にも稀なる美人なり。優しき聲にて靜に歩み寄り『妾は今あなたに助けられた蛇であります。其の御禮として是を奉りませう』とて三本の茅を白き手にて差出し『此茅をさせば其の所より水が湧き出します』とて渡すかと思へば姿は消えぬ。此の人怪しく思ひて其一本を大泉なる家に挿せしが、其處より泉湧出す。是れ大泉といふ村名の起源なり。今其傍に老橡あり神木と稱す其實落つれば神女之を

拾ふ。若し他人取り去れば必ず災ありといふ。余八九歳の時友人四五人と此地に遊びしが偶一人の乙女忽然として現れたるを見て大に驚きて逃げ歸りし事ありき。其乙女の何人なりしかは今も尙ほ怪しさに耐へざるなり。(藤森賢三)

□西條村の義淸神社　中巨摩郡西條村に義淸神社といふ社がある。甲斐源氏の祖刑部義淸を祀つた社であるが其前に小さな池がある。此所は昔義淸が戰に負けて首に刀を受けたる儘逃げ來り、此池にて首を洗つた所、首が落ちたといふ話がありて今も首洗の池といつて居る。又社の北にコンコン山といふ丘がある。義淸の甲冑や死體を埋めた跡だといつて居る。(深澤英哉、同秀德)

□富里村精進瀧の妖　昔近村の某此精進瀧にて網打ちけるに、意外の大漁なりしかば、今一度打たんとしける時、瀧壺の中に聲あり『今一度打つて見よ』といひければ驚きて逃げ歸り、それより網打つ者なしとかや。

□唐土大明神の奇習　同村字山高組に唐土大明神といふ氏神あり。社殿の格子に鰻を書きたる紙無數に奉納せられたり。傳へいふ此神鰻を好み給ふ故、村民鰻を尊信する事篤く若し此を捕ふるものあれば必ず盲目となると信じ居れり。(以上二件小林正明)

□金澤市の六地藏尊　金澤市淺野川のほとりに六地藏尊あり。何時も笑顏に何時も默つて合掌しておはす。何時の頃にかありけん此地方一体の不作にて大饑饉の事ありき。其時城內には多數の倉庫に米を滿しありたれば、市民の難を救ふには充分なりしが、國主は奧深き城內に在りて世の樣を知らず、家來は愈惡辣なる手段を以て市民を苦しめたり。茲に六人の義俠なる人あり、いかにもして城の倉庫を開きて市民を救はんとせしが、中間の惡人に妨げられて容易く目的を達するを得ず。計窮まつて城の向なる卯辰山に登り、天地に轟く大音もて『飯食へぬ!!』と叫び以て殿の耳に達せしめんとせり。其爲彼の六人は遂に死刑に處せられたれども、市民の難は救はれたり。よりて市民は六人の犧牲者の靈を慰めん爲め此の六地藏尊を祀るなりとぞ。(近藤淸)

□福岡村の觀世音　福岡村牛句に東妙寺といふ寺ありけり。境内に北山三十三觀世音といへる觀音あり。本體は龍王村の竹藪中より出でたる三體の一にて、一體は北巨摩郡なる倉原に、一體は南巨摩郡宮原にありて何れも諸人の崇敬を受く、この東妙寺の社殿は左甚五郎の作なりと傳へられ、くさび一本にて止めあり、其を拔かざればつぶす事能はずとて、多くの大工など參考として研究しつつありと。又社殿内に木彫の馬あり。是亦左甚五郎の作にて夜出でて田畠を荒す由にて鎖を以てつなぎ置けり。（雨宮豐）

□初鹿野村の起源　昔或る神信州より此地に來り狩獵を事とせしが、此村に入りて初めて鹿を得たり。此神現今の諏訪神社の境内に宮居し附近を狩す。これより初鹿野の郷と稱す。時に從者足痛あり温泉に浴せしに忽に治せり。此湯今も在り。又其神の携へたる杖の木を土中に樹てたるが其樹今も繁茂し神木と稱す。傍に杉の大木あり周圍十抱に餘る。曰く甲府三大老杉の一と。（佐藤晴信）

□貢川村上石田の女裝　貢川村上石田の氏神は淺間神社の祭の日神輿の立寄りて晝餐する處なり。此の日即ち四月十五日人足は必ず女裝するを例とす。傳へ云ふ富士淺間は女神なる故なりと、其眞否は知らず。（宮川榮三）

□大鎌田村の地藏田　大鎌田村の北部に在る田を地藏田と名づく。其田の草を取りに行けば地藏樣が見ゆるとて此名あり。（三神尙武）

□鳳來村のヘテキテ石　下敎來石の西方に經來石（てきていし）といへる石あり。古日本武尊東夷征伐の砌此石に腰掛け休息し給ひて『大川を經て來て石の』と上の句のみよまれたる跡にて、元來經來石と書けるを何時の頃よりか敎來の文字に改まりたるなりとぞ。（三井信臺）

□境川村の穴居の跡　住穴又は居穴などと稱へ丸く長き穴なり。普通に大きさ六尺深き三間程にて何れも横穴なり。

□矢の根石　同村に時々發見せらる。色は水晶の不透明なるに似たり。幾分の飴色を帶ぶ。長さ六七分やゝ三角形をなし一邊にくぼみあり。昔は數多かりしと雖も今は發見する事稀なり。（以上二件

清水行親）

□松島村の布敎塚　昔一人の僧侶が熱心になりて布敎に從事し、經文を讀みては石に示し、石に書いては布敎し、炎天雨天の別なく數年繰返し其處にて死にたれば塚をたてゝかくいふ。

□法印塚　いつの頃かまだ信州往還のなかつた時一人の法印松島に來かゝりたるが、甚だ餓ゑたればそこにありし堀の中の鯉を取りて生のまゝ食したり。然るに件の法印はその中毒にて死にたりよりて名づくとかや。（二件清水四郎）

□小泉村の天狗の木　大井ヶ森に天狗の木といふあり。太さ凡そ一丈五六尺位にて、大人四人にて卷くも殘る程なり。古或柚此木を伐らんとせしに細き肉塊及び血狀のもの出づ、怪しみて見る中に數間もあらんと思はるゝ大蛇幹の中よりいで來り其柚の手といはず足といはず卷きたれば恐れて逃げかへれりといふ。

□女取川の由來　いつの頃なりけん此の村に住める若き女ありけり。子供を背負ひて此の川のほとりを通りけるが、いと美しき魚の清き水の中に泳げるが見ゆ。女この魚をほしと思ひけん。背なる兒を傍に下し、さてかの魚を捕らんとて見れば見る程美しき魚なり。とかうすれども得ず、かゝる間に如何したりけん誤ちて水中に落ち溺れて死せり。よりてかく名づけけりとなん。（以上二件平井熊男）

□明穗村小笠原長清の墓　小笠原長清は新羅三郎義光の孫加賀美次郎遠光の二男也。今の小笠原子爵の祖先なり。仁治三年七月十五日京都に卒す。家臣等遺族を此村に迎へて埋葬せり。然るに其墓碑は今北巨摩郡小笠原村福性院にあり。されど碑に『甲州西郡筋小笠原曹源寺とあれば當地より移せし事疑なし。明治二十四年此地を開墾して石棺を得たり。よりて同三十四年十一月改めて墓碑を立てたり。（守屋剛明）

尾根といふ語

山登りを初めた頃、土地の人から、「尾根」といふ語を聞かされたとき、奇異に感じた、この頃では、そんな言葉を、奇異に感ずる人の方が、却つ

て奇異に感ぜられて來たほどに、慣れてしまつた、近頃活版に上つた自作の文章を、校正するとき、尾根といふ原文を、注意して書いてあるにも拘はらず、植字校正係に依りて「屋根」と訂正されてあつたことが、三四回あつた、その校正係は無論尾根などといふ名詞を聞いたことがないから、誤字と判斷せられたらしい、試みに大槻博士の『言海』その他主なる辭書を繰つて見たが、「尾根」の語は一向に見當らない、尾根の語原は、「尾の上」の略であらうか、「尾の上」は峯の上の約で、山の高きところ、もしくは山巓を意味してゐる、兩方とも「尾」の解釋には、異存が無いとして「根」は「の上」の約であるかといふと、これも『言海』は「根」の條に「の上」の約ならむ、常に根と書す、筑波根、富士の根、甲斐が根、など例證が上げてある、これで見ると「尾根」と「尾の上」なる古い時代からの語と、全然同一物と解して、一向に反對を受けないやうであるが、扨今日、山民が實際上、尾根なる語を用ゆる地形に就いて見ると「尾の上」即ち峯の上、又は山頂などいふ汎い解釋とは當てはまらない、土地の人に依つて、尾根なる地形の解釋を、必ずしも嚴密に、同一にしては居らぬが、既成の語で當てゝ見ると、英語の Ridge 即ち山脊又は山稜などゝ譯するものに似てゐる、Ridge は屋棟、又は堤防の、高部の如き隆起線で、「峰の上又は山頂」の中の、或一部の特殊なる地形である、脊骨 (Ridge-bone) 棟瓦 (Ridge-tile) など、高まりて、脊狀に長く列なれる隆起線（隆起點といふ如き、狹き地域でなしに）で、「八丁尾根」なる語の如き、おのづとその棟狀の細長き隆起線を示してゐる、或は尾根は「うねり」といふ如き語を、含むとも解せらるゝが、尾根の地形は、必ずしも蜿蜒といふ如き、波浪狀の形態を必要としない。

そこで「尾根」といふ語は、今までは、地方語、山民語で、物の本などに、見えてゐないものと信じてゐたところ、泉鏡花氏編の「俳山水」を見ると、駿河の部に芭蕉翁の

一と尾根はしぐるゝ雲が富士の雪　寛永元祿　芭蕉

とある、出所も擧げてないし、可なり誤植の多い本だから、念のため原本とおぼしい俳書を調べ

て見ると、泊船集（翁は京洛の東山に位して、泊船堂と號せられてゐた）に、正に此句が載つてゐる、拾遺にも、句集にもあつて、貞享四年の作である（異本を校合して見ると「富士の雪」を「富士の山」に作つてあるのもあるが、最もおかしいのは「尾根」がお定まりに「屋根」と誤寫してあるのを見受けたから、この誤植は、御先祖傳來と見える）ともかくも、芭蕉の句といふやうな、古典的の文學に、尾根が出て見ると、この名詞も、山の奥だけに引ッ込んで、遠慮してゐるには當らないのである、さうして俳句が俗語でも、方言でも、窮窟な選擇なしに、取り入れて作をしたところに、平民文學として、又日本獨特な純粹なる詩形として、永く生存してゆかれることを思はせる。（小島）

富士山の豆蒔小僧

下圖は富士山の雪の消え殘つた部分が、笠を冠つた小僧と、豆蒔小僧の形をなしたのを、寫生したもので、甲府方面から見た富士である、この小僧等が見えると見えないとは、やはり同地方の農業に、關係のあることになつてゐるさうである。

圖は明治四十二年五月の所見で、かつて野尻君が、私にスケッチして送られたものである、大きいのと、小さいのが、二人並んで、向つて左の小さい方が、片手で豆を蒔く、所謂豆蒔小僧の形、それに連なつた右の方は、笠（白く細い横線を指さす）を冠つてゐる小僧で、場所に依つ

ては、これが富士嶽の形にも見えるさうである、さうしてこの小僧二人の現出する場所は、富士山の白山ケ岳（ハクサンガタケ）より、殆んど直下した皺折の下部である。（小島）

山梨山岳會講演會

七月五日、甲府市の縣會議事堂に於て、山梨山岳會主催の山岳講演會が開かれた。

なんでも、去年十一月一日夜の事と思ふ、日川中學校及び甲府商業學校の教諭方や、私達が、市の舞鶴城内山梨教育會の一室に、初めて山梨山岳會を起すと云ふ相談をしたのは――その晩は、月が冷たく澄んで、すつかり雪を破つた白峯連嶺が、わだつみの底に、銀の玉を並べ置く樣に晴れた、空にくつきりと浮び出して居たのを忘れない。それから尙ほ數回の會合を經て、其の年の暮れには、山梨山岳會の成立が、縣下の各新聞紙に依つて報せられ、山岳會發會式が、甲府商業會議所樓上に開かれたのは、本年の一月であつて、會員は四十餘名に上つて居た、其の後、山梨縣廳の林務課員や、當時の本縣警察部長前田秀質氏なども、入會する、縣の方からは、其事業たる山梨山林會へ、合併して呉れと云ふ樣な話しもあつた、四月には山岳會の第二回が開かれ、本年七月、愈愈會則に從つて、大會を開く事になつたのである。

山梨山岳會に就ては、以上記す如くであつて、成立早々ではあつたが、會員の熱心は、財政其の他總ての障礙を排して迄、大會を開くに至つたのである。私は幹事會に於て決議された小島烏水氏の講演を氏にお願ひして、快諾を得た、そして七月に入ると、甲府の町の到る所に、山岳講演會の辻張りが張り出された、甲府に住んで居乍ら、白峯の山も、滅多に仰いで見た事のない人々は、ためしもない此催しを、不思議さうに見て通る、白峯を背景にした七月の山國の町に「日本アルプスの研究と甲州山岳」と書き出された烏水氏の演題を見ると、山岳者の心は、もうぢつとして居られない樣なショックを感ずる、農鳥の紺地の額には、

烏形殘雪があざやかな影を現はして居た。

四日の午後、私は山梨山岳會を代表して、勝沼驛迄いつて、烏水氏を迎へた。此高原の驛は、中央東線の內で、山岳觀望に最も好適の場所であるが、其時はもう赤石の連山も、白峯の連嶺も、蒼茫として、夕靄の內に影を沒し、甲府平原の村々に、チラ〳〵と灯が見下ろされた。

夜の八時十何分かに、瀛車が甲府停車場に着く迄、私は無遠慮に、氏と語つた、その內には山岳會の事、山の事、溪谷の事が云ふ迄もなくあつた。甲府停車場で氏は多數の山梨山岳會員の出迎へを受けられ、談露館へ案內せられた。其晩は涼しい前栽を控えた宿の一室に、氏を中心として、會員の間に、話が滾々と溢れた。

五日は輝やかしい空を持つて明けて行つた。會員は朝から會場に出て、出品物の陳列、其他の準備に、忙殺される、開會定刻の午後一時前から、聽衆が詰め掛けて來る、十二時頃に、すつかり陳列を終つた、そして私達は餘り人の來ない內にと、改めて他所の物を眺める樣に、陳列品を見て廻つた、お願ひした烏水氏の出品がどうしても一番に異彩を放つて居る、加奈陀ロッキーの痛快な大連嶺の濤を寫した二間に餘る寫眞——烏の羽毛を差した登山帽やアイスネックスを見ると、全く豪壯な氷河の流れを思はずには居られない、故大下氏の水彩畫「湯島溫泉より赤石山」「新綠の穗高山」「六月の穗高山」も好いが私は「燒岳と梓川」の其の水の色が、堪らなく好かつた。烏水氏の出品は、此の外に中澤弘光氏「山岳圖案」二枚、河合新藏氏「富士スケッチ」四枚、丸山晩霞氏外數氏の肉筆繪葉書は、興味の多いものであつた、それから輸入した登山用具、登山服、リュックサックは會員の內で直ぐに洋服屋へ持參して、此通りにと誂へた者もあつた。「アルプスの山曆」ウエストン氏「日本アルプス」——。會員石塚末吉氏の高山植物標本四十餘種は苦心せられたもの、山梨縣廳から借り受けた百餘種の岩石標本と共に得る所が少なくなかつた。高山植物の栽培家として聞えた會員杉原伊三郎氏出品の、高山植物十餘種は、いづれも美事で、ウテウラン、ビランヂ、ミヤマシヤジ

ンの花が咲き匂い、剝製の雪白と褐色をした生々した雷鳥の姿に、九十度の炎暑も忘れて、身は萬年雪を被り壹萬尺を拔いて居る高山の頂きに立つて冷氣に撲たれる思ひがした。

聽衆は引きも切らず押掛けて來る、定刻本會幹事日川中學校教諭糸賀喜久太郎氏の開會の辭に始まつて、山梨縣林務課長中村三郎氏は「山岳會に對する希望」と題して、本縣人の生活が、如何に山岳と交渉の多きかと云ふ所から說き起し、山岳會に對して、諄々と語られたのは、吾人の大に感謝する所であつた、次に山梨師範學校教諭石塚末吉氏は「甲州山岳と人文の關係」の題下に、甲州人文の發達が反つて圍繞せられた山岳に負ふ所の多かつた事、又往昔信玄が、甲州四邊の山岳を利用し、金の採掘を名として、國境に兵を駐屯せしめた軍略などを說かれて趣味があつた。最後に烏水氏は滿場の拍手に迎へられて登壇、旣定の演題に依り一時間餘に亘つて講演を試みられた、氏の講演振りは、丁度淸冽な水が、深谷の間から、何者かを慕つて、淙々と流れて行く樣で、聽衆に息も突かせず詩味の豐かなのに、全く魅せられて了ふ、講演は氏がいづれ本誌に載せられる筈であるから茲に繰ゥ返す必要はないが、終りに至つてオスカアワイルドが「自然は藝術を模倣する」と云つたと邊りの說明に及んで、語る者聞く者が、渾然と融合して了つた樣に思はれた。斯くの如くにして、紀念すべき第一回の山岳講演會は閉ぢられた。

其の晩七時から、櫻町開峽樓の階上に、烏水氏歡迎晩餐會が開かれた、私は發起者側であり乍ら、眞に已むを得ぬ事情の爲に、出席する事が出來なかつたのは、遺憾であつた。

同氏は翌六日、朝早く鰍澤より、富士川を船で岩淵に出て歸濱された。鰍澤行の馬車が出る所で昨日から雲の爲に烏渡も山の線を見ないのは、殘念だと語られた。

私は終りに臨んで、烏水氏が多忙中に拘らず、當山岳會の爲に、特に講演をして下すつた事、又横濱の高野鷹藏氏が、種々御盡力を賜つた事を、深く御禮申上げなければならぬ。（靑柳白嶺）

茅ヶ嶽登山

甲斐の北巨摩郡の東部に峙つ茅ヶ嶽に、三年四月十九日に登山した、此山に登るには、龍王驛で汽車を下りて、松嶋村に出で、登美村の大字園子から、關屋街道と分れて、西北々に道をとり、登美村の大字、大笹、園子、新居、穗坂村の大字三津澤、宮久保、柳平の部落を過ぐれば、平野となつて、人家は無いのである。

赤松、落葉松、杜松（ネツミサン）、櫟、樅等の森林や、芝原の荒蕪地を一里歩めば、山麓である、茅ヶ嶽は別峯金ヶ嶽と共に、高く聳えて居る、山麓まで甲府市から四里、龍王停車場から三里弱である、茅ヶ嶽は、有史以來噴火した事のない死火山で、さうして噴火口のない塊狀火山である、茅ヶ嶽の熔岩流は、松嶋、登美、穗坂、朝神、江草の諸村に、丘陵となつて、其痕跡を留めて居るが、今は耕地となり、又原野も有つて、赤松や櫟などが茂つて居る、裾野は長者原、淺尾原で、廣漠三里、北西南の山麓を繞つて居る、自分の登山した日は、雲の多い日で、西北方は更に見えなかつた、赤石山系の聖ヶ岳、赤石嶽、惡澤岳、蝙蝠岳が見え、白峰三山は、僅かに其山頂を示し、駒ヶ嶽や、鳳凰、地藏、藥師觀望は、近く峙つて居る、御座石に、なほ雪を見、甘利山は樹木に黑かつた、駒ヶ嶽と鳳凰山との間が、甲府で見るより擴くなつて、朝與岳が屏風を立てた如く、横に大なる山容を示して居る、朝與岳の後で、駒ヶ嶽に寄つた方に、北澤峠、仙水峠が見え、鳳凰山の右肩に、巨峰千丈嶽が見えて居る、近く峙つのは御嶽山、黑富士で、黑富士の火山瀨や、熔岩の流れた痕が、明かに見えた、廿萬分一の地形圖には、五千五百尺以上になつて居るが、茅ヶ嶽は、四千四五百尺の山であると思ふ、附近の山と比較しても、さう思はれる。

茅ヶ嶽の山麓には、輝石安山岩や、粒狀安山岩、角閃安山岩がある、植物は赤松、櫟、杉、樅、落葉松、杜松などが多く、茅ヶ嶽には、赤松と山躑躅、櫟などで、草本にビランヂがある、低い山であるから、山上の眺望は、佳でなかつた。（小佐野迢々）

甲府平原地より見たる槍、常念、後立山の三山脈

三年三月四日、再び岡村の丘陵銚子原より、飛驒山脈を觀望した、二月十五日には、槍ヶ嶽山脈を見たのみであつたが、此日思ひも掛けぬ常念、後立山の二山脈を新らしく見出でたのである、甲府平原で所謂諏訪口を觀望すると、駒ヶ嶽の尾根の低下した所に、巨峰槍ヶ嶽が見え、稍低く連續した山岳は、鎌尾根、縱澤岳、左俣岳と思はれ、其終りに高きは、雙六岳、蓮華岳と思はれた、疑ふべくない槍ヶ嶽山脈であつた、然して餘程離隔した前面で　八ヶ嶽の尾根の低き裾野に、雪光白き秀嶺の連立が見える、其主峰は、槍ヶ嶽と誤られるピラミット形の、大天井岳であつた、南方に並立するは、有明山、燕岳か、北に續くは奥常念、蝶ヶ岳であらう、駒ヶ嶽の尾根に見ゆる槍ヶ嶽山脈と、同じく、南より北に走向して居る此山脈は、常念山彙であつた。

白峰山脈の連嶺の上から、其偉容を見せて居る赤石山系の山を見るべく、銚子原の背後なる松杉科の樹木がある、銚子原より稍高き丘陵に登つて、ふと八ヶ嶽の編笠嶽より延びた尾根の、中腹の瘤狀の凸起の有る稍下に、白きものが見えるのである、熟視すると雪に白き秀峰の連立であつた、五郎岳、三ッ岳、烏帽子岳、不動七倉等の後立山々彙のそれであつた、自分は甲府平原の丘陵から、北日本アルプスの三山脈が見ゆるのが、不可思議のやうに、覺えられ、また奇蹟のやうにも、思はれつゝ銚子原を下つた。

銚子原は、前號に千六百尺の高地としておいたが、岡村の地盤が、三百三十三米突であるから、それより稍高い、銚子原は千百四十尺位であるから、茲に訂して置く。（小佐野迢々）

（勝沼停車場にて、伊那の荒川嶽が見える、其外では、東八代郡の東南部の諸村より見ゆるのみである）

登山法私見

以前私は機會ある毎に、年に一度以上は山岳らしい山岳を踏破してゐましたが、境遇の變化と共に、活動の範圍を狹ばめられ、山岳と云ふよりか、寧ろ丘陵に近い山々の連なる山陽道の一局部に蠢動せねばならぬ樣になり、夏の盛りにも、結んで解けない殘雪のある樣な、一人前の山岳の肌に觸れる事も出來ず、甚だ髀肉の嘆にたへないのであります。唯時々送らるゝ「山岳」の涼しく鮮やかな寫眞版に刺戟せられて、將に腐れんとする血潮を凝結せしめ居るのみであります。從つて最早や山を談ずる資格がない樣になりました。然し今でも低山性とは言ひ、傾斜地を上下する事が多いのと、以前山岳らしいのに小當りに當つて見た經驗とを基礎として、疲勞せずに傾斜地を登る方法(?)を述べたいと思ふ。それは私一個の關係であつて、皆さんには適用し得るか否かは、斷言出來ないが、或は共通の點もあらうと思ひます。

平地でも同じであらうが、殊に傾斜地を登るには、一氣息(イキ)、即ち一吸、又は一呼の半呼吸に一歩を運ぶことが、最も疲勞せない事だらうと思ふ。又長い氣息をするか、歩度を早める場合にも、一氣息に整數歩を運ぶ事が必要である、何歩、何分の何と云ふ樣な端數のつく歩み方をすると、呼吸によりて生ずる血液の運動と、歩行の運動とが、調子が違ふ樣になつて來て、不規律な呼吸をせねばならぬ樣になり、呼吸喘ぎ、さうして、疲勞を招ぎ易い樣である。即ち最も疲勞せぬのは、一氣息に、一歩づゝ歩む事、次には一氣息に整數歩である。勿論同じ整數でも、一氣息の歩數の小なる程、疲勞し難いのであります。勞れ易いのは、一氣息に端數のつく歩數を歩むのである、が其端數に就ても、夫れ〳〵疲勞に及ぼす影響に差異があります。例へば假りにコンマ以下一位の端數とすれば

0.1, 0.2, 0.3, 0.4, 0.5, 0.6, 0.7, 0.8, 0.9,

の内、何れの端數が最も血液循環の調子を狂はすかと云ふに、運歩の結果、整數歩に直ほるまでに、多くの氣息回數を要するもの程疲れ易く、整數歩

に達するまでの氣息回數小なるもの程、疲勞し難いと思ふ。0.5 なる端數は、二氣息目、即ち一呼吸目にて、整數となるから、端數の中では疲勞し難い方である。

0.2, 0.4, 0.6, 0.8

は五倍で整數になるから、五氣息目即ち二呼吸半で整數歩になり。

0.1, 0.3, 0.7, 0.9

は各々十倍、即ち十氣息目にあらざれば、整數歩に達しないから、一氣息の歩數として見る時は、最も疲勞し易い端數と言はねばなりません。

同じく五氣息目、若くは十氣息目に、整數となる端數の内でも、五又は十氣息の間に、運歩數の少くないもの程、疲れないのである、0.2なる端數は、五氣息で一歩、0.4は同氣息で二歩、同様に0.6は三歩になります。今コンマ以下一位の端數を、一氣息間の歩數として、疲勞し難いものより、順序に列擧すれば。

第一級　0.5,

第二級　0.2, 0.4, 0.6, 0.8,

第三級　0.1, 0.3, 0.7, 0.9

となり、第一級は奇數の五で、第二級は偶數順、第三級は五を引き去つた奇數順に排列せらるゝである。コンマ以下の位に、九なる數を有する端數は、整數となりたる時の歩數最も大なるのみならず、整數となるに最も多くの氣息數を要するから、呼吸に伴ふ血液循環のピッチと、運歩に伴ふ血液循環のピッチとが、不釣合を來たし、其結果呼吸の調子が、不規則となり、忽ちにして呼吸の喘ぎを生じ、苦痛を覺え疲勞を感じ易いと思ふ。

又一氣息間に一歩運ぶのが、最も疲勞しないと言つたが、これにも二級あります。其最も勞れないのは、左(右)足より運ぶものとせば、右(左)足を出すとき、左(右)足よりも前方に出さずに、左(右)足の根元に置き、次に又左(右)足を出し、前と同様に右(左)足を左(右)と同一線に置き、前方に出さずに、或期間は同一の足のみを、前方に出し、折り〳〵前に出す足を、交代する様にするのである。これは多くの時間を要すれども、最も疲れない方法で、婦人小兒や、山に慣れない人々に

は、最も安全で、山に強い人でも、長距離の塲合には、此法がよからうと思ふ。これが最後の勝利者となる唯一の方法であります。

農科の植物博士の、草野先生が、年々林科の學生をつれて日光、鹽原、伊香保地方の、御花畑などのある山に登らるゝが、青年の元氣に任せて、一氣息に端數の着く樣な亂調子の步度で、登る連中は、大抵中腹で弱る、然るに悠々と殿軍を守らるゝ草野先生の步調を見るに、一氣息に、一步主義であるのみならず、同じ足のみを前に出し、他の足は前に出し、他の足は前出の足より進めない方法を取り、直高の大なる階段を登る時の樣な調子で、終始一貫、何の疲勞も見せないで、頂上まで直通せらるゝのである。最後に至れば、草野先生には、叶はんと言ひ合ふ樣になる。其當時から、私は一氣息一步主義に限ると思つてゐました。步度を早むる時でも、整數步がよいと云ふのは、二三年前から感じて居ります。

以上は、私の經驗から割り出した登山法に、覺束ない說明を加へたに過ぎないが、一氣息に端數の着く步度を以て登るのは、呼吸に伴ふ血液循環と、運步に伴ふ血液循環との、兩ピッチが、不釣合を來たし、其結果呼吸を不規則ならしめ、疲勞を早やめると云ふ事が、生理學者が認めてくれるならば、以上述べた方法を、一般の人にも適用してよからうと思ふ。

足の弱い者を、先登にすれば、案外疲れないが、後にすると疲れ易い。それは後になれば、後れまいと思ふて、心が落ち付かず、自然步度が亂調子になり、一氣息に端數の着く步度になるからだと思ふ。

步度をゆるめて、ブラ〳〵步くよりも、步度は早くとも、一氣息、整數步となる樣に、調子を合せて步む方が、却つて疲れないのは、全く血液循環の調子が、狂はぬからであらう。

疲れない源因の說明は、保證の限りでないが、以上の方法は、少くも私一個の經驗に取りては、疲勞しなかつた事は、事實であります。

多くの登山家諸氏の、御意見を承りたいものです。（山本德三郎）

飛驒高山の年中行事

元旦は入寒の間際で頗る寒いのは云ふ迄もない。併し近年は次第に雪が少なくなつたので、市中の街路には雪を見ないでお正月を迎へることもある。若水を汲む車井のきしり初鳥の音にあけ初むる太平の御代ののどけさは、都も鄙も變りはない。元日は近隣諸社への賽人廻禮の賀客の外一般は表を閉ぢて休む、何時頃からのならはしか表間口には葭簾をつる。亦一般に燧石により火を得て豆がらを焚き雑煮を祝ふ。二日には各商家〔賣初〕の催があるので、未明から表通りが賑やかである。底まで凍つた地に下駄の齒音を響かせて、曉の夢を破る。初荷の賑ひも隨分景氣がよい。

一般に藏開き七草の祝ひ帳祝ひ等尙昔の式を守る家が多い、家庭に於て兒戲としては歌留多、雙六のやうな室内の遊びが主で、寒氣が烈しいのと、道路の都合上羽子板や紙鳶はあまり弄ばれぬが、男兒が竹草履と云つて草履の裏に竹片をつけたものを履いて、雪で大理石のやうに固まつた道路を、風を切つて辷べる快はスキーにも勝るものがある。新年福引會、消防出初式も亦行はれる。

四圍の村落では農事の都合上お正月を一ヶ月後にして居る。節分の翌日にするのもある。其の正月の準備として一月二十四日に市が開かれる。古來の習慣上二之町二丁目三丁目が其の中心となつて居る。此の地は通俗に中町（なかちやう）と云つて居る。商業は主に造酒で雜貨店のやうな店を張る必要のない所であつたので、臨時の大道商ひには尤も適して居たのと、酒店は主に大地主である、其の地主と小作人たる村人との間の出入の關係上、自ら此の地を卜したのが便利なのであつたらう。〔四日市〕と稱し近村から非常な人が出て來る。

二月の初めには節分の豆撒きが行はれる。四圍の村落との交渉關係上、季節の關係上古來の行事又は式に關した事には舊暦が使用され易い。其の舊暦が廢せられた今日では何事も一ヶ月遲れになつた。年中行事から云ふと二月あるべき初午は三月に、上巳の節句は四月にと遲れて居る。只二月は雪が深いのと、殘寒が嚴しいのとで凡て蟄居の

姿になる。二月末日は〔大節季〕と稱し、年に二回の總勘定日の一となつて居るので市中が賑ふ。近年漸次月末拂の制度が採用されるやうになつたが、尙習慣上二月八月兩度の節季勘定が行はれて居る。

三月第一の午の日には稻荷社では〔初午〕の祭りをする。祭典が終れば神前に供へた團子を撒く。團子と云つても餅ではない、赤飯の握玉を紙に包んだのを撒く。之を拾ふ爲めに老若男女が群集する。團子を撒き終つた後それを入れて置いた叺を投げる。此の叺の藁一筋でも、莚に織り込んで養蠶に使用すると出來が善いと云ふ信仰から此の叺を奪ひ合ふのが頗る奇觀である。此の叺に取りついたまゝ市中を引き廻つて最後まで離れなかつた人々が分配を得る。往昔は之を平素公共の觀念の薄い家へ引き込んで、泥足で座敷と云はず書院と云はず亂暴をしたもので、所謂一種の社會制裁となつて居たこともある。蠶業に關する祭祀風俗も次第に薄らいで、汗を流して叺を引く際に蠶種の吟味をし、桑畑の注意を怠らぬ程進歩した。稻荷の祭りは初午で盡きない、二の午三の午までもある。この競爭祭祀風俗は明に養蠶國としての飛驒には自然の發達である。

四月三日は一般家庭に雛祭が行はれる。各家の兒童は互に〔配り物〕と稱して、趣向を凝した色色な品物を贈り合つて子供相應の意匠を競ふ。

四月八日は灌佛會で、五月八日や舊四月八日に延期される向もあるが、東山の寺々では所謂〔甘茶の施行〕がある。

四月は花の月である。梅も桃も櫻も寒氣に蕾を固くして居たのが、俄に棚引き初めた春霞に笑み初めて一時に爛漫たる盛裝をする、此の四月は實に武陵桃源の春である。紅白凡ての花が相映じて一時に開く。此の花が笑みかけた十五日は安川通以南の氏神日枝神社の〔山王祭禮〕である。〔神輿渡御〕、〔山車練行〕の式がある、殊に山車は妍麗精巧を極め、日本でも稀なる美觀である。附近數里の地より人出で市内大に賑ふ、殊に他に類例の稀なのは祭禮地に於ける各家の饗應で、表には葭簾をつり高張提灯を立てゝ獻燈をなし、家内には

酒食を設けて客の至るを待つ。來る者は知るも知らざるも之を拒まないで饗應する。時代の推移と共に趣を變じたが、今も尙その風が殘つて居る。祭式に列し神輿、山車の警固に從ふ者は皆袴を着る。町の辻々に立つ幟の春風に飜るのも心地よいが、外客に見せたいのは山車が無數に提灯を點けて、宮川邊をゆるやかに練り行く夜の所謂〔引き分れ〕である。併し電燈、電話線の爲めにも山車練行の式は自然廢れんとして居る。これは地下線なり相當の手段を講ずれば廢除される障碍であるから、高山町の美觀の上からも、他國に比類稀なる此の山車や神輿のある氏子連中は少し工夫をして、永遠にこの美くしい習慣を維持してほしい。

觀櫻には高山公園、飛驒招魂社、江名子川邊及び櫻山八幡宮へ出掛ける。朧の月影を踏みて暖雪にあこがるゝ春は何處も變りがない。

九十の春光惜むひまなく暮れて四圍の山色新綠に榮え、所謂飛驒の初夏は頗る畫趣に富むものとなる。

六月五日は〔端午の節句〕で幟及び鯉が空に飜る。五月から苗代、田植、春蠶と引き續いて農家が忙しくなる。春蠶の時期には高山別院前に〔桑市〕が開かれる。毎朝未明から八、九時に及んで桑を賣買する者が群集して頗る雜踏を極める。また其の附近には靑物市が開かれる。市人は眠より覺めて玆に朝の散策を試みる。苗木あり、草花あり、野菜あり、果實あり、雜然として人の好みに應ずる。此の朝市が衰へる頃から夜市が盛になる、七月一日から夜市が開かれて夕方の納凉散步を促す。上旬は尙未だ納凉を要する程でないが下旬から八月へかけて次第に暑さが增すと共に客足も繁しくなる。併し八月の最夏でも朝夕は氣溫の上から云ふと納凉を必要とする程暑くは決してない。

七月農事の手すきを見計らつて、別院では〔夏の御文〕なる法要を營む。其の二十七日には近鄕から男女皆盛裝して出る。嫁見といふ術語が此に附隨して居るのを聞いても、其の賑ひを知るに足るであらう。

八月七日は〔七夕星祭〕をする。各川筋には祭壇が設けられて美觀である。

八月十五日は〔盂蘭盆會〕で精靈祭が行はれる。禪宗の古式を保存して居る家は、十三日に門口及び墓所で迎火を焚く、十五日の夜は更けてから精靈送りと稱して一族供物を奉じて河流に投ずる。十三日から十五日にかけて三日間、各自靈棚を設けて、祖先の祭をする。東山を始め各宗の寺院からは、和尙小僧總出にて檀信徒の宅を訪ねて、其の靈に廻向する。檀信徒の方からは各自所屬の寺院へ參詣し又其の祖先の墓參をする。盆の頃が暑氣の尤も盛な時で、それからは次第に衰へる一方で、九月になれば急に涼しくなる。八月三十日は第二の〔大節季〕で貸借の勘定日。九月一二日頃の二百十日が無難にすめば、農家の愁眉は頓に開けて、祝はうか踊らうかと云ふ相談が始まる。此の時高山町で〔盆踊〕が催される。併し文運の漸入と共に、今は踊り手が少くなつた。牽牛花形に張つた釣燈籠の下で、列を作り手拍子を合せて踊る。男女思ひのまゝの假裝をして徹夜で踊り廻ると云ふのが例であつたが、假裝に就ても時限にも警察の干涉がある、風俗を頽廢せしめると云ふ點からも心配をして貰ふので、今は眞に踊の好きな人々の催で、見る人は多いが踊る人は少ない。然しかう云ふ優美な風習は廢滅させたくない、或る程度までは警察などでも大目に見てほしい。

九月十五日は櫻山八幡宮の例祭〔八幡祭禮〕である。安川通以北の氏神の祭禮で、日枝の祭禮に對して遜色がない。神輿渡御、山車練行は勿論、市內の裝飾、饗應の食膳に至るまで異る所がない。殊に其の神輿は精麗飛騨國隨一で、日枝神社の祭禮に於て誇るべき山車が多いのと對比をなして居る。

月見、宮參りと秋漸く更けて叢にすだく虫の音も哀調を帶びて來る時は、飛騨の最も誇るべき秋で、滿山錦を織ると云ふ、陳腐乍ら僞のない景色となる。栗の實拾ひ、茸狩り、山にふさはしき遊興が催され、焚く紅葉に酒を煖め、取りたての松茸に舌鼓を打つのは此の時季である。

併し黃金の波打つた田は、何時の間にか落穗まで拾ひ去られて、田には何の殘す所もない。この時至る處の水流の岸には、大根、蕪菁など堆高く

積まれて〔菜洗ひ〕の奇觀が現出される。これも過ぎ去れば、暮鴉枯林に落日を悲しむ師走になり、夜は寒燈田家より漏れて、籾をひく臼の音も淋しく響く樣になる。十二月の冬至には茄子の枯莖を焚き南瓜を食ふ。

過ぎやすしこんな事なら百年もと云ふ感じを痛切に思はせる年の暮は、餅搗、注連繩飾り等に忙しい。年越には年取りと稱し饗膳を整へるが一般の風習である。

これが高山町一般の風習となつて居る年中行事の大略である。土地の人は一年の内に六つの目標を立てゝ話をする。〔お正月〕から〔二月の節季〕、〔山王祭〕から〔盆〕、盆過ぎには〔八幡祭〕、〔暮〕といふ樣に考へて居る。舊格を失はぬ家では、上巳、端午、重陽と各節句にはそれ〴〵桃の酒や菱餅、粽、菖蒲酒、菊の酒等の設をして祝ふ。

一般から云へば生活の程度は低い。副食物の野菜は近村の農夫が農事の手すきを見て之を市に商ふ、獸肉は土地で屠るから其の方面に不自由はないが、不自由なのは魚肉である。北の濱越中の海から漁つたものを徹夜して車で運ぶ。物資が乏しいので料理法は發達して精進料理など仲々侮れぬものがある。併し宮川に產する香魚は尺に餘るものがあり、其の味の美なることは他鄕に比を見ない。春の鱒、秋の香魚何れも誇るに足る。其の他「ハエ」、「ウグイ」等の川魚の味も善い。

着物は綿入が最も長い期間用ひられる、之に次ぐのが單衣である、袷の時季は極めて短い。併し概しての話であることを附け加へておく。

家屋の構造も趣を異にして居るが、他地方の便利な點が漸次輸入せられ改築せられる樣になつた。只屋根が板葺きで、抑へに石が載せてあることゝ、積雪の重量に堪へ得る樣に頑固に出來て居ることが最も注意を惹くであらう。然し家並の外觀には古風な奥床しい所がある。

風流韻事は上流には仲々盛である。國學は田中大秀翁の影響を受け、漢學は赤田家一派の流れを汲み、其の他和歌、俳句、運座、畫會なども仲々よく催される。娯樂としての茶、生花も流行する。尤も此等は一般生活に餘裕のある人々の娯樂であ

る事は勿論である。國守の弟であつた宗和の流を汲む人も少くない、花は一般に池の坊が行はれて居る。かゝる趣味が行はれて居る丈けに、來遊の文人、墨客で品格のある人ならば厚遇せられる。

（奥田正造）

本誌に用ゐたる紙に就て

本誌卷頭畫及びタイトルページに用ゐたる紙は、日本アルプス山下の村民に由つて作らるゝ、純日本紙なり、質は粗野なるが如しと雖も、少しのバルブをも含まざる純粹の桑皮紙なり、日本アルプスの山水に由て生きたる桑は、日本アルプス山下の民衆に由て、此純なる紙と化す、將に日本アルプスの山氣は一枚の紙背に迄徹して生きたりと云ふべし、徒らに西洋を摸倣するに過ぎざる現今の文明に、今日尙ほ斯る純日本紙を得べき事は、吾人の眞の日本を知らんとするものゝ喜悅置く能わざる所なり。

斯る紙は、吾人の用ゐて、山岳畫となすに最も適せり、紙面の粗野なるは山岳生活の象徵とも云ふべし、敢て本號の卷頭に飾るの意茲にあり、本紙は、會員百瀨愼太郎氏の寄贈にかゝる所にして、吾人は氏に由りて初めて斯る山岳的純日本紙を得たり、記して感謝の意を表す、紙の名、松崎氏と稱す。（蝶郎）

雜報

會員及び讀者に乞ふ　各地の山岳に關する出來事、新聞の切抜等の通信を乞ふ、本欄は將來の山岳史としての資料を蒐集するにあればなり。會員鵜殿正雄氏は常に多大の材料を寄贈せられつつあり、記して感謝の意を表す。

諸高山の融雪

本年は、附近の諸高山に、五月になつてから殆晩雪がなかつた、こんなわけで融雪期の例年より約一週間も早かつた、今其期日を列記すれば左の如くである但當小縣郡中部地方より四望した時の觀で絶對的終末期を意味してはゐない、山の北面は常に南方より融雪期が遲れるから右の見方では正しき比較にはならないが、年々同一筆法であれば、大體の見當をつけるには敢て差支はなからうと思ふ、括孤内のものは大正二年度のものである。

山名	融雪期日
淺間山	五月十六日（五月廿五日）
三尾根山	五月十五日（五月十九日）
籠塔山	同　（同　　）
烏帽子岳	同　（五月十七日）
四阿山	六月六日（六月十三日）
美ヶ原（武石入）	六月十七日（六月三十日）
立科山	六月廿二日（七月三日）

（鵜殿正雄氏報）

●妙高山の大崩壞

燕溫泉閼溫泉の泉源全滅

十七日午後二時十分越後國頸城郡燕溫泉には近來になき濃霧襲

◎雜　報　蓼科山の祇園祭　御嶽初登山の外人　御嶽山開き　一八八

ひ來り續いて百雷の如き地響きと共に地震起りて二十分間震動を繼續し更にこれに次で妙高山の中腹より俄然大崩落を爲し濁水と共に樹木泥土大岩石等太田切川に押出し水の深さ四十尺餘に及びたり折柄太田切川附近の國道に仕事中なりし石工越後中頸城郡中山村成合友太郎(四八)同郡關山村宮下安治(二八)同村平田賢治(三〇)の三名は濁流の爲めに押し流されて溺死し關溫泉戸山舘笹川恒三郎(四〇)も亦濁流に呑まれて溺死せり高田輜重兵第十三大隊の一箇中隊は關山川國道にて演習中にて太田切橋を渡らんとしたる際突然濁水に襲はれたるを以て其三分の一の兵卒は濁流に押し流され危く溺死せんとしたるも幸ひにして無事なるを得たり之が爲め燕溫泉及び關溫泉の湯源泉は全滅となるに至りたり、太田切附近の國道五十餘間は濁流の爲め破壞して交通杜絶せり此下流なる越後直江津高田方面の魚類は此崩壞と同時に多くの黃硫分を流出せし爲め損害を被りたり、崩落の原因は山上の雪解け水が或所に溜まりたるに一度にドット押し出したるものなり崩落箇所は長さ實に一里餘に亘り巾は測るべからざる程にて越後行の汽車中よりは能く之を望見し得、太田切川附近國道等は實に慘憺たる光景なり(十八日新井夢影雷話、五ノ一九、信、毎)

●蓼科山の祇園祭

北佐久間郡同山の祇園祭は毎年來る七月十五日にして南北兩佐久小縣諏訪方面より登山する者毎年頗る多く本年は淺間山の危險より一層多かるべし因に同山の殘雪は去る二十三日頃より全く消へ失せたりと(六ノ二八、北信毎日)

●御嶽初登山の外人

既報の米國ハーバート大學教授ウヰルソン、アーメスト(四〇)氏一行は九日福嶋町を發し途中登山路を變更して其夜は王瀧村瀧旅館に宿泊し十日午前頃出發植物を採集しつゝ午後一時頃七合目に到着し茲にて晝食し珍しき植物もなければとて此處より下山に決し六合目田ノ原にて寫眞など撮影して夜七時半頃瀧旅館に戻り十一日は棧を見て上松驛より乘車せり甲府泊りにて猶富士山へ登山するとの事なりし御嶽山は八海山上の森林中にも雪は更になく七合目にて見上し處にては王瀧頂上日ノ權現迄登山路には雪少しもなく其分にては勿論八町だるみにも雪なかるべく準備さへして行かば絶頂に登るもさして難事なるまじき樣子なりしと(六ノ二五、信、毎)

●御嶽山開き

木曾御嶽山は例年の通り七月廿日山開きを行ふ鐵道は豐橋、名古屋、一の宮、岐阜、大垣、千種、大曾根、京都、大阪の各驛より木曾福嶋御嶽登山者に對し七月廿日より九月十日迄二三等二割

引をなす由猶上松驛は七月一日より臨時途中下車驛となりたり。
（七ノ四、信、毎）

淺間記

●淺間山初登山

谿間は尙ほ數尺の雪

去年といふ去年は、岩の眞ッ赤に熔けた灼熱の泥流や、一間四方もある岩石や輕石や灰やを噴出して燒け爛れた淺間山も、頂きから白妙の雪の衾を厚く引きかついでからは滅切り溫順しくなつて、僅に活動の後に來る力の無い疲れた息吹を、時偶ポッと突くばかりであつた。昨年の秋芦の平の假觀測所を閉鎖して觀測技術員が下山してから絶えて訪ふものもなかつた淺間山を「無事で居たか」と訪れたのは震災豫防調査會の黑坂技手、長野測候所の神林技手、夫から例の小使の星野爺さんと折よく、小諸町に來合せて居た長崎測候所長の後藤技師及器械職工の一行五名であつた。

▲五名の人達　は四月廿九日午前九時と云ふに萬事の用意を整へて登山の途に就た、芦の平の淺間館には留守居の人が居る筈だつたが、そろ〳〵西疇に事あるの季節とて下山して誰も居らなかつた、昨年の大爆發の時湯の平に居堪たまらなくなつて芦の平まで退却して來た觀測所に立ち寄り觀測器械類を纏めて再び登山の途につき午後三時に湯の平に到着した、觀測所の建物は異狀がなかつたが、火山館は屋根に六十餘ヶ所降石に打ち破られた大小の穴が明いたまゝ荒れ果て居る、無論誰一人居らう筈はない、夏季に入つても開業するには

▲餘程の修繕　をしなければならぬのであるから或は今年は開業せぬかも知れぬ。其晩は其まゝ登山の疲れを休めて翌三十日觀測器械の修繕と据え付けに着手し其午後から試驗觀測を行つた。頂上の動靜は如何にと云ふに廿八日の晩から廿九日の朝まで噴火坑は間斷なく噴出す煙が紅色を呈し鬼火の明滅するが如くに見えて居つた、一行が斯る現象を實見したのは始めてであつた、何れ噴火坑底に熔岩が湧き上つて强い光を發して居るのが煙に反映して居るのであらう廿九日午前六時三十分頃に煙が止んで濛々たる白い水蒸氣を噴出して居つたが同九時に再び煙が高く騰上して西方に靡いた、斯くして廿八日以來本月一日まで頂上は不斷に煙に閉されて居たので遂に頂上まで登る機會がなかつたが、一日に湯の平から七八町を登つた觀測所水源地まで登つて見た。

▲磊々たる燒石　の中に大きいのは二間四方もあらうと思はれる摺鉢形の穴是は昨年六月十五日以來の大爆發の遺物である、其後幾度も石や灰が降つたらうけれども何れを何れとも見別けが付かない湯の平氣候華氏の廿七八度、谷間や少しの凹みには尙二三尺の雪がある、水源地の水桶も引水樋も皆深く氷雪に閉されて居て樋も破壞されたから無論水は觀測所に來ない、而も雪が解なければ修繕も不可能であるから五月中旬以後でなければ水は飲めない、當分は下から汲上るより外に仕方がない　神林技手は二日午後歸つて來て斯う語つた。（河東四ノ五、信、毎）

●淺間山噴火口大變化

淺間山火山觀測所に地動觀測の爲め出張中の文部省震災豫防調査會の加藤技手より淺間山火口の現狀に就て左の如く報告し來れり。

▲絕頂を極めて觀測す　五月廿七日田中館理學博士、石黑工學博士、兩氏磁力計據付の事につき觀測所に來りたる序に山頂を實査せんとのことなりしにつき自身案内を爲して登山せしに幸ひに天氣快晴噴煙多からず觀察に最も好都合なりし火穴内の變化は豫想の外にて一昨年十二月實見せし時は穴の底非常に隆起し北側は殆ど周壁と同じ高さとなり居たりしに今回は一昨年來溢出隆起せし熔岩の一部を殘して中央部は大正元年九月頃と大差なきまでの深さとなり其北側は傾斜緩にして南側は殆ど絕壁狀を呈し穴の底の中央より少しく南に偏したる點に於て轟々たる强き鳴響を發するを聞けり從て其處には噴煙も亦多量なりしを認む又近來は黑煙の噴出及び地動等絕無の姿なり云々。

▲西澤長野測候所長の談　右に付西澤長野測候所長の語る所に依れば此報告の模樣に依り察すれば昨年來穴の底は約八十米突位深くなり又穴の形狀は元南方緩漫にして西より北に向つて絕壁狀をなし居りたる處今回はこれと反對となり最も强き噴出は南に偏りたるものと思はる、されば此儘にて暫くの間は大噴火は無かるべしと察せらるとなり（五ノ三一、信、毎）

●淺間山異狀を呈す

噴煙猛烈にして氣味惡き地鳴りを發す

淺間山は九日以來噴煙多量にして十二日午前十時頃より益々出量を增たり、且恰も液體の沸騰するが如き鳴動を發し十二日夜七時十四分頃一回黑煙天に冲し續いて十三日午前六時頃噴煙鳴動愈愈猛烈となり尙引續き氣味惡き鳴動と共に地動を爲しつゝあり。

▲西澤所長急行　之が爲め西澤長野測候所長は十四日急行したり三十日迄同山地動觀測候に滯在測候の筈也（六ノ一四、信、毎）

●淺間山の現狀

從前に比し大なる變化を來せり

西澤長野測候所長は此間淺間山に登山し噴火に就き調査せるが其報告要點を摘記せんに左の如し。

一、火口南方側の高低は從前に異ならざる樣なれ共火口緣の附近は廣く且つ平坦となり南側は火口に向ひ約十三度の勾配なり凡そ三十間程下より急勾配となり中邊に棚をつくり又斷崖となりて坑底に至る夫れより少しく東に緩勾配の所あり而も約四十間にして急に斷崖となりて底に達す。

一、東及び北東は殆んど斷崖なり北東の火口緣は一大岩石なり其破れ目より盛んに燒氣しつゝありて附近一帶降灰多量のため岩石を埋め勾配急にして步行困難なり且水氣を含み其の上を步むときは恰も雨後の砂原を行くが如し。

一、昨年春は北方より坑内に降りるを得たるまでに（熱度なければ）隆起し居りしも今は殆ど斷崖となり緣に至ると足慄ふ心地す。

一、西方は獨り斷崖なるのみならず却つて内に向つて覆ほれ居れり。

一、周變は從前より廣くなりしも坑底は極めて狹く殆ど北南〻

の如き形となる。

一、坑底最深所西方火口壁は不明八十メートルと目測す。

一、坑内は周壁と云はず又低所を選ばず無數の噴氣口あり最も猛烈なるものは西方火口壁際も中央より南東方に偏す此方最も深し。

一、絶えず周壁より岩石の崩落するを見る其最も甚だしき所は東北方なり。

一、西乃至北西方面即ち前掛山に向える方は無數の熔岩拋出せられ居るも灰砂の堆積するを認めず。

一、南方は灰砂及び熔岩の拋出多からず。

右に由り考ふる時は近來長野市に於て煙脚の度々見ゆることあるものは火口内殆んど全般に噴煙する爲めに依れり噴氣口の增加せしは昨年來屢々の爆發若しくは地震により外皮の岩石に縱横無盡に龜裂を生じたるに因る。

爆發に際し大なる熔岩の西若しくは南並に北西方に拋出せられ北東及西南に掛て少きは注目すべき現象にして今發見したる所に非ず先年既に此傾向あるを言明せし事ありしが余の考ふる所によれば拋出口は西方に傾きつゝあるが故ならん。

同山は活動の最盛期を經過せるものと見做し得らるべく休息期が茲一兩年に近づきたるものならんと察せらる然るに茲に注意す可きは外皮に存する岩石の龜裂を多からしめたる一事也何んとなれば此龜裂の多きは岩石の支持力を弱からしむるものなればなり故に長歲月の間に於て若しくは强烈なる地震等（一般の地震）ある時は夫が爲め岩石墜落せざる限りにあらずよし此事無しと雖も常に此龜裂線に沿ひて蒸氣の吐出すること現時の如くに永續せば岩石中の熔解部は次第に分離し益支持力を減殺すると同時に内部も亦此作用に依り自然空洞を生ず可く遂には壓力に依り陷落する事あらん現に余の火口附近にありたる事僅々二三十分に過ぎざれ共其の間崩落する事五六回にて周壁に反響する音凄しく人をして膽を寒からしめたり而して漸次に火口を塡め噴火口を閉塞したる後再び活動力を增進せば之より以上に暴威を逞しうする事見易き譯なれば爾今一時鎭靜に歸すると雖も特發地震の常時觀測は勿論坑内變化に注意すべき事なり（七ノ一、信、毎）

●淺間山局は見合せ

長野郵便局にては例年の通り本月十一日より九月末日迄淺間山に郵便局を開設する筈なりしも本年は湯の平迄は危險區域と觀測され且登山者も少き樣子なれば當分見合す由（七ノ六、信濃）

會報

第七回大會期日の確定

世は諒闇の帳に鎖して、本會第七回大會も亦、此秋に延期したりしが、漸く諸般の機熟して、來る十月廿五日（日曜日）東京市赤坂區溜池、三會堂に開會する事となれり、今秋は、別頂に記せる如く、大會に次で京都に、關西在住の會員諸君によりて、山岳講演及び陳列會開催されんとし、登山熱の勃興と山岳研究の普及は、今や一新紀元を劃さんとせり、此時に當りて、本會々員諸君、及び世の愛山家諸君は年來の蒐集になれる珍品、圖書、寫眞の公開を許され、成る可く多數の出品陳列あらん事を特に希望せり、從來は一部人士の出品にのみ成りしが、今秋はなるべく廣く諸君の御出品を希望せり、且つ出品物の內、破損滅滅の憂なきものに限り、特に出品者諸君の許諾を得て、京都に開かるゝ、山岳講演會に出陳して、廣く其喜びを頒んとす、乞ふ愈々多數の出品あらんことを。

午前十時陳列場開場

午後四時閉鎖

午後五時諸般事務報告の後講演及び幻燈開始、講演者は目下夫々交渉中にして、某博士及び某學士の內諾を得たり。尙ほ幻燈は今夏槍島槍ヶ岳より八峯の險を越へ更に小黑部を溯りて劍岳に登攀せる會員大木操氏の幻燈六十枚餘の新登路の講演あるべし。

出品下さるべき諸君は、成る可く前以て數量品目御一報ありたく、京濱地方なれば場合に由りては本會より拜借に上らすべく、成る可く多數の御

Alpine Club
23 Savile Row
London W

ALPINE CLUB,

23, SAVILE ROW.

LONDON, W.

June 15th, 1914.

The next informal meeting will be held on TUESDAY, JUNE 23RD, at 8.30 p.m.

As announced by the President at the last General Meeting, Mr. S. Kondo of the Japanese Alpine Club will show some Lantern Slides of the mountains in Japan.

THE ALPINE JOURNAL

A RECORD OF MOUNTAIN ADVENTURE AND SCIENTIFIC OBSERVATION BY MEMBERS OF THE ALPINE CLUB

Alpine Club.

Exhibition of Alpine Photographs

AT

THE CLUB ROOMS, 23, SAVILE ROW, W.

On Tuesday, May 5th, 1914, 2-6 p.m.

AND FROM

Wednesday, May 6th, to Friday, May 10th, both days inclusive, 9 a.m. to 6 p.m.

You will be provided on TUESDAY, MAY 5TH.

Admit Luckeche Kondo Esq and Friends.

(Signature) Ch Schuller M.A.C.

A. L. Mumm
Ch Schuller
W. E. Davies
Alex Kirkcaldy
J. N. Collie
H. A. Tuffield
A. B. Godley
Walter Leaf
T. G. Longstaff
H. Woodley
Sydney Spencer
E. St. F. Bradby
L. W. Rickston
Edith Brooms

Kondo San photographs
J. Tsujimura
Sydney E. Harwood
S. Kondo.

出品を希望せり。

出品物は當日午前九時迄に會場に搬入ありたし。

入場には何等の制限なし、成る可く廣く同好諸君の御誘引あらん事を乞ふ、然れども會場其他の都合により、會員外の入場を謝絶する事あるべし。

會場に於て御食事の需に應じ得る丈けの設備は致し置くべく、尙ほ下足等の用意はあれど成る可く、靴又は草履にて御來場ありたし。

關西の山岳講演及び陳列會

在京都の會員今村幸男、小山源治、石崎光瑤諸君の熱心なる努力と勸誘とに由りて、今や關西在住の本會々員に由りて、今秋本會大會終了後、十月下旬を期して、京都に山岳講演及び陳列會を開かんとし、本會よりも、特に第七回大會出品物を乞ひて、京都に再び陳列せんとし、本會幹事の兩三名は、特に京都に赴かんとしつゝあり、加ふるに、歐洲の山界に約一年を送りたる本會幹事辻村伊助氏は、其歸途、特に右の會に於て幻燈講演を試みんとし、目下計劃中に屬せり、期日場所等を詳知するを得ざれど、京阪の新紙は其豫報をなすに怠らざるべし。（蝶郎）

英國山岳會寫眞展覽會

五月五日より、同二十九日まで、サヴィル、ロー、なる同會ホールに於て、本年度山岳寫眞展覽會を開催す、本會名譽會員ウエストン氏は、槍ヶ岳、穗高、燒岳その他數枚の寫眞を出品せられたり。在英中の近藤茂吉、辻村伊助、兩會員は同會に招待せらる。

英國山岳會六月例會

六月九日午後九時より、同會ホールに於て例會(Social meeting)を開催し、バトリック氏の佛國アルプス山麓旅行談あり（幻燈）本會々員近藤、辻村兩氏、出席せらる。

來會者約百五十名なりしといふ。

英國山岳會に於ける本會員辻村近藤二氏招待晩餐會

倘ほ同日（六月九日）午後八時より、リジェント街なるイムペリアル、レストラント（Imperial Restaurant, Regent St. W）に於て、我が兩會員を正賓として、晩餐會を催うされたるが、出席者二十名、しかして、その出席者は、世界に有名なる、大なる登山家及び探檢家を一粒撰りに撰り拔きたる觀ありしは、兩氏の光榮は勿論として、兩氏の背景をなせる日本山岳會に示されたる、同國山岳會の好意として、感謝すべきものなりき。

當日の紀念として、列席者の署名を、「メニス」の裏に求めたるものを、兩氏より送付を受けたれば、別紙に刷出することとせり、倘ほ當日の光景は、辻村氏の通信に詳しければ、その全文を左に掲出す。

六月九日午後八時、リジェント、ストリートのインピリアル、レストラントに集まつたのは僕達二人を合せて二十人であつた、小雨のしと〳〵と降り初めた夕方、倫敦とは云へ僕達の氣分だけは何となくのんびりした灯ともし頃で。

名譽書記ウォラストン氏は二人を一々紹介してくれた、十八人の主人側にこつちはたつた二人だけだから、あとから名前を云はれるんで、顏と名とコインサイドしないで困つた、大審院長ビックフォード氏に伴はれて隣りに座る、右は一番若いハウアード氏未婚だと云ふが、今に結婚するとあはは山に登りませんよ。とウォーラストン氏は笑つて居た。

近藤君の右にはウォーラストン氏次はヒマラヤ探檢家のマンム氏である。今日は特に盛んな登山家ばかり集まつたので、僕達は、ヒマラヤの雪と共に忘れ難いドクター、ロングスタッフ氏と山を語り得た事を非常の幸福と感じた、氏はモノクルをかけた五十ばかりの紳士、その態度はすつかり氣に入つてしまつた。

ルーウェンゾリの話しが出た、マンム氏は、ディユーク、アブルッィの企てた前年行かれたのであるが、天氣が惡くて、登山出來なかつたと云ふ。

近藤君の廻りでは大分オペラや音樂の話しが出たやうだ、みんな音樂好き、芝居好き。

驚ろいたのは大部分はみんな老人で、散會後にロングスタッフ氏に伴はれてホールに行つて見廻はした時も十中八は禿頭、少くも半白の連中であつた、そしてみんな名前を呼びすてにして呑氣な調子で笑つてる樣子が非常にうれしかつた。

フレッシュフィールド氏は王立地質學協會にドクター、モリソンの南極探檢談があつたので來會せられなかつた。

僕達渡歐以來の最もうちとけた最も愉快な會合であつた。

Mountain climbers are always young, gay and jolly, no matter of their age and nationality!

とはウォーラストン氏の言。(インヴァネスより)

(あづさ)

英國山岳會に於ける本會員近藤氏の講演

英國山岳會は、この六月に小會 (Informal meeting) を催うすこととなりたるが、同月二十三日午後八時より、同會のホールに於て、この小會は開かれ、本會員近藤茂吉氏は、日本アルプスに於ける幻燈講演をせられ、聽衆の感謝を荷はれたり。なほ右に就いて、近藤氏よりの私信を拔萃して、左に載す。

謹啓

一昨夜七時半 Dress で山岳會の事務所にゆきスライドを屆けて其の夜の講演の打合せをしました、會員の Mr Davenport が幻燈をやつてくれます。

これからすぐ New Bond Street Bleuheim Restaurant で廿五人の晩餐會がありました、僕も招かれました、會長や名譽書記や夫妻でヒマラヤに出かけた勇士も列席してをりました、例の通り呑氣な山の話をして八時半、會にゆく、もう四

五十名集まつてまつてをりました、會長に紹介せられて講壇に立つ、すつかり上つてしまひましたよ。まづ

"Mr President and gentlemen! I feel it a great honour and pleasure to be allowed to show you some of our slides of the Japanese Alps."

から初めて日本山岳の要點や特長やら森林の美や黒部川の事やら甘分も說明して幻燈にとりかかり一通り旅行の大畧を說明して十時に終りました、終つてから日本山岳會が其の設立の當時英國山岳會の好意に負ふ所多かりし事と今でも種々高配を煩したしと云ひ、日本山岳會員一同が英國山岳會員一同に對し恒に敬意を示し感謝しをると申して講壇を下りましてまつかになりました會長の禮詞と日本山岳會設立當時會長たりし、ブリストルの Bishop が其の當時の追懷談がありまして十時半に終りました、集會者一同から堅く握手せられました、そして一同針の木澤や藥師平や五色ヶ原黒部川の繪には非常に興味を引き起した樣です、山の方はそれ程でもありませんでした。

それからすぐタキシーで Royal Geoglaphical Society の Reception に出かけましてフレッシュフィルド氏に再會しましたら、昨年日本で受けし好遇を厚く感謝せられて、寫眞が出來なかつのを甚だ殘念がつてをりました、皆樣によろしくと、ヒマラヤの非常にいゝ寫眞が澤山ありました、十二時に歸る、名譽書記のウーラストン君が是非日本山岳會のメダルを會の事務所に揭ておきたいからと申されましたから小生のを殘してをきました、そして其の夜の成功を祝されました、案外にうまくやりましたよ、あんなに英語が上手とは自分で思つてをりませんでしたがな、一生懸命とはえらい物ですね。

六月廿五日夕

高野兄　　茂吉

飛驒高山の山岳講演會

八月一日、午後一時より、飛驒山岳會主催の山岳講演會を、高山町役場の樓上に開會し、本會幹事小島烏水の、飛驒山脈に就いて一時間餘に亘る講演あり、當日は炎熱酷だしかりしに拘はらず、同地に於ける中流以上の階級を集め、聽衆堂に充ちて、いづれも靜肅に來聽せられしは、近來の盛會なりき、講演畢つて、其夜同町の有志者は、講師を宮川河畔の清輝樓に招じて、慰勞の宴を開かれたり。

會員登山報

○幹事辻村伊助氏は三月二十九日ヴェスーヴィヨ (Vesuvio) に登山し、四月十四日北イタリヤなるコモ (Como) より湖を渡りてコリコ (Colico) に至りスウイス領サンモリッツ (St.Moritz) に遊び、更らにヴーレンゼー (Waaren See) ツューリッヒ (Züriich) イスブルッグ (Innsburg) ザルツブルヒ (Salzburg) 等を經てツエル、アム、ゾェー (Zell am See) に着オーベルピンツガウ (Ober Pinzgau) の谷を上りてクリンムル (Krimml) の瀑をながめ同二十七日墺國ウヰーンに向ひ五月一日一週間、南獨逸シュワルツワルト (Schwarzwald) の山間に旅行したり。

○會員近藤茂吉氏は五月下旬北英グラスゴーよりロッホ、ローモンド (Loch Lohmond) 及びロッホ、ロング (Loch Long) 等の山湖に遊び附近の山麓を旅行せらる。

○幹事小島久太氏は飛驒山岳會講演結了後八月二日同國双六谷と高原川の合流點なる見座に到り三日より双六谷に入りて廣河原に一泊四日雨天のため滯在五日奥拔戸の大岩に一泊五日双六谷の水源双六池に出で双六岳に第二回目の登山を行ひ笠ヶ岳の尾根に一泊し六日笠ヶ岳に登り穴毛谷を蒲田に下り一泊す上寶村にては同谷の水源を未だ究めたるものなかりしより、同氏の此擧を壯として村會の決議を經て、案内者及び人夫を寄附し且つ小學校長及び教員六氏の加はれるのみならず村内の有志者中には獻身的に無料にて人夫の役に當れるものありそのため困難なりし双六谷の探檢を漸く完了することを得たりといふ同氏はそれより燒岳を踏え上高地温泉一泊歸らる。

○會員南日重次氏は夫人及び家族同伴槍、及び穗高踏破の目的にて上高地に向れたり。

○會員采野善次郎氏は阿蘇山に登られたり。

○幹事中村清太郎氏は、信州御岳二ノ池畔に滯在、一ヶ月油繪の製作に努力せられつゝあり。

○會員岡野金次郎氏は、七月下旬、秩父の大宮に入り、武甲山及三峰山に登り、峰傳ひに雲取山頂に達し、青梅街道に出で、多摩川の上流に渉り、柳澤峠を越え、甲斐鹽山に下り、又金峰山頂よ

◎會報　會員登山報

り御嶽新道を下り、七月二十三日甲府に一泊、翌日富士川を下られたり。

○會員今村幸男氏は、七月下旬白馬岳に登られ、轉じて中房溫泉より、燕岳に登攀せられたるが、天候險惡のため、常念山脈縱走を見合せ、又中房溫泉に戻られたり。

○會員八木道三氏、祖父江重兵衛氏は八月七日名古屋より中央線に由り四家に一泊、五日白馬頂上に露宿し、杓子、鑓ヶ岳を巡り清水平の谿谷に天幕を張り、其翌日祖母谷を下りて鎖釣溫泉に一泊、愛本を經て三日市驛より歸らる。

○會員八代準、伴野清、百瀨慎太郎の三氏は大町より針ノ木峠を越へ五色原より立山に出で、劍岳に登り小黑部川を下りて大黑鎖山に出で歸られたり。

○會員小倉伸吉氏は白馬岳より鹿島槍ヶ岳迄從走せられ冷澤を下りて大町に出られたり。

○會員朝直次郎氏は七月十八日大阪出發信本より島々を經て廿日上高地着、翌廿一日穗高岳登攀幸にして快晴頂上の展望を得て下山廿二日乘鞍登山の爲め阿房峠を越へて平湯に入り廿三日午前五時半出發蒲鑛坑を過ぎ密林に入る頃少雨ありしと後晴れ大石溪を上り十一時頂上鶴池畔にて齋食、夫より右方の平より頂上の一峯を超へ絕頂の下室に達す、十二時半絕頂着、午後七時平湯着、高山に出で岐阜を經て歸らる。

○(前畧)小生二十二日大町を出發して、針ノ木を越して廿四日此所に參り申し候、豫期せし以上に美はしき所に一驚を吃し候今日は雨のため一日天幕の中にゴロ〳〵致し居候これより立山、劍、白馬に登山致すべく候(五色原にて伴野清)

○(前畧)駒は鉞に入り申候八合目邊に小平坦ありて小さき青芝の中にナンキンコザクラ一面に群生發花して前面に荒澤岳の金字形を望見して實に此上もなき野營地に候降路惡絕險絕を極め居り候雪溪は約二十町位も有之候中ノ岳と平ヶ岳は差支ありて中止候檜枝岐は便利のやうに聞きをり候も鑓詰もなく酒屋へ十四里にて候會津駒と燧岳に登り候會津方面の山岳は雪無之候へ共越後方面の山岳は殘雪壯大に見え申候明日より若松へ向ひ可申候長藏の小屋にて志村氏に出逢ひ申候(檜枝岐にて高頭式)

○拜啓七月二十六日夜十一時飯田町發翌日甲州雨畑宿り二十八日青薙山を踰えて田代に行く積りの處新しく薙が出來て野宿しなくては越されぬとの事に一番低い處を越して(山伏峠といふよし)行くことに定め案内者を連れて出懸け候處頂上までは路筋明瞭なるも駿州側は一面のすゞ竹にて其上大雨の爲め終に路を失ひ其夜は谷間の小屋に一泊二十九日六時出發して三時間惡戰苦鬪の後漸く路を覓めて二時田代着絕食三度にて閉口致し候。

(田代にて　木暮理太郎)

○拜啓七月卅一日田代出發其日は信濃俣河原泊り八月一日カッチ河内と中俣との間尾根を登り途中一泊翌日イザルヶ岳に上り北進して大春木澤に野營三日カッチ河内、仁田河内を攀ぢ午後風雨の爲上河内岳南腹に露營五日迄同所に滯在し翌六日快晴に乘じ早曉出發上河内、聖、兜、圓山、大澤を經て赤石澤上流に野營、七日赤石岳を踰え雷雨に逢ひ奥西河内上流(西河内岳の南腹)に泊り入日早天

西河内、魚無河内、栗澤を窮め申候此日無上の快晴にて東京灣より伊勢海に至る迄展望致し候尚ほ小河内岳まで行く積に候ひしも副食物皆無と相成止むなく井戸川を小淺川に下り十二日歸京致候尚ほ拜眉の上可申上候　草々　（木暮理太郎）

○前畧七月廿四日鐘釣出發小黑部鑓山に至り翌日劍の登攀を三の窓より試みしも濃霧の爲め三窓頂上に至りしのみにて引返すの止むを得ざるとゝなり劍澤に露營致し此日正午頃より風雨烈しく相成り廿六日も依然として風雨に惱まされ遂に案内助七も立山に出づる路を失して別山裏に野營することゝなりて一行の困難中々に大なるものに有之候助七は溪谷はいざ知らず山の案内者としては殆んど資格無しと云ひても可なりと思はるゝ程に御座候廿七日早朝霧の晴るゝを待ちて別山に出でそれより立山全山を廻りて午後一時頃室堂着こゝにて百瀧博太郎氏の一行に會し再び劍の登山を思ひ立ち廿九日共に長次郎谷下に露營、天幕は合計四個にて愉快なる一夜を過し申候廿九日霧を冒して遂に劍の絶頂を極むること得茲に本望を遂けて欣喜雀躍正午過露營地着、直ちに長驅再び室堂に五時頃到着仕候これより五色ヶ原針木峠に二泊して大町に歸着の豫定に御座候人夫も大町にて頁好なる者を得終始愉快に旅行したるは何よりの事に御座候何れ歸京の上參上天幕の御禮も申上可く先は大畧の經過御報告申上候　頓首　（大水操）

○拜啓小生儀去る十九日兵三郎を遣れて葛ノ堺より烏帽子に上り三ツ岳、五郎、赤、鷲羽まで縱走致し上平に下りて大郎兵衛より槍師岳に登り二十四日有峯に下り申候。

それより室堂に二泊の後五色ヶ原に遊び針ノ木を越えて三十日大町に下山致し候途中二回許り夕立に出遇ひ候のみにて至極愉快なる旅程を終り申候。

室堂にて小野氏、大木氏、伴野氏、一高の八人連等と出會致し候室堂守も感情の行遊ひよりしてか或は事實なりしかは分明ならず候も米の缺乏より夜中十二時過ぎまでテント内にて大會議を開き申候伴野氏一行は室堂にてパンの貳個程も買ひしめて劍岳に向け出發致され候色々滑稽やら悲慘やら何れ御拜眉の節御話し可申上候　（加山龍之助）

○（前畧）小生は七月十日より約三週間日三州鳳來寺山附近の地質調査に參加いたし候、

こゝの山には佛法僧鳥が夜はなき候、それより歸り道に信州に立ち寄り申ひしが、長き勞働のあとにて心身疲勞いたし候ひしかば登山を斷念いたして白骨まで參りしのみにて歸り候、あやまちの功名にて行きかへり見物だけにてもいたさむと存じたるヘットナーシュタインの附近約一里の間（狸平、明ヶ平、稻核村）に歐洲品に優るとも劣らざる氷河痕を印したる岩塊、石礫等を拾得いたし得花崗岩粘板岩、硅岩、砂岩等種々有之其々條痕の模樣を異にに致し居り候、兎に角問題は想像以上に重大に相成る樣子に御座候　（辻村太郎）

○會員上野菊二郎佐双定雄兩氏は、八月七日大町を發し濁小舍に泊まり、二日目烏帽子岳露營、三日目三ツ岳、野口五郎岳、眞砂岳、四ノ鉢、劉物澤の頭を經て赤岳龍泊り四日目黑岳、赤牛岳、登山、五日目赤岳、小鷲、鷲羽を經、昨年途行の越中アルプス路と合し、運轉、双六、樅澤を經て槍ヶ岳下、硫黃澤乘越泊り、六日目去年

失敗の槍ヶ岳を極め、梓川穩高下泊り、七日目暴風雨中を上高地に赴く、山中の一週日、快晴續きなりし由。

○會員冠松次郎氏は、八月八日西山溫泉を發し、白峰三山を極め、野呂川に下り、芦安の湯に出でられたり。

○會員大槻禎郎氏は、富士登山後、八日釜ヶ原に至り、駒ヶ岳第二回登山をなし、屏風小舍泊り、二日目白扇を下り、仙水峠に泊り、三日目朝奥岳に登り、早川尾根に泊り、四日目ゴーロ澤岳、鳳凰、地蔵岳を傳ひ、夕七時、芦安に下られたり。

○會員中原繁之助氏は、日光男體白根山に登り、八月九日芦安より菊安を經て、御室測量天幕に泊まり、十日地蔵鳳凰藥師觀音岳に登り、直ちに下山されたり。

會員諸君に

○今秋開かるべき大會は、其出品物を京都に轉送して、京都に開かるべき、山岳講演會に出陳致すべく候、就ては成る可く多數の御出品ありたく、特に願上候。

○會員諸君にして、登山せられし際は、成る可く其場所と時日など報ぜられ度候、會員相互の智識の交換の栞ともなるべく、一枚のはがきを、登山報に、惜むなからん事を希上候。

○本會々員にして會費未納の諸君には、集金郵便の方法にて集金に上らすべく候間、其節は御拂込相成度候。

○會員諸君にして住居を轉ぜられし諸君は、必ず御一報あり度候。

新入會員

圖版說明

○卷頭畫、上高地の夏（辻村伊助氏撮影）

本號は上高地の記事に多數の頁を提供せり、然して今復卷頭を飾るに上高地の景趣を以てせるは、吾人の上高地に戀々たるの證なり、吾人は此仙境の日に月に殲滅せんとするを嘆くものにして、此上高地の天然自然物の保存全からん日を期して待てり。

圖は德本峠を降りて梓川畔に近く、牛番小屋あり、烈々たる眞夏の日を受けて、樹間を漏るゝ輝光は征矢よりも鋭し、上高地の景趣は其處女の森に飾られて、偉嚴を增す、八木氏の寫眞「冬の上高地」にある牛番小屋の寫眞と對照されたし、如何に其自然の變化せるかを。

用紙は、百瀨愼太郎氏の寄贈にかゝる、松崎紙を用ゐたり。

○山高しと雖も貴からず、吾人は必ずしも高山のみを嘱望するものに非ず、低山性の山景必ずしも平凡ならず、吾人は、東京人士に奥秩父の、登攀を切に勸告するものなり、山は深きと淺きとは、其標高と平行するものに非ず、奥秩父の山は、深き事に於て、決して日本アルプスの諸山に劣るものに非ず、三日乃至五日の旅びは、此奥秩父を訪ふに十分なり、切に東京人士の來遊を望む、(北澤基幸氏撮影秩父諸景の挿繪參照)

○「雪のアルプス越へ」の説明圖として挿入せるもの二圖版、「冬の嘉門治小屋」と「雪の上高地」なり何れも、筆者八木氏の勞苦の作にして、上高地の冬景を、世に公にせる最初の寫眞なりと云ふべし、白皚々たる、上高地の自然の如何に其景趣の、吾人の熟知せる夏の有樣と異にせるかを、牛番小屋の前に走れる犬あり、嘉門治の愛犬「小僧」なるべきか (八木是峰氏撮影)

○「金川原より見たる白峯山脈」の一圖版は水彩畫より複寫したり、眞の色階を正しく、描寫し得ざりしは、筆者の爲め甚しく遺憾とする所なり、(角田祐吉氏筆)

○「千社札の數々」小島氏の蒐集(コレクション)の内登山に關係せるものを出したり、廣重のデッサンに維新以前の藝術の臭ひあり、登山千社札の内に諸國高山の文字あるも面白し。

○本誌會報欄に載せたる、「英國山岳會に於ける本會々員辻村、近藤二氏招待晩餐會」文中にある、献立書裏面に署名されたるもの、其他を一揃として、印刷せり、英國山岳會寫眞展覽會の入場券、アルバイン、ジョウナルの表紙、及び近藤氏の講演會通知書をも合せて撮影せり、會報欄と對照されたし。

附錄

日本山名錄初稿（四）

高頭式

式曰、此稿ハ嚴格ナル意義ニテ、一々出處ヲ表明スルニ努メタリシモ、到底後期ニ逸スベクモナケレバ、他日一覽表ヲ作製シテ卷尾ニ附スルコトヽセリ、故ニ以後ハ略式ヲ主トシ、特別ノ場合ヲ除キテハ、一々「地質ハ臆斷ニカヽル」、「米突ヲ記セズ」ノ文字ヲ省キタリ、又、他圖モ「陸五地何々圖」、「地質廿何々圖」等モ或ル程度マデハ記載セザルコトヽセリ、又、岳ト嶽ノ區別ヲナサヾルコトヽセリ、幸ニ諒セヨ。

筑肥山脈

式曰、（大日本地誌）第八、五二頁以下ヲ錄シテ、筑肥山脈ノ說明ニ代フ、曰ク「國（筑後）の南部即ち矢部川以南の地に於ては筑後、肥後の境上に起伏せる山嶽丘陵は又主として古生層の地塊より成り、山勢一般に低爽にして、四五百米の高距を保てる山嶽地をなし、連續せる一條の山脈をなすして、却て矢部川支流の南地に走れるものによりて、相挾まれ、之と並走せる二三の隆起帶を造れり、其東部に於ては國境にある女嶽（五九六米）、男嶽（五二〇米）等著るしく、久留米より山廟に通ずる三樹峠（約二〇〇米）の阪路を隔てゝ更に中部に南郷山（三八五米）、鷲巣山（約三六〇米）の二山東西相並びて國境上に起ち、其北方には鷲形山（四五〇米）及び八女、山門二郡の界に鷹取山（三六四米）、清水山（三五一米）等あり、之れより西方に赴けば、山益々低く、鷲巣山の西方は筑紫平野の細長く灣入するによりてなれる狹隘なる平地を挾み、阪路亦甚低くして此處に筑後の柳河と肥後の山廟とを連ぬる街道を通じ、其阪路は海拔百米に過ぎず、之より西方は再び隆起して三池郡東部の丘陵地をなし、唯郡の東南境にありて花崗岩より成れる久留山（三八八米）の聳ゆる外は、何れも極めて低爽なる百米乃至二百米の丘陵緩慢に起伏するのみ、而して此丘陵中三池町南方に延亘せるものは、第三紀層より成りて良好なる石炭層を挿み、本邦著名の炭田地をなせり。」

同書一三八頁、肥後國ノ部ニ曰ク、「眼を轉じて國の北部を見るに、筑後に跨り北は矢部川の谷によりて限られ、南は菊地川の爲めに切解せられ一連嶺の横はるあり、之れ所謂筑肥山脈にして、筑紫山脈の一部をなすものなり、山は低山性を帶び、其地線、中國山脈と相似たり、此山脈は始め筑紫山脈の西南翼をなせしも、

後筑後平野の陷落により分離せられ、塊片をなして現今の山脈をなすに至れるものなり、山體を構造せる岩石は、片麻岩層及び古生層にして、又花崗岩の露出少なからず」。

△馬秡山　筑後國八女郡、肥後國鹿本郡ニ跨リ、山鹿町ノ北方ニ位ス、秩父古生層ヨリ成ル、標高二千百二十一尺。

「地質甘佐賀國」記名、「陸五地山鹿圖」無記名642,8參取、熊本圖、記載ヲ缺ク。

△西岳　肥後國鹿本郡ノ北部ニアリ、馬秡山ノ南方約一里二十町ニ位ス、筑肥山脈第一ノ高峰ナリ、秩父古生層ヨリ成ル、標高二千百三十九尺(日本山嶽志)六五五頁參照。

「山鹿圖」記名648,2地質、佐賀圖ニ據ル。

△深倉峠　肥後國鹿本郡ノ北部ニアリ、西岳ノ南方約一里ニ位ス、秩父古生層ヨリ成ルモノノ如シ、標高五百六十四尺、三嶽村ヨリ三玉村ニ通ズル道路ニ當ル。

「山鹿圖」記名171ニ據ル、佐賀、熊本ノ二圖、記載ナシ。

△蒲生山　肥後國鹿本郡ノ北部ニアリ、深倉峠ノ南東方約三十町ニ位ス、花崗岩、秩父古生層ヨリ成ル、標高千二百八十二尺。

佐賀圖」記名120ニ據ル、但ル標高ハ、「山鹿圖」無記名338,6ニ取ル、熊本圖、記載ナシ、彦嶽ノ疏注參照。

△日嶽　肥後國鹿本郡ノ北部ニアリ、蒲生山ノ南ニ位ス、秩父古生層ヨリ成ル、標高凡千二百尺。

「佐賀圖」記名412ニ據ル、然レドモ山鹿圖ヲ按ズルニ、此邊ニ有名ナル不動岩ノ普近ニハ、前記、蒲生山ヲ除キテハ、他ニ一座ヲ求ムベカラザルニ似タリ、故ニ佐賀圖ノ標高ヲ取ラズシテ蒲生山ヨリ低キモノトセリ、或ハ不動岩ノアル處ヲ日嶽ト呼ブニヤ、記シテ後考ヲ待ツ、熊本圖記載ナシ、彦嶽ノ疏注參照。

△震嶽(ユルキ)　(別稱日籠寺山(タカマヤマ)、高天山、佐賀圖記名492ニ作ル、熊本圖記名)肥後國鹿本郡ノ北部ニアリ、深倉峠ノ西方約十町ニ位ス、秩父古生層ヨリ成ル、標高千三百七十四尺、山上ニ神社アリ、(日本山嶽志)四三九頁參照。

「山鹿圖」記名416,3、地質、佐賀圖ニ據ル彦嶽ノ疏注參照。

△女岳　(日本山嶽志)六五五頁、岩野山ハ此山ヲ指セルモノカ、筑後國八女郡、肥後國鹿本郡に誇リ、馬秡山の北西方約一里十町ニ位ス、輝石安山岩及ビ其集塊岩、秩父古生層ヨリ成ル、標高千九百六十六尺。

「久留米圖」記名595.8 地質、佐賀圖ニ據ル。

△木屋山　筑後國八女郡ノ南部ニアリ、馬秡山ノ北西方約一里三十町ニ位ス、輝石安山岩及ビ其集塊岩ヨリ成ル、標高千五百九十一尺。

「地質廿佐賀圖」記名、「久留米圖」無記名462參取、熊本圖記載ヲ缺ク。

△姫嶽　（式曰、山鹿圖ヲ按ズルニ、女岳、男岳ノ間、更ニ一座ヲ見ズ、想フニ女岳ノ誤記、或ハ別稱ト見ルベキモノカ）筑後國八女郡、肥後國鹿本郡ニ跨リ、女岳ノ南方ニ位ス、秩父古生層、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ル、標高凡千五百尺。

「地質廿佐賀圖」記名ニ據ル、山鹿、熊本ノ二圖、記載ナシ。

△男岳　筑後國八女郡、肥後國鹿本郡ニ跨リ、女岳ノ南方約十五町ニ位ス、秩父古生層、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ル、標高凡千七百尺。

「山鹿圖」記名、地質、佐賀圖ニ據ル、熊本圖記名。

△陳床峠　筑後國八女郡、肥後國鹿本郡ニ跨リ、男岳ノ南西方約十五町ニ位ス、秩父古生層、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高凡千五百尺、八女郡串毛村ヨリ、鹿本郡岩野村ニ通ズル道路ニ當ル。

「山鹿圖」記記名ニ據ル、佐賀、熊本ノ二圖、記載セズ。

△三楠山　筑後國八女郡、肥後國鹿本郡ニ跨リ、陳床峠ノ南方約二十町ニ位ス、秩父古生層、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ル、標高千百五十五尺。

「佐賀圖」記名、「山鹿圖」無記名330參取、熊本圖記名。

△小栗峠　（佐賀圖三楠峠201ニ作リ、熊本圖小栗峠ニ作レドモ、米突ヲ記セズ）筑後國八女郡、肥後國鹿本郡ニ跨リ、陳床峠ノ南方約一里五町ニ位ス、秩火古生層ヨリ成ル、標高凡六百尺、八女郡福島町ヨリ、鹿本郡山鹿町ニ通ズル道路ニ當ル。

「山鹿圖」記名、地質、佐賀圖ニ據ル。

△小草越　筑後國八女郡ノ南部ニアリ、陳床峠ノ西方約二十五町ニ位ス、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高千百六尺、邊春村ヨリ串毛村ニ通ズル道路ニ當ル。

「山鹿圖」記名335ニ據ル、佐賀、熊本ノ二圖、記載ヲ缺ク。

△烏塚山　筑後國八女郡ノ南部ニアリ、女岳ノ西方約一里二十町ニ位ス、輝岩及ビ角閃岩ヨ

リ成ルモノヽ如シ、標高八百四十五尺。

「陸五地久留米圖」記名256ニ據ル、佐賀、熊本ノ二圖、記載ナシ。

△竹山　肥後國鹿本郡ノ北西部ニアリ、小栗峠ノ南東方約二十町、男岳ノ南方約一里二十五町ニ位ス、秩父古生層ヨリ成ルモノヽ如シ、標高千三百十四尺。

「山鹿圖」記名398,2ニ據ル、佐賀、熊本ノ二圖、記載ヲ缺ク。

△三ツ尾山　(佐賀圖梅迫山450ニ作リ、熊本圖、三ツ尾山ニ作ル)肥後國鹿本、玉名ノ二郡ニ跨リ、小栗峠ノ南方約三十五町ニ位ス、秩父古生層ヨリ成ル、標高千三百五十尺。

「山鹿圖」記名409,2　地質、佐賀圖ニ據ル。

△彦嶽　(別稱三嶽(ミタケ)、古名荒瓜山(アラウリ)、肥後國鹿本郡ノ北西部ニアリ、三ツ屋山ノ南東方約三十五町ニ位ス、秩父古生層ヨリ成ル、標高千百九十一尺山上ニ神社アリ。

「山鹿圖」記名361　地質、佐賀圖ニ據ル、但シ佐賀圖記名ハ346ニ作ル、熊本圖記名。

(大日本地名辭書)一六四三頁、「岩野の南方に盤踞する峻峰なり、又、三嶽とも云ふ、古風土記に見ゆる荒瓜山は蓋是なり、肥後國志云、彦嶽權現は上宮、下宮、二所に祭る、此權現を日女龍神とも呼べり、その上宮は絶頂に在り、里俗の說に、當山の四方二里の間は神領にて、其榜示四方にあり、今や湯町中村の東、二子塚の道傍に在る蝦蟆石は、其榜示の一石なりと、一說に、上古當社の大岩と滿生村の不動岩は、兄弟なりしに、其母は彦嶽を憎みて、不動岩を愛み、彦嶽には大豆を食はせ、不動岩には小豆を食はせけり、或時この兄弟首引するに、踏哥せたる土堆く山と成り、動き搖ぎし故、其の山と成たるを搖嶽(日龍寺山の一名)と號す、不動岩は力劣り、終に首を引切らる、今の久原山に在る首岩是なり、不動岩を其嶽とす、首を引合たる繩の當り摺れたる迹、搖嶽に二條、又、彦嶽に二條、於今草木不繁と云、鍋田川山の東麓を繞る、(武曰、下略)。荒瓜山釋紀云、筑後國風土記、曰三毛郡(中略)昔者棟木一株生於郡家南、其高九百七十丈、朝日影、蔽肥前國藤津郡多良峰、暮日影、蔽肥後國山鹿郡荒瓜山、因曰御木國、○按に、荒瓜の瓜、一書には爪に作る、今地勢に因りて之を推測するに、彦嶽に當り、彦嶽の麓を津留村と呼ぶに因れば、其舊名は津留嶽たるを疑ふべし、然らば荒瓜は荒津利と訓むに似たり、古事記に八瓜を八鈎に通用したるにて、瓜字の訓を知る。

△岩村岳　肥後國鹿本、玉名ノ二郡ニ跨リ、三ツ屋山ノ南方約三十町ニ位ス、秩父古生層ヨリ成ル、標高五百五十七尺。

「地質廿佐賀圖」記名270ニ據ル、但シ標高ハ山鹿圖無記名168,8ニ取ル、熊本圖、記載ナシ。

△腹切坂　肥後國玉名郡ノ北東部ニアリ、岩村岳ノ南方約二十五町ニ位ス、(地質ハ花崗岩カ火山灰及ビ灰石カ不明)關町ヨリ、鹿本郡山鹿町ニ通ズル小坂ナリ。

「山鹿圖」記名ニ據ル、佐賀、熊本二圖記載ナシ。

△南郷山　筑後國八女郡、肥後國鹿本郡ニ跨リ、小栗峠ノ西方ニ位ス、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ル、標高凡千尺。

「地質廿佐賀圖」記名ニ據ル、山鹿、熊本ノ二圖、記載ナシ。

△立花山　肥後國玉名郡ノ北東部ニアリ、三ツ屋山ノ西方約二十五町ニ位ス、秩父古生層ヨリ成ル、標高九百九十九尺。

「佐賀圖」記名302ニ據ル、但シ標高ハ山鹿圖無記名302.6ニ取ル、熊本圖、記載ナシ。

△城ノ平　肥後國玉名郡ノ北東部ニアリ、立花山ノ西方ニ位ス、秩父古生層ヨリ成ル、標高八百八十四尺。

「佐賀圖」記名268ニ據ル、山鹿、熊本ノ二圖、記載ナシ。

△中岳　肥後國玉名郡ノ北東部ニアリ、岩村岳ノ西方約二十五町ニ位ス、秩父古生層ヨリ成ル、標高八百二尺。

「佐賀圖」、「熊本圖」記名、「山鹿圖」無記名243.1參取。

△城平山(ジョウンデラ)　筑後國八女郡ノ南西部ニアリ、小栗峠ノ北西方約二十五町ニ位ス、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高千百三十五尺。

「山鹿圖」記名314ニ據ル、佐賀、熊本ノ二圖記載ナシ。

△城山　筑後國八女郡の南西部ニアリ、女岳ノ西方約一里二十町ニ位ス、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高凡六百尺。

「山鹿圖」記名ニ據ル、佐賀、熊本二圖記載ナシ。

△鳶形山　筑後國八女郡ノ南西部ニアリ、城平山ノ北東方約三十町ニ位ス、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ル、標高千四百八十五尺、(日本山嶽志)四三九頁參照。

「山鹿圖」記名449.9地質、佐賀圖記名ニ據ル、熊本圖記名。

△城山　筑後國八女郡ノ南西部ニアリ、鳶形山ノ北方約一里五町ニ位ス、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高三百四十尺ノ小丘ニ過ギズ。

「陸五地久留米圖」記名103ニ據ル、佐賀、熊本ノ二圖記載ナシ。

△鷲巢山　筑後國山門、八女ノ二郡ニ跨リ、(佐賀圖記名436八女、山門ノ二郡、肥後國玉名郡ニ跨リ、熊本圖ハ位置、佐賀ト同ジ、)小栗峠ノ西方約二里十五町ニ位ス、花崗岩、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ル、標高千百九十六尺。

「陸五地久留米圖」記名362.4ニ據ル、但シ同圖ハ山門郡ノ南東部ノ一隆起ニ鷲巢山ノ名ヲ冠セリ、今佐賀、熊本ノ二圖ニ參取シテ、其位置ヲ定メ、其標高ヲ取ル。

△牧山　筑後國八女、山門ノ二郡ニ跨リ、鷲巢山ノ北方約二十町ニ位ス、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高千三百五十尺。

「山鹿圖」記名409ニ據ル、佐賀、熊本ノ二圖記載ナシ。

△鷹取山　(佐賀圖甲塚山343ニ作ル、熊本圖、鷹取山ニ作ル)筑後國八女、山門ノ二郡ニ跨リ、牧山ノ北方約十五町ニ位ス、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ル、標高千二百二尺。

「山鹿圖」記名364.3地質、佐賀圖ニ據ル。

△清水山　筑後國山門郡ノ北東部ニアリ、(佐賀圖記名317、山門、八女郡界ニアリ、熊本圖同ジ)鷹取山ノ南西方約二十五町ニ位ス、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ル、標高凡千尺。

「山鹿圖」記名、地質、佐賀圖ニ據ル。

△古僧都山　筑後國山門郡ノ北東部ニアリ、清水山ノ北方約十町ニ位ス、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高凡八百尺、山上ニ永興寺アリ。

「山鹿圖」記名ニ據ル、佐賀、熊本ノ二圖記載ナシ。

△櫨現山　肥後國玉名郡ノ北部ニアリ、鷲巢山ノ南方ニ位ス、花崗岩ヨリ成ル、標高七百七十二尺。

「佐賀圖」記名281ニ據ル、山鹿、熊本ノ二圖記載ナシ。

△小原山　肥後國玉名郡ノ北部ニアリ、櫨現山ノ南方ニ位ス、花崗岩ヨリ成ル、標高千九十二尺。

「佐賀圖」記名331ニ據ル、山鹿、熊本ノ二圖記載ナシ。

△二城山　(佐賀圖相谷山356ニ作ル、熊本圖記載ナシ)肥後國玉名郡ノ北部ニアリ、鷲巢山ノ南東方約一里二十町、中岳ノ西方約二十五町ニ位ス、花崗岩ヨリ成ル、標高千五十三尺。

「山鹿圖」記名319ニ據ル。

△四箇山　(佐賀圖四筒山ニ誤ル)肥後國三

池郡ノ北東部ニアリ、鷲巣山ノ南西方約三十町ニ位ス、花崗岩、輝岩及ビ角閃岩ヨリ成ル、標高九百三尺。

「輯製廿熊本圖」記名、「地質廿佐賀圖」記名、「陸五地山鹿圖」無記名 273,5 參取。

△**久重山**　筑後國三池郡、肥後國玉名郡ニ跨リ、鷲巣山ノ南西方約二里十町ニ位シ、三池郡大牟田町ノ東方ニ座ス、花崗岩ヨリ成ル、標高千二百八十一尺。

「山鹿圖」記名 338,1、「佐賀圖」記名 433、「熊本圖」記名參取。

△**片平山**　筑後國三池郡ノ南西部ニアリ、久重山ノ西方約一里十五町ニ位シ、大牟田町ノ南方ニ座ス、第三紀層ヨリ成ル、標高百六十八尺ノ丘陵ニ過ギズ。

「佐賀圖」記名 51 ニ據ル、山鹿、熊本ノ二圖記載ナシ。

△**小代山**　(別稱庄代山)　肥後國玉名郡ノ中部ニアリ、筒ケ岳、前岳、觀音岳、日岳等ノ總稱ナリ、《日本山嶽志》六五五頁參照。

「陸五地高瀬圖」ハ筒ケ岳ノ別稱ノ如クニ記シ、「地形廿熊本圖」ハ單ニ小代山ノ總稱ニ 604 附記ス、「輯製廿熊本圖」四岳ヲ小書シ、小代山ト大書セリ、但シ觀音岳ヲ日岳ノ東方ニ置ケリ、「肥後國土性圖」モ亦同ジ。

《大日本地名辭書》一六三七頁、「小代山、又、庄代山に作る、玉名郡の中央(稍西南に偏せり)なる一座の山彙なり、筒獄、觀音獄、前獄、日獄、天狗獄等の諸峰あり、筒獄最高し、一名黑摺と云ふ、筒獄は府本村に屬し、小代氏の城跡を存す、小代は本武州入間郡の郷名にして、小代平內重俊、寶治元年、本郡野原莊地頭に補せられ來住す、子孫世襲して天正中まで邑主たり、小代山の名之に因る、觀音獄は石貫村に屬し、山中に廢正法寺跡あり、山中の諸峰は皆南流、石貫川、大野川、友田川、瓜屋川等數派あり、皆長からず、石貫、大野の二溪、高瀨川に入り、友田、瓜屋の二溪、長州の海に入る」。

△**筒ケ岳**　別稱黑摺(ツツダケ)《大日本地名辭書》筒獄ニ作ル、小代山ノ一峰ニシテ、久重山ノ南東方約一里十町ニ位ス、花崗岩ヨリ成ル、標高千六百五十四尺。

「高瀨圖」記名 701,4、「肥後國土性圖」記名參取。

△**前岳**　小代山ノ一峰ニシテ、筒ケ岳ノ西方約十五町ニ位ス、花崗岩ヨリ成ル、標高凡九百尺。

「高瀨圖」記名、「肥後國土性圖」記名參取。

△**觀音岳**　小代山ノ一峰ニシテ、筒ケ岳ノ南方約十町ニ位ス、花崗岩ヨリ成ル、標高凡千五百尺山上ニ寺院アリ。

△日岳　小代山ノ一峰ニシテ、觀音岳ノ南方約二十五町ニ位ス、花崗岩ヨリ成ル、標高六百七十七尺。

「高瀨圖」記名205、「肥後國土性圖」記名參取。

△天狗嶽　小代山ノ一峰、其他ハ不明。

(大日本地名辭書)ニ據ル、小代山ノ疏注參照。

△障子嶽　肥後國玉名郡ノ北西部ニアリ、前岳ノ西方ニ位ス、第三紀層ヨリ成ル、標高凡六百尺。

「肥後國土性圖」記名ニ據ル、「陸五地長州圖」、「地形廿熊本圖」、「輯製廿熊本圖」並ニ記載ナシ。

△袴嶽　肥後國玉名郡ノ北西部ニアリ、障子嶽ノ北方ニ位ス、第三紀層ヨリ成ル、標高五百六十四尺。

「肥後國土性圖」記名171.2ニ據ル、「長州圖」ニ據レバ此邊百二十米突ニ過ギズ、「地形廿熊本國」記名171ニ作ル、長川、熊本(輯製廿)ノ二圖記載ナシ。

△大島山　肥後國玉名郡ノ北西部ニアリ、高瀨圖ニ載セタル、荒尾村大字大島ノ北方ニアルモノ(無記名56、山上ニ神社アリ)蓋此山ナラム、第四紀層ニ屬シ、標高百八十五尺ノ小丘ニ過ギズ。

(大日本地名辭書)一六三七頁、「大島山、今荒尾村大字大島に屬し、肥、筑の國界は此磯山の北に定めらる、山上に虛空藏堂あり、山脚なる汀には、岩石波濤に洗はれて出沒す、亦一佳眺なり」。

△米野山　(別稱米野岳、目野山?)肥後國鹿本郡ノ西部ニアリ、筒ケ岳(小代山ノ一峯)ノ東方約三里十町ニ位ス、片麻岩及ビ雲母片岩ヨリ成ル、標高千二十九尺。

「高瀨圖」記名311.8、「肥後國土性圖」記名參取。熊本圖(地形)記名熊本圖(輯製)記名。

(大日本地名辭書)一六四七頁、「米野山、又米野岳と稱し村名にも呼ぶ、或は目野に作る、千田の西、江田(玉名郡)の東なる高陵にして、一峰の稍秀拔なるものあり、山中に廢寺跡存す」、(式曰、下略)。

△日平山　肥後國玉名郡ノ東部ニアリ、米野山ノ南西方ニ位ス、片麻岩及ビ雲母片岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高千三百八十六尺。

「地形廿熊本圖」記名120ニ據ル、高瀨圖、熊本圖(輯製)、土性圖記載ナシ。

△國見山　肥後國鹿本、玉名ノ二郡ニ跨リ、頂上ハ鹿本郡ニ屬セリ、米野山ノ南西方約一里五

町ニ位ス、片麻岩及ビ雲母片岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高千二百八十三尺。

「高瀬圖」記名338,8ニ據ル、熊本圖(輯製)記名、熊本圖(地形)土性圖記載ナシ。

△木葉山　(別稱靈南山、《日本山嶽志》四三九頁、靈雨山ニ作リシモノハ、南ノ誤謬ナリ、同書參照スベシ)肥後國玉名郡ノ東部ニアリ、國見山ノ南西方約二十五町ニ位ス、片麻岩及ビ雲母片岩、石灰岩ヨリ成ル、標高九百四十四尺。山上ニ神社アリ。

「高瀬圖」記名286、「肥後國土性圖」記名參取、熊本圖(輯製)記名熊本圖(地形)記名310。

(大日本地名辭書)一六四〇頁、「木葉、今木葉村と云ふ、高瀬の東一里半、鐵道車驛なり、木葉山は驛北に峙ち、驛東の一帶の丘陵起伏南北にわたる、諸溪澗驛傍を過ぎ西流、高瀬川に入る、(木葉山一名鞍南山、山中に石灰を產出す)」。

△金比羅山　肥後國鹿本郡ノ南部ニアリ、木葉山ノ東方約一里五町ニ位ス、片麻岩及ビ雲母片岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高八百七十尺。

「高瀬圖」記名263,5ニ據ル、熊本圖(輯製)記名、土性圖、熊本圖(地形)記載ナシ。

△岩野山　肥後國鹿本郡ノ南部ニアリ、金比羅山ノ南東方後三十五町ニ位シ、植木町ノ北方ニ座ス、石灰岩、片麻岩及ビ雲母片岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高七百二十尺。

「高瀬圖」(記名218,1ニ據ル、熊本圖(地形)記名260、熊本圖(輯製)、土性圖記載ナシ。

△辨天山　肥後國菊地郡ノ南西部ニアリ、岩野山ノ南東方約三十町ニ位ス、片麻岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高四百八十一尺。

「高瀬圖」記名145,7ニ據ル、熊本ノ二圖、土性圖記載ナシ。

△石川山　肥後國鹿本郡ノ南部ニアリ、辨天山ノ北方ニ位ス、片麻岩ヨリ成ルモノヽ如シ、標高凡四百尺。

「地形廿熊本圖」記名ニ據ル、高瀬、熊本、(輯製)土性圖記載ナシ。

大正三年九月八日印刷
大正三年九月十二日發行

定價金七十錢

著作權所有

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

印刷所　横濱市山下町百〇四番地　福音印刷合資會社

發行所　横濱市本町四丁目六十七番地　高野鷹藏方　日本山岳會事務所
（振替貯金口座東京四八二九番　電話特長百七十一番）

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂